レーション（戦場食）　　～巨乳アイドルが異世界に連れ去られ、強化食として扱われましたが回復術で何度も再生します～

京野美波

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

レーション（戦場食）　～巨乳アイドルが異世界に連れ去られ、強化食として扱われましたが回復術で何度も再生します～

【Ｎコード】

Ｎ４８９６ＧＴ

【作者名】

京野美波

【あらすじ】

中堅グラビアアイドルマイがアルバイト中に事故に合い、普通なら即死の所を異世界から異種族を探していた勇者の眼に止まり異世界に飛ばされました。しかし事故は、勇者の術で起こされたものでした。マイは人族でも希少で戦闘食糧用に捕獲されていました。マイを食べると術のランクがアップするという不思議な体質でした。マイは食べられた箇所が一晩で回復し元に戻る魔術をかけられ異世界でしか生きられません。しかし年に一回、実を付けるバカンの汁

を飲むと元の世界に戻れるため非常食として異世界で生き残る為にパーティに合流しました。マイの体にはまだ秘密が有り、魔族や他のパーティから狙われます。無事にバカンの汁を飲み元の世界に無事に戻ってこれるのか？拙い文章の第３弾。宜しくお願いします

食べ過ぎ注意

１食

大きなリュックを背負い短パンにＴシャツ姿の娘が坂を降ってくる。視線は前方では無くハンドルに固定しているスマホの地図に目が行き、坂を降った先の十字路の信号など考えてもいない。最近始めた宅配サービスの仕事で稼がないと今月の家賃が払えない。白い自転車用ヘルメットからは赤いウェーブがかかった肩まで伸ばした髪が風に揺られ背中は汗でビッショリ。ブラの紐の形状から色まで透けて見える。姫野マイ、１９歳。１７歳の時に初めて群馬から渋谷に買い物に出た時にスカウトされグラビアアイドルとして東京に出てきた。１７歳から１８歳はＦカップに童顔、タレ目でフニャフニャ笑顔でソコソコは売れた。しかし、一年が過ぎるとファンは飽きてくる。ソレに追い打ちをかけるように毎年、グラビアアイドルは生まれ、グループアイドルもグラビアに進出する。事務所からはヘアヌードからアダルトに転向を打診されているが実家の両親は東京に出る時に全ての衣装を脱ぎ捨てないと食えない時と風俗、水商売をするなら群馬に戻ると約束をして出てきている。先日迄、夜は居酒屋さん。昼はファーストフードを掛け持ちをして、たまに有る撮影会で食いつないだが、先月からふしぎな疫病が流行りバイトは人員削減で首になった。今は出前宅配だけが日銭を稼ぐ術だった。「後、２件配達したら家賃は払える」マイはスマホの地図画面に魅入っていた。

「アレ、良い太腿と胸だな。オマケに赤い髪だ。希少種かもしれないな。」十字路の交差点から１００メートルも離れた高層ビルの屋上から竹の棒でマイの姿を見ている少年がいた。「ヨシ！あれにし

よう。」十字路に人差し指をかざすとマイの進行方向の信号が赤に変わり、横の信号は青にスグに変わった。「アラム…」十字路の横から走ってきた大型トラックに跳ねられ飛んだマイは自転車もろとも、宙で消えた。「アグム…」トラック運転手は人を引いた事も忘れ、十字路の真ん中に何故、止まったのか分からず、エンジンをかけ直し走り去った。「あいつったたた」マイが目を覚ましたのは干し草にシーツが敷かれた簡易テントの中でテントの隙間から眩い星空と大きな月が見えた。外で何やらコソコソと声が聞こえる。「ヤッパリ希少種だよ。この味は千年前に食べた時と同じだよ。」「さすが、ゴールドランクの勇者だけ有りますな。わしも初めて希少種を食いました。魔力が漲ります。」「凄い美味ですわ。あのタヌキ顔の肉の旨さは凄いですわ。」「魔力も漲りますが、精力も漲ります。今夜はエルフを相手に愉しみます」何やら美味やら甘露やらと何かを食しているらしい。焚き火をしている方にマイが行こうとするが左側の脚がない。股関節のしたからは消えている。切断面は白い包帯で巻かれている。脚が切断している大怪我で有るにも関わらず、痛さが全然無い、。「あ！起きたの？気分はどう？」

銀髪の少年が日本語で話しかけて来た。少女漫画に出てくるような銀髪を靡かせ、切れ長の眼に薄い唇と堀の深い目鼻立ちが焚き火の火に揺られ幻想的に見えた。「ココは何処ですか？アタシの脚は？」

「ココはラクナ。君の居た世界の隣に位置する異世界。僕はS級勇者のバム。後ろは僕のパーティの仲間さ！君、元の世界でトラックと言う鉄の馬車に轢かれたの覚えてない？」「スグに転送術を使ったけど脚は無理だった。でも、回復術と星の水を使ったから明日には元に戻っているよ。お腹、空いている？スープとパンしか食べれないけど有るけど。」「助けてくれてありがとう。元の世界には戻れないの？」「今、戻ったらこの状態だよ。即死だけど戻る？」バムがテントの幕に指でなぞるとアノ十字路の景色が見え、トラックが斜めに止まり、四肢がバラバラの状態のマイが見えた。「今の状態では転送したらこの状態でしか無理。でも、この世界で一年で一

回、実を付けるバカンの実の汁を飲んだら転生してもバラバラの状態にはならない。一年は僕たちのパーティに加わらない？勿論、無理強いはしないけど食料はパーティの仲間の物だから明日には出てもらうし回復術は僕しか掛けれないケドね。」実質、マイはドコにもいけない。「まあ、体力回復の為にスープを飲みなよ。皆に紹介するから」

「ワシは竜人族のガイ。一応は賢者。」ガイの緑の顔の顔は普通に人間だが、細長い眼と首から下のウロコに目が行った。「アタシはハイエルフのラム。弓手とコック兼任。」ピンクの髪をなびかせ、コロコロとあどけなく笑う。やはり尖った耳と長い犬歯が目立つが高校生位の幼さが残る。革のベストの下にはマイよりも大きな胸が揺れる。「後は、おい！スレイ！挨拶しろよ」「なんで…食い物…」「おい！言うなよ。」「剣士のスレイ。邪魔をするなら半分に切り裂く」「ごめんなさいね。皆んな、根は優しいのよ。アタシは巫女で術者のレイナ。」レイナはシースルーのブラウスを着ているが月の光に身体のラインからアンダーヘア、バストトップまで透けて見える。「レイナは月と闇の巫女だから夜はあの状態なの！」ハイエルフのラムが説明する。「まあ、とりあえず食べなよ。この後、回復で体力を使うから」言われるままにスープとパンを食べ、寝付きが良くなると酒も飲まされた。深夜、マイは脚の付け根に火を押し付けられたような激痛に目が覚めた。「ぐぁぁい、痛い」傷口から肉が盛り上がりモリモリと盛り上がり度に激痛が走り、激痛に耐えられずに失神した。

希少種と普通種

2食

マイは異世界に飛ばされて初めての夜を過ごした。純白のシーツに包まれ、シーツの下は何も着けていないし、アンダーヘアは奇麗に剃られていた。「あ！おはよう？で良いのかな？貴女の世界の挨拶では？」ハイエルフのラムがピンクの髪を揺らしながらマイに近づく。「チョッとゴメンネ。」そう言うとマイに掛けられたシーツを剥ぎ取る。マイの左右に別れて垂れた乳房とその下の少しふっくらした下半身、剃られてツルツルの恥丘が露になった。「チョッと見るよ」昨日、切断された脚が元に戻っている。膝をラムに持たれて前後左右に動かされる。その度に剥き出しの股間の大陰唇がパクパクと動き大陰唇に隠れたクリトリスと少し肌色の強い肉ビラが見える。ラムは気にせずに生えた脚の可動域と関節の動きを観察する。「大丈夫みたいだね。回復術で元に戻っているよ。立ち上がってみたら？」マイはアソコを手で隠して恐る恐る立ち上がった。「ソコ、隠さなくても良いよ。邪魔な毛はアタシが剃ったから。この世界では水は貴重だから無駄な毛は剃るんだ。巫女のレイナは神のお告げで毛を剃れないんだ。」「昨日、着ていた物は洗ったから今日はシーツを巻いていてよね。」そう言うとラムはテントから出て行った。「チョッとゴメンネ。」スグにラムが鉄製のフンドシ型の金属を持ってテントに入りざまにマイのシーツを剥ぎ取り、「早く脚を上げてワッカに脚を通して早く！早く！」言われるままにマイは金属のワッカに脚を通した。ラムがワッカを持ち上に上げた。「アゥ」ワッカの真ん中に有る金属の突起がマイの膣口を広げて刺さる。パンツのように金属の貞操具を履かせて呪文を唱えるとワッカは銀のパンティに変化した。「大丈夫か？ラム！」「今履かせて呪文を掛けたわ。」ガランガランガラン。金属を引きずる音が近付いて来る。

「よぅ！バム！お前も異世界に行っていただろ？希少種はいたか？」
「久しぶりだな、ジャン。お前の馬車に繋がれたヒト、髪の色が違うが希少種じゃ無いのか？」「あれ？違う！違う！又、ややこしく髪を染めたヒトだよ。希少種なら大事に扱うよと笑いながら応える。馬車の後に紫に髪を染めた少女と緑に髪を染めた少女が首輪をされた状態で両手を紐で繋がれ首輪から伸びたフックをお尻の穴に引っ掛かけた状態のまま、フラフラと歩いていた。」「最近はややこしくて困るよ。見た目ではわからないから食べないと駄目だし、普通種はマズイし回復も遅いし、とりあえず町で売るよ」「ソレよりも」ジャンの腕から黒い紐がテント目掛けて飛び出した。マイの股間目掛けて飛び込んだ途端にバチンッと下に落ちた。ミミズにコウモリの羽根が生えた虫が脚の間に落ちている。「バム！あれだけの貞操術でガード。お前！希少種をゲットしたな！ズルいぞ！」「ジャン！お前も人の持ち物に子宮虫を飛ばしやがって！一戦、ヤッても良いぞ！」「バム！冗談だよSクラスの相手はゴメンだよ。なぁ！後ろの普通種に黄金1袋で交換は駄目か？」「ジャン？希少種だぞ！王宮に売れば黄金２０袋だ。冗談は言うな」「ソレに俺たちは依頼されて東の海の魔女退治だから希少種は譲れない。」「さっきから聞いていたら、S級かもしれないが！ジャン！子宮玉、使うぞ！」隻眼の男が首輪をかけられ馬車に繋がれた少女の尻からフックを引きずリだし、股間に手を呪文を唱えた。
「　　」
「アアアアアア」少女の股間が盛り上がり、少陰唇が拡がり初めた。「ガァァ何か…出る…出る」「ガハァア…」股間からピンクのソフトボール大のボールが飛び出し呪文を唱えた男の掌目掛けて飛び出した。男がボールを口に近付けかじり付いた。「ゴォフッ」ピンクのソフトボールが股間から飛び出した少女の身体が霧のように消えていく。ボールを噛じった男の身体が紅く光りだすと、バムに向けて指を指し呪文を唱えた。
「ダンド！」指先からバムに向かって光の矢が飛び出すと百の矢に

増えて襲いかかった。バムは掌を矢に盾のように構え「　　」呪文を唱えると赤い魔法円がバムを中心に拡がりダムの後ろのパーティ一行を覆った。魔法円に当たる矢は次々と消えていく。男は次に火炎弾を放つが全て消えていく。「ジャン！コイツ消しても良いな！」「ああ！俺には関係ない。」「　　」バムの呪文と同時に魔法円が男に向けて火炎弾と光の矢を放った。火炎弾と矢の同時攻撃で男は霧散した。

「流石だな。バム！アイツ、アレでもＡ級賢者だぜ。ソレに普通種の子宮玉だが食べたからトリプルＡには格上げしていただろ。」「ジャン！パーティは抑えておけよ。ウチの希少種に闘いを見られたし、子宮玉を食べるところまで見られただろ。たく！」「スマン！俺たちは残りの普通種のヒトを売りに先に行くよ。じゃあな」ガラガラと音を立てて動き出す馬車の後に繋がれたもう一人の少女とマイの目が合った。自分よりも大分、幼い目がマイに助けて欲しいと哀願しているように見えた。弓手のラムにマイが「あの子を助けて欲しいと懇願する。」困った顔をしたがラムが念をバムに飛ばす。少し困った顔をしたが、「ジャン！その普通種のヒト。俺に売らないか？」と声を掛けた。ジャンは「迷惑を掛けたから金貨５０枚はどうだ？町でも１００枚は下らない。」「ああ！良いだろう。ラム！縄を外してやれ！」ラムが紫色のショートカットをした少女の尻からフックを外す時、「アッ」少女の幼い顔が苦痛で歪んだ。。少しアナルから出血をしていたがラムが腰の袋から取り出した軟膏を塗ると「クンッ」と仔犬のような声を上げた。ラムは面白がっているようだ。シーツを掛けてマイがいるテントに連れて来られた。「ジャン！コレで良いな？数えないのか？」「Ｓ級さまが誤魔化さないだろ。俺も街まで行く手間が省けた。」「お前のトコの賢者には悪い事したか？」「自分の力量をわからない奴はこの世界では生きれないし、パーティの邪魔になる。気にすることはないさ」そう言うと馬車に乗り込んで走り去った。「ラム！その普通種のヒトに呪詛やトラップが無いか調べてくれ」

普通種ありさの改造

３食

テントに入れられた紫色のショートカットの少女はラムに横になるように促され、テント中央に横になった。ラムが少女からシーツを剥ぐ。「イヤ！」「コラ！隠すんじゃ無いよ。呪詛やトラップ、寄生虫が付いていたら大事になるんだからね。マイも良く見てて、貴方がこの娘の世話をするんだからね。じゃ、膝を曲げて立ててアソコを拡げて。」少女は言われるままに膝を立てて自分の性器を指で左右に拡げた。「先ずは寄生虫がいないか！少しチクっとするよ。」ラムは３０センチは有る針を少女の拡がった膣の中央に入れて行った。「あああああ！」幼い性器に長い針がスルスルと入って行く。３０センチ、全て入ればへそまでいく長さだ。マイも恐恐と見ている。２０センチでラムの手が止まり、針に呪文をかけだした。そして針をユックリと引き抜いた。スグに異変は起きた。少女の恥骨上からヘソの下にかけた下腹が蠕き出した。「アア…何か出てくる…出るよ。」「アガッ」一瞬、膣口が膨れ黒い泥のようなゼリーのような物が大量に膣口から吹き出した。吹き出したゼリー状の物はウネウネと動きを止めない。ラムが針を突き刺して地面に抑えて水状の物を掛けて火を着けた。「ブブブ」ウネと動きながら跡形もなく焼けた。「アレはねチンクスライム。貴女、水辺でオシッコかウンチしたでしょ。」少女が頷く。「寄生スライムは動物の子宮、その内部で成長して動物の脳を奪い、性交で宿主を代わるの。あのまま貴女の子宮内で成長していたら貴女は誰彼かまわず売春をする女になるわ。普通は売春宿の主人が購入した奴隷に入れるの。エルフなら耐性で死ぬ事は無いけどヒトは3年で死ぬわ。後は呪文、呪詛を調べるわ。」「××××＜＜」少女のお腹に魔法円が浮かんだ。「ん！回復術だけみたいね。あーＢ級魔術だわ。後でバムにかけ直しても

らうわ。貴女の名前は？」「あ、ありさ」「ありさね？」「≡≡≡≡≡」少女の身体が紅く光った。「コレで大丈夫。逃げないでね。今かけたのは呪詛だからね。逃げる事は無いと思うけど誘拐されて犯されたら相手が即死するようにしたの。勿論、この世界のオスは皆、巨根！あなた方の世界で言うペニスが大きいから犯されたら股が裂けて死ぬわ。ペニスがあなた方でも受け入れれるのは、ヒトに似てるヤムス、貴方と同じこの世界のヒトのバムと竜人族のオスのみ。だから貴女は竜人族のバムの性の相手をしてもらう。竜人族は２週間に一回、精子を出さないと竜に変わるの。竜に変われば理性が無くなるわ。竜の型でも射精させれば元に戻るけど、竜のペニスが収まるのは竜のメスしかいないの。だから、森でエルフを捕らえて性の相手をさせるけど。一晩でアソコが裂けて死ぬの。エルフには回復術は掛けれないからヒトである、ありさにはガイの相手をしてもらう。」「そんな！こんなに幼い少女ですよ。アソコも小さいし無理ですよ。どうしてもと言うならアタシが変わります」マイがそう言うとラムは「貴女は希少種だから違う仕事があるの！言っておくけど、貴女達は奴隷だから！忘れないでね。」「ラム！この世界は初めてだから分からないのよ。後はアタシに任せなさい。ありさの性器も私が改良しておくわ。」「レイナ！わ、わかったわ。貴方に後は任せるわ。」ラムが怯えたようにテントを出る。「さあ、貴女の身体を誰が見ても欲情するようにしてあげるわ」「やめてあげてください！」レイナの笑顔が消え「黙れ家畜！」レイナの一言でマイの身体は動かなくなった。「この娘の胸は小さいわね。貴女の胸を貰うわ。ガイは巨乳が好きだから。」そう言うと横たわる、ありさの胸に手を添えて、腰から金色の短剣を取り出した。全てが金色の短剣は刃先もキラキラ金色に光っている。短剣の刃先を見て、ありさは震えている。「ラム！銀のトレーと秘薬を持って来て！」テントに銀色のトレーと軟膏を入れた壺。包帯を持ってラムが入って来た。刃先がありさの幼い胸に当たる。胸と肋骨の間の少しくびれた乳房の下から刃を上に上げていく。「あん！ううん。はぁ」乳

房を切り裂かれているのに、ありさは顔を紅く染めて興奮している。「はぁはぁ」股間の割れ目からは愛液が溜っている。「はぁ…」右の乳房が切り落とされトレーに乗せられる。「次は貴女の番だから」マイはシーツを剥がされた。たわわな胸がレイナの前に飛び出す。「早くしないと上手く、同化しないからね。」そう言うとマイの乳房の先にある乳首を持ち上げた。マイの目の前に自分の乳房が見える。「あん！」乳房を下から上に素早く跳ね上げレイナは切り落とした。マイの目にはレイナに乳首を持たれ揺れる自分の乳房が見える。ソレを横たわるありさに持って行き、ありさの胸の切り口とマイの乳房の切り口に塗り傷口どうしを張り合わせ呪文を唱えた。赤い線のように胸を囲っていた傷口が塞がっていく。数分後には右の乳房が巨乳、左は膨れ初めの幼い胸になっている。同じように左側の胸も切り落とし、マイの乳房をつける。幼い身体に似つかない巨乳が付いた身体にありさはされた。マイは切り口を包帯で巻かれているだけで何も手当はされない。「心配しなくて良いわ。明日には元に戻っているから」切り落とした乳房が元に戻ってくる？マイには信じられなかった。「ラム！もうソノ希少種の女にようが無いから連れだして！アタシはこの娘のアソコを男共の性器に耐えれるように改造するから。特にガイのアソコは強烈だからね」「わかったわ。マイ！ついて来なさい。」マイはラムにテントの外に連れ出された。「巫女さまって神様に使える人ですよね。残酷過ぎます。」「貴女のいた世界には慈悲深い神しかいなかった？彼女はエロスと破壊の神の巫女よ。ウチのパーティで一番、冷徹で残酷なの。さっきの敵の賢者を消したのを見たでしょ。バムなら消しはしないわ。貴女も彼女に逆らうと家畜みたいに手足を短くされて言葉も消されるわよ」

「アガッアアアアア」「ほうら、あの普通種のヒトの性器改造が始まったわ。」

テントの中では、ありさが大の字に術で固定され、マングリ返しの状態で性器を上に向けて固まっていた。まだ、米粒大のクリトリス

にラッパの形の口をした虫を吸いつかせている。虫は蜜を吸うようにクリトリスを吸引している。「はぁ…」数分、吸わせて虫を外し少し伸びたクリトリスに薬を塗り、数分後に又、虫に吸引させる。何回か繰り返すと米粒大のクリトリスが赤子の指先位まで伸びた。「ココはコレで良いわね。後は頑丈なアソコの中ね。」そう言うと捻れた木の棒をありさの膣に押し込んだ。「エロスの神……オン！」棒を刺した状態で呪文をかける。刺した棒は捻れながら少しずつ大きくなり、樹液を出して少しずつ膣を拡張しながら火箸で膣壁を焼いたような激痛がありさを襲う。「グェ…イギィ」「五月蝿いわね。オン！」レイナが手をかざすと口をパクパクとした状態でありさの声は出なくなった。レイナは微笑みながらありさをテントに残し外に出た。レイナの金色の髪が風に揺られ笑顔は慈愛に満ちた微笑みを浮かべながらマイに近付き、「明日は貴女を変えてあげるから」そう言うとパーティの中で一番、大きなテントに入って行った。

ジャン、復讐を考える

４食

レイナにキツく言われたマイはテントから出て、宿営地にある木の切り株に座っていた。削ぎ落とされた胸の傷口は全く痛さがない。逆に肩が軽い。まな板な胸に巻かれた包帯を見ながら自分の足先を見るのはいつ以来だろうと考えていた。「心配する事は無いわ。明日には元の巨乳に戻っているから。」ラムが横にしゃがみ話し出す。「この世界はラクナ。前にも言ったよね。貴女は希少種のヒト。貴女を食すと私達の魔力は倍増する。貴女は翌朝には切断された所は元に戻るけど再生中は激痛に苦しむ。後、希少種の子宮玉を食べればS級のバムなら神に近い力が付く。でも、子宮玉を食べられれば貴女の身体は消える。回復術も子宮には効かない。だから、貴女の子宮は魔物、ゴブリン、スライム、同業者、王族ら全てから狙われる。A級賢者、術者、勇者なら子宮玉を取り出す術は持っている。でも、術を持っていない者は生きたまま貴女の穴から引き摺り出すわ。」「ヤンム」ラムが唱えると貞操帯のパンティが落ち鉄のワッカに変わった。「私は弓手でエルフだから貴女を守る事は出来ない。一年後に元の世界に戻りたいなら離れず、自分の身は自分で守ってね。」（ラムさんは他の人とは違う優しいかただ。）マイはラムとレイナを比べラムを信用しようとした。

「カッン！カッン！カン！カン！」小屋の中で木と木がぶつかる音が木霊する。「アッ！アッ！」小屋は牛舎のように別れて真ん中に通路、左右に１０部屋づつに別れている。カンと木の音が木霊する度に部屋から「アッ！アッ！」と淫靡な声が上がる。「よう！ゴメス！元気か？」「よう！ジャン！久しぶりだな！あれ？今日はヒトの奴隷はいないんだな。」「ああ！バムに売った。」「ほう！バムが買うとは希少種か？」「いや、普通種だよ。」「珍しいな！アイ

ツが普通種を買っても使いみち無いだろ。ドSのレイナの相手か？竜人の性奴隷か？」「いや。どちらでもない。」「何か隠しているなジャン！普通種のヒト、一人で教えてくれよ。」「仕方ないな。バムのやつ、異世界から希少種を一人、さらって来ているよ。」「やはり、S級様は違うな。」「その、希少種のヒトが普通種を求めてご購入だよ。」「良い情報だよ。王宮に知らせれば金貨１００は貰える。好きなヒトを持って帰りな。」「ゴメス！前にお前に売ったヒトはまだ生きているか？」「ああ。A５の部屋で子宮を鍛えている最中だよ。」ジャンが歩いてA５の部屋のドアを開けた。中では全裸で尻を天井に向けて固定され膣に咥えこんだ木のペニスの木型を抜き差しされていた。「カン！」となるたびに「アア…」と声が漏れる。ジャンが術を唱える。「アアァ…痛い痛い。」声が出るようになる。「お前と一緒にこの世界に連れて来られた紫の髪の女はお前とどういった間柄だ？」「アァ…っ友達…友達…」「助けてやるよ」ジャンが部屋の壁に有る歯車を止めると上下していた木のペニスは止まった。「ほら！纏え」ボロボロの布を渡されフラフラと歩きながら布を纏った。部屋から出るとゴメスは居なく、王室の兵が入り口に立っていた。「アイツ、やることが素早いよ。」女を抱きかかえて手を空にかざすと「ドガン」小屋の屋根を突き破り小型の龍がジャンの前に現れた。龍の上に女を乗せ、「業火！」兵士に火球を投げて龍に乗り飛び去った。「ワシの小屋が！ヒトが！」急ぎ火に水をかけながらヒトの拘束を解いて行った。小屋からは裸の女性達が出てきたが、通行人に一人ずつ抱えられ持ち去られた。「お前と一緒だった、紫の髪の女は名前は？」「ありさ。」「おまえは？」「マキ。」龍は暫く飛び、眼下に馬車が見えた所で地上に降りた。マキを降ろし、胸のポケットを叩くと龍は小さくなりながらポケットに入って行った。「おい！レイ！このヒト、呪詛と呪文。ソレと寄生虫を調べてくれ」マキは背中を押され、緑の髪をなびかせたクリクリ眼の幼い顔と子供のような体型と身長の少女に渡された。「ゴメスの所にいたから寄生スライムは入れられていると思う

から先に出してくれよ。」「わかった！今からする。あんた！裸になって寝転がってアソコを拡げて！早く！」マキは言われるままに土の上に横たわり脚を拡げて、指でアソコを左右に拡げた。「やるよ！絶対に動かないでね。」レイの手にはスライム退治の針が手に持たれている。日に照らされ針先がキラキラと光っている。「さぁ。行くよ」「怖い…怖い」ブルブルとマキは震えている。指を離しかけた時にレイがマキの手を押さえてピンクの亀裂にポッカリ開いている穴に針先を入れて行った。スルスルと針先が股間に入って行く。針先が子宮口をかすめる。「あっ」子宮に入ると針に呪文をかける。一気に抜くと、マキの下腹部がウネウネと蠢き出した。スライムは子宮口に殺到し一気に体内から吹き出した。量はありさに入っていた量の倍はある。水色と黒いゼリー状の物が大量に蠢いている。スグにレイはスライムに油を掛けて火を着けた。「どうだ？終わったか？」「ジャン！2匹分だよ。明日にはこの娘、理性が無くなり性の機械になっているわ。」「売って、スグに連れ帰ったけどどうするの？」「バムと交渉するのさ」

山の上にそびえ立つ白亜の王宮の一室で兵士に連れて来られたゴメスが隻眼の老将にジャンとの一件を説明していた。真っ黒に光る鎧に金の剣。胸に王家の紋章。近衛師団の長、S級剣士のガミラである。

「ゴメスよ。希少種はS級勇者のバムの所にいるのだな？」「ジャンがそう言ってました。そして希少種モドキのヒトを連れ去りました。」「どう思う？勇者ガルム！」「ジャンが無茶苦茶にしても連れ去るとは普通種にしては重要なヒトなんでしょう。」「では、勇者ガルム！王の為に希少種をバムから奪い王宮に連れて来るのだ。S級勇者のそなたにしか頼めぬ。」「わかりました。パーティを集結させ今夜、ジャン、バムを追い希少種を捕獲します。」隻眼の老将の影が動き窓から消えた。「金貨は？」「出口で門番から貰え」そう言って部屋を老将は出て行った。

レイナの実力

5食

マイはスライムを全てアソコから吐き出して失神した。「あらあら、気絶したわ。以外と脆いのね、ヒトって。」「ああ！貴重種がいなければアチラの世界まで取りに行かない。」「とりあえず、明日の朝にバムの所にもう一度、行くからな。明日は取り引きだが、一戦交えるかも知れない。今のうちに回復魔術をかけて、太腿の肉を削いで持って来てくれ。普通種でも術のランクアップ位、するだろ。」レイは見た目は少女だがA級の巫女。回復魔術は普通に使える。「オンム…」マイの身体が青く光り身体の真上に魔法円が現れマイの身体に吸い込まれていった。「少し、削ぐよ」そう言いながらマイの左側の太腿を削いだ。白い太腿の切断面に白い脂肪と赤い肉が奇麗に見える。「レイ！クリトリスも取っていてくれ。明日、使うかも知れない。」「クリトリスを取るのは良いけど。この娘、3日は激痛だよ。」「バムだけなら強化した俺で何とかなるが、S級の巫女がいるだろ？あの狂い巫女。レイでは難しいからレイがクリトリスで強化して当たってくれ。そのうち、王宮の勇者が来るだろ。」「王宮付の勇者？ガルム！」「ああ！けしかけた。」「ヤッパリ、賢者ジイの仇討ちを考えていたのね。」「ああ。一応、幼馴染みだしな。バムが無理でも巫女のレイナには一撃は入れる！」「じゃあ、この娘のクリトリスをアタシが使うよ。」レイは金色のスプーンを持って横たわり眠っている、マキの股間に座り股間の薄い陰毛を除けて、ピンクの粒の包皮を剥き、スプーンをクリトリスに当てて力を込めてクリトリスをすくい上げるようにスプーンに力を入れた。「アッ」と身体をクネらしたがスプーン上にピンクの豆が乗り血液が少し付いていた。スプーンから瓶に移しレイは腰の袋に入れた。翌朝、股間に鈍痛が走りマキは目を覚ました。股間には葉っぱが貼

られている。最初に乗せられた馬車のなかだ。「イヤー」金切り声が馬車内を切り裂く。「五月蝿いわね。声は天空に…ジョム！」白人の少女のような子供が掌をマキにかざすと口から声が出ない。見た目は人間のような風貌だが、耳が長く人の倍は長さがある。「貴方ねイチイチ、うるさいわよ。友達の所に連れて行ってあげるから黙りなさい。」回復魔術で太腿の肉は戻っているがスプーンでくり抜かれたクリトリスは肉は戻ったがピンクの豆がまだ無い。「レイ！前に来てバムがテントを張っている頭上に魔法陣の弓を打ってくれ」レイは馬車の中を前方に移動してジャンね横に座り弓を空に向けた。「空は晴れ、陰はなくなり…」ジャンが弓矢に魔術をかける。レイの弓矢が虹色に輝く。「いや！」虹が真っ直ぐに空に掛かる。「バム！誰かが空に魔法陣を掛けたよ。」雲が奇麗に無くなり陽射しが燦々と降り注ぐ。「コレは対レイナようだな。レイナは日の下では術が限られるしな。」バムは焦らず、パーティの仲間に戦闘準備を伝えた。前方の丘の向こうから土煙が上がる。丘の上で見た事が有る馬車のシルエットが見えてきた。「ジャンの奴、術まで掛けて昨日の賢者の事、根に持っているじゃん」そう言いながら腰の袋からビーフジャーキーのような肉片を口に含みガムのように噛んだ。ゴクリと飲み込むとバムの身体が青く光りだした。掌を天に掲げ、呪文を唱えると掌から青い光の玉が空で爆発して快晴の空が曇って来た。馬車の中ではレイが驚いている。「ジャン！一発で結界が消えたよ。」「アイツ、希少種の肉を食ったな。」馬車がバムのテント前で止まった。「よう！バム！もう一匹、普通種を買わないか？」「ジャン！取り引きなら結界は要らないよな？晴天にしたのはレイナの対策か？」バムの後から髪の毛を逆立て、炎のように紅く変色した髪がメラメラと揺らぐ。透明感が有るレイナの白い肌は浅黒く変色し、透明なドレスは漆黒に染まっている。腕には死神が持つ鎌が握られている。「死は闇の神にエロスは我に…」「ガイ！スレイ！股間に防御だ！」「ガァー」鎌が左右に振られるとガイ、スレイの股間からは火花が飛びジャンの剣士からは血飛沫が飛び出した。「

アワワ…」ジャンの仲間の巫女はシャーシャーと体液を股間からタレ流す。レイナの手には性器が男性器、子宮と乗っている。「死は闇の神に！」剣士と巫女は天空に空いた穴に吸い込まれた。手に取った睾丸を一つレイナは口に含み飲み込むと赤い髪は長い黒髪に戻り、浅黒く変色した肌も白く透き通る肌に戻った。「バム！この子宮でガイ用の子宮玉を作るからね。ジャンは貴方がどうにかしなさい。」そう言いながらテントに入っていった。「ジャン。晴天にしたのはお前たちのミスだな。レイナは影が無いと暗黒の巫女の本性を出す。浅黒く成ったら俺でも止める事は無理だ。お前とA級の弓手。それと普通種の人でどうする？」「アァ、嫌、普通種のヒトをバムに買って貰おうと…」

「ギャーン！ギャーン」雲を掻き分けて天空を馬に乗った人が駆けてくる。鎧を纏った王宮の勇者ガルムが馬に跨り空から駆け降りてきた。「ジャン…希少種の事を王宮に喋ったか？」「あ！」ジャンは普通種の人と弓手を置いて姿を消した。「勇者バムよ！王宮の命令だ！希少種を渡せ！」「勇者ガルム！俺は王の司令で東の海の魔女を退治しなければならない。ソレには希少種のヒトが必要だ。魔女退治が終わる迄は渡せない。剣士ガミラも知っているはずだ。」「ムゥ、ソレなら仕方がないな。」「ソレより勇者ガルムよ！西の森の魔女は？」「バムよワシの股の下にいるわ！」よく見ると裸の女の手足が馬の手足に変わっている。黒い髪を靡かせ、切れ長の眼はバムを睨んでいる。目鼻立ちは整い魔女に成る前は美人であったに違いない。ただ、体躯は大柄なガルムを載せるだけの体躯が有るので一度は魔女になったのはわかる。整った顔に猿轡と手綱が妙に色っぽい。バムも東の魔女を乗り物にと考えた。「ワシは報告に帰る。ジャンの仲間の処遇はお前に任す」そう言いながら魔女に跨ったガルムは天空に消えて行った。バムがジャンの馬車の幌を開けた。中には弓手のハイエルフのレイと普通種のヒトのマキがバムを見て震えていた。「そっちはハイエルフと普通種のヒトか？降りてこい！早く」マキとレイは馬車から降りてマイとありさの入っているテ

ントに入った。「マキ！」「ありさ！」二人は抱き合い泣いている。「お前たち知り合いか？」コクリとありさが頷いた。「貴女たちは何処に住んでいたの？」「横浜です。」「アタシは東京のあきる野市。」三人は自分の身に起きた事を話しだした。

ミルクステーキ

6食

「ラム！このハイエルフとヒトの身体検査を頼む。特にヒトは術と罠。ハイエルフは奴隷の刻印。ジャンなら仲間にも奴隷の刻印をするかも知れない。」「わかったわバム。」「貴方の名前は？」レイはキッとラムの顔を睨んでいる。「パン！」レイの顔をラムが平手で叩いた。「名前を言わないと刻印は取れないでしょ！このままだと腐って死ぬわよ！」奴隷の刻印を打たれると主人から離れると身体が少しずつ腐り最後は絶命する。「レイ！北の森のハイエルフ。」「わかったわ。」両手をレイの胸に当てラムは呪文を唱えた。レイの肩に赤いアザが浮きがって来た。「バム！奴隷の刻印！消して貰えない！」「仲間にも奴隷の刻印を打つかな？アイツ。」バムがレイの肩の刻印に手を当て呪文を唱えると赤いアザが消えていった。「レイ！わかった？ジャンは貴方を仲間と思ってないわ。あの普通種のヒトを置いて姿を消してもいいし、私達の仲間として付いてきても良いわ。ヒトが三人だから私だけだと大変なのよ。バムは刻印は打たないわ。でも、裏切り者には容赦はしない。」「わかったわ。貴方の手伝いをする。」「貴方！こっちに来て刻印と呪文が入って無いかをみるから…話は後でして！」マキを呼び裸になるように命令した。マキは怯えながら巻いていた布を解いていった。年の割にマキの乳房は張っていた。血管も浮き乳首、乳輪も濃い肌色をしている。下腹には妊娠線が薄っすら残る。「貴方！妊娠した？」「レイ！この子、何処に売ったの？」「街の奴隷商のゴメス。」「売ったのが3日前なら魔族の子供を産んでいるわね。」ラムはパンと張っているマキの乳房を牛の乳搾りのように乳房全体から乳首に向けて搾ると乳首から白い母乳が飛び出した。「バム！久しぶりにミルクステーキを食べれるわよ！この娘に回復魔術を早くかけて！」「

え！ミルクステーキ！この娘、妊娠してたのか！」バムは急いで回復魔術と呪文破壊、刻印破壊の魔法をかけた。「ラム！料理は任せる。成るべく、母乳は出すなよ！」嬉々として剣士と賢者達に話し出す。「おい！今日は人のミルクステーキだぞ！」ラムは木の枝に滑車を取り付けてマキの両脚を縛り逆さまに吊るした。「酷いことはしないで！」マキの友人の、ありさが震える声で訴える。「心配しなくて良いわ。明日には元の胸に戻るから。」マイがありさに呟く。

木に逆さに吊るされたマキの乳房は重力に引っ張られ乳首が顔の位置まで来ている。その乳首にラムはオモリの付いた鈎針を突き刺した。「イヤ！イヤ！痛い！痛い！」マイがラムに思わず強い口調で窘める。「なんで術をかけているのに痛がるの！」「術をかけても軽いやつさ。そうしないと回復具合が悪いからね。」左右にオモリ付の鈎針を吊るした乳房はオモリで伸びている。肋骨と乳房の付け根に切り込みを入れて、ラムはオモリを引っ張らる。「ガハッ！」一気にもう片方の乳房も引きちぎる。「レイ！後処理は出来るわよね？アタシは料理をするから」マキの乳房跡の赤い切り口に葉っぱを貼り、マイの処理のように胸に布を巻いた。山陰に日が隠れてから、真っ白なレイラが自分のテントから出てきた。手には皿に乗せた性器を乗せている。そして、木の枝で祭壇を作り性器を飾り天空に出ている月に向かい祷りを捧げだした。

レイの悲劇

7食

マイはマキの額の汗を拭きながら、この世界の異常性を考え不安に駆られていた。本当にバカンの汁で元の世界に戻れるの…

マキ、マイ、ありさ達、ヒトはスープに木の実、パンを与えられ肉類は食べるのを禁止されていた。この年で妊娠、出産って…魔獣やハイゴブリンと性行したら直ぐに妊娠するってラムは言っていたけど。アタシも肉が食べたいけどマキさんの乳房はちょっと…

マキ達が入っているテントの隣ではバム達がマキの乳房のステーキにナイフを入れながら酒宴をしていた。乳房は縦に切られ白い乳房の先には褐色のブドウのような物が付き、元乳房の形を辛うじて分からせている。

竜人のガイはご機嫌で有る。ナイフの切り口から肉汁に混じり母乳も滲み出る。

「肉は美味い！特に異世界のヒトは！」元々は竜人族は他の種族を好んで食べた。魚や家畜類に成ってまだ５００年だ。異世界の時間軸だと3日前位だろう。

異世界ラクナの創造主の教えで同族は食すべからず。と言う教えが有る。マビトはマビトを竜人は竜人をエルフはエルフを捕食はしない。

テーブル席の隅で新入りのレイは腰の袋に入ったマキのクリトリスを取り出し口に含み飲み込んだ。斜めの席に座る巫女レイナを睨み、指に念を込め人差し指をレイナに向けた。

「あ！」直ぐに気付いたのはラムだったが指からは光弾が飛んだ。

レイナは身動ぎもせずにスープを啜る。光はレイナの手前でギュインと軌道を変え夜空に飛んでいった。ラムは直ぐにレイを羽交い締めにして取り押さえた。「お前もしつこいな？」バムがレイの髪を

掴み呆れたように話す。「あの賢者はお前の想い人か？まあ、いい。お前は仲間を殺めようとした。」「レイナ！コイツの処理、お前がするか？」「ゴメンナサイ。ハイエルフの子宮玉も肉も使い道がないの。いらない。」「ガイ！お前の夜伽にするか？」「いや、ハイエルフのアソコは緩い。いらない。」「スレイ、試し切りにするか？」「剣が汚れる」「じゃあ、明日にでもココを出発して、コイツは街で売るわ」「ラム！空いているテーブルに四肢を縛り付けて裸にしといて。」「それでヒトの動けるやつ…マイだけか。見せつけるから呼んでいて！」

マイは食後、看病は良いから来いとラムに呼ばれた。

宴が終わり各自かテントに帰った後の広場にテーブルが置かれ真っ白な裸を大の字にした、昼に仲間になったハイエルフのレイが裸でテーブルの脚に四肢を繋がれていた。口には葉っぱを口いっぱいに入れられ、頭を振っている。ハイエルフの裸体は真っ白で透き通っている。レイの緑の薄い陰毛が月の光で淫らに煌めいている。「マイ！良く見ておけよ。売られる前の儀式をな。お前も他の勇者や奴隷商に捕まるとこうされる。」バムがマイの後ろに立っていた。「ラム！始めるぞ…」バムの手には太い針と金の糸。赤い札を持ってレイに近づく。レイに手をかざし呪文をかける。「ラム！お腹の上に馬乗りに乗ってくれ」ラムがレイのお腹の上に馬乗りになって尻を腹に降ろす。バムがレイの股間に座り緑の陰毛の下のピンクの亀裂に手を伸ばした。バムがレイの薄い肉ビラを引っ張る。「ウゥ…」「確かに小さいな。ガイなら一晩で壊すわ。」一人ごとを言いながらビラに針を突き刺すビラの反対側がポッンと膨らんだ途端、赤い点になり赤い点から血が滴る。左右に有る肉のビラを縫い合せ、糸に赤い札を結び付ける。札には捕獲した者。売買許可印。販売される者の性能が書かれている。奴隷売買も国ごとの許可がいる。バムはS級なので全国の許可は持っている。後、赤い札は売るのがS級勇者という証、普通よりも高く売れる。

「マイ！逃げて他に捕まったらこのようにされるからな。」目の前

で行われた事に少しマイは興奮していた。「ラム！寒く無いからコレは明日までこのままで良い。休息は今日迄、明日は隣町まで行くからな！」「くれぐれも同族だからと逃すなよ。仲間にこんなことはしたくないからな。」そう言いながら自分のテントに戻って行った。レイは口に詰められた葉の汁の効果で目をトロンとさせて空を見ている。

レイ、売られる

８食

翌朝、マイは眼を覚ますと、ありさの股間の木の枝は抜かれていてまだ、寝息をたてていた。マキの切り取られた乳房も膨れ、たわわな乳房が重力に負けベッドにダラリとスライムのように卑猥に拡がっていた。マキも寝息をたてている。昨日は色々な事が有った。夢から覚めれば現代に戻り自分のベッドの上と思っていたが、やはり薄暗いテントの中にいる。それも半裸の状態で年下の女性２人と同じベッドに寝転んでいる。

「もう、起きなよ！朝食を食べて街まで行くんだからね。」ラムの耳の長い顔を見ていると自分が異世界にいる事を再確認をして気分が滅入る。ありさ、マキが起き出す。マキの乳房がシーツからはみ出して見える。顔は幼く、数日前まで学生だったのも頷けるが乳房は子育て中の張り詰めた大きさがアンバランスさを強調していた。

「早く！全員、テントから出て！」

全員がテントから出るとラムがテントに手をかざし呪文を唱えた。巨大なテントはみるみる小さくなりミニチュアのテントになった。周りを見渡すとテントは無くなり小型バス大の馬車が馬、４頭に繋がれていた。

「朝食は馬車で食べるから乗り込みな！もう、男達は馬に跨がっているんだからね」

先頭に竜人のガイ、２頭目にバム、その後ろの馬の背中に鞍にＭ字に股を開き縛られた、ハイエルフのレイ。背中には異界の文字が書かれ、股間から赤い紙が風に吹かれて揺れている。眼は見開き、口をモゴモゴさせてはいるが声は出ない。手も後ろで縛られている。馬車の操縦はラム。馬車内は前方と後方で仕切られ前にはレイナ、後ろにマイ達が乗っていた。殿は剣士スレイ。

「よし！行くぞ。今日中に街に入るぞ」
バムの掛け声で馬車は動き出した。
馬車は森を抜け草原に出た。マイは窓から外の様子を眺めていた。
異世界と言われても風景はモンゴルの草原のような草の海原が遠くまであり、空には白い雲が所何処に浮かんでいるが、鳥のような物が雲の上を飛ぶのが見える。草原の中に小屋が所何処に見える。草原を抜け森を抜けた所で石造りの建物が増えて来た。
「五大王国連合公認S級勇者バムとパーティー、王の命令で東の海の魔女の退治の為にラバン市で食料、武器弾薬を仕入れる為に数日、滞在する。街の片隅に滞在を求める」
竜人ガイの声が響く。
「ガガガガガガガガガガガガガガ」
市の入り口の鉄門が大きな音を立てて開いた。
馬車が町中に入ると人々が口々に裸で馬の背中の鞍に股を開脚して乗っているレイに男達の眼が向けられる。
「あのオンナ、何処の娼館に売られるかな？」
「先に奴隷商のジバの店だろ！市長が買うかもしれないぞ。」
「おい！股に付いてる札、S級勇者の札だぞ！俺、初めて見た。」
「S級勇者って、ラクナ全体で5人だけだろ！その内。二人が王国直属でフリーが3人。その内の一人だよ。」「その内のトリプルS級が一人。もう、神に近いな。誰も姿を見たものはいない。実際は四人だよ。」
「顔を拝みたいが馬上の三人は頭巾だろ？馬車の操縦はハイエルフ。馬上の三人の誰かだろ。迂闊に絡んで術でも掛けられたらたまらんぞ！」
馬車の窓はミラーガラス状に成っており、中の様子は外からは見えない。マイ、ありさ、マキは外にいる群集を見ていた。髪が緑のハイエルフ。鼻の大きい男。やけに肌が白い女性。半裸に近い女性もいる。明らかに現代、マイのいた世界ではない。
馬車は牢獄の様な堅固な建物の前に止まった。

「おい！ジバを呼んでくれ！バムが来たと言えば分かる」
門前を掃除をした男に伝えると男は小さな扉から中に入って行った。
直ぐに建物の門が左右に開いた。
「ガイ！付いてきてくれ。スレイはジャンの襲撃に備えてくれ。もう来ないと思うがな。」ガイ、バムはレイを乗せた馬を引き門の中に入って行った。中にはバムの2倍は有りそうな大きな男が立っていた。
「久しいなバム！」ジバは大きな体を揺らしながら近づいてくる。
「このハイエルフが売り物か？」「ああ！一応、A級の巫女だ。術も掛けられる。」
「巫女か？じゃあ初物だな？術が掛けられるとなると手は邪魔だな。それと声も。」「ああ。ソレは俺が処理する。後、今日は売りに出さないでくれ。こいつの元の仲間、A級のジャンが連れ戻しに来るかも知れない。」「おい！揉め事は困るぞ！」「いや。俺も今晩はココに泊まる。」「金よりも、普通種のヒトが居れば変えて欲しいんだが。いるか？」「ああ、今なら二人いるよ。先月の異界が繋がった時に異種モドキを捕まえたA級勇者が売りに来た。見るかい？」「ああ！見学してみる」バムはジバと館に入って行った。

愛液搾取

9食

バムは暗い廊下を奴隷商のジバのノソノソと動く体の後ろを付いて行った。廊下の先に鉄格子の扉が有る。ジバは鍵を開けた。モァっと甘い淫靡な香りと酸っぱい尿の独特な奴隷小屋の匂いが鉄格子の奥には充満している。

「ハウァハウハウァハウ」

所何処の部屋から喘ぎ声と呻き声が聞こえる。

「アバババ…」

中を覗くとマビトの女が陰部をミダラキツツキに付かれてる。ラクナ特有の鳥で嘴が男のペニスの形をしている。愛液を食料にしている珍しい鳥で鳥の唾液は淫薬の効果が有り経験の少ない娘を直ぐに娼館に売る前に使う事がある。

「バム！この部屋だ。」

扉に付いた小窓から中を覗くと赤い髪の少女と黒髪に赤いメッシュの入った少女が毛布に裸体を包んで肩を抱き合い震えていた。顔は二人とも似ている。

「あの二人、姉妹だと。」

「ジバ。二人に何か施したか？」

「嫌、生娘だしな。高く売る為に何もしていない」

「姉妹なら扱いやすいか？ジバ、幾らにする？」

「ハイエルフの娘に金貨２０！」

「解った。決まりだ。」

「普通種のヒトの生娘。何かに使うのか？」

「ああ！王様の命令で東の海の魔女退治さ。生娘は生き餌だ。」

門の外に待機している竜人のガイに娘を渡し、代わりに黒巫女のレ

イナをジバの所に連れて来るように頼んだ。
暫くして、真っ黒な頭巾とマントに包まったレイナがジバの奴隷小屋に剣士スレイとやって来た。
「すまんな。レイナ。念の為、頼む。」
「A級勇者ごとき、バムで何とかなるでしょう。」
レイナは笑いながらバムの顔を撫でた。
門を抜け特殊な木馬に跨ったままのレイをチラリと見て奴隷小屋の中に入って行った。
「バム！アタシは小屋の中で暇潰しをするから。来たら呼んでね」
「バム！レイナのヤツ、ウチの奴隷を壊さないよな。」
「大丈夫だよ。鎌の手入れと魔術に使う愛液を採取するんだろ」
「おい！レイナの手伝いをしろ！」
奴隷小屋の見張りはレイナの後に付いて行った。
愛液、尿、排泄物が混ざった空間。所何処に呻き声と悲鳴が聞こえる。
レイナは眼を輝かせて、子供が遊園地に来たように拷問されている女達を見ている。
真っ白な顔が紅く火照り、眼は虚ろになっていく。逆さに吊るされた女が一つの小屋の中に居るのが見えた。
「この部屋の扉を開けて！」
見張りに促し木の扉を開けて中に入る。
一人のマビトがマタサキの型で逆さに吊るされた。
「先ずはこの娘から」
袋から竹の筒を取り出し吊るされた女の膣に。竹の筒をねじ込んだ。
「イギィギギ…」
緑の竹がピンク色の秘部の亀裂を左右に拡張しながら押し込まれる。
ビラビラとした肉が竹に絡まり膣に入ったり出たりを繰り返す。
「タライかバケツを持って来て」
見張りの男がレイナに渡す。
レイナはタライを逆さに吊るされた女の真下に置くと、竹筒に付い

た紐を引く。
竹筒に蠢くスライムイーターが一斉に竹筒から飛び出し女の子宮口に殺到し中に入って行く。
「アッァ～アアア」
スライムイーターの細長い体に生えた産毛が子宮口の壁を擦りながら何十匹も入っいく。子宮内に蠢くスライム目掛け、虫が襲いかかる。形状はミミズに小さな毛が全身に付いて極小の毛が子宮内に刺さり刺激する。先端には口が有り小さな牙でスライムや人を噛むがチクリとした痛みしかない。唾液に快楽物質が混じり痛みより快楽の方が勝る。
「オオオォ…」
女の恥骨上が出たり引っ込んだリしている。
竹筒を刺し込んだまま隣の奴隷部屋に入り、寝転ぶ奴隷を尻を上を向くように見張りの男に指示をした。尻を上に向けたマビトの女の膣に竹筒を刺し込み作業のように紐を引く。
「ハハハウゥ！」
雄叫びを上げて身悶える女を部屋に残しレイナは隣の部屋に行く。
「何だ！ハイエルフのメスか？使い道は無いわ」
一瞥し、隣の部屋に移る。
「レイナさま。ココはマビトの生娘です。高値で売れます。竹筒は許して下さい。」
「え！生娘なの！心配しなくても愛液を頂くだけよ」
「床に尻を上に固定して！」
怯える少女を男達は尻を上に床に固定した。手足を革のベルトで繋がれ薄い陰毛と亀裂だけの股間と小さな胸の丘とピンク色の乳首がフルフルと慄えている。
「痛くないからね。」
普通に喋るレイナの声には相手を包み込むような柔らかい雰囲気が有る。少女の震えもおさまった。
袋から緑の葉のような物をレイナは取り出した。葉っぱにしてはウ

ネウネとしている。ソレを少女の幼い性器に乗せる。
「アーアーアーアー」
葉っぱが股間でうねり出す。
姫ビルと言われる異界にしかいないヒル。吸盤のように女性のクリトリスを吸い愛液を栄養にする。小さな乳首にもヒルをのせる。
「チューチューチュー」
まるで赤子が乳首を吸うような音に聞こえる。
「アタシは少し眠るわ。」
少女の喘ぎを聞きながらレイナは少女の横に椅子を置き眠りについた。

愛液回収

１０食

奴隷部屋の看守達は悶える女達を見て股間を膨らませていた。奴隷館の女達は商品なので看守達が手を付けようものなら直ぐに奴隷として売られる。男の場合はマビトはペニスを切られ、肉体労働で売り飛ばされる。マビトのペニスは黒巫女や闇巫女達の術のアイテム造りの素材や淫薬の材料として売られる。ハイエルフ、ハイゴブリンは肉体労働だけに売られる。容姿が良ければ男娼館にペニス付きで売り飛ばされる。普通は手を付ける気持ちも無くなる。しかし、目の前の少女は生娘なのに白目を剥き、口からは泡をたらしながら悶えている。本番なら殺されるが触るだけなら…

手を伸ばし蠢く緑の姫ビルを剥がそうとした…

「カスン！」

男の太い腕がボトリと床に落ち転がる。

「ガヴ…」

ハイゴブリンの看守の男は鈍く銀色に光る鎌の持ち主に牙を向けながら睨みつける。

細長い腕には似つかない鎌を持って微笑む。

「駄目じゃない。勝手に剥がそうとしたら…この娘のアソコ、グチャグチャに成るわよ。」

「おい！誰が商品に手を出せと言った！何時も言っているよな？」

「おい！切り落とせ」

ジバの両隣の看守達がハイゴブリンの男のズボンを下げた。

まだ興奮が覚めぬペニスは上を向いていた、其処へしたから睾丸おナイフで掬うように手馴れた手付きで上へ滑り上げるとハイゴブリンのヒト科よりも大きなペニスはボトっと床に落ちた。

「ガフガフガフ」

呻く男に猿轡を噛ますと看守に連れられ部屋から出て行った。
「ジバ、これ貰って良いかしら？」
「ああ、捨てるだけだからレイナに進呈しよう。」
ペニスの上へ布を置き丁寧に包むと自分の袋に収めた。
「あれはいらないわ。」
ハイゴブリンの腕を指差すとジバの看守が摘まんで部屋から出た。
ジバの眼の前には口から泡をたらしながら気絶している少女が身体を痙攣させながら気絶している。
黒髪の長い眼の奇麗な美人系の清楚な少女が全身の力が抜け、脱糞もしている。
「先に汚物を流しましょう」
樽に水を入れて看守が入って来ると白い尻にぶっ掛けた。汚物は流され固定された白桃のような尻が水を滴らせながら光る。
股間には蠢く緑のヒル。
レイナがヒルの身体に手を置くと呪文を唱えだした。ヒルの蠕きが止まる。袋から小さな瓢箪と瓶を取り出した。少女の股間の前に座りユックリと産毛のような薄い陰毛が生えた恥丘からヒルを剥がしにかかる。ユックリと剥がすと少女のクリトリスに吸い付くヒルの触手が見える。剥がすとクリトリスは伸び切り触手から離れる。その下に有る尿道口に直ぐに瓢箪型の物を押し込む。少女は気絶してまだ起きない。ユックリと剥がすと肉のビラビラと膣口が少しみえた。
レイナな直ぐに瓶を押しあて、ヒルを剥がす。
「ウアーアーアーアアア」
瓶の底を押すように大量の愛液が吹き出る。眼を剥き大きく見開き絶叫する少女。瓶の上から大きめの器を被せ、片方の手の瓶を取り出す。大量に愛液が詰まっている。まだ、吹き出している。
ビアジョッキ位の大きさの瓶、５本分の愛液を少女から採取しジバの横にいる二人の看守に館前に、とめている馬車に積み込むように伝えた。股間、両乳首に吸い付いているヒルを外し袋に入れる。愛

液を吹き出して果てている少女のピンクのビラビラした亀裂からは湯気が立ち、乳首は赤子に座れたように尖って肥大している。
「生娘で淫売、最高の商品になったわよ」
笑いながら部屋を出て、隣の部屋に入って行った。
「ォオオ…オォオォオォオォ…」
竹筒を膣に差し込まれた女がブルブルと震えている。
全身が紅く火照り、下腹の蠢きは収まっている。
手馴れた手付きで竹筒に牛の胃で作った袋を取り付けると、下腹に手を当て呪文を唱える。
「ガハハハウ！」
バシャバシャと袋に液が吹き出て袋に当たる振動がレイナの手に当たる。満足そうにその様子を眺めている。
ブルブルブルブルっと震え女は気絶した。
竹筒に手を当て呪文を唱えると子宮を蹂躙していた悍しい虫は全て筒に戻って行った。気絶しているので女はピクリピクリと太腿だけが動いている。袋に栓をして、看守に持たせ、部屋を出て隣の部屋に移る。
逆さに吊るされた女がぐったりと力を抜き垂れ下がっている。
隣の部屋にいた女にした方法で竹筒に袋を接続した。
下腹に手を当て呪文を唱える。
「バシャバシャ」
袋の壁を叩くほど吹き出す。逆さまに吊られた女は動きもしない。
程なくして、袋が満タンになり、竹筒に虫を戻し抜いた。
「そこの看守！この女、死にかけてるわよ。早く下に下ろしなさい。」
慌て看守達が女を降ろす。床に転がる女の乳房の下に手を当て呪文を唱えると息をしだした。
「何の為に逆さまに吊るしていたか知らないけどマビトはか弱いから直ぐに死ぬわよ」
そう言いながらへやから袋を抱えて出て行った。中庭には、レイと

それを見るバムがいる。
「レイナの予知では来るか?」
「そうね。後、一時間、夕暮にくるわ。娘の子を助けるよりも貴方に復讐する為にね」
「レイナだけでも返り討ちにできるけどな?」
「私は男に興味ないし、自分よりも格下に興味ないのよ。」
「これ、馬車に積んでくるわ。」
そう言いながら館の門に歩いて行った。

暁の黒巫女エルム

１１食

馬車にレイナが近寄り、幌付きの荷台に乗り込んだ。馬車の荷台に普通種のヒトが半裸に布を巻き抱き合っている。
黒い髪に赤い髪が混じっている。
「何処の３流勇者よ！この髪で希少種なわけ無いじゃない！余り、ヒトを連れて来ても異種交配種や魔女が増えるだけじゃない」
そう言いながら馬車の荷台から降りた。
辺りは真っ赤に染まり出す。町外れの砂丘に赤い太陽が沈みだしている。
「あら？きたわね。禍々しい気がビンビン来て、アソコが濡れるわ。」
レイナは荷台に戻り長い袋に入った棒状の物を持って奴隷館の前に立っていた剣士スレイに
「暇潰しが来たわよ」と言いながら館の中庭、レイが裸で鞍に拘束されている近くにいるバムに近づいた。
「バム！来たわよ。前より禍々しい気がビンビン伝わるわ。」
「ああ、凄い気配が伝わる」
「娘のクリトリス、貰うわよ。」
「娘のハイエルフのか？回復術は間に合わないぞ。」
「それぐらいは罰よ！」
一段高い位置の貼り付け鞍に登り、レイの片足の拘束を切った。
沈む太陽に黒点が見えていたのが、ハッキリと鳥の上に人が乗っているのが見えてくる。
レイの片脚を抱え上げて性器を丸見えにさせるとレイナの顔がレイの股間に近付く。
「イギィ！」

レイナはレイのクリトリスに噛み付き、首を捻じり、むしり取りそのまま、飲み込んだ。
段々とレイナの髪が逆立ち、肌の色も変色して来る。
奴隷館の頭上に来た鳥には金髪に銅色の肌のエルフと勇者ジャンが乗っている。門前の剣士スレイが飛び上がり鳥の脚を狙い剣を振った。
「キエ！」
鳥の脚を切り裂いたがスレイも剣を持つ腕を鳥の上の銅色の肌の女の薙刀状のモノで切り落とされた。
スレイもS級の剣士の称号は持っている。
女はスレイと同等か格上の腕を持っている。
「バム！館に行ったぞ！」
片脚の鳥が中庭の上空を旋回していた。
大鷲の上から銅色の肌に逆立った金髪を揺らしながら女が中庭に飛び降りた。
薙刀のような武具を館の上で降ると光と共に防御術のシールドは消えて中庭にストンと降り立った。マビトでは無くハイエルフだが肌の色が違う。
「バム！その娘はエルム。ダークエルフと魔族のハーフよ。崇める神は逢魔が時を支配する神」
髪が逆立ち、焚き火の火のように揺らしながらレイナがバムに近付く。
真っ赤な髪。漆黒に変色した肌の色が完全化した暗黒神を崇める黒巫女レイナが大鎌を持ち立っていた。
「エルム！アンタがジャンみたいな格下に付くなんてどうしたの？」
「レイナ！そのハイエルフの娘、返さない？アタシの妹なの！」
「へぇ、珍しいわね。」
「母親が魔族に襲われて生まれたのがアタシ。だから腹違いの妹ね。」
「貴方、門前の剣士を切ったわね。」

「切らないとコチラが斬られたからね。」
「どう、落とし前を付ける？」
「コレでどうかしら？」
手に持った薙刀状の武具を降るとエルムの後のジャンの首が天空に飛び上がり、切り口からは血が吹き出した。
「どうする？バム。アタシは闘うのは構わないけど。ジャンがアレじゃあね。」
「無理に敵は作らない方が得策だろう。」
「わかった。ジャンが襲ってこなければコチラも闘う意味はない。ハイエルフはこの、奴隷館の主人に売った。代金の返金はしておく。後はアンタと主人の話し合いだ。」
バムが裸で拘束されたレイに手をかざすと拘束が外れ、声も出るようになっていた。
「お姉さま…」どさりと落ちたレイは泣きじゃくる。
近付き、レイの頬を打つと
「パーティーは選びなさい。S級のバム、スレイ、レイナ、ガイと全員がトップクラスのパーティーに喧嘩を売るなんて、死にに行くようなものよ。ましてや、狂い巫女のレイナ。貴方、普通なら死んでいるわよ。」
「で、誰がこの館の主人？」
のそのそとジバが巨体を揺さぶりながら姿を表した。
「館の中での喧嘩はやめてくれ。ハイエルフはいくらでも売られる！それとアンタのパーティーに眼を付けられたら商売がやれなくなる。金はバムから返して貰う。連れて帰れ。」
「バム！金は返して貰うぞ！」
「ああ！ジャンの亡骸からと今の持金を渡すよ。」
バムはジャンの亡骸を弄り、腰袋から金貨２０枚。貴石、ポーション。魔具を取り出した。
「コレに後、３０枚。コレでいいか？ジバ？」
「構わないが遺骸はどうにかしてくれ」

「ソレはアタシが始末するよ」
エルムは空に薙刀を突き上げ、呪文を唱えだした。
「暁の魔神…」
天空に魔法円が表れ、中から赤い腕が伸びジャンの亡骸を掴み消えて行った。
「バム！本当に済まなかった。東の海の魔女の退治にいくのだろ？コレを持って行ってくれ。大鷲の卵だ。呪文で孵化する。」
「私はコレでこの子を連れて帰るわ。この子は村で大人しくさせる」
レイを脇に抱えた、エルムはレイの股間に眼を向けたが何も言わずに館の上空で旋回する、大鷲に乗り飛び去った。
「バム、あれで良かったの？」
「相手がエルムならパーティーはＳ級のジャックだろ？余り関わりたくないから。」
「狂乱の勇者ジャック。確かに関わりたくないわね。」
「ジバ！館が潰れなくて良かったな。返さないと言っていたら、お前も消滅していたかも知れない」
「儂も肝を冷やしたわ。暁の黒巫女エルム。初めて見たわい。」
「とりあえず、金貨５０枚と貴石は全て渡す。それで良いよな？」
「ああ、奴隷を連れてくるのは構わんがあの類は勘弁してくれ。」
バムとレイナは館の門を潜り、馬車に戻った。
「バム。すまない。止めれなかった。」
「構わないよ。エルム相手では剣では止めれないよ。ソレより腕は？」
「応急処置で繋げて回復術はかけたが…宿営地でラムに直して貰うよ。」
「俺が操舵するからレイナとスレイは荷台に乗ってくれ。」
乗り込んだ馬車は宵闇の中をゴトゴトと音を立てながら町外れの宿営地に帰って行った。

マイ乳房をミンチにされる

12食

夕闇の中、馬車が猛スピードで帰って来た。

「オイ！ラム！希少種を連れて直ぐに来てくれ！スレイがヤラれた！早く」

「バサッ」

ラムがテントを荒々しく開けて入るなりマイの腕を掴み、引っ張りだした。何事かと思いながらマイは馬車に連れて来られた。

剣士スレイが血だらけで馬車に乗っている。

「ラム！右腕を切り落としてスレイに付けろ。後、乳房を切り落としてスレイに食わせろ」

一刻の猶予も無いのだろう。

ラムは腕を掴んでいたマイの腕を無痛刀で切り落として、バムに渡した。次にマイの上着を左右に引っ張り胸を開けると、右の乳房を下乳から持ち上げて掬うように切り落としバムに渡した。無痛刀で切り落とされたマイはポカンと呆けたように立っていた。右腕の切り口、右胸の切り口からは血が滴り落ちている。

「ひぃ」

馬車の奥から少女の悲鳴が聞こえた。

「おい！ヒト！誰か出て来てこの赤毛の女の手当をしないか！」

テントからありさが出て来て

「どうすれば良いですか？」

マイの無くなった腕と胸から滴り落ちる真っ赤な血に狼狽えていた。

「ラム！薬草と包帯を渡して来い！」

マイの腕をスレイの腕に縫い合わせているバムがラムにマイの手当に向かわせた。

「貴方！見ておきなさい。」
小瓶にはいった薬草を手早くマイの腕の切断面に塗り包帯を巻いた。
乳房の切り口に葉っぱを乗せて包帯で巻いていく。
マイは眼をトロンとさせて口からはヨダレを垂らしている。
太腿には乳白色の愛液が太腿を垂れていく。
葉っぱには、淫薬が混ぜており、痛みを緩和させる。
「おい！この乳房をミンチにして血を絞れ」
ありさがバムに呼ばれ、切取られたマイの乳房を肉の塊のように渡された。
ありさの手のひらにマイの白い乳房とツンと尖った乳首が作り物の玩具のように見えた。
「ソコの切り株の上でみじん切りしてミンチにしろ！早く！」
スレイは白い顔が蒼白くなり、息も荒くなっている。
言われたように切り株をまな板にして乳房にナイフを降ろしスライス状にしてスライスを細切れにし、ナイフで叩きミンチに変えて行った。
「その布でミンチを絞り血を絞りだせ」
言われたようにミンチを布に包み布を絞ると血が容器に絞り出された。
「ラム！血にレイナの秘薬を混ぜてスレイに飲ませろ」
馬車にいるレイナが薬壺をラムに渡す。
バムは縫い合わせたマイの腕とスレイの肩の段差に黒い粘土のような物で固めて行った。
マイの血が混ざった秘薬を少しずつ飲んだスレイの顔に血色が戻っていく。
「やっと血色が戻って来た。ラム！そのミンチを使ってスープを作ってくれ」
「ありさ、マキは、明日からラムに着いて手当ての仕方と剣術を覚えろ。」
「マイは何もしなくて良い。」

「マキも乳が出なくなったら剣術修行だ！」
「剣術はお前たちが身を守る為だ。魔物やゴブリン、ウォークエレクチオ等がこのさきは沢山いるからな」
「特にウォークエレクチオ、コイツに襲われたら死ぬまでセックスは終わらない。」
「ガチャ」
馬車の後部トビラが開き少女が降りてきた。
奴隷館から購入した普通種ヒトの生娘の少女だった。

竜人ガイとありさのセックス

１３食

ありさがガイのテントに入って行く。昨日、レイナに改造されていた性器の検査が終わった。レイナの細い指で性器を弄られ「ほら、奇麗な、なめし革のような丈夫な性器になったわよ。これだったら壊れる心配は無いわ」

手鏡に映されたありさの性器は牛革の鞣したような光沢の有る光を放ちクリトリスも小さな米粒が少女の乳首大にヒョッコリと飛び出ている。

「感度も良くなっているから」

顔を近付けたレイナがクリトリスを口に含むと舌先でクリクリと舐めると

「ハゥウウウ〜〜〜〜〜」

頭にかけて股間から電流が突き抜けた。

「ラム！夜伽の準備をしてガイのテントに連れて行って。

「こちらに来て！全て衣服を脱いで。」

ありさは言われた通りに来ていた布だけのブラウスを脱いだ。簡単な衣服で前と後を縫い合わせ腰を練った紐で結んでいるだけの衣服。下着は無い。

「この股の毛は直ぐに生えるのね」

顔を赤らめながら前の陰毛を隠す。

「まあ、今日は全てこの毛は抜くからね」

「そこに座り四つん這いになって尻を突き出して！」

ソロソロと膝を付き四つん這いになると尻をラムに向けて突き出した。壺に入ったワックス状の液体をヘラを使いながら尻の穴から大陰唇、恥骨からクリトリス迄を塗りたくる。

数分後、ゴムのように固まると「イッキに剥すからね！」

言い終わる前に固まったワックスをイッキに剥がした。
「イイィ！」
股間に激痛が走る。
股間の処理は昔の現代社会だった頃はパンティから出る部分だけを剃っていたので敏感な部分の毛を剥がされた事は初めての経験のありさは、その痛さにビックリしていた。
「ヒャイ！」
ハッカ入りの油を股間に塗りたくられビックリしたありさは声を上げた。
「もう、股間に毛は生えないからね。」
ハッカと脱毛で股間はヒリヒリしている。
「そこに立って」
言われるがままに立つと顔に革のマスクを被せられ手首と首、太腿に革の防具を付けられた。
「ガイはもう龍人化をして来ているからね。牙と鉤爪で怪我の防止用の防具よ」
ＳＭ嬢のようなボンデージ姿でガイのテントに入って行った。
「シューシューシュー！グルグル…」
獣臭がテントに充満している。
座っているのは大きなトカゲが座り股間には鱗がビッシリ付いたペニスをイキり立たせている。
竜人時の美男子の顔は面影も無くオオトカゲが発情して座っている。
「ヒィ…」
ありさはその場で腰を抜かしヘタりこんだ。
「ガヴ！」
ヘタり込み、小水を漏らしたメスのニオイに理性が無くなったガイが飛びかかり太腿を左右に開いた。太腿には鉤爪が生えたトカゲの手が獲物を逃さないように食い込んでいる。
防具が無ければ太腿の肉は削ぎ取られている。ありさの股間に先が割れた舌が伸びチロチロと尿を舐めとる。舌が生き物のように動き

クリトリスを締めたり捻ったり指先のように動き回る。
「アゥ！クッ…アアア…」オオトカゲに股間を舐められている快感と恐怖、色々な感情で経験人数が少ないありさも眼をトロンとさせ、時に白目になりながら悶ている。二股の舌が膣口を広げて、奥に入る。突き当りの子宮口の亀裂を小さな舌先がこじ開けようとする。
初めての快感にありさは悶え死にしそうになる。
ヒョロンっと舌先がガイの口に戻ると鱗だらけのペニスをありさの割れ目に当て膣に潜り込ませた。
「ヒャイ！」
竜人が龍化する前は低体温に成りペニスも冷えている。熱い肉の壺に冷えた氷の感覚で少し正気をありさは取り戻した。竜人のペニスは人よりは少し大きいが入らないサイズでは無い。しかし鱗がネックになる。差し込む時はスンナリと膣壁を広げながら入るが引くときは鱗の返しが膣壁を引っ掛け引き裂く。
レイナに性器改造を受けていなければ一度のセックスでありさの女性器は潰れていただろう。慣れて来ると鱗が膣壁を引き裂くのが快感になる。改造で膣壁自体が鞣し皮並みに丈夫になり痛さと快楽が同時に襲ってくる。
「ガゥ！」
ガイが果てたようだかまだ、ペニスは硬いままだ。
夕方から翌朝までガイとのセックスに明け暮れた。ありさはいつの間にか失神して眠っていた。
傍らには竜人に戻って眠るガイの美しい顔が有った。
この顔のままにセックス出来ていたら…
そっと股間に手をやりオナニーをありさはしだした。

彷徨うウォークエレクチオ退治1

１４食

「マキさん。今日で終わりね。」

前屈姿勢で釣り鐘型の乳房に重りを付けて限界迄で伸ばしたちぶさに無痛刀を肋骨が薄っすら見える乳房の薄い皮膚にスッと差し込み手馴れた手付きで乳房を木皿に切り落とした。左右の乳房を切り落としたマキは眼をトロンとさせてまな板になった胸の切り口から血を垂らしていた。

「ミライ、ミクリ、マキの切り口に薬草を塗って包帯で巻いて！」

ミクリ、ミライと呼ばれた少女達がマキの胸に薬草を塗り包帯を巻く。

手馴れた手付きで乳房の乗った皿をラムの料理をしている場所に持って行き、チラッとガイの横顔を見る。

「バム！このミルクステーキを焼いていてくれる？アタシはミクリとミライの貞操帯を外して拭いてくるわ。」

マキを介抱しながらテントに入るありさの後からラムがテントに入る。

「ありさ、ひょっとしたらガイにほれている？」

分かりやすく、ありさは頬を紅くした。

「ふぅ…竜人族のガイにとって貴方は肉の壷なの！」

「精子を出す為の道具だから。」

「それにガイには婚約者がいるからね。だから行為は貴方の仕事と割り切りなさい。それに、来年の異界のトビラが開くときに貴方達、元の世界に戻るんでしょ」

「後、１０ヶ月位の我慢でしょ。私達、エルフからすれば瞬きみたいな時間よ。」

ラムにガイが好きな事がバレてありさは恥ずかしくなった。

昼に移動をし、襲って来た山賊を退治しながら東の海の手前のハイエルフの村の入り口まで来た。
村の入り口で門番のハイエルフの男にラムが食料、水の補給と通行を頼むと門番の男が村長のハイエルフを連れてきた。
「一行は勇者バムの一行と聞いたが、一つ頼みを聞いて下さらぬか？」
「村長！何があったの？魔物？野良ゴブリン？」
「嫌、村の近くの森にウォークエレクチオの群れが住み着き、村の薪を取りに行った娘が連れ去られた。」
「群れと言っても１０人位なら村の男で退治はできるだろ？」
「ソレが勇者か術者、巫女の類が束ねて５０は下らん。儂らにはどうする事も出来ん。食料品、水に金貨でお願い出来んか？」
「娘が拐われたのは？」
「２日前じゃ。」
「経ちすぎだな。娘の安否は難しいぞ。」
ラムの後からバムが歩いて来てそう言った。
「もう、３時間で夜だ。今夜の夜に巣穴か砦か、奇襲を掛けて全滅させる。」
「５０なら全員で行かないとキツイな。」
「ラム！ありさにトラップを仕掛けて敵が食い付いたら後を追いアジトを見つけてくれ。」
「村長、ソコの空き地に馬車は置かして貰うぞ。操る者がいたら今夜、退治しないと逃げられる」
「ラム！早速、ありさにトラップとコレを仕掛けてくれ！」
「バム、コレは？」
「黒巫女エルムから貰ったドラゴンの卵さ。子供でも危険を感じたら敵は滅ぼすだろ！」
「分かった。」
ありさは馬車の中でマイとマキの手当てをしていた。マキが異界の風邪が移り寝込んでいる。

「ありさ！チョッとした仕事だよ。他のマイやオチビちゃんは馬車を降りて！」
「マキは…寝かしていて良いか。」
「ありさ、裸になって座って股を開いて！」
「何をするんですか？怖い。」
「貴方しか出来ない仕事だよ。人助け！ほら、早く！」
「何をするか、教えて下さい。」
「面倒だね。貴方には囮になって貰うの！ウォークエレクチオの退治のね。」
「ウォークエレクチオ？」
「旅する勃起した男とか動くペニスとか言われている、アンデッドだよ。」
「貴女を助けた時に子宮から子宮スライムを吐き出させたよね。普通の娼館は吐き出させるんたけど、モグリの店や奴隷館から脱走した女は取り出さずに男と練るのさ。女は衰弱死か水に浸かって溺死だけど、男は脳を占領されて他のメスを襲い自分の分身をペニスから相手に移す。普通は群れて行動しないから村の男や普通の冒険者なら倒せるが時々、３流勇者や術者が群れを操り村を襲うの。ソレを退治。」
「何でアタシなの？」
「アナタのアソコはガイ専用に丈夫にしているから壊れないし仕掛けもするから安心しなさい。」
「他のマイやマキならアソコが裂けて死ぬわよ。だからアナタなの」
「他の人にして貴女、見殺しにする？」
「ラムさんは駄目なんですか？」
ラムがムッとしてズボンをずらし小さな子供のような割れ目を見せた。
「アタシたちハイエルフのメスはココが小さいの！だからハイエルフのオスとしかできないの！」余りの剣幕に慌ててありさは謝った。
そうだ、ラムはバムが好きなんだ。素直に座りラムに向けて股間を

突き出した。
ラムは小指の先大に肥大したクリトリスに透明な糸を巻いた。
そして指で広げたありさのビラビラした陰唇を広げて、もう片方の指先に小さな豆状の物を膣奥の子宮口の裂け目に押し込んだ。
「何を入れたの？」
「貴女を護る者よ」
「さあ、薪を拾いに森に入って」
馬車から出たアリサはランタンと簡単なナタ、ノコギリを持って森に入って行った。後、少しで日は沈む。
後から糸を捌きながらラムは遅れて森に入って行った。

盗賊退治

15食

ありさは森の中を薪を探す振りをしながら彷徨い続けた。
時折、異界の虫の鳴き声が聞こえ、異界の鳥も独特の鳴き声を発する。
いくら、ラムが付いて来ていても薄い森の中は心細くなる。
森の中央辺りに草原が有る。
余り大きな草原では無いが切り株が数個、椅子のように有る。
少し休もうとその内の一つに座った。四方を森の木が生い茂る。
ウォークエレクチオの出る気配は無い。
木の上から双眼鏡でラムがありさと草原を見渡す。草原の草を分けて二本の黒い筋がありさにせまる。
ウォークエレクチオの移動速度では無い。マビトかハイエルフ、蛇の速度である。
蛇なら防御の呪文をしているから近くで逃げ出すが真っ直ぐありさに近付く。
「ザバッ」
いきなり、ありさの眼の前の草むらが別れ、頭巾の男に鳩尾を棒で付かれる
「グフッ」
倒れ込む瞬間に後から近付いた男にがありさに袋を被せて二人掛かりでありさを肩に抱え上げ、一人がナイフでありさとラムの連絡用の蜘蛛の糸を切った。
「蜘蛛の糸を切った？ハイエルフだ！」
ラムは懐から小鳥を出して呪文をかけて飛ばし拐った男達を追った。
ありさの耳の穴には念を声に変える豆を詰めている。
「ありさ？大丈夫？シッカリとアタシが追っているから」

小鳥がツバメより早く森の入り口にいるバム達、一向に到着した。
「バム！敵は盗賊団。ありさが拐われた。蜘蛛の糸を見破ったからハイエルフも混ざっている。鳥には念を送るから鳥の後を付けて来て！」
バム、ガイ、スレイは馬を飛ばした。バムの馬の背中にはレイナも乗り涼し気に髪をなびかせて微笑みを浮かべている。
「頭！コイツ、村の連中が雇った奴の仲間ですぜ」
２メートルは有る大男が、大ナタを手に持ち歩いてありさに近付く。山の麓に空いた洞窟を盗賊達が基地にして近隣からハイエルフ、マビトの若い娘を拐い洞窟の横の檻にぶら下げて、膣に槍を刺している。檻の上にはナイフを持った男が数人、登り周囲を見廻している。娘達を助けに来た村人や勇者達を足止めする為に近付いたら縄を切り娘達を槍で串刺しにする算段である。
「バム！娘達を入れている檻の上に３人、洞窟横の広場に術者とウォークエレクチオが３０体」
「檻の娘達は檻からぶら下げて、股間に槍を刺して地面に固定されている。私達が行ったら脅しに使うかでしょ。どうする？」
「ラムは檻の上の盗賊を３人、始末して欲しい。術者はレイナに任せる。洞窟の中は俺とガイ、スレイで行く。」
「後、２分後に決行する。」
ラムが木の上で背中の矢を３本取り出し弓に掛けた。
洞窟の中では裸にされた、ありさがイタぶられようとしていた。
裸にされ、クリトリスに結われている蜘蛛の糸をハイエルフに引っ張られ弄ばれている。
「ウン。ゥ！」
糸が引っ張られるたびに声が出る。
「珍しいマビトだな？アソコの具合は？」
ハイエルフの男が指をなめ革のような肉ビラと亀裂に滑り込ませる。
「？マビトにしては硬いぞ？
改造されている。それも術者に。コレだけの事が出来るのはＡ級以

上。お前の飼い主は誰だ！」
ラムからバムの名前は出すなと言われた、ありさは黙っていた。
「面白いアソコだな。其れだけ頑丈ならオレ専用にする。のけよ！」
3メートルのハイゴブリンの男が丸太を両手に抱えて来たと思っていたありさは驚愕した。
丸太はハイゴブリンの男のペニスで先には鉄の三角錐のカバーが付いている。
「コレでズタズタにすれば柔らかいアソコになるだろ？」
「お前たち、押さえろ」
手足を押さえられ、三角錐の先がありさの割れ目に触れた。
…こんなの入れられたら死んじゃう…恐怖が頂点に達っした時にありさの下腹部の内部、子宮口の豆が割れ中から小さな糸が出てきた入り口、膣から出ようと動く内に段々と大きくなっていく。
ハイゴブリンの男が入れようと腰に力を入れた瞬間、男の下半身に感覚が無くなった。
「ハレ？」
目線が下から上にしか見えない。
ドラゴンが洞窟の中の盗賊達を食い殺して行く。
「ギャーグエー」
洞窟からの叫びに檻の上の盗賊が縄にナイフを当てようと手を伸ばした時に
「スカン！スカン！スカン！」
一斉に眉間に矢が刺さり倒れ込んだ。
ウォークエレクチオの前にいる術者が娘達に手を向け呪文を唱える型をした時に下腹部にフワリと微風が当たった。
「……」
声が出ない。
「バシャバシャバシャバシャ」水のような物がタレ落ちる音が聞こえる。
恐る恐る下腹部を見ると切り裂かれて膀胱の尿が腹部から漏れ出し

ている。「ヒ、ヒー…」
何とか自分の術で腹の傷は止めれた。
「チクショウ！」
檻に眼を向けると檻はバラバラに崩れ娘達は地面に倒れている。
「この黒巫女ヤマさまに盾突き生きて……！」
黒い頭巾が風で捲り赤い髪が見えた。
「え！貴女は…」
「３流巫女が黒巫女を名乗るの…」
レイナが術を唱えると整列しているウォークエレクチオが一斉に燃えだした。
「貴女は私のペットにしてあげる…」
マヤは身体から力が抜け倒れた。
「うわ！凄まじいな。殆どドラゴンが噛み殺しているぞ」
「アレは暗黒龍だな。レイナしか懐かないぞ」
「……鎮まり我の懐に…」
大蛇大の大きさの龍は小さく成りながら出口に佇むレイナの元に行き、首に巻き付きチョーカーのように布のようになり首に収まった。
ありさは血塗れで座っていた。
「ホレ、帰るぞ。」
スレイが盗賊から剥ぎ取った服をありさに渡した。
「お前も盗賊の服を外の娘達に渡して回れ」
「バム！馬は使わして貰うわよ。良い物、捕まえたの」
「ああ、先に帰っても良いぞ。レイナ、余り夜に叫び声は上げさせないでくれよ。」
「わかったわ。おい！ヒト、この女を馬に乗せろ」
ありさは気絶しているヤマを馬に乗せた。
レイナも馬に跨り
「ドラゴンを産み落とした初めてのヒトだなお前。」
クスリっと笑い馬で森に分け入って行った。
「ラム！服は着せたな。先に娘達を連れて帰ってくれ。ありさも同

行してな。」
「バムはどうするの？」
「盗賊の遺骸を片付けて帰る。このまま、魔物やスライムが着いたら後々、厄になるしな。」
「それに、俺の相棒に餌もあげないとな」
ラムは相棒で納得しありさと娘達を連れて森に分け入って行った。

ヤマの肉体改造

１６食

村に到着したラム達は娘を無事に助けた事で歓迎を受けていた。

「無事に娘達を助けてくれて有り難い。流石に勇者バムさま達じゃ」

「バムさま達は？」

「バムは盗賊達の遺骸を片付けて帰って来るって。村長、他の村の娘達も村に返して貰えるかな？」

「トコロであの巫女は？」

馬の背に縛られ乗せられた巫女を見て村長は

「盗賊なら儂らに渡してくれんか？アイツらに殺された村人もおる。」

「妾の獲物を欲しいと…」

急いで村長にラムが話をする。

「普通のハイエルフには巫女を処刑する事は無理だわ。私達に任せて。」

「ラム！アタシはこの娘で遊ぶから…用事が無ければ呼ばないで…」

「わかったわ。レイナ…余り叫び声は上げさせないでね。」

ニコリと笑い自分の馬車に戻り、村の片隅に小さなミニチュアの小屋を置き呪文を唱えるとミニチュアが大きな建物に変わった。

肩に簡単に乗せ小屋に入る。

「ガチャン」

中から鍵を掛けた。

森の中をバム、ガイ、スレイが馬に乗りユックリと進む。月夜に星が瞬いている。

「いつ見てもバムの相棒の食欲は凄いな。」

「３０体は喰ったのでは？」

「まあ、亡骸を喰わせているだけで本来は捕食だからな。」

「東の魔女退治では使うのか？」
「いや。魔女を使い魔にするつもりだ」
「ガルムが魔女に乗っていたな」
「有効利用しないとな。退治ならA級が１０チーム有ればできる」
「レイナが敵の術者を捕まえて持って帰ったな。」
「魔道具か何かに使うんだろう。干渉はしない」
小屋の中では大型な円形の拘束台にヤマは着衣のまま台に拘束されていた。
側の机の上ではレイナがメスを研いでいる。
机の上には、ナイフ、キリ、洋梨型の道具等が置かれ、天井の滑車には鈎針が付いた縄が垂れ下がっている。
ユックリとレイナが椅子から立ち上がり、気絶しているマヤに近づいた。
「…愛炎…」
呪文と共にヤマの衣服が青い炎を上げ衣服を焼いた。
「あ！あっ熱い！」
「へぇ、貴女、ハイエルフなの？」
「ハイエルフの黒巫女は聞いた事が無いけど誰の弟子なの？」
「あ、暁の巫女エルムの孫弟子だよ！」
大概の黒巫女は5大巫女の名前を聞けば畏怖する。
「へぇ、あんたエルムの孫弟子なの？アタシはレイナって言うの。今からエルムに聞くわ」
ヤマは凍り付いた。眼の前の女は5大巫女、その中でも最凶の狂い巫女レイナ。
「あっそ。知らない？じゃあ玩具にしても良いわね。じゃあねエルム！」
「あなたさぁ、嘘は駄目よ。」
「本当は白巫女の修行中に逃げ出した所で盗賊の仲間になりました」
「ハイエルフにしてはアソコが広いし使い込まれているね。」
ヤマの股間に付いている性器をイジり回す。柔らかな指が透明な肌

に亀裂のように付いている性器をイジり指で肉のビラビラを引っ張り、膣に指を入れてかき回す。
「ウン、ウン…」
細い指が敏感な箇所をユックリ押したり、爪を立てたりすると透明な液体が亀裂から垂れる。
少し膨らんだ胸に手を伸ばし、ピンクの乳首をつまむ。
「アン！」
「小さいのに感度は良いわね。」
少し考えて、
「貴女、内の仲間の性奴隷にするからね。」
ヤマは少し安堵した。捕まった時から死を覚悟していたし、性の相手なら盗賊仲間のハイエルフの相手はしていた。
「貴方の相手は竜人族だから性器を改造させて貰って、小さい胸は大きくしてあげるわ。」
狂い巫女レイナの祀る神はエロスと死を司る神。
まさか性器を改造されるとは思っていなかった。
小さな木をハイエルフ特有の小さな亀裂に入れる。
「この木はね。愛液や体液を栄養に育つの。育ちながら樹液を出して膣壁に付くと浸透して動物の革のように丈夫になるの。私が特殊に改良したから明日の夜には丈夫に成っているわ。」
それとね…
「パカッ、パカッ」
小さな乳房にカップを被せてカップの突起に袋を付けた。
「ブブブ…」
小さな虫の羽音がする。
「な…何…」
「大きな声を出さないように…」
口に木の束を加えさせて布で縛った。
「痛かったら木の枝を噛みなさい。麻酔と淫薬がしみでるから…」
袋を叩くと一斉に蜂が飛び出し透明な乳房とピンクの乳首に群がり

泊まる。
極彩色の赤と黒の蜂が白い乳房を這いずり回る。
「ブッッ…」
「ウウウウウウウウ…」
「この蜂は北の山脈に住む蜂でマビトのメスが乳房を大きくする為に使うの。普通は毒を薄めて胸に針で注入するんだけどね。直だから明日には巨乳に成っているわよ。」
「あ、ココもね。」
小さな小瓶をクリトリスに被せて真空の呪文を掛けると空気が少なくなった蜂は暴れて当たり構わず針を刺した。
「ギギギギギギギギ…」
眼に涙を貯めて痛みにこらえているヤマを見ながらユックリと椅子に座り真っ赤な果樹酒を飲み、苦しみに耐える様をニコニコしながら眺めていた。
戒律によりレイナは異性と交わりが無い。ソレが異常な性癖に変わり人の苦痛が楽しくてしょうがなくなった。

ヤマとありさの性器改造

17食

「グググググググググ…」

一晩、眼を見開きヤマは痛みに耐えていた。先にクリトリスを蜂に刺される痛さに耐え、胸は蜂に刺され過ぎて痛みが無くなっている。膣に押し込まれた拡張用の魔樹木はヤマの尿、愛液、体液を栄養に変えて一晩で子供の腕の大きさになり股間から伸びて枝が生え葉を何枚か付けていた。木の出す樹液がヤマの膣壁に染み込み柔らかな膣壁が厚くなりかけていた。

「ヒギギギギギギギ…」

手は握り締めて掌に爪が食い込む。口に詰め込まれた痛みを和らげる枝も余り効かなく成っている。

「あら、寝れなかったの?」

他人事のようにレイナが起きて来た。

銀の髪に透明な白い肌。彫りの深い整った顔立ちは男なら誰でも振り向く。たわわな胸を透けた黒のドレスに身に纏い同性が見ても息を飲む美しい女性が苦しみに耐える女性の前に立っている。

「あら、胸が結構、大きく成っているわ。後、半日かな?昼過ぎには立派な胸が出来ているわよ。」

股間に手を伸ばし真空にした瓶を剥がす。

「ポン!」

蜂は針を刺しすぎて事切れている。

「これ位が丁度、良いかな?」

指でクリトリスを弾くがヤマには分かっていない。

マヤの頭の中は昼迄、この苦痛が続く事で絶望的に思えた。

「貴女、巫女だわね。裏切ったりしないように奴隷の呪文をかけるわよ。名前を聞くから枝は外すわ。」

「ありさ！入って来なさい」
小屋のドアがユックリと開いて、染めていた髪の色が黒髪に戻ったありさが入って来た。
「ありさ！コレからコノ娘もガイの夜這いの相手になるの。貴方の専属奴隷にしてあげるから、名前を聞きなさい。」
「名前はヤマでは？」
「ソレはあだ名みたいな物よ。あなたの世界でも氏名って有るわね。ソレを聞かないと奴隷の呪文はかけれないの」
「…ぜ、絶対に言うもんですか…」
「ありさ、この子の仲間の盗賊に殺されかけたわね。」
「そこに有る、毒虫や拷問具を使っても良いから言わせなさい」
「胸のカップはまだだから、その肥大したクリトリスとまだだけど膣から魔樹木を抜いてアソコに拷問しても良いわ。」
ありさにはガイの性の相手にこの女がなる事に嫉妬に似た憎悪のような、もともと有ったサド気質が湧き上がっていた。
「ありさ！やり過ぎて壊れても構わないからね。」
「コレはどうしたら？」
「あー、貴女がアソコに薬を塗る仕事をするなら抜いても良いわよ。抜いても、葉に火を付けて燃やしても良いわよ」
…使い物にするなら焼いた方が…
ありさはレイナの机に置いて有るランタンに眼を付けて取りに行った。
「貴女、アソコを燃やされるわよ」
ありさが手にランタンを持ってヤマに近付く。
レイナが口を縛った布を外して枝葉を口から出す。
枝葉に唾液が付きヌメヌメと糸を引いている。
「再度、聞くわよ。貴女のなまえは？」
眼に涙を貯めてレイナを睨む。
「ありさ！付けて良いわよ。どうしても奴隷にならずに死にたいみたい。」

ランタンのカバーを外し、股間から生えている魔樹木の葉に火を近づける。
「パチィパチィ…」
ありさがレイナを見る。
眼で火が付きにくい事を訴えている。
「…業火…」
小さな火が魔樹木全てを覆い赤赤と燃え上がる。
「ヒーヒー！熱い痛い。」
魔樹木も苦しみで濃い樹液を染み出す。
「アァ…アゥ！名前はヤマ・スーニャ！早く止めて！」
「…深水…」
炎を水の玉が覆い火は消えた。
レイナは手をヤマにかざし、奴隷の呪文を唱えだす。
「…暗黒の神、エイナスの名の元に…」
ヤマの肩に赤い痣が浮かび消えた。
「ありさ、魔樹木はもう駄目だから抜きなさい。優しくね。貴方の仲間になる子だからね。」
魔樹木は木の根を子宮口から子宮内にまで伸ばしている。力任せに抜けば子宮迄で出てくる。
ありさは木を掴みユックリと引っ張る。
「い、痛い…」
膣を拡げて育った魔樹木は樹皮もゴツゴツし引き出す度にヤマの膣壁に当たり、擦る。
ありさのサド性が出て捻じりながらユックリと抜いて行く。
魔樹木の全体が出て根がまだ子宮内から伸びている。
…このまま引き抜いたら死ぬわ…
レイナがありさの頬を打つ。
「パン！」
「肉の袋の奴隷の癖に変な考えて持たないでよね。貴方よりヤマの方が術か使えるから大切なのよ！」

「ご…ごめんなさい…」
「マヤ、私が抜いてあげるわ。」
ユックリとマヤの亀裂から伸びた根をユックリと抜き、マヤの頬を撫でた。
「さぁ、胸の虫も取り除いてあげるわ」
胸に付いているカップは隙間なくヤマの肥大した胸ではち切れんばかりの大きさに成っていた。
カップの袋に術を掛けると胸にいた蜂は自然と袋に戻り、羽音も鳴らなくなった。袋に蜂が戻ったところで胸のカップを外すと小山状の胸は大きくデロンと左右に重力に引っ張られ垂れた。
乳首も赤子に吸われた妊婦のように肥大している。
「ありさ！外からバケツに水を入れて持ってきて！」
ありさは急いで外の水桶から水を汲みレイナに渡した。
レイナは布を水に浸し、マヤの胸を拭きだした。
「腫れが引けば形の良い綺麗な大きさの胸になるわ。」
「さぁ拭けたわ。ゆっくりと眠りなさい。」
「ありさ！そのテーブルの上にアソコを拡げて座って！早く」
手にはヤマの胸で暴れていた蜂が入った袋を持っている。
…何をするの？私の胸は大きいし…
「あん…」
レイナが袋の先をありさのアソコに突き刺した。蓋は取られている。
「ガイがツルツルのアソコは刺激が無いって言うから、貴女のアソコをボコボコにするから。ガイの事、好きなんでしょう。絶えてね」
「あわわわわ…」
半開きの口に淫薬が染み出す枝葉を入れ口を布で縛り。蜂が入った袋に呪文をかけると
「ブブブ…ブブブ…」
羽音が大きくなりだした。
「ふぐっ！ぐっ！うグッ！」
蜂はありさの膣壁に針を刺し、子宮にも手当たり次第に鋭い針を刺

していった。

ヤマ、ありさに殺される

１８食

「フッフッフッフッフッ…」

ありさの鼻息が部屋にリズムよく鳴り響く。

レイナはバムに呼ばれ小屋から出ている。

膣壁に針を刺され、股間が痺れている。

「ガチャ」

レイナが部屋に戻り、ありさに刺さっている蜂の袋に呪文をかけると羽音が袋に移動して音が小さく成って行った。

「出来たかな？」

クッキーでも作ったような口調でレイナは指を二本、ありさの亀裂に滑り込ませた。

「この子、根っからのマゾね。ヌルヌルだわ。」

指を膣内でかき回す。

指に突起が当たる。小型の蜂を使ったので刺した跡も小さい。

膣内全体に突起が出来てツブツブのザクロに指を差し込んだ感覚に、にている。

…コレを奴隷娘にして売れば売れるだろうけど、アタシが疲れるわ…

この子も来月までか…

バムがレイナを呼びに来たのは東の魔女との退治の話だった。

魔女は定期的に同性の生命エネルギーを補充しないと老化して死ぬ。

魔女に変わり、悲嘆して死を選ぶ者は多いが肉が腐り、骨が崩れ落ち消える迄、痛みが襲い、気絶も出来ない。

死を断念し、ハイエルフ、マビトの生命エネルギーを求めて人を襲い、時々は男の性エネルギーを吸い尽くす。

元々は異世界から連れ去られた奇種のヒトが子宮玉を失い魔女に変わる。

普通は子宮玉を抜かれると消滅するが念や怨念が強いと魔女に変わる。
魔女に変わると術もかけれるし、元の世界で格闘技等の経験者なら異世界ではA級のパーティでは歯が立たない。
東の魔女は元は格闘技のチャンピオンだった女だ。普通は王宮付のS級勇者が担当するが北の魔女を退治していた時に剣士と賢者が怪我をしたと聞く。
…餌としての普通種ヒトの処女の姉妹は生体エネルギーを吸われても、途中で私達の攻撃で吸うのを止めれば生き残るが、ありさ、マキは吸われたら老人になるか、そのまま消えるか？
私が作った子宮玉は2個。魔女は取られた子宮玉を子宮に戻せば魔女では無くなる。出来るなら後、一つは、子宮玉を用意して置きたいが、誰から作るか…
ヤマから抜いても良いのか？　東の魔女を退治する方法をレイナも考えていた。
…ヤマは術も出来るしハイエルフだからヒトよりも長生きする。
普通種のヒトなら奴隷館や売春宿で手に入る。…
東の魔女が出る海辺の村で考えるか…
翌日、バムは村長より金貨と水、食料品を分けて貰い村を後にした。
森を抜け、山を数個超えると山頂から海が見えてきた。
「今日はこの近くでテントと小屋を設営する。ガイの月一の性交もしないといけないからな。」
「今回の相手はマヤに頼む。お前も初めてだろう。」
「ガイ！構わないよな？」
「うむ。精を出すだけだ。」
「ヤマ、夜にガイのテント。夜の相手をして貰う。行く前にラムに鎧を付けて貰え。」
「ラム。頼む。」
二人の会話を険しい顔でありさは聞いていた。
食事が終わりガイがテントにフラフラと戻って行った。

もう、腕には鱗が浮きあがり、手の指先には鉤爪が出始めている。
「ヤマ！こっち来て」
ラムに呼ばれヤマはラムのテントに入る。
「全裸に成って。」
素直にマヤは全裸になる。
ハイエルフのメスは体毛は短く陰毛も産毛並みに短い。
「ヒャリとするけど潤滑油だからね」
念入りにヤマの股間に淫薬いりの油を塗り、顔に面、手と太腿に革の鎧を付けた。
「さあ、行きなさい。」
言われるままにガイのテントに入って行った。
「グルグルグル…」
もう、ガイは巨大なトカゲに変わり鱗が生えたペニスを立てていた。

ヤマも怯えて腰を抜かし漏らした。
尿のメスの匂いに興奮したガイはヤマに襲いかかり、鱗だらけのペニスを白い肌に亀裂が有るピンクの割れ目に突き刺した。
「アァ！痛い。痛い。」
ガイは突き刺さすと腰を振り精を出すだけの行為をする。
「ヒギッ！イタ…」
抜く時に鱗の返しが膣壁を擦る。
行為は朝方迄で続いた。
マヤは気を失っていた。
早朝、ヤマは先に起きた。
横にはトカゲから彫りの深い美麗な顔のガイが眠っている。
水桶の有る場所に行き、マヤはバケツに水を汲み脚の鎧を外して体を拭こうと屈んだ時に股間に激痛が走った。
「イィ！」
股間には深く鎌の先が先程までガイのペニスを収めていた膣に刺さり後ろの尻の穴と繋がっていた。

「ギビー！」
バタリと倒れて痙攣している。
ワナワナと震えたありさがヤマが倒れた横に立ち尽くしていた。
「あんた！何をしているの！」
ラムが異変に気付きテントから出て来てヤマに駆け寄ったが息絶えていた。
「ガイ、ガイ、アタシの…」
ありさは直ぐにラムに縛られた。
「どうしたの？ラム！」
ユックリとレイナが近付く。
「そう、殺したの…悪い女ね。
仲間を殺すのは万死に値するわ。ラム！アタシの小屋に入れていて。
バムにはアタシが話すから。」
ニコリと笑いながらレイナはバムのテントに向かった。
まるで、ありさが嫉妬に駆られヤマを殺すのを知っていたかのように…
…コレで子宮玉はありさから取れるわ…
エロスの神に仕えるレイナには行動が全て分かっていたようにヤマは死にありさからは子宮玉を取れる。
バムにはレイナがありさに嫉妬を植え付け操ったのは分かったが子宮玉が必要なのは分かっていたので黙って聞いていた。

ありさ、子宮を抜かれ……

１９食

「凄い事をやったわね！アナタどのパーティーもそうだけど、仲間殺しは重罪。処刑だから、貴女もヒトだからと例外ではないわ。」

「貴女の子宮玉を貰うから、最後は仲間の力に成りなさい。」

尻を突き出した格好で台に固定されている、ありさは譫言のように

「ガイはアタシの…ガイはアタシの…」

「色ボケも、ここ迄とは…貴女、元の世界では余り経験はないでしょう。」

真っ白な尻をパシンッと叩く。

「ヤマから子宮玉を採る予定だったのに…仕方無いから貴女から子宮玉は頂くわ。」

「…わが右手…」

レイナが呪文を唱えると右腕が伸びて指は猛禽類の鉤爪のように変幻していく。

「呪文でも取り出せるけど、アタシは自分の手で取り出すのが好きなのよ。子宮の弾力と引き出す時の絶叫。大好きなのよ。」

鉤爪を握ると細い棒状に変形した。

ありさの尻の穴、下にポッカリと空いた穴に変形した腕を滑り込ませる。

十分に強化、改造した膣はすんなりとレイナの腕を受け入れた。

「本当は貴女の乳房も切り取ってあげようと思ったけどメスの象徴は付けてあげるわ」

そう言うと膣の奥、子宮に当たった腕の先、鉤爪に変形した掌を開いた。

「アグッ！グエッ！」

爬虫類のような鳴き声をありさは発する。
鉤爪を子宮に当てレイナは握る。
「ギ…ギェー！…」
頭をガクガクと震わせ眼は宙を泳いでいる。
柔らかな子宮に鉤爪がギッチリと食い込んでいる。
「ほら！抜くわよ！」
「ガガガガガガ…」
頭を振り乱し、身体は震えている。
「ズル…ズルズルズル…」
レイナの腕にはピンクに光る袋と袋から伸びた黄色い玉状の物が付いてありさの股間の穴からズルズルと出て来た。
ありさはピクピクと動いていたが、やがて動かなくなった。
レイナは手に持った子宮を桶に入れる為にありさから振り向き歩き出した。手にした子宮からは体液がヒタヒタと垂れている。
普通ならヒト、マビト、ハイエルフのメスは子宮を抜かれると絶命し、回復術を掛けていると作用で砂のように崩れて無くなる。
「！」
レイナが背後で凄い殺気を覚え、子宮をテーブルに投げながら、ありさに対峙した。
普通なら消えるありさが紅い髪に変色し、緑に肌の色を変えて仁王立ちしている。
「え！この子も奇種！」
「グエッ！！」
レイナに襲い掛かり鉤爪の残る腕に噛み付いた。
「駄目…呪文が…」
レイナは太腿に隠した剣で自分の腕を切り落とし、片腕で呪文を唱える構えをしたが
「ギャ！ギャアー！」
ドラゴンのような雄叫びを上げて屋根を突き破り小屋から逃げ出した。

レイナが外に出るとオオトカゲに変わったありさが西の空に飛んで行った。
「レイナ！どうした！」
「バム！貴方、ありさは普通種って言ったわね。あの娘、奇種のヒトよ。子宮を抜き取ったら魔女に変わったわ。私の右腕を噛みちぎり西に飛んで行ったわ。」
「髪は？」
「赤色よ。マイと同じ。」
ちょっと、アイツの友達のマキに聞いてくる。
マキも騒ぎで起きていた。
「何があったの？ありさは？」
「ソレよりもありさの髪の色は元は何色だ？答えろ。」
「産まれた時は紅い髪で母親が直ぐに染めたって聞いた。母親の故郷では紅い髪の子供は鬼の子って忌み嫌われていたから母親が直ぐに染めたって言っていた。」
「産まれて直ぐなら奇種だ。」
「バム！奴隷館の親父は何も言わなかったの？」
「いや。親父も知っていたら手放さないし、ジャンも知らずに売ったんだろ。」
「とりあえず、五大王国には連絡は入れる。」
異性ラクナにも秩序が有り、五つの王国が存在する。
勇者の登録、等級も王国で決める為、新たな魔女が産まれたら全てに報告する義務が有る。
「レイナ、腕は大丈夫か？」
「腕と貴重な奇種の子宮を交換したわよ」
「ラム！王国に伝書鳩ともう一度、マイ以外のヒトを普通種か奇種か見てくれ。」
「それにしてもあの娘、本当にガイを好きに成っていたのね。想いからドラゴンに変異なんて。」
「東の魔女を退治したら、ありさを追うぞ。」

マキがラムにありさの所在を聞くと
「ありさには街に薬草と薬を買いに行ってもらたから…」
マキも誤魔化すしか無かった。

レイナの買い物

20食

「マイ！直ぐに来て！裸でも構わないから！」

ラムに起こされ、覚醒せずにレイナの元に連れて行かれた。

「貴女の腕、貰うわよ！」

言い終わるか否や、左手に持ったレイナの剣がマイの腕を切り落とした。

「ラム！直ぐに傷口を洗って薬草を塗っていて！」

そう言うとレイナはドラゴンに変幻し食いちぎられた腕の付け根を切り落とした。

「グッ！」

無痛刀では無く、普通の剣で切り落としたので流石のレイナも声を上げた。

ラムがレイナにマイの腕をくっつける。

「…暗黒神の加護…」

呪文を唱えると腕が繋がり切り落とした傷口が塞がり、筋になり跡形も無くなった。

新しい腕を降ったり、剣を握ったり動きを確かめている。

「何とか繋がったわ。」

「ラム！アソコで転げ廻っているの介抱してやりなさい」

無痛刀では無くなく、普通の剣で腕を落とされたマイが地面に転がり痛さを堪えてる。

「はい！転げ廻るから傷口が砂まみれよ！」

ラムが水桶の水にマイの腕の切り口を浸し、砂を洗い落とす。

「アゥアゥアゥ…」

眼に一杯の涙を浮かべもがいている。

水から出した切り口にラムは腰の袋から取り出した薬草をベッタリ

と塗り込み布で包んだ。
薬草に混ぜた鎮痛剤で痛みが和らぎ、同時にマイは痛みから開放された安堵で気を失った。
「とりあえず、あの山を越えたら東の海が有る街に着く。少し早いが出発する。」
「レイナ、腕は動くか?」
「何とか回復させるよ。ガイの性の相手は?」
「海の街で適当に探すよ。」
「じゃあ、小屋とテントを小型化にして出発するぞ!」
「ラムはマイを馬車に乗せて、マキにはありさの事は隠して。」
「マキ。起きて!直ぐに出発するから」
「あの騒ぎに起きないなんて凄いね。」
眠そうにマキ、姉妹のミライとミクリは馬車に乗り込んだ。
「ラム、明日からマイの肉を削ぎ落として塩漬けにしていてくれ。何時、魔女との対決になるかわからない。」
馬車を走らせ翌日の昼には東の魔女が出る海辺の街に着いた。
「ラム。街を治める王国の役人に挨拶に行ってくる。ガイは付いてきてくれ。スレイは馬車のヒトを頼む。」
「レイナは街の奴隷館か売春宿で調達を頼む。性器を改造するレイナが探した方が良いだろう。マビトかヒトで頼む」
「分かったわ。」
黒い頭巾に長いマントを靡かせレイナが街なかを歩き出す。
レイナには女性の悲鳴、喘ぎ、体液が良くわかる。売春宿、奴隷館の場所は自ずとわかる。
街の外れ迄で来た所に監獄のような建物が有り、門番が剣を持ち立っている。
「奴隷、買いに来たのだけど…」
頭巾にマント。マントから伸びるスラリと長い脚を見て門番は若い女が女を買いに来たのだろうと思いレイナをからかった。
「その年で女が良いのか?俺が男を教えてやるぞ」

下卑た言葉を黒巫女レイナと知らず浴びせる。
新たな街で殺戮もと無視して門を通ろうとしたところ
「無視するな！」
怒号を上げながら男がレイナの身体にさわろうとしていた。
「おい！門番！死にたいのか？」
門番の前に若い男がいつの間にか立っている。
「新しい勇者のアンタか？この女にワシが？」
「オマエ、５大黒巫女を知らないのか？その方は暗夜のレイナさんだ。」
「チッ」
マントの中の剣を納めた。
大男はヘタリ込んでいる。
異世界で５大黒巫女を知らない住人はいない。その中でも最凶の巫女レイナ。
「貴方、勇者なの？私が気配がわからないのは…Ｓ級？」
「イヤイヤ、術かＡ級なもんで…
ここで女を調達なら、この街に暫くはいるってことだな？魔女退治か？バム達が来ているって事だな！」
「暇なら貴女も退治に加わる？」
「嫌、辞めておくよ。足手まといになるし、今は奴隷館の用心棒さ。館の主人に合わせるよ。さっきの門番の事も言えば安く譲ってくれるだろ」
「貴方、名前は？」
「ライだよ。」
「ライ、術は回数よ。貴方、剣が得意だから剣で退治しかしないでしょ。」
「なるほど。回数かぁ」
ヒョロ長い男が館の入り口に立っている。
ライが男に駆け寄って話し出した。
ライが先程の出来事と買い主が黒巫女レイナだと言っているのが聞

こえる。
「どのようなメスがご所望でしょうか？」
「ヒトの処女が居れば。いなければマビト：処女がいなければ、母乳が出る娘、ヒトのメスだ。いなければ、マビトでもヒトでも構わないが子宮を叩いて柔らかくした娘と穴を広げたメスはいらない。」
「メスの処女はいませんが、乳を出すヒトのメスはおります。見ますか？」
「ああ、見学させて貰うわ。」
牢獄のような奴隷小屋に繋がる廊下の鍵を館の亭主は開けた。
「はぁ～」
メスの体液と愛液や尿が混ざったメスが出す独特なニオイが廊下に充満している。
「あぅーあぅー」
「コチラが乳を出す娘です。
普通種のヒト。連れてきてハイエルフと交配させましたが、ハイエルフはペニスも小さく穴は広がってません。」
部屋には全裸で両手、両脚を部屋の四方に縄で結ばれた女が乳房を万力状の板で挟まれ板から出た褐色の乳輪と飛び出した乳首からは母乳が身体の下に置かれた桶にポタポタと垂れている。
俯いた頭の髪色は黒に赤のメッシュ状に少し伸びた髪にアクセントとして入れている。
レイナは女に近付き、髪を鷲掴み顔を上げさせた。
「アグっ」
年はマイと同じ位。
「亭主！このメスは貰うわよ。町外れに有る洋館を借りているから送り届けて。」
…別にマキをガイ専用に改良しても良いわ…
レイナが帰ろうとすると隣の部屋からガチャガチャと鎖を動かす音がする。
レイナが覗くと部屋に鎖で四肢を繋がれ頭に袋を被せられた肌の黒

いメスが暴れている。
「亭主、あれは？」
「ああ、外にいるライが生け捕りにしたダークエルフですわ。術をかけたりしよるんで頭に袋を被せて、明日には声を出さんように喉奥を切ります。」
「亭主！アレも買う！アタシの子飼いにする。アレも送り届けてくれ。金貨は何枚でいける？」
「ウチの者がそそうをしましたので２０枚でかまいません。ダークエルフの処理にも困ってました」
「よし、今日中に洋館に届けてくれ」
奴隷館の門を潜ると門番がペコペコと頭を下げていた。
「気が変わったら魔女退治を手伝ってくれ。町外れの洋館にいる」
ライは手を上げニコリと笑った。
…今夜は久しぶりにミルクステーキが喰える…
普段は笑わないレイナは微笑みながら洋館のある方向へ歩み始めた。

新たなヒト、レイコ

21食

「レイナさんに奴隷女を連れて来たと言って下さい」
少年のような若い男が布袋を2つ馬に乗せて町外れのバム達が借りている洋館に訪ねてきた。
外ではマイとマキ、ラムが洗濯をしていた。
マイに声をかけた男は、マイが普通のヒトのメスでは無いと直ぐに感じた。
少年のような男は奴隷館の用心棒をしていた勇者ライだった。
ライは術以外はS級の実力を持っている。
だが、S級勇者になるには剣術、魔術、呪文、格闘技等全てでS級の実力が無いと成れない。
「奴隷館の主人に言われているメスを配達に来たんだけど…」
ラムがライに近付き、声を掛けた。
「レイナから聞いているわ。あの小屋に運んで！」
レイナの小屋を指差し、
「マキ！マイ！後でレイナの小屋に来てね！」
「ねぇ？あの赤毛の子って奇種だよね。凄いな異世界で奇種を捕まえるなんて。俺なんか髪を染めたエセしか捕まえていないよ。流石に勇者バムだな。」
「貴方も良く奇種って分かったわね。」
「一度、奇種を見せて貰った事が有って、奇種は独特なニオイを発するんだ。汗や尿などの体液か、フェロモンか？俺は鼻が効くからね。近づくとわかるの」
「へー。」
レイナの小屋に購入したメスを入れる。
レイナは昼は大体は寝ている。

「どっちがヒトかしら？この台に乗せてくれる。」
「白い袋だからこれだ。」
ライは白い袋を台の上に置いた。
「黒いのは？」
「レイナが起きてからイジるからその辺の床に転がしておいて。」
「バムに挨拶したいなら洋館にいるから。挨拶だけでもしていったら。」
「そうするよ。じゃあ、レイナさんに宜しく」
小屋から出たライは洋館に歩いて行った。
「さて、子宮に居るスライムを出して、術と呪文を解かないと回復魔術は使えないからね。」
「ヨイショ。」
袋からゴロンと裸の女が出てきた。
連れて行かれた先が何処か怯えている。
「大丈夫だよ。ソレよりも貴女の子宮を綺麗にしないとね。」
連れて来られた女、レイコはハイエルフ、ラムの流暢な日本語に少し安堵した。
「じゃあ脚を開脚して自分で足首を持ってジッとしててね。動いたら針が子宮壁を破るからね。動かないでよ。」
レイコのアソコは今までのヒトのありさ、マキ、マイとは少し違う。
一度、出産経験が有るからか、肉のビラビラが大きく肉厚で縁が黒く褐色なアソコの色だった。ラムがアソコを開き針を刺し込もうと開く。膣壁は綺麗なピンク色をしている。
スーッと針を刺し込む、子宮口は少し開き加減なので簡単に針先は子宮内に入った。
プルプルとレイコは小刻みに震えている。
異界に拐われ無かったら、子宮内に針を入れられたり、耳の長いエルフにアソコを弄られたりしない。
「ん！」
ラムの持っている針先にスライムとは違う感触が伝わった。

「…森の防御…」
レイコの子宮から飛び出した黒い蛇は針を伝い膣から飛び出しラムに襲いかかった。
「バチッ」防御壁に触れラムの足元に落ちた。
売春宿でよく使われる、肉穴ヘビと呼ばれる暗殺用のヘビが出てきた。
「…灰に…」
ヘビは塵のように消えた。
…あのライって奴、暗殺者だったの？
念入りにレイコの子宮内を針で調べた。スライムとヘビは一緒には無理なので子宮内に他の生物はいなかった。
…後は術と呪文かぁ…
奴隷の呪文が付いていたがラムが無効化した。
ラムも弓はS級だが、術もS級である。
「後は脱毛ね。回復魔術は今、かけるわよ」
「…エルフの神…」
レイコの身体が緑色に光った。
「ヒャイ！」
レイコの股間に脱毛クリームを恥丘から尻の周りに塗り込み、「動いたら脚の皮まで剥けるからね。そのままね。」
そう言い残しバムの所に掛けていった。
「バム！大丈夫そうね。」
「ラム！コイツ何？」
「レイナが奴隷館で購入したメスを届けに来たけど…切ったの…」
「いきなり、剣を抜いたからスレイがザクッとね…」
「誰の差し金だろうね。後でレイナの黒巫女の術で喋らせるよ」
黒巫女レイナは死者を動かしたり、魂を呼んで喋らせたり出来る。
死を司る神に仕える為、死者を使うのは簡単な事だった。
「あ！いけない脱毛！」
急いでレイコの所にラムは戻った。

「あー間に合った。剥がすよ」　レイコの股間のクリームは粘土状の硬さになっていた。
「バリンッ」
「痛っ」
「うわー尻の穴の周り、固まっている。」
道具箱から金槌を持ち出すと
「ガン！」
「ハグッ」
尻の穴周りの石化したクリームは全て取れた。
「イタタタ…」
尻の穴周りを押さえて身悶えている。
「チョット、眼に布をかけるからね」
「え？ぇ！」
レイコは顔に布を掛けられ心細くなったが、
「はぅ。ハァ、ハァン」
胸を羽根で撫で廻される感触に身悶えた。
母乳の沢山、溜まった乳房を無痛刀で綺麗に削ぎ落とすラムの刀捌きにレイコは悶ていた。
両乳房を切り取り桶に入れてレイコの切り取って無くなった乳房跡に薬草を塗り布を胸にかけた。
薬草に催眠薬を入れていたので寝息を立てていた。
切り取った乳房の乳首からは母乳が滲んできていた。
…ヒトの肉って美味しいのかな…
ハイエルフの神の教えで言語を喋る動物は食すべからず…とある。
ラムは美味しそうにミルクステーキを食べる仲間を見ながらどんな味なんだろうと考えていた。

レイナの小屋に叫び声が木霊する

２３食

マイは異世界に来てから余り肉は食べていない。
時々でるスープに数個、有るか無いかだ。
後、普通種のヒトは日本人が殆どである。
ある時、ラムに聞いた事が有る。
「…あ！それね。貴方の国って基本は農耕民族でしょ。白人や黒人は肉食が多いからバム曰く肉が獣臭いんだって。菜食主義者もいるけど探すのが手間だから日本人を捕まえて、異世界の穀物を与えて獣臭を消す。だから貴方達には肉が出せないのよ。スープの肉みたいなのも肉じゃないのよ。」
ここ数週間、スープには雑穀しか入っていない。
もうスグ、自分の肉を強化食として削がれるんだとマイは思った。
最近では無痛刀で羽根のように削がれるのが快感になっている。
…アタシってマゾなんだ…
無痛刀の快感の後の再生時の痛さも快感になっている。
スープとパンを食べ終るとラムにレイナの所にマキと行くように言われた。
マキに伝えるとマキも顔を赤らめている。
…この子もマゾなんだ…
「レイナさん。来ました。」
マキとマイが恐る恐るレイナの小屋に入る。
「え！」
二人の眼に黒褐色に銀髪の女が全裸で磔台に大の字に縛られている。
銀髪に黒褐色のブロンズ像のような肉体。
オイルを塗られているせいかテカテカと光っている。
陰毛も銀色に股間に張り付いている。

ラムのようなハイエルフでは無くダークエルフは異界でも余り見かける事は無い。
そのダークエルフの股間から桶に掛けて真っ直ぐに透明な糸が下がっている。
「なに？珍しいの？」
マイの後にレイナが立っていた。
「あれは奴隷館から購入したからスライムを出しているとこ。人より強烈なスライムを入れられてるから数日掛けて出すのよ」
「貴女の仕事はマイは強化食ように今日から乳房、太腿、クリトリスを切って保存していくからね。マキはガイの夜の相手に改造させて貰うわよ。貴女の友達のありさが嫉妬で予備の子も殺して自分も逃げるんですもの」
「マイはその台の上。全裸で台に寝転がって。マキは隣の台」
二人はお互いに全裸に成り台に言われたとおりに寝た。
マイの手足が台に固定され、尻の下にクッションを敷かれる。
寝転がりアソコを突出す形になっている。
マキも固定された。
マキはまだ陰毛の処理をされていないので黒く、こんもりと恥丘から尻の穴に掛けて陰毛が生えていた。
「ヒャイ！冷たい！」
ラム特製の脱毛クリームが真っ黒な剛毛を塗りつぶすように塗られていく。
赤ちゃんにオムツをしたような感じになる。
「さて、マイ！貴女の肉を貰うからね。」
その前に…
レイナがマイの処理されツルツルになった股間の一番、敏感な部分を引張り、レイナ特製の蜘蛛の糸で縛り伸ばす。
…クリトリスの再生が一番、痛いのよね…
クリトリスを伸ばしきり、先に胸から無痛刀で切って行く。
何時もはラムがマイの肉を切る係だが今日はレイナが自らしている。

「イギッ！ギギギギ…イタイイタイイタイ！！」
無痛刀では無く普通の刀で胸を削がれる。
「ラムは優しいからね。私は食材に情なんてかけないよ！それよりも女が泣き叫ぶ声が大好きなんだ！普通はアタシが肉を削ぐんだけど、アンタ達に逃げられたら面倒ってバムが言うからね。」
「次は左の乳房を行くよー！」
乳首を左手の指につまみ持ち上げると真っ直ぐにマイの乳房は伸び切った。
下乳房から肋骨に這わすように刀をひく。
「ガガガッグッ……ヒギェ！」
絶叫を上げ白目をむき気絶をした。
左乳房を桶に入れて左右に赤く丸く有る切り後に緑の薬を塗ると薬から白い蒸気が上がる。
「ァ～ア！熱い熱い熱い熱い」
何時もの薬では無い。
もうムクムクと切り口は盛り上がろうとしている。
「アタシが調合した特製の回復増強薬だよ。難点は凄い熱い事だね。あれ？貴女のアソコ、ダラダラと液を垂れ流してるね。根っからのマゾだね。」
「次はコレだからね。」
指で伸びたマイのクリトリスを弾く。
短刀をクリトリスの根本に当てる。
「ヒェ」
スッと左に引くと糸の弾力で紅い血を飛ばしながらクリトリスは跳ねて床に落ちた。
口から泡を吹きマイは気絶している。
股間の切り口に薬草を塗ると
「ハァ！熱い！アソコが焼ける！」
直ぐに眼を覚ます。
「ヒギギギギギギギギ…」

左右の肉の太腿の肉も削ぎ落とし、肉と乳房が入った桶には白い粉を掛けて蓋をした。
床に落ちている小さな肉の芽は液体に入った瓶に入れる。
「次はアンタだね。マキ。」
ユックリとレイナはマキに近付くと右手に持ったスリこぎ状の木片を入れようとしたがクリームを塗った事を忘れるほどマイをいたぶるのに没頭していた事を笑った。
「少し痛いからね」
力任せにカチカチに固まったクリームを剥がす。
「バリバリバリバリバリバリ」
「ギェーー」
怪鳥のような叫び声をマキは上げた。
恥丘からは血が滲んでいる。
「貴女も凄い声だね」
レイナは細い指でマキの肉のビラビラを拡げて魔樹木の木片を膣に押し込んだ。
押し込んだだけでは男性経験があるマキには普通に余り濡れずに入れられる感覚で遭ったがレイナが呪文を唱えるとマキに押し込んだ魔樹木からは根が伸び、伸びた根の先は子宮口から子宮内に入ろうと蠢き出した。
「アア！嫌、いや、変なのが入って来る」
魔樹木の根は子宮内に根付き、マキの体液を吸いながら幹を太くしていく。
「ああ、いや、さ、さける」
ペニスサイズの魔樹木が缶サイズに大きくなりまだまだ拡がろうとしている。
「うぇ！キツイ…キツイ…」
レイナの小屋の中は女の悲鳴で満ちていた。

拐われた理由

２４食

レイナの回復薬は凄い効きで3時間で乳房、太腿、クリトリスは再生した。

朝までに3回は乳房を切られ、クリトリスを伸ばしては切り取り、太腿の肉を削いだ。

朝方になり、レイナは眠りにつく為にベッドへ行った。

マイは泣き過ぎ、眼を腫らし髪は振り乱し、鼻や口からはヨダレ、鼻水を流して放心していた。

マキの股間の魔樹木は体液と愛液を吸いバットより太く樹皮は硬そうにゴツゴツし、枝葉がのび葉を繁らしていた。

マイは放心状態だったが、マキはずっと呻き続けた為に今は猿轡をハメられている。

マイの絶叫にマキの喘ぎが、入るのが気にいらなかったみたいで五月蠅いと口を塞がれた。

朝が来て、ラムが桶に水を入れて入って来た。

泣きじゃくりながらラムにマイは涙声で訴えた。

「なんで、アタシがこんなに酷い事をされないといけないの…」

ラムは溜息を付き話し出した。

「…余り、言わないんだけど…貴女、人を落とし入れたり死に追いやったりしたこと無い…例えば、他人の旦那を寝盗ったり、家庭を壊したり…」

マイには思い当たる事を思い出した。

グラビアアイドルになって直ぐにテレビ局のプロデューサーと不倫になり、不倫が相手の妻にバレて家庭を壊したり、企業の幹部から仕事を貰うために、酒に睡眠薬を入れて美人局のような事など、悪事を働き仕事を取ったり、金を脅し取ったりしていた。

「バム達、勇者にも掟が有って善人は連れ去らないの…。幾ら希少種のヒトであっても…。
貴女の場合、希少種のオーラと悪事を働くヒトの黒いオーラが見えたから連れ去られたのよ…」
「そんな事で！悪い奴は男も女もいるわ！男は連れ去らないの！」
「貴女、ゴブリンを見た事は有るわよね。ペニスを勃起させて、小さな悪事やメスを襲う小さな怪物、アレは貴女の世界の男よ。
この世界に来て、最初はハイエルフやマビトも饗したり、仕事を与えたりするわ。でも悪事を働き村や街から追放されるオスが殆どなの。そして魔樹木の森に連れて行かれ放置されるの。魔樹木の実を食べ過ぎると身体が変異しゴブリンになるのよ。ハイゴブリンは普通種のメスが襲われて生まれるのがハイゴブリン。元は同種だから妊娠はするわ。マキ達もガールズバーで悪事を働いていたみたい。だから連れ去られたのよ」
マイは絶句した。
グラビアアイドル業界では仕事の為に悪事を働く女達は何人もいる。
「基本、悪事を働いていないヒトは連れさらないがこの異世界ラクナの掟なのよ。」
「貴女はまだ、良い方よ。奴隷館に売られてセックス専用奴隷や売春宿で働くならまだましで
王族や貴族に買われペットの怪物の性の捌け口やドSの貴族に回復術を掛けられて性器を抉られたり、拷問の限りを尽くされ回復術を掛けられたままに焼かれたり。」
…それって、ココは地獄じゃないの…
「そうね。貴方の世界で言う地獄ね。貴族に売られた娘達は槍で串刺しにされたり、生きたまま、食われる娘もいるからね。
それに比べたら貴女って、まだましね。」
「あの少女達も悪事をしたのですか？」
「あの少女達は同級生を脅して売春させたり、イジメたり貴女達より質が悪いわ。処女じゃ無ければバムも買ってないわ。」

「あーありさも彼の浮気相手を階段から突き落としたわ。ココでも同じようにガイの性処理の娘を殺して魔女になったけどね。」
「ソレよりも、一年後に元の世界に戻れるの！」
「貴女が無事に過ごせたら戻れるのじゃない？」
「とりあえず、果汁は飲ませてあげるわ」
そう言い、果汁をラムは飲み、マイにキスをした。
柔らかなラムの唇から甘い果汁がマイの口に入ってくる。
「ハァ！…」
口の中でラムの舌がマイの舌に絡まる。
一通り、口や舌を絡めて、唇を離すと二人の唇は細い透明な糸で繋がれていた。
マイの顔は火照っている。
ラムがマイの胸の薬草を拭くと胸は元の山のようなたわわな胸に再生していた。
股間も拭き取るとクリトリスも紅い肉を尖らせていた。
「やはり、レイナの秘薬は回復も早いわね。」
ラムは桶を持ちマキの所にいこうとすると
「ねぇ、後なんかい、胸を切られるの？」
「昨晩で胸が６個だから今日の夕方にレイナが起きて朝までだからあと１８個、だから８回は切られるかな？でも貴女、死なないから良いわよ：」
悪いと思わずやった事が全てバレている。後、８回は切られる。
「ねぇ、ラム！せめて無痛刀にしてもらえるように言って…」
「貴女、バカね。レイナが聞くと思う？激痛刀かノコギリに変えて削がれるわよ。」
…確かにレイナが怒りもっと残酷になる…
マキは魔樹木の成長で膣が腕が収まる位に拡張している。
ラムが樹皮を触っても起きない。マキの身体を拭き出ていった。
夕暮れにレイナが起きて来た。
ラムが入って来て何か喋っている。

「へぇ、もっと刺激が欲しいの？じゃあ新しい刀でやってあげるわね。」
「約束だから言ってあげたわよ」
ラムはそう言って小屋から出ていった。
「これ、一度は試したかったのよね。」
木製の短刀に白いギザギザな歯が付いた刀をレイナは持って来た。
慣れたように乳首を持って乳房を伸ばし歯を下乳房の付け根に当てて轢いた。
「ィイアッあぎゃーガガガガガガガガガガガ」
皮膚を引くたびに小さな歯が皮膚、肉を引っ張り激痛が走る。
「アガッ」
マイは一挽きで気絶した。

レイナの楽しみ

２４食

「ねぇ、ミクリ。ココって本当に異世界？そりゃ、緑の髪に長い耳のエルフとか病弱そうな銀髪の女とかいるけどコスプレイベントじゃないの？」

「わかんないわよ。エリを半グレに売りに行く時に事故に有って、ここでしょ。で岩みたいな奴に捕まって牢獄に入れられ、ココなんだから。」

「せっかく、エリを売ったお金でホストのマサトを指名して初めてのセックスをする予定だったのに…アイツら何なの！」

「パンツを脱がされ、革の紐に金属棒が付いたパンツみたいな物、履かせられるし。処女膜破れたらどうするのよ！」

「でも、あの剣を持った男は人を斬っていたわよ。アレも作り物？」

「わかんないわよ！毎夜、女の悲鳴は聞こえるし…絶対にヤバイコスプレ集団よ」

「あのラムって女を襲って逃げようよ。アイツ、弱そうだからイケるよ！」

「ガチャン」

馬車の扉が開きラムが食事のスープとパンを持って馬車の少女の所に運んで来た。

少女達は眼で合図を送り、一斉にラムに飛びかかる。

「…処女のリング…」

ミライ、ミクリは股間を押さえて床を転げ回る。

「痛いよ！クリトリスが千切れる！」

「ったく、そのままにクリトリスを千切り落とそうか？」

「イヤイヤ…謝る…痛いよ」

「貴女達、アタシの身体が小さいから力で勝てると思ったんでしょ。逃げて何処に行くの?他のエルフやマビトに捕まって奴隷館に売られるだけよ。それに腕を見て、紅いアザが有るでしょ。ソレ、奴隷の紋章。この館から2キロかな?貴女の世界の単位で…ココではこの街から離れると身体は腐って崩れて行くわ。消える迄、身体が崩れる激痛は、続く。あの、マキやマイ、レイコにも付けているから自由に近くは歩いたりしている。貴女達は来週に仕事が有るからこの馬車牢に入れているの。バカそうだから逃げると思ったしね。後、コレ見ててね。」

ラムの手には銀の棒状の物が有る。

「…針山…」

「ザザザザザザザザ…」

棒から針がサボテンのように飛び出した。

「貴女達のアソコの穴に入れているのと同じ物。使えなくなるわね。」

ミクリ、ミライは金属のサボテンを見て股間を押さえて震えた。

「来週の貴女達の仕事が終わればもしかしたら、開放されるかもよ。」

そう言い残し牢を出ていこうとした。

「あの…食事は…」

「貴女達がアタシを倒して食事を台無しにしたんでしょ。パンは食べれるからパンだけ食べなさい」

ラムは馬車から戻り、スープとパンを持ってレイナの小屋に入って行った。

いつ来てもレイナの小屋の中は女達のフェロモン、愛液、糞尿など色々なニオイが籠もっている。

ダークエルフの女の子宮に付いていたスライムは股の下に置かれている桶に全て流れ出ている。

口は塞がれ眼を閉じて眠りに付いている。

「何故、ダークエルフだけ胸が大きいのよ…」

ラムは黒褐色の乳房にピンクの乳首を口に含むと意地悪に甘噛みした。
「ぅうん…」
「感じているわ。まぁ、仲間になるかも知れないから意地悪は辞めておこうっと…」
「うわぁ！凄い顔で気絶してる。うわっ！再生した乳房もデコボコじゃない。」
マイの台の傍らにギザギザした短刀が置かれていた。
「レイナ、コレを使ったのね。マイは起こさないで良いか。
また、切られて絶叫するから寝かせてあげよ。」
「うわぁ、凄い成長！亀裂がお尻の穴と繋がりそう。今夜も絶叫かな？レイナの趣味でアソコに蜂を入れてデコボコにさたげるんだね。あの人、仲間には優しいんだよね。」
「新しい、レイコか。まだ、乳はでるのかな？」
ラムの手がレイコの乳房を鷲掴みにした。
「ピピッ」
乳首を中心に四方八方に乳が飛び出した。
…まだ、ミルクステーキは食べれそうね。でも、今日からは当分はマイの肉で強化しないと来週の新月が魔女が砂浜に現れる日だからね。アタシも弓の手入れをしておかないとね。…
東の魔女は新月の夕刻から夜にかけてしか現れない。
今日の夕食から皆にマイの希種の肉で術や剣術、魔術の強化をしないと魔女は倒せない。
…さあ、今日の分の肉は有るから、スープ、生き血、色々と仕込むか…
そう考えながら、洋館に戻って行った。
「あああ…あが～ぁぁ…」
「ペチッ」
桶にマイの右乳房を投げ入れる。
「アズ…アズイ…」

手慣れたように左右の乳房跡に薬草を塗り、股間のクリトリスをプッと切り取って瓶に入れる。
マイは毎回、気絶している。
「後は魔樹木を抜かないと穴が繋がるわ。」
股間から木を生やしているマキの台に近づく。
魔樹木は枝葉を伸ばし葉っぱを茂らせてる。
「…業火を…」
「ボウッ！」
「熱い！痛いよ！お腹で何か暴れる！」
魔樹木の根がマキの子宮内で焼かれる熱さに苦悩して暴れる。
数分後、枝葉を焼かれ黒くなった魔樹木は半分炭化している。
「コレだけキツキツになると抜いたら子宮も出るかもしれないわ」
そう言いながらナタを持ってきてマキの股間の魔樹木目掛けてナタを振り下ろす。
「ガッガッツン。」
魔樹木をバラバラにして少しずつ抜いて行く。
「あっ！引っ張られる。」
根は子宮内から卵管に迄でのびていりる。
抜くたびにマキは声を上げる。
全て魔樹木を抜くとマキの割れ目に左右の人差し指を差し込み左右に広げた。
入り口付近のユッケのような真赤な赤肉の奥はなめし革のような色をしている。
「次はコレを…」
袋にロートのような管が出ている袋を持って来て、マキの割れ目に差し込む。
「ブブブブブブ…」
例の蜂をマキの膣内に送り込む。
「ああ！イヤ、イヤイヤ！痛いよ！刺してるよ！」
眼からは涙。鼻からは鼻水。口からはヨダレを垂らしながら頭を降

る。
レイナにとっては最高の瞬間であり、唯一、興奮して愛液を垂らす瞬間だ　。」
「はぁ…遊び道具が多くて最高の夜…」
「次はダークエルフをいたぶろうか…」
そう言いながら、磔台に縛られ動かないダークエルフに近付いて行った。

姉妹、ボディピアスをつけられる

25食

「それにしても、綺麗な身体だね。いたぶるのが楽しみだよ。」

口に詰めた猿轡を外すと

「貴女の名前を言いなさい！」

「ジャイム・イリンガ。助けてくれてありがとう。黒巫女レイナ。」

「？アッサリと言うんだね。いたぶって、聞こうと思ったのに…」

レイナが残念そうな顔で呟く。

「アタシは西の森に住むダークエルフでこの街に仕事を探しに来た時に勇者ライに騙され奴隷館に売られた。あのままなら、喉を潰され、手の指は切断されてオスの相手をして一生を過ごすところでした。」

エルフは多少なりとも術や弓等が使える為に術を書けるときに必要な声や印を結ぶ指を切られて売春宿に売られる。

「じゃあ、私達の仲間になるんだね。奴隷の刻印よりもキツいパーティーの刻印を打つよ。仲間を裏切ると即に暗黒神の餌食だ。イイね」

「構いません。」

レイナは黒巫女の本性に変化をした。

紅い髪を炎のように逆立てて揺れるさまは地獄の鬼を思わせる。

「…暗黒神……」

ジャイムの身体が紅く光り出す。

「アグッ…」

子宮自体を何者かに掴まれた感触がした。

「子宮を掴まれた感覚がしただろう。暗黒神の手が実際に掴んだんだよ。コレで貴女は黒巫女レイナに仕えるエルフだ。このドラゴン

を授けるよ。」
自分の首のネックレスを解くと小さな竜に変化した。
竜はジャイムの首に巻き付きネックレスに変化した。
「ジャイムはメスをいたぶるのは好きかい？」
ジャイムはニコリと笑った。
「じゃあ、そこで乳房を切られて気絶したメスの乳房が再生したら、切断して桶に入れてくれ。」
「はい。このメスって希種ですよね。やはり、スキルが強化するのですか？」
「ダークエルフはヒトの肉は食べれるの？」
「はい。私達の神はハイエルフのような掟は有りません。」
「じゃあ、ジャイムも食べてスキルを強化してもらわ「」して貰わないと、来週の新月の夜に魔女退治だからね。」
ガチャっと小屋の扉が開きラムが入って来た。
「ラム！膝を擦りむいてどうしたの？」
「ああ、レイナさん。馬車牢の姉妹に襲われましたよ。」
バツが悪そうにラムが喋ると
「その姉妹を連れて来なさい。お仕置きと来週の囮に使う罠を仕掛けるから。ジャイムも手伝って…」
「レイナさん、ダークエルフの方は？」
「あぁウチらの仲間になったからね」
「そう、私は北の森のハイエルフのラム。宜しくねジャイム。」
「じゃあ姉妹を連れて来るから手伝って…」
数分後、犬のように四つん這いで姉妹が入って来た。
「ァぅん？アン！」
仔犬の鳴き声を上げながら姉妹はレイナの小屋にはいる。
「キャン！」
乳房を切られて横たわるマイを見てミクリは驚き声を上げたが犬のように吠えるだけだった。
「ジャイムが術をかけたのかい？」

「ラムさんは優しいから、ヒトが付け上がるんですよ！キャンキャンと煩いから犬に変えました。」
「ジャイム！気に入ったよ。流石はダークエルフだね。ハイエルフは慈悲深いから残酷にはなれないんだよ。」
「ラム！今日からマイの肉で料理を作ってくれ。来週の新月の夜に魔女を退治しないと次は一月後になる」
「分かりましたレイナさん。ところでガイの夜の相手は？」
「明日がそうだろ？明日には出来るように仕上げるよ。」
「ジャイム！この姉妹を裸にしてこの椅子に固定して。」
「早く脱ぎなよ。ほら！」
ブラウスを素手でズタズタに紙の様に引きちぎる。
「ほら！座りなさい。」
ミクリを強引に椅子に座らせ首、小さな乳房のしたをバンドで縛り付け、脚を片脚ずつ椅子の手摺に固定した。ミクリは股を開いた状態で椅子に固定された。
「貴女も強引に座らすた方がいい？」
自分で裸に成りミライは自分で椅子に座り自分から両脚を椅子の手摺に股を広げて置いた。
「それで良いのよ。」
「レイナさん、出来ました。」
「さてと、魔女用に罠を着けようかしら」
手の平に針が二本、乗せてミクリの広げた股間の間に座った。
「へぇ…マビトもエルフもヒトもカタチは同じよね」
「生意気に毛が生えてるじゃない」
「コリコリコリコリ…」
小さな性器の上に有る肉の突起をくすぐるとぷっくりと小さく尖った。
「…声をもとに…」
「あんっ…」
仔犬の鳴き声が喘ぎ声に変わった。

小さな突起の根本に黒い針をイッキに刺した。
「いぎっ！」
「…このモノを守護する…」
針は丸まりボディピアスに変わり少女の処女の性器のアクセサリーの様に白い大陰唇に輪っかが付いた。
「ああ…痛いよ！ヒリヒリする。」
「次は元気なほうか…」
「…声をもとに…」
「何するのよ！変態女！止めろ！」
「ヤッパリ、元気な娘が鳴くのが良いわね」
股間に顔を近づけてチロチロとミライの肉の芽を舌先で転がし初めた。
「変態女！舐めるな！バカヤロー」
「はっ！喚きながらおっきくしてるわ」
「ブッ」
「グッ、痛いよ！痛いよ！」
「…このモノを守護する…」
同じように針が輪に変わりピアスに変わった。
「ジャイム！この子達、馬車牢に裸で入れてて。身体は拭いてもアソコは拭かないでいてね。魔女は処女が大好物なの。」
いつの間にか首に鎖を巻かれ犬のように４足歩行に成り、声も犬の声に変えられ、姉妹はジャイムに引かれて馬車牢に連れ戻された。

強化食　屍虫

２６食

２日に渡り太腿の肉と乳房を削がれたマイは台の上で頬が痩けて乳房もハリを無くし裸体を台の上に力なく仰向けにし、天井をボンヤリと眺めていた。

「ウゥ…アウッ…」

マキは股間に蜂を入れられて放置されている。

「アブッ…ア…」

まだ、刺されているのだろう、時折、手を握り痛みに耐えている。

「マイは肉が無くなっているね。」

レイナが上からマイを見下ろしている。

「ジャイム、ラムと一緒に屍虫を採って来てくれないかい？肉を削ぐだけ削いで食べさせて無いから痩せて来ているよ。肉を与えたいけど来週の退治にこの娘も必要だからね。」

「屍虫？なんですか？」

「ラムに言えば分かるよ。」

レイナの小屋を出て朝食の用意をしているラムに屍虫の事を告げた。

「もうスグに朝食が出来るから食べてから行こう。スープとパンをレイナに持っていって…」

ジャイムは盆にパンとスープを乗せてレイナの小屋に入った。

「朝食かい？そこの机の上に置いといてくれないかい？

アタシはこの子の性器の仕上げだから終わらせて食うよ。貴女も食べてレベルアップしときなよ。」

ラムの調理場に行くとガイ、バム、スレイがテーブルに付き朝食を食べていた。

「ラム！このダークエルフは？」

「バム。この子はジャイム。レイナさんが助手につけた子だよ。」
「あっそ。ジャイムはスキルは？」
「術と弓がAです。」
「まあ、レイナの助手なら精進しなよ。」
「ジャイム！コッチで食事とろう。貴女、奇種の肉は初めてでしょ。食事が終わったら街に屍虫を取りにいくわ。」
普通のスープに肉と木の芽、実等が入った普通のスープだ。
スープを吸い、肉と木の芽をスプーンに乗せて口に運んだ。
…何！凄い美味しい。魔界の森に住む獣でも無いし何だろう。
身体から力がみなぎる…
「その肉は奇種のヒトの肉よ。力がみなぎるでしょ。」
ジャイムはご馳走に驚き、自分がバムのパーティーの一員になれた事を喜んだ。
「ラムさんは食べないんですよね。」
「そうね。昔からの言い伝えだし、食べて何も無いなら何千年も掟として残らないでしょう。化け物や魔女に変化して仲間に退治されたくないしね。」
朝食の片付けをして、布袋を用意すると、ジャイムに屍虫を今から取りに行く事を言い、バムから馬を借りると馬の背にラム、ジャイムと乗り馬を走らせた。
「ジャイム！落ちないように腰に手を回しててね。」
街に向かったラム達は町外れに有る売春宿の離れに有る売春婦の遺体置き場に付いた。
「ねぇ、ラム…こんな場所にいるの？」
「屍虫だからね。特に売春婦で子宮にスライムが寄生していた女の亡骸に好んで住むのよ。」
まだ、新しい死骸を見つけ腹の辺り下腹部をブーツで踏みつける。
女の股間、亡骸の動かない肉ビラや大陰唇がウニョウニョと動き出し膣口から肉色をした芋虫大の幼虫が亡骸、一体から2匹、3匹と出てくる。

それを器用に箸状の棒ではさみ、革製の袋に入れていく。
「ジャイム！絶対に遺体は素手で触らないでね。後、屍虫も病気や毒、呪詛がかかっている場合も有るから素手で触っては駄目よ。比較的新しい死骸に住んでいるわ。腐敗した死骸には住まないから。」
「ねぇ、ラム。この虫ってここにしかいないの？」
「何処にでもある売春宿や娼館、奴隷館の死体放置場所にはいるわよ。この虫は男女の体液が混ざり合った所の肉が餌なの。自然に湧いて来るのか、暗黒神の下僕なのかわからないけどね。」
革製の袋に半分程、三十匹ほどを捕まえて二人は帰路に着いた。
…アタシもレイナに助けられなければ放置場所に破棄されて身体に虫が這う状態だたんだ…
ジャイムは改めてレイナに忠誠を誓った。
洋館に着くとバムが声をかけてきた
「ラム、何処に行ってきたの？」
「レイナから言われて屍虫を捕まえに奴隷館に屍虫を捕まえにジャイムとね…」
「屍虫かぁ…マイの回復が遅いの？」
「木の実とスープにパンだけだからね。肉に変わる物を食べさせないと肉に変わるのは難しいわ。屍虫の肉ならマイに食べさせても獣臭はしないし速攻性があるからね。」
「レイナが下処理を？」
「私達には屍虫の毒抜き、呪詛、呪い抜きは無理だから。」
パーティーが借りてる洋館に着くと各自が武具の手入れをしていた。
「採れたか？ラム！」
「小さな街の奴隷館だから、そもそもが少ないよ。でも、マイが回復するくらいは有るよ。」
そう言いながらレイナの小屋に屍虫を運び、蓋をして蓋に重りを置いた。
夕暮れになり、レイナがベッドから起きて来た。
「ラムは仕事が丁寧だね。」

重りをどかし、桶の屍虫を覗き込んだ。
レイナは桶に水桶から水を入れて机の上に有る秘薬を水に入て、手で混ぜた。
その水を屍虫が入った桶に注ぎ込むと呪詛を口にした。
屍虫の桶からは黒い湯気が上がる。
屍虫はウニョウニョウニョと呻きながら、体から紫の液体を水に吐出す。
一気に水は紫に変わる。
立ち上がった黒い湯気は消えて無くなった。
レイナは下処理が出来た屍虫をラムに渡しに小屋を出た。
「ラム！夕飯の前に屍虫を液体状にして欲しいの！出来る？」
「わかったわレイナ。マイ、危ないの？肉を剥ぎ過ぎたのと無痛刀を使わなかったから…命の炎が弱くね。直ぐに食べさせないと…」
レイナがバツが悪そうな顔を見せるのも珍しいがマイの容態も悪いのだろう。
「わかったわ。直ぐに作るわ」
手早く、屍虫をミンチにしてお湯に入れて木の実をすり潰した物を入れて粥のような流動食を作り、マイの元に持って行った。
マイの身体の回復術は機能しているが再生する為には肉には肉が必要になる。獣臭がしないように肉は与えず腕を切ったり、乳房を削いだりしていたが、肉は与えずにいた。痩せて来ても仕方がない事だった。
マイの口に屍虫の肉を与えても飲み込まない。
ラムは自分の口に肉を含み噛み砕いてマイに口移しで与えた。
何度か与えるとマイの顔に明みが見えてきた。
口で咀嚼も仕出した。
…やっと自分で食べだした。助かるわ…
ゆっくりと起き出したマイに盆に乗せた屍虫の料理とパンを食べるように言い、レイナの小屋を後にした。
「レイナ、マイは食べだしたわ。直に治るわ。」

レイナはバツ悪そうに頭を下げ、自分の食事をしだした。
マイの食事を横で股間に管を入れられ気絶しているマキの下腹部だけが動き時折、身体をビクビクさせていた。
…この人も他人を不幸にしてこのラクナと言う地獄に落とされたんだ…
そう思いながら食欲が戻ったマイは屍虫の肉を食べた。

マキの最後

27食

マキがラムに食事後に呼ばれた。

…とうとう今夜、ガイに抱かれるんだ…ありさを虜にしたガイとのセックスってどんな感じ何だろう…

「マキ、月があの位置に来たら水場に来て。準備があるから…」

異世界に飛ばされ、奴隷館で怪物に妊娠させられてからはセックスはしていない。

元の世界ではセフレ、ホストなど言いよって来ていた。

それが異世界で妊娠させられてからは乳房は切られ、アソコは拡張と膣壁の改造。蜂を入れられてボコボコの名器に改造させられた。

バムもスレイも人には興味が無いのか手を出さない。

月に一回、ガイだけは精液を出さないと龍化する為にメスを抱く。

ガイの横顔は白人のように白く鼻筋も通ってハリウッド俳優と紹介されても信じてしまうぐらいに綺麗な顔立ちをしている。

…ありさが夢中になるのもわかるな…

そのガイに抱かれる。

自ずと下半身は熱く火照りマキのメスの本性が疼いてくる。

月が真上に登った。

ラムに言われた水くみ場に行くとラムは桶に水を入れて待っていた。

「マキ。全て脱いで。身体を拭くから。」

言われるままにマキは簡素なブラウスを脱いだ。

下着は付けていない。

ラムが頭から水を掛けて、頭、身体と拭いて行った。

「ヒャリとするわよ」

そう言いながら壺のローション状の物を首から下に塗り込みあしの付け根で

「ちょっとガニ股になってもらえる？」
言われた通りにガニ股になると念入りにローションを股に塗りこんで行った。
拡張した膣は細いラムの手も半分は入る。
膣壁のボツボツをラムは指先に感じながら膣内までローションを塗り込む。
「次はこれよ」
鉄の仮面に鉄のブラ状の乳房を隠す胴、手首から肘までのコテ、太腿に巻く鉄の胴。
全て鉄製の鎧を着させられて、頭から仮面を被せられた。
「ちょっと重いんですけど…革製の鎧は無いのですか？」
「魔女狩り前で気が立っているから革製の鎧なんかでは貴女、かみ殺されるわよ」
昼間の端正な顔からは噛み殺すと言う感覚がわからない。
「中に入ったら絶対に背中は見せないでね。」
「ほら！行って。」
恐る恐る、ガイのテントに入った。
「グルグルグルグルグルグルグ…フシュー」
…え？何？生臭いし…
黒いオオトカゲと変化したガイがウロコだらけのペニスを怒張させて座っている。
…え？怖い…
そっと後ろに後退ろうとしたマキは床に置いてある敷物に足を取られて倒れた。
…痛いわ…
「あ！」
オオトカゲに変化したガイがマキに襲いかかる。
愛撫も何もしていない股間にウロコだらけのペニスを押し付けて強引に突っ込む。
「ヒギッ！」

ローションを塗られ多少は潤滑剤的な効果は有るが、ピストンで引くときにウロコの返しがマキの膣壁を擦り、イボを引っ掻く。
「ああっ、いた、いた、いた。」
逃げようと暴れるマキの乳房をガイの牙だらけの口が噛んだ。
鉄製の鎧なのでへこむが牙は鉄が抑えている。
「ああ、いや、怖い…」
身体を捻った瞬間に鎧から乳房がボロンと飛び出た。
肉に反応したガイがはみ出た乳房を噛んだ。
「ギェー!イダイ、イダイ!ダズゲデ!」
尋常では無い絶叫にラムがテントに入った。
「あんた!逃げようとしたの!」
一度、セックスをしだすと射精する迄、竜人族のセックスは終わらない。
「クチャクチャクチャクチャ…」
ガイが咀嚼する音がテントに鳴り響く。
「ああ…いや!」
ラムが見た光景はオオトカゲから逃げようと藻掻いているマキの姿だった。
「そのままに、動かないでよ。ガイが射精したら終わるからね…」
「ああ…いたいよ…」
「駄目よ!背中を見せたら」
マキは逃げようと四つん這いになり出口に逃げようとしていた。
マキの股間からズルリとガイのペニスが出てくる。
急いで動くマキの首から背中に掛けてオオトカゲのガイが噛み付く。
「ゴキゴキゴキ…」
動物の本能で逃げるメスを噛んで逃げないようにしてセックスに励むオオトカゲ。
興奮と野生でマキがヒトのメス等と考える理性も消えている。
白い眼をむき、口からはピンクの泡を吐ながら首は半分食いちぎられガクンガクンと人形のように動いている。

「あの娘、もう駄目ね。回復術も胴と頭が付いていないと無理だわ。子宮玉を抜いて悦楽の中で無に返してあげるわ。」
「ガフゥ！」
ガイがマキの膣に大量に射精した。
徐々に人に戻ってくる。
急いでマキをテントから出すと「ヒューヒュー」
息はしているが首の傷から抜けていく。
マキにレイナは手をかざし、呪文を唱えるとマキの下腹部が膨らみ、膨らみは段々と膣に向って動き、拡張した膣を広げながらピンクの球が出てきた。
「アゥン…」
絶頂の中で事切れたマキは子宮玉を抜かれボロボロと崩れ、砂のようになり土に戻った。
「前も有ったわね、ラム。ガイがメスを噛み殺したことって。」
「でも仕方ないわ。来週は魔女退治だし。興奮して理性も無くしているから仕方ないわ」
…アタシたちもトカゲに処女を奪われるのかな…
ミクリとミライは馬車牢からマキの最後を見ていた。

２８食

日が落ち前、浜辺にはマイ、ミクリ、ミライの３人しか人は出ていない。マイは砂浜と海岸沿いの道が繋がる芝生に座り、ミクリとミライ姉妹が海に入ってブラウスの裾を濡らしながら遊んでいるのを眺めていた。

異世界に飛ばされ、ありさ、マキ達と知り合ったがいつの間にか居なくなった。

ラムに聞いても教えてくれない。

新たにレイコさんと言う女性が加わりバムのパーティーのヒトのメスは５人になっていた。

不思議なスープを飲んで体力と痩せた身体が回復したのはほんの２、３日前で回復してからは肉を削がれる事は無い。

今はミライとミクリの姉妹の遊び相手をしている。

姉妹はマイがグラビアアイドルをしている事を知っていた。

「ねえ！ねぇ！俳優の００ってカッコ良い？」

「ナニーズ事務所の子とあった事ある？」

歳、相応のアイドルと俳優や芸能ゴシップでキャッキャと喜んでいる。

…本当にこの子達が援助交際の元締めみたいな事をやっていたのかしら？…

「本当に大っきいオッパイだね。」

白いブラウスの上からミクリがマイの胸を鷲掴みにした。

「やん…」

「アタシも触ろっと！」

ミライがブラウスの襟元から手を入れてマイの胸を直に揉む。

「あん！やん…」

ミライの指がマイの乳首を弾いたり抓ったりして遊ぶ。
「もう！怒るわよ！」
ミクリがブラウスの裾から手を入れて乳房を直に鷲掴みにする。
少し力を込めてわざと痛く揉む。
「アハハ…面白い！乳首、立って来たよ。」
キャッキャとマイをいたぶるミクリのブラウスの裾をひっぱる白人の少女がいつの間にかいる。
「何？この子！いつの間にいるの？」
遠方から術で3人を見ていたバムがラム、ガイ、スレイ、レイナに伝えた。
「良し。出てきた。東の魔女だ。金髪に白い肌、青い目の少女。間違いは無い。」
「お姉さん達、何処から来たの？」
…え！白人の少女？異世界にもいるの…
「アタシも混ぜてくれない？アタシはジャネット。お姉さん達、いいニオイがする。」
「本当に脚も綺麗…」
ジャネットの手がミクリのブラウスの裾から太腿を撫で廻し、小さな掌がミクリの産毛の生える恥丘の毛を撫でる。
…え！な、何？この子の腕の長さ。すごく長い。…
ジャネットは金髪をツインテールで結び、異世界では珍しいゴスロリ系のファッションで本当にフランス人形のような少女。
「あん！あ…」
急にミクリが悶えだした。
「ヤダ！このこ、アソコを触ってくる。」
ミクリは悶えているが身体から赤く光を放っている。
小さな胸が少しずつに膨らむ。
「ああ…お胸がいたいよ…」
ミクリの太腿、お尻、身体全体が大きくなってくる。
「あんた！何してんの！ミクリから離れなさいよ」

ミライがジャネットの身体を抱きかかえたがビクともしない。
「あん…」
ミライのブラウスの裾からもジャネットの腕が伸びて、ミライの幼き亀裂に指が入る。
「あゃゃゃ…」
ミクリの身体は大きく大人になると今度は頭は白髪になり腕も細くなっていく。
「ちょっと！離れて！」
マイがミクリのブラウスに入る腕を掴むと、
「ググっ」
何処からかジャネットの腕が増えてマイの首を掴んだ。
「珍しくヒトの奇種か？後でお前の子宮も食ってやるよ」
少女だったジャネットは身長が2メートル近く有り、ゴスロリの服は破れ腕が4本で筋肉に尻や乳房が付いているボディビルダーのような体躯に変わっていた。
「…森林の神よ我が矢に力を…」
ラムがジャネットに向けて矢を連射で放った。
矢は5本、真っ直ぐにジャネットに向って飛ぶ。
「ガチンッ！ギン！」
両腕二本ずつの腕が増え両腕で6本に変わっている。
「ハイ！」
マイを掴んでいた腕をレイナの大鎌が払い切る！
「グェ！」
「それっ！」
次はスレイの剣がミライの股間に伸びる腕を切り払う。
「マイ！ミライを連れて逃げて！早く！結界を張るから！」
「ミクリちゃんは？」
「駄目！生命エネルギーを吸われて助からない！」
マイはミライの腕を掴み浜辺から逃げた。
途中、ミライの股間に蠢く食手を抜いた。

食手はタコの脚のように吸盤が有り先かペニスのような型をしていた。
ジャネットが第2段階の変形をしようとしている。
伸縮自在の腕は硬化して槍のように変形をする。
「暗黒神の力で…」
レイナが浜辺に結界を張る。
夕焼けだった空が薄暗闇に変わる。
ジャネットの攻撃は容赦なく続く。
切った腕は数分で元に戻り、ラムやレイナの股間を執拗に攻撃してくる。
ジャネットの目的はメスなら股間から子宮に腕を突き刺して直に生命エネルギーを吸い取る。特に黒巫女レイナの生命エネルギーなら千年分の若さを保てる。
「ガイ！過重力をかけるぞ」
ガイが杖をジャネットに向けて呪文を唱える。
バムも手を出し術を唱える。
「ヌグッ…」
ジャネットが苦しそうに四つん這いになる。
過重力で身体に何倍もの重力がかかり立っていられない。
「ハイ！」
レイナがジャネットの下半身の黒いビキニの股間を切り裂き、懐に入れていた、ありさから抜いた子宮玉をジャネットの股間に押し当てて亀裂に捻じり子宮玉を元の位置まで押し込む。
「ハグッ」
「スレイ！首を落として！」
スレイがジャネットの首を目掛けて剣を振り下ろすとジャネットが金髪の髪を振り乱しながら砂浜に首が転がった。
「あ…あなた…たちが…かってに…こ。んなせかいに…連れてきたのに…」
言い切らずにジャネットの首は塵になり消えた。

子宮玉を入れた胴体は子宮玉に
吸収され蒼い鉱石に変わった。
全てが終わり結界を解くと薄暗くなり、老婆になったミクリが砂浜
に横たわっていた。

ミライの未来

２９食

街は朝からお祭り騒ぎだった。

バムは朝から街監理庁に出向き、魔女退治の報告と魔女を封じた魔鉱石を監理庁の役人に渡し、翌日、王宮付き勇者が魔鉱石を引き取りに来る事を承諾した。

異世界ラクナには中央にダイム帝国。北にヤーセ、東のセリ、南にワイム、西にトリンの王国が有る。ダイム帝国国王が父王で４兄弟が東西南北の国の国王をしている。

全ての情報は帝国に集まり、勇者、巫女、剣士、賢者、斥候の登録は帝国に監理され帝国でランク付けされている。

Ｓ級勇者になるには、全てがＳ級無ければ成れず、ラクナには５名のＳ級と一人のＳＳ級勇者がいるがＳＳ級の勇者には誰も会った事が無い。

レイナもＳ級勇者の資格は有るが帝国に監理されるのを嫌がり申請はせずに巫女のままにいる。

「どうだった？」

「あの役所と国の役人は何時に会っても気が滅入るな。明日、魔鉱石とミライを帝国国王に献上しろだと。」

「本当に好きだね！あの国王も…破瓜が好きなんだろ？」

「でも、ミライは生命エネルギーを吸われて、少女よりも成熟した女だぞ。」

「王妃が御所望らしい。」

「あの、ドＳの元黒巫女。」

「自分の美貌の為に処女膜と性器を使い何かを作るんだろ？」

「だすのか？バム！」

「あれだけ生命エネルギーを吸われたら次は使えないしな。奴隷館

でマビトの処女を購入するよ。それに大帝国王に恩を売っといて損は無いしな。」

「どちらにしろ、売春窟か奴隷か？」

「気まぐれな王妃のペットとして生きれるかも知れない。」

「現世で友人を食い物にしたんだ。次は自分が食われる番だろ。」

魔女退治後はミライはミクリが亡くなった記憶は全て消され、自分が少女だった事も覚えていない。

女王気取りでマイやラムを使う。マイは気を悪くして、ふくれっ面で対応しているがミクリが亡くなった事を知っているので強く言えない。

ラムは今夜だけはと哀れみを持ちミライに接している。

大帝国王妃の所に召され無事に王宮から出た者はいない。

「早く晩御飯、持って来なさいよ！」

最後に肉らしい物をスープに入れて最後の晩餐をミライに食べさせる。

「何よ！ソーセージが有るなら食べさせなさいよ！」

マイはソーセージは屍虫を加工した物と知っていたので、美味しいと言いながら食べるミライが滑稽に見えた。

翌朝、ペガサスに乗った王宮付勇者ガイムが魔鉱石とミライを連れに来た。

馬の身体に頭は女性のペガサスを見てミライは怖がっている。

「バムよ。魔女退治、ご苦労だったな。魔鉱石とヒトの処女は確かに連れて行くが、奇種のヒトのメスは差し出さんのか？」

「ガイムよ。事情が有って西に消えた魔女ありさを退治しないといけない。暫くは差し出す事は無理だ。国王にお前から伝えてくれないか？」

「仕方なしか。分かった。ワシから国王には伝える。そしてこれが国王からの褒美だ。加工すれば良い剣や武具、鎧が作れる」

そう言うとバムの傍らに立っていたミライをペガサスに乗せた。

「貴女もアタシに乗るのね。」

ペガサスの女がミライに話かけた。ペガサスのタテガミがミライの下着を履いていない股間のワレメを擽る。
「この子、アタシのタテガミで興奮している。スケベな娘だわ。」
自分が興奮しているのを化け物みたいな馬に見透かされ顔を真っ赤にして下を向く。
ミライの後ろにガイムが乗りペガサスの腹を叩くと大空に飛び上がり雲間に消えた。
国王から送られた包を開くと魔鉄鋼が入っていた。
魔鉱石と秘薬や様々な薬草、術を使いダイヤモンドも切れるような硬さに精製する。
マイに苦痛を与えずに乳房を切り落とす無痛刀も元は魔鉄鋼から出来ている。
大空をペガサスでかけた先に中世の城のような建物が雲間から見えてきた。
中庭には騎士が整列して、訓練をしている。
中庭の馬が揃っている場所にゆっくりとペガサスが降りる。
「ご帰還、ご苦労さまです。」
鎧を付けた兵士が勇者ガイムに近付く。
「おい！コレは魔鉱石だ。精錬所に持って行ってくれ。」
馬からミライが降ろされる。
「このメスは勇者バムから王妃に送られた物だ。王妃にお伺いを立てて牢か調理場に連れて行け。」
…調理場？アタシが料理を作るの？…
「王妃様からです。活き造りを御所望なので剃毛して大食堂へと言う事です。」
「え？え？」
白衣のコックに連れられ大調理室に連れて来られたミライは四つん這いになった拘束台に固定された。
「まずは下ごしらえだ。」
ミライの肩まで伸びた髪は短く切られ、残りの髪は短刀で全て剃ら

れた。股間の黒黒と茂った陰毛も剃られ、体毛が無い状態にされた。
「ああ！嫌だ…オシャレ出来ないよ！」
「ヌプン」
尻の穴に管を入れられる。
「ヒャイ！冷たい！」
管に液体が流れる。
「ああ、痛い…お腹がいっぱい…」
妊婦のような腹になり台から少し浮いたミライの背中をコックが踏みつける。
「ブシャー」
2、3回も繰り返すと腹からは透明な液体しか出なくなった。
バシャバシャと水をかけられ、ミライは拘束台ごとワゴンに乗せられた。
王宮の廊下は輝石をふんだんに使い、ピカピカと光り輝いている。
その中をミライを乗せたワゴンは進む。
天井迄も有る大きな扉の前でワゴンは止まった。
「晩餐の準備を初めます。」
扉前の衛兵が左右に扉を開くとワゴンは大宴会所に入っていく。
シルクのようなドレスを着飾った女性。
メイド服の女性、裸に腰巻き状の布を巻いただけの女性。
宴会場にはミライを運んで来たコック以外は女性ばかりがいる。
「私がかわります。」
ミライを運んでいた、ワゴンの後ろから調理器具を運んでいたコックがミライを運んでいたコックに声をかけるとコックは中央に座った妖艶な女性に一礼して、宴会場を出ていった。
「皆さま、本日は珍しいヒトの処女です。魔女に生命エネルギーを吸われました、がまだ若いです。これから処女を振る舞います。」

ミライの未来2

３０食

ミライはキョロキョロと落ち着き無く辺りを見渡している。

「グォン～」

ドラが鳴り、磔された若い少年が台車付の磔台に乗せられ大広間に入って来た。

マビトの少年で有ろう。

素っ裸にされた少年の股間に付いたペニスは小さく縮み上がっている。

腰巻きをした女が少年の股間に座り縮み上がったペニスを手で触り、股間に顔を近づきペニスを口に含んだ。

「アグっ」

少年の身体がビクリと痙攣した。

フェラをされるのも初めてのような感じからメスとの性行も経験が無いのであろう。

ドレスを纏った貴婦人達は少年が感じる度に淫靡な笑みを見せる。

ムクムクと少年のペニスが膨れて立ち上がって行く。

貴婦人達はヒソヒソと喋りながら見学をしている。

身体は大人に変化したがミライは男性の勃起したペニスを見たことが無い。

ジッとムクムクと唆り立つペニスを見ている内に下半身が熱くなり、綺麗な使用していないピンクの綺麗な亀裂から透明な液体を流し出した。

ソレを見ていた、コックはミライの股間に楕円形の筒を当てて筒の先に有る木のハンドルを押し込んだ。

「あん！」

楕円は丁度、ミライの性器を覆う型をしている。

上はクリトリスの直ぐ上、恥骨との境から下は蟻のトワタリ、肛門と膣口の間。
横は大陰唇と太腿の付け根、
性器を筒状にクリ抜く器具だった。
刃は快楽刀を使い、ミライには性器をえぐられる痛みは皆無。
むしろ快楽が腹からは押し出る快感に口からはヨダレをたらし、目は虚ろに目の前の勃起したペニスを見ている。
筒がミライの体内に入るとユックリとコックは筒を引っ張りミライから性器をえぐり抜く。
勃起した少年は顔を左右に振り乱しながら射精を我慢している。
その我慢しているペニスにミライから抜き取った筒を被せるとミライのピンクの亀裂に押し当てて筒をペニスに被せた。
「アグっ」
射精寸前の所でコックは無痛刀で少年の肛門の上に有るペニスの出発点、モッコリ盛り上がった所に素早く刃を当ててペニス、睾丸を切り取った。
ミライは眼の前で少年に処女を奪われるのを見ているが、実際は身体には性器は付いていない。
少年も童貞喪失前にはペニスは身体から離れている。
少年のペニスが刺さったミライの元性器が入っている筒を女性コックは王妃達が座るテーブルに有る皿に乗せて銀色に輝く筒を開いた。
銀色の筒が開くと真っ赤な肉に片方の先にはペニスの先、亀頭がピンク色の頭を出し、もう片方には、切り取られたペニスの切り口に睾丸が付いている。
「王妃様は睾丸が付いた方ですよね。第二妃様は亀頭が付いた方ですよね。」
「アウア…アッアウア…」
ペニスを切り取られた少年が股間から血を垂らしながら唸って居る。
ミライの尻にいた女性コックが両手を少年にかざすと呪文を唱えた。

「…無き者は無き者に…」
少年の股間からの出血は次第に収まり、短い髪が長く伸び、胸が膨らみゴツゴツした身体は丸みを帯びてきた。
少年から少女に変化していった。
磔台から降ろされると、腰巻きのようなスカートを渡され、同じ格好をした少女に連れて行かれた。
少年は王妃に使える為に性器を切り取られたのだった。
…おチンチンが無くなり女になった〜…
股間に大きな穴が空いたミライは快楽刀でまだ自分の性器が食べられようとしているのさえ分からない。
赤い肉の塊にフォークを刺してコックがペニス入り女性器を切り分けていく。
第二妃にペニスの亀頭部分が付いたペニスの膣肉巻が皿に乗せられる。
亀頭部分をナイフで切り端麗な顔立ちに赤い唇が、妙に艶めかし第二妃がピンクの亀頭を口に頬張り咀嚼した。
「やはり、この歯ごたえはたまらないわ」
帝国国王には第一王妃から第四王妃迄でる。
昔は宦官制では無かったが第五王妃がお付きの下僕と不貞行為を起こし、宦官制になった。
ヒトのメスの処女は異世界では高額で取り引きされる。
異世界から専門に現世に処女だけを捕まえに来る勇者もいるが処女で罪を侵した少女は奇種を探すよりも難しい。
今回の晩餐のような処女と童貞の料理は王宮でも滅多に出ない。
「王妃さま、この者の処遇はどうしますか？肉を削いで調理しますか？」
王妃は優しく笑いながら呟いた。
「異世界に拐われ、魔女退治に貢献し、処女を失わずに命を落とすには余りに不便。性器が抜けた穴にペニスイーターを移植し、罪人の処刑人にしてあげなさい。セックスも出来るし娘の罪も浄化して

いくでしょう」
「分かりました。王妃さま、娘は処刑人に改良致します。」
一礼して、コックはミライの乗った台車を引き、大広間から出ていった。
王妃は少年の童貞睾丸にフォークを刺し、口に含んだ。
コリコリした食感に王妃は満足し、ミライのクリトリスにフォークを刺しナイフで切り取り、もう一つの睾丸と一緒に口に運んだ。
ミライが連れて来られた所には池が有った。
コックの女がミライに池に入るように促す。
ミライがユックリと池に入ると太腿にウナギのようなヌメッとした感触がした。
次の瞬間、えぐり取られた女性器よりも大きな物が股間を押し上げて股間を拡げる。
「あがががかが…」
這うように池から上がるとコック姿から黒い法衣の黒巫女姿に変わった女がミライに呪文を唱えた。
ミライはそのまま、気絶した。
ミライが眼を覚ますと豪華な寝室に横たわシースルーのガウン状の物を身に纏いテーブルには色々な果実が山盛りに銀の皿に盛ってある。
先程の黒巫女が部屋に入って来た。
「目が覚めたようね。貴女の胸は少し小さいから大きくしたわ。お尻も少し大きくね。どんな男も貴女の虜よ。部屋にある物は飲んだり食べたりしてもいいわよ。ココは貴女だけの部屋だから。」
広い部屋の中にはプールも設置している。
黒巫女が部屋から出るとミライはお腹が空いてきた。
皿に有る果実を取って噛じっても味が薄いし幾ら食べてもお腹が満たさない。
廊下で衛兵がハイゴブリンの男に中の女を絶頂させたら、開放すると話をしている。

丸太のようなペニスを持ったハイゴブリンの男は
「あの女を壊してもお咎めは無いよな？」何度も衛兵に聞いている。
「ガチャ」
ペニスを怒張させた大男が部屋に入って来た。
処女のミライだったら怖がるはずなのに、ミライから男に飛び付き
股間の性器を丸太のペニスに押し当て、男の口に唇を合わせた。
丸太ペニスに当てていたミライの性器のワレメがバックリと開き丸
太をくわえて蛇腹のようにペニス全体を包んだ。
「バッン！」
「グア…ギャー！」
男の丸太のペニスが股間から無くなり部屋を転がり廻っている。
ペニスを含んだ蛇腹はミライの腹に収まり下腹部がウネウネと蠢く。
「あぁ美味しい…」
ミライの内臓はペニスイーターと同化して栄養はペニスイーターが
食した物しか栄養に成らない身体に変わっていた。
元々はペニスイーターは北の王国の沼に住む寄生生物でメスの膣に
住み、オスのペニスや魚などを食し薬草で駆除出来たが、帝国で改
良してペニス専門に食すように改良されている。
ミライは罪人の処刑用に改良されていた。

新たな少女サワ

３１食

望遠鏡を眺める翠色の少年が高層ビルのツインタワーの最上階の屋上で東京の街を覗いている。

見た目は少年たが異世界ラクナに５人しかいないＳ級勇者の一人、シャナがバムに頼まれ処女で人を殺めるような事をしている黒いオーラを放つメスを探していた。普通に黒いオーラを放つメスなら新宿、渋谷、六本木と言う所にウジャウジャといるが処女は難しい。

「ねぇ！シャナ、いたの？」

「嫌、サラいないよ。」

「バムもキツい注文出すわよね。」

「サラ、ちょっと渋谷まで、移動するよ。怪鳥を召喚してもらえる？」

サラが呪文を唱えると真っ赤な鳥が現れた。

鳥の背中にシャナとサラが乗ると怪鳥は大空に飛び上がり、渋谷方面に飛び立った。

「ちょっとシャナ、アノオーラが見える？あの病院の前のベンチに座っている幼女なんだけど。」

「ああ、凄いなアノ色は三人は殺めているな？」

「あの子にする？」

「幼女だけどレイナが術で何とかするだろう。」

鳥からシャナが飛び降りると服装は現代風のジャケットに短パンにスニーカー。脇にはスケートボードを持っている。

「君、誰を待っているの？」

「貴方、誰ですか？」

「僕はショウ。お母さんを待っているの。君は？」

「アタシはサワ。アタシもお母さんを待っているの。」

シャナが少女から立ち上がる黒いオーラを見た。
黒いオーラに少女が犯した罰が映る。
幼稚園の遠足で嫌いな娘を池に突き落とし殺す。
近所に住んでいた若い夫婦の赤ちゃんにアメを食べさせ窒息死。
そして、自分の妹がお腹にいる実の母親が妹の宿るお腹を触り自分に愛情が無いと思い階段から突き落とした。
母親が運ばれた病院の前のベンチに座っている。
生まれて数年で４人を殺害している。
異世界ラクナに連れ去るには申し分ない穢れた魂を持っている。
「サラ！娘の子を拐う。娘の母親に化けて下に降りてくれ」
サラが怪鳥から飛び降り、女の子の前に立つまでに容姿は突き落とした少女の母親に変化していた。
「サワちゃん！お母さん、治ったから、お家に帰ろう。」
「ママ。お腹の赤ちゃんは？」
「？何処かに行っちゃった。」
「お家に帰ろうか？サワちゃん。」
「うん！ママはサワちゃんだけの！」
タイミングよくサワとサラの前にタクシーが停まる。
タクシーは怪鳥が変化したもの。
運転士はシャナ。
タクシーは走り出し、高速道路したのトンネルに入ると跡形もなく消えて行った。
勿論、普通のヒトには見えない。
トンネルを抜けると異世界ラクナに変わり、周りの風景も中世ヨーロッパ風になり、タクシーも馬車に変わっていた。
「え？お姉さんだれ？アタシのお母さんは？」
「ここはラクナ。お母さんから言われてサナちゃんを連れてくることにしたの。」
まだ低学年の少女。サワは泣き出した。
「サラ、黙らせて。子供の泣き声って嫌いなんだよ。」

「仕方ないわ。」
…声を小鳥に…
「チュン…チチチチ…」
「まだマシだよ。」
馬車は東の魔女がいた街のバムの滞在している舘に着いた。
「バム！この娘で良い？これ以上の黒いオーラを纏った子はいないよ」
「こんな小さいの拐ったの？」
ジッと少女を見ると
「凄いな。この年でシリアルキラーなんて初めて見たよ。レイナ！この少女、ある程度の年齢に変えれる？」
「どう変える？牛みたいな巨乳女にも変えれるし成熟したオンナにも変えれる」
「そうだな。現世で言うハイスクールガール位？下の毛が生えるか生えないか位に…」
「わかった。ミライ位の感じだね。」
レイナは少女を腕に抱えて舘に入って行った。
「シャナ、異世界との門はどう？」
「バム、A級の低級勇者が通るのに無理をしているからガタガタだよ。又、ヒトのオスが入り込んで事件が起こるぞ」
「門の修理には魔鉱石に黒巫女が三人、後は奇種のヒトのメスが二人は必要だな。シャナ、奇種を探して来てくれないか？」
「そうだな。ヒトのオスが紛れて１０年前の事件が又、有るかもしれないしな…」
「あの時はA級が5人、S級が1人、犠牲になったな。」
「クリアマンの王族殺害事件。」
「そう。ヒトのオスとラクナのマビト、ハイエルフ、エルフ、ダークエルフが交尾して出来るのが化物だからな。魔術でも気配が分からない。透明な怪物」
「あれからだよな。ヒトのオスが入ったら即座に殲滅になったのは。

」
「だが、噂では王国の宮殿地下に監禁して化物を産ませている噂が有るぞ。王妃が指示を出しているらしい。」
「あのヒト食い巫女ならやりそうだな」
シャナとバムが話をしている時、レイナはサナを真っ裸にして台に手足を拘束してサナの人体改造に取り掛かろうとしていた。

「ビョピョ…」
「足と手を伸ばすから…」
「ゴキン！ゴキン！ボコ！ボコン！」
「ピ！ビョ！」
「あら、失神したわ。胸はツルペタだから…」
ツルペタの胸に茶碗大のカップを二つ被せ特殊な蜂をカップに入れる。
気絶しているサワは痛みを感じていない。
巨大な注射器の針を外した関節部分に打つ。
成長促進効果の有る薬品で一晩で少女から下の毛が生える位の成長を遂げる。
一直線に割れたワレメを見ながらレイナはどんな改造をしようか考えている。真っ赤な唇を舐めながら。

レイナから王妃へ

３２食

空が薄ぼんやりと明るくなってきた。
幼女サワはレイナの術で強制的に成長させられている。
先程からレイナは粘土で人型を作り呪文をかけている。
「…バム、至急に逢いたい」
人型を床に置くとテクテクと小さな泥人形がバムの寝室に歩いて行った。
バムはＳ級になって深く眠りにつかなくなった。
耳元でレイナの声がする。
「…バム、至急に逢いたい」
レイナはバムに行為を寄せるが宗教理由から恋愛、性行は出来ない。
だが、幼い頃からの唯一の幼なじみ同士である。
お互いが信じ合っていた。
人形を伝令で寄越すのは余程、聞かれたく無い話の内容なのだろう。
バムは起き上がり、寝室から出てレイナの舘に赴いた。
「なんだ？レイナ？」
「待って、結界を張るから」
「…暗黒神の手の…」
レイナの舘が霧に覆われた。
「ものものしいな？レイナ。」
「バム、この子を見て。」
バムがサワを見ると幼女から少女と女の境位に成長していたが、黒い髪は紫に変化していた。
「レイナ、この子は奇種か？」
「調べたけどヒトの奇種よ。」
「奇種はわかったが、人型迄、使ってよんだのは？」

「ねぇ、ミライのことなんだけど。王国からの要請よね。寄進したの。何処から王妃の耳に入ったと思う?他のパーティや奴隷舘の主人は知らない事よ。」
「じゃあ、レイナはこのパーティにスパイがいると?」
「その可能性はあるわ。王妃が幾ら元黒巫女でも千里眼は持ってない。」
「誰がスパイだ?新入りのジャイムか?」
「いや、ジャイムが入った時にはアタシが刻印を打ったから、その時にアタシに隠し事が有れば呪いで死んでいる。」
「じゃあ、スレイ、ガイ、ラムか?昔からの仲間だぞ。」
「バム!娘の髪は直ぐに黒髪にするわ。この子が奇種なのは誰にも言わないで。」
「裏切りは許さない。アタシが、始末する。昔からの仲間なら特に…」
「全員の影にアタシの小龍を忍ばせる。賢者のガイにはばれると思うけど、無実ならガイなら無視すると思う。」
レイナは髪をかき揚げて小さな龍を取り出し術を掛けて放った。
龍はスルスルと地面を這い、仲間の影とマイ、レイコ、ジャイムの影に潜ませた。
ワザと情報を流すように奴隷舘でヒトのメスを調達し、髪をオレンジに染めてサワが成長したら奇種だった事にした。
奴隷舘のメスは術で小鳥の泣き声しかしない。
本当のサワは館の二階に結界を張り隠した。
翌日の朝食時に皆に聞こえるかのようにサワが成長したら奇種に変わった事をバムに伝えた。
食事が終わるとラム、ジャイム達は食器を持って水場に向かった。
ラムが水場から離れ草むらに入って行った。
用を足すようでも無い。
ラムに麻の頭巾を被り腰に短剣を刺した男が近寄り、何かの紙を男に渡した。

レイナの脳裏に全員の行動が浮かんで来る。
…ラムがスパイなのか？しかし違和感がある。…
念でバムに伝え、ジャイムとラムを舘に来るように伝えた。
「二人を呼んだのは聞きたい事が有って…どちらが帝国のスパイだい？」
二人はイキナリの事で驚いた。
「アタシは知りません！」
「アタシも違うよ仲間を疑うのか！」
ジャイム、ラム共に拒否をする。
「アタシに観えたのは白い肌の女が王家の紋の短剣を刺した男に紙を渡すトコが見えたのよ！」
「ち、違うよレイナ！アタシは知らない！」
白い肌はラムしかいない。
「仕方ないね。暗黒の龍よ裏切り者の肉芽を噛みちぎれ！」
「が！ガガガガガ！イダ！イダイ！イダイ！」
股間を押さえて身悶えているのは褐色の肌のダークエルフのジャイムだった。
床で転げ廻るジャイムの肌の色が白くなっていく。
「バン！」
館の扉が開きバムが頭巾の男を捕まえて帰って来た。
「その女は王妃直属のスパイ、白巫女だよ。」
コレにバムが又、奇種のヒトの処女を捕まえたと書いている。
「やはりね。王妃は白夜の黒巫女の噂が有る。白夜の黒巫女は白巫女も従える事ができる。」
「レイナ、その白巫女とこの男はどうする？」
「王妃に献上するのさ。王妃が好物にしている食物にして活き造りでね」
レイナが剣を降ると男の衣服が破れ飛んだ。
「この女もだよ！」
ひとふりで白巫女の衣服も消し飛ぶ。

「ラム！こいつらを王妃に送り届けるから手伝って。」
「分かったわ、アタシに罪を被せようとして！でも、どうしてアタシでは無いと分かったの」
「ラムは左利きでしょ。弓を引く左腕が少し太い。この女は左右ともに腕は同じだから。」
「…龍よ肉芽から離れろ」
小さな龍は噛んでいたクリトリスから口を離し、レイナの髪に入って行った。
「貴女は四つん這いになって」
「貴方は穴に突っ込みなさい！」
「ほら！早く！」
剣を向けられ全然、男は勃起しない。
「あんた！口で立たせて！」
真っ白い白巫女の尻を剣の峰で叩くと女はペニスに貪りついた。
「ホレ！コレも入れてやるよ」
男の尻の穴に屍虫を押し込んだ。
男の尻の屍虫は蠢き、前立腺を刺激して女の口で大きくなっていった。
屍虫を取り出し
「早く穴にぶち込め！」
男は白巫女の四つん這いになった尻を持ちピンクのワレメにペニスを押し込んだ。
白巫女も規律で性行禁止だが黒巫女のように死ぬ罰は与えられない。
「ほら！胸でも揉んで上げなさいよ！」
男が女の背後から両手を胸に回した時にレイナが同化の呪文を唱えた。
太腿、性器、背中、手のひらと乳房が同化して一つに引っ付いた。
「ほら、二人とも王宮迄、快感に溺れるように良いものをあげるよ」
魔樹木の一種で振動樹を二人の尻の穴に押し込み、木の箱に収めて

蓋をした。
「あん！あん！」
「ウオウオ…」
男女の悶えが箱から聞こえる。
「箱を外に出すよ」
館からバムとラムが箱を出す間にレイナは魔法園を書き、暗黒龍を召喚した。
「龍よ、この箱を王妃が住まう王宮の庭に…」
暗黒龍は箱を咥えて飛び立った。
王宮の空が暗くなり稲光と共に龍が王宮の庭に舞い降りてきた。口には箱を咥えている。
王宮の衛兵が見守る中、箱を庭に置き、龍は天空に消えた。
箱からは男女の呻き声が聞こえる。
箱には親愛なる王妃さまに…
暗黒の黒巫女レイナよりと書かれていた。

ジャイムの最後。

３３食

ワゴンに乗せられた、スパイの白巫女と王宮の兵が真っ裸で王妃ジジの前に連れて来られた。

「あぁ…あぁ…」

「オグッ…デル…」

ワゴンを押していた女性衛兵が男の尻を剣の柄で叩いた。

「静かにしないか！王妃の御前だぞ！」

「これ！快楽に溺れているのは尻に突き刺さる魔樹木のせいじゃ。抜きやれ。」

衛兵が剣を抜き魔樹木を刺して尻の穴から抜いた。女の尻に刺している魔樹木も同じように刺して取り払った。

「はぁ…王妃さま、面目ありません。」

男はハァハァと言いながらも王妃に謝罪した。

白巫女の女は何回も絶頂に達し目が虚ろで王妃の前に裸でいるのもわかっていない。

「親愛なる王妃さま、この女と離れる術は有りますか？」

「ふう…お前が童貞な訳は無いわな…童貞なら離すが…」

「衛兵！切り離してやれ」

「王妃さま！どうか無事に引き離して下さい。私は王の遠縁に当たるジンバと申します！何卒！」

「王の縁者か！」

渋々と手をかざし呪文を唱えた。

「…闇と光は交わらず…陰と陽も…」

王妃が唱えた途端に乳房と同化していた手は離れ、背中も離れた。

「ズルん」

男の精を出し切ったペニスも女の穴からズルリと抜けた。

男は急いで女から離れて裸のままで急いで王妃の間から出ていった。
「…マヌケの王にはマヌケな縁者しかいないわね。」
「王妃さま、この女はどうしますか？」
「失敗したから斬首が適当だけど…私のペットのハーピィの巣に入れていて。この女の白巫女の力がまだ有るなら助かるだろうし、なかったらハーピィの餌だから」
衛兵がワゴンに乗せたままに女を運んで行った。
豪奢な宮殿の廊下の先に宮殿に似つかない鉄の扉が現れた。
衛兵も全て巫女が務めている。
衛兵は自分に術を掛けて、鉄の扉を開きワゴンごと扉の中に入れてワゴンの台を倒した。
ゴロンとジャイムだった女はワゴンから落ち、王妃が飼っているハーピィの檻に入れられた。
「あら！新しいメス！」
「メス！メス！メス！」
ハーピィの飼育部屋には3匹の妖鳥がいる。
身体は人間で手の平、足が鉤爪の真っ白な長い髪に真っ白な裸。乳首と眼の色だけが薄いピンク。
背中には鷲の翼が生えている。
「どうしましょ！」
「どうしましょ？」
「食べ物はまだ有るから置いておきましょ？」
そう言いながら飛び立ち、ジャイムの肩に足の鉤爪をくいこますと飛び立った。
「イダッ！」
ジャイムは正気に戻り、ハーピィの檻に入れられたと分かると呪文を唱えた。
「え？何で効かないの！」
巫女は男と性行為をすると契約している神との契約が切れる。
神殿で覚えた術、呪文は全てが使えなくなる。

奴隷舘では術で性器を隠し、性行為は尻で処理していたが、レイナに性器を使った性行為をさせられ巫女では無くなった。
木の枝には色々な人種のメスが刺さった状態でも生きている。
ハーピィは術で苦痛も空腹も取り払い快楽を与えて活き餌を生きながらせる。
「あふん…ぁぁぁぁぁぁぁ…」
多くの木に刺さったメスから喘ぎ声が聞こえる。
ハイエルフ、ダークエルフ、マビト、ヒト、動物以外はニエにされている。
ジャイムの眼下に木の枝が見えてくる。
先は尖り幹に沿って太くなって行く。
「あ…いや…やめて…」
「…メスには快楽を…」
ハーピィが歌を歌い出した。
「はぁ…素敵！入れたい！入れたい！」
ジャイムには木の枝が逞しいペニスに見えている。
木は若い美麗な青年に見え笑顔で両手を広げジャイムをまっている。
実際には木の枝で人の様に幹から何本も枝を伸ばしているだけだがハーピィの術で催淫術をかけられ、ハーピィの脚の鉤爪からは体内に苦痛も快楽に変える秘薬が注がれている。
ささくれて尖った枝の尖端がジャイムの肉のビラを強引に別けてピンクの肉の穴に入っていく。ささくれが肉のビラや膣壁を裂きながら潜り込んでもジャイムには快楽にしかお燃えていない。
「オァ…アー！」
破れ目の上、恥骨から恥丘、下腹がボコボコとせり上がり、　ヘソの穴からボコンと枝の尖端が飛び出した。
木にしがみつきジャイムは腰をグラインドさせている。
枝が肉の穴を広げて赤い血が木の幹を垂れる。
ハーピィはジャイムから離れ、違う木に刺さったメスのハイエルフを枝から抜き地上に降りた。

ハイエルフは眼は虚ろだが、徐々に苦痛と意識が戻りだす。
他のパーティが集まり各々がハイエルフの身体にカブりつく。
「グェ！」
乳房を噛まれて引き千切ろうとしている。
「ガブッ」
もう片方の乳房も噛まれて引っ張る。
パーティの顔は端麗な顔立ちだが性格は残酷でニエを食す時は正気に戻し生き食いにする。
もう一匹が股間を噛じった。
「ギェーー！」
ひときわ大きな叫び声が飼育部屋に響いた。

東から西へ！王妃ジジの狩り

３４食

異世界ラクナには四季が無い。北は一年中、氷と雪に閉ざされた白銀の国。

南は熱帯の年中、暑い国。

東西は比較的温暖な過ごしやすい国だが魔獣、異界の者、ゴブリン、魔女などラクナ中から集まる。ソレを目当てに冒険パーティが集い、ハイエルフやマビト、ハイゴブリンなど雑多な者が集まる。

ラクナ中央は帝国領のダイム。

五角形の型に結界を張り、見張りの砦が５ヶ所有り、Ａ級の白巫女と剣士、勇者、千の兵が砦を守り、砦の周りには村や街が出来ている。

帝国帝王はダイム中央神殿に鎮座し王妃ジジが付いている。

帝王は高齢で西を治める第一王子が次期帝王には決まっていたが、王妃ジジは自分がラクナの支配を企んでいる。

しかし、第一王子の暗殺を企んでも、Ｓ級最高の勇者が王子の下には付いている。

霧の勇者と異名を取り勇者の姿もパーティの姿も誰も見たことがない。

しかし、王妃が放った暗殺者、忍びは王妃の元に戻ったものはいない。

バムには別にラクナの勢力図は関係が無かった。

別に帝国王が誰になろうが気にはしないが王妃ジジがなるのだけは阻止をしなければならない。ジジは自分以外の勇者、術者、賢者の全てを排除し、異世界の門の私物化とヒトのメス狩り、特に処女のメスを狩る事を望んでいる。

罪のオーラを纏っていないメス狩りはもはやラクナの秩序も無視す

る事になる。
そうなると人間界でも特殊な能力者を異世界に侵入させて、大規模な戦になる。
異世界の存在自体の意味が無くなり元に戻す作用が異世界の神から作用されると異世界自体が一度、消滅して鏡の世界の人間界も消滅する。
王妃ジジは白巫女、黒巫女、どちらにも属する神から寵愛を受けていると勘違いをしている。
異世界の神が神の創った秩序を壊す者を許すはずがない。
帝王は王妃を寵愛し、自分の病を王妃ジジのかけた呪いとも思っていない。
不審に思った北の第三王子が間者を帝都に放ったが戻らずに逆に第三王子の子が透明な怪物に殺害された。
ヒトのオスとダークエルフの間に産まれたクリアマンと呼ばれる怪物。
それ以降、ラクナではヒトのオスが紛れたら直ぐに抹殺される。
北の国はバムとレイナの産まれた場所であり、レイナは異形とマビトの間に産まれたと噂され迫害されていた。
それを救ったのが第三王子である。
ラクナでは北の第三王子が王位を継ぐことを願っているが、順番では西を治める第一王子になる。
西、東は肥沃で温暖な海に面した国だが第一、第二王子共に領民に重税をかけている。
領民は他の国に移るのを希望しているが南、北の両国に移るには中央帝都を通らないと移れない。
移民は重罪で罰金と元の国に戻されるか、若いメスは帝国王妃が没収する。
ジジが王妃に付いてからはラクナは実質、ジジの支配下になっている。
そんなおり、西の国の王子が暗殺された。

北の王と西の国の王は仲が良く、ジジの圧政に不満を持っていた。
A級勇者が護衛に当たっていたが全て暗殺されていた。
北の国王からバムに西の国王の護衛と王子、王女の護衛の依頼が届いた。
北の国王には恩義が有る。
西の国に向かった魔女のありさも退治しなければならない。
直ぐに東の国を離れ西に向かった。
西の国に行くには帝国領内を抜け東に行かなければならない。
砦は北の国王の発行した通行証があるから抜けれるが帝国領内で王妃ジジの妨害が有るだろう。
北の国王の恩義と魔女に変えたありさを退治する為には妨害を受けても西の国に行かなければいけない。
東の国の役人に西に向かう事を伝えてバムのパーティは西に向かった。
マサヨ達は何故、裸で中世の城の牢獄に入れられたのか解らなかった。
修学旅行でバスで山道を登る途中に濃い霧に遭遇し築いたら鎧姿の男と黒い頭巾の女性達にバスは囲まれ、山道は草原の中に止まっていた。
運転士はバスから降りて女に近付いた途端に斬られ絶命した。
バスに鎧姿の男達が乗り込み、担任の男性教師を殺害し、全員がバスから降ろされ馬車に乗せられ城に連れて来られた。
黒い頭巾の女性達は生徒３０人を荒々しく全裸にし、副担任の女性教師は何処かに連れて行かれた。
３０人全員が足に中世のオモリのような物を付けられ巨大な牢獄に入れている。
自分の手で股間と胸を隠すしか方法は無い。
マサヨも右手で股間、左手で胸を隠したが隙間からは黒い陰毛、左手からはピンクの乳首が見えている。
牢獄には兵士が槍を持って立っている。

「ガロン！ガラン！ガロン！」
「ウグッ！アグッ！ウグッ！アグッ」
牢獄の外の通路を大男が木馬を引きながら歩いてくる。
大男の前にティアラを付けた白い肌の奇麗な女性が白いドレス姿で歩いている。
少しおかしく見えるのはドレス姿の女性が大男の首に巻かれた首輪を持っていること。
「ガロン！ガラン！」
マサヨ達、女生徒は木馬の上に乗せられた人物に驚愕した。
別に連れ去られた、副担任の女性教師だった。
後ろ手に縛られて木馬に跨がっている。手綱は乳首に伸びて乳首に貫通した輪っかに着いている。手綱の重さで乳房は下に引っ張られ水風船のように垂れている。
股間にはバット大の木の杭が股間の女性教師の破れ目に食い込み、木馬が動く度に滑車や歯車で上下するように出来ている。
口には猿轡を噛まされているがもう気絶して反応していない。
ドレス姿の女性が裸の生徒達に
「この女は既に貫通しているので妾には不必要だ！お前達も貫通している者は要らぬ。」
何人かの生徒達からは悲鳴があがった。

選別

３５食

「ああ…いや！いや！」

生徒達３０人は処女と非処女に選別の為に台の上で横に並ばされ四つん這いにさせられた。

少女から大人になりかけた若い張りの有る尻が３０人分、台に並んでいる。

マサヨが頭を上げると、副担任の女性教師が木馬の上で白眼を剥き気絶している。

非処女なら副担任のようになる。

大丈夫、アタシは経験は無い。

木馬から滴る赤い血を見ながらマサヨは気丈にしていた。

…きっと夢かだれかが助けに来る…

端の髪を染めたアキナから処女の選別は始まった。

「何すんだよ！お前ら犯罪だぞ！オイ！ソコのドレスの偉そうな女！」

アキナな非処女らしく検査をしていた黒い頭巾の女が首を振った。

ジジが手を上げる。

「オイ！なんだ…」

ヒュンとアキナの首に頭巾の女が剣を振り下ろすと、

「…よ…」

床に転がった首から一言だけ発して眼を開けたままで茶髪のアキナの頭が床に転がった。

「キャーキャーキャーキャー」

生徒２９人は一斉に悲鳴を上げ、中にはもらしている者もいた。

「ガシャン！」

王妃ジジが檻を持っていたムチで叩く。

「黙らないと検査せずに打ち首にするわよ！」
「うぅ…」
生徒は皆、押し黙った。
「あの者は妾に暴言を放ち、非処女だった。非処女でも打ち首にはせぬ。妾に暴言を吐いた事が罪である。非処女でも無下には殺さぬ。」
「ぁ、あ…あ…」
アキナのつるんでる仲間のマコの小陰唇を頭巾の女は左右に開き長い枝を破れ目に入れて行くと枝の先の葉は微動だにしない。
「このメスも違う！連れて行け」
銀色の甲冑に黒いマスクの中世の騎士の様な格好の兵がマコを台から降ろし、部屋から連れ出す。腰にはギラギラ光る太刀が地下牢を照らすロウソクの灯りに照らされて光る。
斬られれば白い体はザックリと切り裂き、首は落とされる。
ガクガクと震えながらマコは首輪をされて連れて行かれる。
「このメスも違う！連れ出せ！」
中々、処女が出ずに検査をしている黒い頭巾の女は苛ついている。
「おい！このメスは処女だ！連れて行け！」
…え！ヨーコが処女なの？…
髪を金髪に近い色に染めて、半グレ風の男友達とつるんでいのを見たことが有るマサヨは驚いた。
黒い頭巾の女はヨーコに白い布を巻き連れ出す。
経験者と非経験者の待遇が全然違う。
そっとマサヨは横を向くとクラス委員のサチヨが検査をされるところだった。
…サチヨは処女よ…大丈夫だわ…
「……」
葉は微動だに動かない。
「ああ…いや…」
「違う！連れ出せ！」

最後のマサヨに順番が回ってきた。
…あたしは大丈夫よ…経験ないんだもの…
女はマサヨの股間に手を伸ばして小陰唇を左右に開き枝を破れ目に入れていった。
「アッ…」
思わず声が出てしまい顔が紅く成るのが自分でも分かった。
女性の細長い指が自分の秘所を弄っているのが少しこの状態でも興奮していた。
「カサカサ…」
「このメスも処女だ！連れて行け」
マサヨは台から降ろされて白い布を巻かれて、黒い頭巾の女に連れて行かれた。
…副担任の先生は生きているの？…
木馬に跨がった女性教師はピクリとも動かす股間からはまだ血が滴っていた。
クラス３０人のうち、処女は１２人。
経験者は１８人だった。
地下通路を歩いて行くと階段が有り上に登って行くと真っ白な大理石の宮殿の廊下に出た。
ペタペタと裸足で頭巾の女に付いて行く。廊下には全身甲冑の兵が所何処に立っている。
大きな扉の前に着いた時に身体に巻かれた布を剥がされ裸のままに部屋に入れられた。
マサヨの目の前には大浴場が拡がり、先に連れて行かれたクラスメイトが丸坊主の女に身体を洗われていた。
真っ裸の丸坊主の女がマサヨの前に来て、マサヨの手を取り浴場の椅子に座らせる。
マサヨはアキナの首が転がるのを見てからは抵抗も声も発していない。
抵抗してはこの異様な世界では直ぐに殺される。

頭から湯をかけられ先に頭から洗いだしていった。
同性に身体を洗われるのは幼い頃に母に身体を洗われて以来だ。
心細くなりマサヨは涙を流した。
「心配いりません。貴女が暴れたりしない限りは私達は危害は加えません」
流暢な日本語で話かけてきた。
「ココは何処ですか？」
「貴女がいた世界と違う世界です。これ以上は言えません。」
「あのドレスの人は？」
「この世界の王妃ジジさまです。」
「さあ、こちらに寝転んで膝を立てて股間を広げて下さい」
言われたままにマサヨは横になり膝を立てて股間を広げた。
股間の恥丘から肛門にかけて黒黒と茂った陰毛に泡を塗り拡がれて、
坊主頭の女は手に小さな刀を股間に当て刀を動かして行った。
「ジョリジョリジョリ…」
恥丘から大陰唇、肛門にかけて丁寧に陰毛を女は剃り上げていく。
マサヨは恥ずかしさから眼をつむり顔を手で覆っている。
「バシャン！」
股間に湯をかけられた。
「出来ましたので湯船に入って下さい」
目の前には坊主の女性達がクラスメイトを連れて歩いている。
クラスメイトの裸をみるのも初めてだったし皆、股間のはツルツルになっている。
…あ！やっぱりトモの胸って大きいんだ…
クラスメイトのトモが目の前を歩いている。
後には丸坊主の女が付いている。
歩く度にユサユサとトモの胸は弾んだように上下している。
「行きますよ！あがってください」
マサヨも浴槽より出て、丸坊主の女の後を付いて行った。

選別2トモの受難

３６食

「そこに並べ！前も胸も隠すな！」

処女判定を受けた女生徒１２人が全員、並ばされると、ひときわ漆黒の頭巾を被り、木の柄に豪奢な石が付いた杖で共を従えて女性が入って来た。

顔を見るとアノ、残虐な王妃が黒い頭巾姿で全身黒の装束で現れた。

共の頭巾が王妃に黒い布を渡し何やら話をしている。

そしてヨーコを指差し話をしている。

王妃から黒巫女ジジに変わった女がヨーコをジロジロと見渡す。

「お前！その年で３人も殺めたか？」

ヨーコはビックリした顔をした。

…何でバレるの？誰も知らない事だし…

「ほぅ、お前も残虐な性根だな。女の秘所に鉄の棒を突き刺して棒を蹴って殺すとは…ワシはソナタのような者は好きじゃ…殺す時には濡れたであろう？」

一年前に半グレの彼の浮気相手を締めた時にバールを膣に突き刺してコンコンと蹴っていたが誤って蹲いた瞬間にキツくバールを蹴り腹を引裂き殺した事は有る。

…でも…あの時は知り合いの本職に金を渡して…

「ははは！次は焼くとはな！」

ヨーコはドキンとした。半グレグループの対立相手の女を浚い陵辱したあとに薪を身体に巻いてアソコに爆竹を入れて、爆竹に火を付けてマンが爆発しビラビラが熟したイチジクになった状態にして薪に灯油をかけて生きたまま殺した事もある。

「最後は男をか…凄いな、お前。」

…何で知ってるの？アイツを殺したのはアタシしか知らない…
最後は半年前、遺体処理を頼んだ本職に暴行されそうになった時に咄嗟にペンで首を刺して、自分でバラバラにして建設中の生乾きのコンクリートに投げ捨てた。
「お前の金色の髪は産まれた時からか？」
ヨーコはキッとジジを睨んだ。
産まれた時はオレンジ色の髪で幼稚園から皆にイジメられた記憶しかない。
中学生で直ぐに金色に染めた。
父親の財力、暴力で髪の色が違うから金色でも入学させろと脅し学園に入って来た。
ヨーコの父親は裏社会にも顔が利くのでヨーコに手を出す半グレ連中はいなかった。
ジジがヨーコに手をかざし呪文を唱えた。
金色の染めた色が髪から滴り落ち地毛のオレンジ色の髪が出てきた。
「黒いオーラにオレンジ色の髪。そなた、奇種か？」
…？奇種？何？…
また、ジジが呪文を唱えた。
ヨーコの体が青白く光る。
「おぉ処女の奇種じゃ！」
「おい！あれを持ってこい。後、黒巫女のメイサも呼べ！」
「ガラカラガラカラガラカラ」
跳び箱の様な形をした台を黒い頭巾の女が押して来た。
その後ろにひょろりとした細い手を揺らしながら女が歩いてくる。
「そのメスを台に固定しゃれ。こやつの子宮玉を抜き取る。皆に見えるように台を移動しゃれ。」
「やめろ！オヤジに言ってお前ら皆殺しにするぞ！」
「ガラカラガラカラ」
ヨーコの顔の前に大きな鏡が置かれた。
鏡はヨーコの顔から薄くなり、現世の繁華街が見えて来た。

ストライプのスーツを着て、口髭を蓄えた割腹ある男を黒いスーツ姿の男達が薄いカバン型の防弾板を持って囲んでいる。
ボディガードの一人を指差し、呪文を唱えた途端に頑強なボディガードは膝から崩れ落ちた。
繁華街は騒然としている。
すっとジジの指がストライプのスーツの男に向いた。
「ああ！嫌！パパはやめて…大人しくするから！」
「ソナタの世界の兵が幾ら来ても全て殺してやるわ！」
自分で台に乗り手足を広げる。
手を降ろした先に手枷が有り縛られる。
足は左右に跨がる格好なので股間が丸見え状態に有る。
「そら！ソナタ達にも見せてやるわ！」
黒い頭巾の女がガララと股間をマサヨ、トモ等クラスメイトの方に向けた。
「やりすぎだ！」
トモが台に駆け寄り台を動かしていた黒い頭巾の女の襟を持って投げ飛ばした。
胸がブルンっと大きく揺れる。
「ファサッ…」
黒い頭巾の女は空中で回転しフワリと着地した。
トモは同年代にしては体格も良く街の総合格闘技道場に通っている。
柔道は初段だ。
だが、女は軽々と空中で回転し怪我など負ってない。
「ほうほぅ！粋の良いメスだな。カゲ！捕えて孕み虫を入れてやれ…久々に処女の胸肉も愉しみたい。」
「は！」
カゲと言われた女がトモに襲いかかる。
カゲは細身で華奢な印象だ。トモは負けるハズは無いと自分からかかって行った。
カゲが襲いかかるトモを軽々と肩車にして床に叩き落とすと腹を踏

んづけた。
「グゲッ…」
余りの激痛にトモは気絶した。
気絶したトモをエックス字の磔台に固定してカゲはトモの頬を打って起こした。
「コレを咥えておけ！激痛で死ぬぞ」
口に魔樹木の木を咥えさせられトモは暴れたが段々と噛んでいた魔樹木からは樹液がトモの喉の奥に流れて行くと下半身が熱くなって行き、タラタラと幼い性器からヌメヌメとした愛液をたらした。
「これへ！」
カゲに桶が渡された。
中にはオタマジャクシが泳いでいる。カゲはオタマジャクシを手で掴みトモの股間、まだ男を知らないピンクの破れ目に近づける。
「シュル…」
勝手にオタマジャクシは破れ目に潜りトモの膣内を子宮を目指し登って行く。
処女のクラスメイト達は興奮しながらトモの責を見ている。
「ゥウ…アッアゥ…」
口からはヨダレが垂れる。
天井を見上げアグアグと喘いでいる。
「ギ！ギギギ…」
開いた事が無い子宮口をオタマジャクシが強引に押し開き子宮内に入ろうとする。
「アグッ」
トモがガクンと頭を力が抜けたように下げた。
トモの下腹部が段々と膨らんでいく。
元々、大きな胸がはち切れんばかりに大きくなり、乳首から白い液体を流す。
妊娠半月位の下腹部に成った時にカゲが股の間にバケツの様な桶を置きトモの下腹部に手を当て呪文を言うと下腹部がウネウネウネっ

と不気味に蠢き、ポトンとオタマジャクシが一匹、桶に落ちた瞬間に
「ドボドボドボドボ…バシャバシャバシャバシャ」
桶に大量にオタマジャクシが落ちて桶を半分以上、満杯にした。
トモの下腹部は普通に戻っている。
「カゲ！このモノ、今日の宴席に出す。広間に連れて行け」
黒い頭巾の女がトモの磔台を押してクラスメイト達の前から連れて行かれた。

選別3　魔女ヨーコ。

37食

黒巫女メイサがヨーコの跳び箱状の台に固定された白い尻から股間にかけてローションの様な物を塗り股間の破れ目、特に性器を揉むようにローションまみれにしている。

「…アッ！アアン…ア…」

ヨーコの眼はトロンとして口を半開きにして唇のからはヨダレが垂れる。

「…暗黒神の力を…」

メイサが呪文を唱え出した。

「アグッアグッアグッ…」

ヨーコの下腹部が煽動して波打った。

「チャリンチャリンチャリン…」

裸の生徒達がたたされている部屋に金属片の音を立てながら裸の女が歩いてくる。

モジモジと股間に何やら挟まったような歩き方で女が現れた。

「レイカ先生！」

レイカ先生は黒い頭巾の女に首に巻かれた首輪を轡かれながらモジモジとふらつく足で歩いてくる。

眼が垂れてちょっと愛嬌の有る顔は童顔でそれでいて胸はFカップは有る。

まさにコンパクトグラマーの典型とも言える体型と童顔、男子教師からは好意をもたれていた。

学生時代からの先輩と交際をしていて近々、学園を辞める予定だった。

それが異世界に生徒達と拐われて、陵辱され女の秘所は拡張され力を入れても締まらないような身体に変えられた。

そして改造された姿で生徒の前に連れて来られた。
レイカ先生の乳首を貫くように横に一本、ピアスが貫通している。
左胸は輪っかに成ったピアスが付けられ股間から金色のチェーンが床まで垂れ下がり歩く度に金属音を発する：
「ヨーコさん！」
ヨーコが尻を上下に振るのを見て思わず声をあげた。
「ジャス！」
王妃がレイカ先生に声をかけるとレイカ先生は下腹を押さえ蹲った。
レイカ先生の股間、拡張された破れ目から赤い小さな動物が出てきてレイカ先生の頭に乗る。
真っ赤な小さな猿。
「飼育檻が勝手に喋るな！」
王妃ジジが叱責する。
小さな猿が王妃に駆け寄ると
「ひぎ！ち、千切れる！」
レイカ先生は苦痛で顔を歪める。
猿が首に付いたチェーンを引っ張る度に苦痛に顔が歪む。
チェーンはレイカのクリトリスに付いたピアスから伸びている。
猿が引っ張ると千切れる激痛がクリトリスから頭に響く。
「ジャス！ハウス！」
スゴスゴとレイカに近寄り太腿の間に潜り込み緩く成った膣のビラビラと膣口をかき分け膣内に潜り込んだ。
「元生徒が変わるさまをお前も見れば良い」
マサヨは処女と非処女の待遇の違いに驚き連れて行かれたトモとヨーコに何が起こるのか心配したが、自分の処遇も分からない。
「ウガ！ウウ…アガ！」
ヨーコがひときわ、高い呻き声を上げた。
股間が膨らんで大陰唇が膨らみ小陰唇と肉のビラビラを広げ、膣口が迫り出してくる。
ピンクの穴から、苦澄んだピンク色の肉が見える。

「ハガー！ハガハガ！ア～！」
「ボコン」
ピンク色の玉をヨーコは産んだ。
「ガハ！ガハ！ガハ！」
ヨーコの息が荒々しい。
ピンクの玉は黒巫女が拾い王妃に渡した。
「これからが本番じゃ！魔女か？消えるか？」
台に拘束されたヨーコは息が荒くなりガタガタと震えながら、体が薄くなりかけた。
「ヨーコさん！」
副担任のレイカがヨーコに駆け寄ると…
「ブチン！」
革の拘束具が弾き飛び、レイカのFカップの胸を掴んだ。
「アア…い、痛いわ！やめて…ヨーコさん…」
「ブチン！バチン！バチン！」
細い糸を切るように簡単に拘束具が切れていく。
ヨーコの髪は逆立ち、手の爪は長い。
白い肌は日焼けしたような褐色になっている。
台から降りてレイカのFカップの胸を掴んだままに床に立ち、胸を掴んだ手を上に上げる。
「アァー！千切れる！千切れるわ！ヨーコさん…降ろして！」
乳房を掴んで伸びた乳房。
ヨーコはもう片方の乳房も鉤爪のような手で握り左右に引っ張った。
「グゲー！」
聞いたこともないような絶叫が床や天井、壁に響き。
「バッン！」
「ドサッ！」
レイカは床に落ちた。
乳房の痕跡からは血を流し口を派パクパクと鯉のようにさせながら
自分の乳房をむさぶり食う生徒をレイカは見ている。

他の生徒達も悲鳴を我慢しながら見る者や眼を瞑るもの、小水を流す者など色々な反応を見せながら目の前の惨劇に恐怖した。
「ボデッ！」
乳房に飽きたヨーコは床に乳房を投げ捨てて、倒れて口をパクパクと開けてるレイカの腹に長い爪の手を突き刺した。
「ゴ！」
レイカは絶命した。
腹からレイカの子宮を取り出し四つん這いになり慾るヨーコの尻に向けてジジが、鉱石の付いた杖の柄の部分を突き刺した。
柄の先は秘所に当たり、膣壁を分けながら子宮が元有った場所で止まると杖から取れて子宮玉に変わった。
「もうよい！其処で喰い終われ！」
ヨーコは食べかけの子宮を置きジジの下に行き跪く。
「ソナタは魔女になった！我の言う事は絶対で有りソナタを人に戻せるのは我だけ」
「はい！ヨーコは王妃に従います。」
「ソナタは北に行き、男のペニス！女は子宮を喰ろうてこい！食す度にソナタの霊力は強くなる」
「ハイ！仰せの通りに…」
「バサン！」
ヨーコの背中からはコウモリの大型な羽根が生え、王宮の窓から飛び立った。
「ジジさま。残りの者は？」
「処女宮殿で行かせ。肉が上手く、胸は大きくな！」
「このモノは！」
ヨーコを指差した。
「王宮の裏手に捨置け。屍虫が処理をするわ」
生き残りの生徒は頭巾の女達に連れて行かれ、レイカだった肉片は荷車に乗せられ王妃は玉座に戻っていった。
その後ろから赤い猿が王妃を追いかけた。

王宮の大理石の部屋には静けさが残った。

新たな勇者レイとレレイ。

38食

「バチバチバチバチバチバチ」

炭が爆ぜる音がする。

トモは黒い頭巾の女から白い服を着た女に渡された。

「さあ、下ごしらえするわよ」

「おい！四つん這いに跪け」

小柄な女だが手には刃物を持っている。

タライにウネウネと蠢くホース状の物体を白い服を着た女が頭の部分を持ち四つん這いになったトモの肛門に近づけると自らホース状の物体はズルリズルとトモの肛門に入り込んで行った。

「うわん…お腹の奥に入って行く…」

トモの下腹部は大腸から蠢くと腹がボコンボコンと蠢いた。

不思議事にキツい便秘症のトモの腸は内容物が無くなっていくのがトモにも分かる。

「この虫はホースワーム。

ヒト、エルフ、動物の腸の内容物が栄養原なのさ。別名食糞虫。宴席でお前に漏らされたらアタシたちが処刑されるからさ、別に肛門を閉じても良かったが別の使い道が有るからね」

何をされるのか分からず、トモは不安げに蠢く自分の下腹部を眺めた。

草原を白馬に乗った頭巾にマント姿の男が後ろ真っ白な装束の女性を乗せて歩いている。

目の前に鉄の箱が見える。

「なぁ、レレイ。アレってアチラの世界のバスって乗り物だよな。」

馬がバスに近づくとヒトのオスが倒れている。

男が遺体にジッと遺体を見ても黒いオーラの残像も見えない。
バスには少しオーラの残像が見えるが精々、一人くらい。
バス一台なら３０人は乗っている。
「これ程の事をやるのは王妃ジジぐらいか…ラクナの掟も無視だな」
「あのヒトのオスからはオーラの残像はないわ。」
「ねえ！聞いてるレイ！」
「聞いてるよ。レレイ。でも俺一人じゃジジは倒せないよ。最低でもＳ級勇者が５人はいないと…それとジジの退治じゃ無く帝国との戦争だからな！」
「ちょっと待って…」
レレイが馬からフワリと降りた。
元運転士、教師の遺骸に祈りを捧げた。
…太陽神の加護を…
遺骸は光りながら消えた。
「レレイは優しいな。」
「太陽神に仕える白巫女。黒巫女と一緒にしないで！」
「だよな。ジジも白巫女の資格が有り司祭だもんな。レレイ、白巫女は誰でもなれるのか？」
「アタシも不思議なのです。元来、暗黒神の使いの黒巫女が白巫女にはなれません。」
「それでいて帝国国王の王妃だぜ。夜の生活は出来ないだろ？」
「たしかに姦通をすれば暗黒神の怒りに触れ体は消えます。白巫女は力を無くします。」
「ジジを倒すにはその辺りを攻めて暗黒神の力で消えて貰うか、白巫女の力を無くすしかないな。」
「このバス、スクールバスだぜ。３０人は連れ去らているな。」
「別名、処女食いのジジ。おぞましい。」
「レレイ！行くぞ。今日中に帝都を抜けて北の王国に行かないといけない。」
レレイは馬に乗りレイの腰に手を廻した。

光明のレイ。実力はＳＳ級も有りながら帝国にはＡ級で登録して入る。
Ｓ級なら色々な恩恵を受けれるが煩わしさや他の勇者が闘いを挑んでくる奴がいる。煩わしいので帝国にはＡ級で登録している。
「なぁ。この女学院って学校ってとこだよな？」
「どうせ、ジジの狩りでしょ。人食い巫女だから。」
「でもさ、白巫女は動物は禁止だろ？ジジは大丈夫なの？」
「あの女は食事になると黒巫女に変わるのよ。」
「便利だね。しかし、穢れが有るメスを拐うのは掟には触れないが穢れ無い者をラクナに拐うのは掟に触れるだろ？」
「ラクナの神も気紛れだから、レイは奇種とかの肉とかは食べないの？」
「俺は話をする物の肉は食べないの。それに食べてランクアップしたら自分で力を制御出来ない。亜神に変化するかもしれない」
「北には？」
「北の王子に話が有ると言われてね。」
「あの西の国の王子暗殺の事件でしょ。レイも大変ね。」
「本当だよ。ついて来る仲間も白巫女のレレイだけだよ。」
草原を抜け帝国外壁周りに出来た街に入った。
「！レレイ、寄りたい所、有るんだけど…」
「何処？武器屋？」
「違う、光が見えた。」
レイは街に有る売春宿に向かった。
「貴方、昼から女？」
「違うよ。光が助けを求めている。」
レイは売春宿に馬を置き、中に入って行った。
その後ろをレレイも付いて行く。
一室、光を放つ部屋が有る。
レイが入ると裸に足枷をされた普通種のヒトのメスが座っている。
「この娘かぁ。」

「幼いわね。それに黒いオーラが見えない。」
ラクナに引き込まれたり、迷い込む娘は黒いオーラを纏う。
大なり小なりは纏うがこの娘は光が出ている。
ラクナに来てはいけない娘だ。
「名前は」
「サ…サチヨ…」
ドカドカドカっと売春宿の店主と用心棒が部屋に入って来る。
「勝手に入られたら困るんだがな！」
「オヤジ！この娘を買う。幾らだ！」
「ははは！ウチの稼ぎ頭だ！一晩、銀２０だ！」
「違う！見受けだ買い取るんだよ！」
「そうだな！金貨１００枚！」
金貨１００枚なら売春宿が一軒建つ。
「はぁ…レレイ！この娘の足枷を取って！」
「魔霧！」
部屋が真っ白になり、レレイ、レイ、サチヨの姿は消えた。
３人の姿は草原のバスのそばに有った。
「君に起きた事を話して。」
サチヨは山にバスで登るいる途中に霧に巻かれて気づいたら草原にいた事、兵に捕まり、黒い頭巾の女に選別された事を話した。
売春宿に留めていた馬がレレイの側に歩いて来る。
「レレイ！この子、あちらの世界に戻して来るよ。この世界はこの子がいるとこではない」
あのバスの中で待っていて、レレイ。
レレイが馬に着いているカバンからブラウス状の服を渡した。
「裸では向こうで困るでしょう。着て行きなさい。」
サチヨは馬に跨り、後ろにレイが乗り鞍を叩いた。
「バサン！馬に羽根が生え、額から角が伸びた。」
「さぁ、元の世界に戻るよ！落ちないように鞍を持っていてね。」
天空に飛び立った後に馬は雲に消えた。

サチヨは修学旅行で登るはずだった山の山頂の駐車場で見つかった。
バスが消えて3日目の事だった。

トモでディナー

３９食

「グゴ…グググゴ…」

「ジュ！ブシュ～」

丸い白桃のような尻から伸びた筒に真っ赤な石を入れる度に銀色の尻の穴に刺さった筒からは白い蒸気が上がり、トモは苦痛に顔を歪める。

「カラン！ボトン！ジュッ」

「あずい！熱い！お尻焼ける！」

涙を垂れ流し顔をクシャクシャにして顔を振る。

尻の穴に刺さった筒の中はグツグツと煮えたぎっている。

普通なら生きているはずが無い。

ジジに不死の呪文をかけられて生きている。

「はい！出来上がりました。王妃さま。膣から子宮に流し込んだ怪鳥の卵、生娘蒸しです。

王妃さま、召し上がり下さい。

」

王妃ジジが左手を上げた。

「お待たせいたしました。ミルクステーキの用意をさせて頂きます。

王妃、子宮はどうしますか？」

「久しぶりに食したい。コヤツは身体を動かしているようだから美味いだろう。」

白衣のコックが小型の肉切りナイフを手に取り四つん這いに成ったトモに近付く。

尻にはまだ金属の筒が刺さっている。

トモは回復魔法をかけられているので一昼夜で身体は元に戻るが戻る時の激痛も凄い。

「無痛刀を使いなさい。気絶すると楽しみが半減する。自分の乳房が食われるさまを見るのが楽しいんじゃ」
「は！」
トモの水風船のように垂れた乳首に針が付いた重りを突き刺す。
「嫌ー痛いよー！」
左右の乳房が重りに引っ張られ伸びる。
乳房とアバラの境界の赤い段差に沿ってナイフを突き刺す。
「アァ…アン！アハァ」
激痛では無く舌で乳房を舐められるような快楽に眼がトロンとしてくる。
何時もはキリリと凛々しい眉と切れ長の眼が印象的なボーイッシュな顔立ちに似合わない巨乳で学園では同性から慕われているトモが乳房を斬られながらヨダレをたらし、眼が虚ろに空を見ている。
巨大な乳房が銀色の皿に乗せられ王妃に見せられる。
王妃の前には鉄板が置かれ
「ジュー…ジジジ！」
勢いよくトモの乳房は鉄板の上で煙を上げた。
白い乳房がキツネ色に段々と変わっていく。
乳房をフォークで刺し、ナイフで切り分けていく。
切り口からは赤い肉汁と脂、白い母乳が溢れる。
全て輪切りにされた肉は王妃達に分けられていく。
王妃ジジには乳首が付いた肉が皿に乗せられた。
「次の料理を…」
「は！」
白い服の女は尻の穴に刺さった筒を両手で掴み引き抜いた。
ズルズルと筒が引き抜かれ、尻の穴はポッカリと開いたままで穴から湯気が立ち上がっていた。
仰向けにしてトモを膝立ちにして細い金属棒を膣の穴に突き刺し、膣の中で棒を動かしていた。
「いだ！」

棒の先が子宮口に当たり小さな亀裂に入り込む。
「…」
白い服の女が呪文を唱えると棒の先が子宮内で鈎針のように変わった。
無痛刀を下腹部のヘソの横に構えもう片方の手で腹を触り何やら探している。
「は！」
感触が有る所に刃を突き刺した。「アン！」
もう片方にも同じように刃を突き刺す。
そして棒を握り女は棒を引っ張った。
「あ、あ、あ、産まれる！何か！出るー」
膣壁を滑りズルんとピンクの肉の塊が出てきた。
直ぐに魔鉱石を子宮の有った場合に押し込む。
魔鉱石を入れなければ回復魔法の副作用で子宮を抜かれた肉体は消えていく。
棒の先に吊るされた子宮はドロドロの粘液をたらし、ピンクのアンコウの吊るしたような感じに見える。
「このメスは連れて行け！快楽に溺れ自分で乳房を喰われている事も分かってないわ！」
「ジジさま、子宮はどのように？」
「吊るしたままに切り分ける。私の前に吊るして置け。」
トモは台車に乗せられたままに王宮の廊下を運ばれ、クラスメイトの監禁されている部屋に入れられた。
「トモ！トモ！」
胸は切り取られ、尻の穴はポッカリと空き、膣口はデロンと空いたままの姿を見てクラスメイトは泣くもの、震えながらトモの胸に布をかける者、全員が絶望的になっていた。
「あ…あ！痛いよ！痛いよ！」
「トモ！どこが痛いの！」
「胸が熱い！痛いよ！」

「布を替えてあげる。」
マサヨがトモに掛かった布を取ると赤い肉の跡が肌色になり白くなっている。お腹の傷も小さくなり、ポッカリ開いていた尻の穴は小さくなっていく。
「なんなの！この傷！治ってきている！」
新しい布をトモに被せて見守るしかなかった。
処女監禁室は空調は効いていて寒くも暑くもない。
部屋の隅にトイレが有り、飲水や食料も部屋に流れる川に流されて来る。
灯りは一定期間で付いたり消えたりする。
部屋が薄暗くなると
「アァア～！胸が張るの！お乳！吸って！痛いよ！」
トモが悶だした。
「どうしたのよ！トモ！」
マサヨ達、数人が起きてトモに駆け寄ると失くなっていた胸が元に戻り、Fカップ有ったトモの胸が張りGカップは有る。
そして乳首からはタラタラと白い母乳が垂れている。
白い乳房が張り血管が浮き出ている。
「ああ！痛いよ！吸い出して」
マサヨは狼狽えたが、ナオがトモの乳房を乳房の根元から乳首に向け絞った。
「ビャ！ビュー！」
勢いよく母乳が乳首より飛び散った。
「マサヨも絞るか、乳首を吸って母乳を出してあげて！乳が貯まり過ぎるとトモの乳房が腐るよ！早く」
ナオのように乳房を揉むが一向に母乳は出ない。
「マサヨ！吸い出して！」
急いでトモの乳首を含み吸うと勢いよく口に母乳が流れ混んでマサヨはむせた。
「口の中の母乳は吸って吐いて！」

マサヨとナオがトモの母乳を出しているといつの間にかトモは眠りについていた。

「ナオ！よく知っていたわね。」

「あたしは看護科だからね。母乳は出さないと炎症するの。」

「それよりも、若いのに母乳が出るようになるなんて…」

二人は将来を考えて暗くなった。

ジジ退治の密談と魔女ヨーコの最後

４０食

白銀の中、レイとレレイは北の王国の門の前にいた。

「北の王国の王子に呼ばれた！」

「ギギギギギギギギギ…」

王宮の門がユックリと開いた。

中には毛皮を甲冑に纏う白髪の老騎士と白い毛皮を纏う銀色の髪の巫女が立っていた。

「こちらでございます。」

王宮の中は至る所に結界、罠が仕掛けてある。

東西王国の王子達が暗殺されたので王宮内は対暗殺者用にしているのだろう。

「コチラのお部屋です。」

王子の部屋にしては少し狭い部屋へ通された。

毛皮をレイ、レレイは脱ぎ入り口に有るハンガーにかけた。

正面に王子が座り、右側に黒いシースルードレスを身に纏う黒髪の女性と精悍な容貌の男が座っている。

男の首から下がった階級章を見てＳクラスの勇者と分かった。

レイは年の割に幼く見える。

首にはシルバーの階級章。

「ジャバ！Ａ級勇者を一人、呼んだだけでは無理だろ?ジジに殺られるだけだぜ！」

椅子に座ったレレイがキッとバムを睨んむ。

横に座る黒巫女レイナはレイが秘めた力を制御しているオーラを薄っすらとみている。

「実は王妃ジジの事なんだが、兄上達を亡きものにするように暗躍している。実際、王室関係喋るなが２人、暗殺された。王妃を暗殺

出来る事は無理か？」
「帝都軍を抑えるのは厄介だし、王宮付のS級勇者もいる。」
「王宮軍は心配ない。兄者達と4方向で軍を帝都に進軍させる。」
「問題はジジだ！」
「倒せない事は無いわ。」
ボソッとレイナが口を開いた。
「私達、黒巫女は姦通をすれば暗黒神の怒りで時空の狭間に吸い込まれる。帝国国王との夜も女性器は使わずに肛門を使ってしているわ。私達の術で股間を変化させる事が出来るの。その変化している股間に動物、ハイエルフ、マビト等から作ったハリ型を突き刺すの。別に性行為が目的では無いわ。暗黒神に捧げた操、処女膜を破れば暗黒神の怒りで消滅よ」
「ハリ型は私が用意するわ。王子は各国王に来春、帝国に進軍するように伝えて。」
「で。貴方達、西にありさって魔女がいるわ。退治して貰えない？コレは子宮玉、貴方も仲間を集めたら魔女位、退治出来るでしょ」
「ギャー！イギ！グァ！」
王宮の外が騒がしく成った。
窓から見下ろすと褐色の身体にコウモリの羽根の女が甲冑の兵士の首を片手で摘んで持ち上げて股間を噛り性器を喰い漁っている。
他にもメイドが子宮を抉られ鍛えている。
魔女に変えられたヨーコが北の王宮で殺戮を繰り返していた。
「レイナ！行くぞ！」
「バム！ソコの二人に退治して貰ったら？A級でも何とか頑張れるでしょ？」
「はぁ…行こうか？レレイ！」
レイがフワリと窓から飛び降り。レレイも木の葉の様に降りた。
「シャーシャー！」
魔女ヨーコは肉片を握りながらキョロキョロと辺りを伺う。
「レレイ！王子に危害が向かったら面倒だ！結界を頼む。」

バムとレイナは窓から下を覗き込み闘いを見ている。
「バン！」
レレイの結界が張られると同時に…
「魔霧！」
中庭に真っ白な霧がかかり、上からは見えなく成った。
コウモリの習性を持つヨーコには霧の中でも、レイとレレイの位置は分かった。
「カハァ！」
ユラユラと揺れるドレスのシルエットをレレイと思いヨーコが襲いかかる。
「バン！」
ドレスが四散してヨーコに絡みつく。
「魔縛！」
「ギチギチギチギチギチギチギチ…」
蹲った状態でヨーコは捕縛されている。
バムから渡された子宮玉をヨーコ肉の穴に押し込むが中まで入らない。
子宮玉を置き、片腕をヨーコの亀裂に肘まで入れ、中から魔鉱石を取り出し、子宮玉を奥まで押し込むとヨーコの褐色の肌は白くなり、背中の羽根も消えていった。
「が！あがが…」
肉が亀裂に吸い込まれていく。股間の亀裂が太腿、脚、腹、胸と吸い込み赤赤とした魔鉱石にヨーコは変わった。
霧が晴れたら、レイとレレイが中庭に魔鉱石を持って佇んでいる。
窓から飛び降りて１０分も経っていない。
「王子！アイツ、Ａ級勇者か？魔女だぞ！倒すのに１０分だぞ！」
フワリと中庭から出ていった窓辺に飛び上がり部屋に入った。
「王子！この魔女、真鉱石で操られていた。ジジの差し金だろう。
それと、バス事、拐われた学生だ。」
「ラクナの創造神の掟では穢れ無き者は拐うなとある。無謀を許せ

ばラクナも異世界のヒトの世も無くなるぞ。」
「それと少年！その嬉しそうに付けている金の階級章、ジジに居場所が丸わかりだぞ。」
「早急に捨てるんだな。」
「後、他のS級勇者には私から説明する。君は人を見下す感じがするな？」
「北の王子！ジジ討伐は春！使い魔をよこす。一斉に王宮に打ってでる。」
「少年！西の魔女は君が責任を持って倒しなさい。」
「エイム！」
真っ白なユニコーンが天空から降りて着て窓辺に滞空した。
「王子！勇者と王子達の説得は私がする。レレイにもジジ攻略方法を考えて貰う。では春に…」
レイ、レレイはユニコーンに乗り込み天空に消えた。
「王子！あの小僧はなんだ！A級勇者の実力じゃ無いぞ！」
「バム、十年程前のクリアマン事件の生き残りの勇者の一人が彼、レイだ。実力はWS級。責任を取ってA級に降格したねだよ。後、一人はレイと同じ実力者はいる。今は西の王子の護衛をしている。それと彼は君より年上だ。」
「降格したもう一つが金の階級章を王国に返却する為だ。ジジは勇者達の動向を階級章を通して全て把握している。」
バムはムシャクシャした顔をしたが…
「レイナ！ドラゴンを呼んでくれ！直ぐに西の魔女を倒してジジ退治を始める！」
そう言いながら階級章を踏み付け粉々にした。
ドラゴンにバム、レイナが乗り天空を西の空に飛び立った。

41食

「なぁ、ジジはどうして王妃になれた？黒巫女としてはS級だろ？」
「噂ではクリアマン事件に乗じて成ったらしいわ。西の王子が暗殺されて、前王妃が床に伏せて亡くなり後妻で着いたのよ。」
「噂ではクリアマンもジジの弟だと言う話よ。」
「あの事件の時にジジは？」
「A級勇者のパーティの一員でいたわ。」
「そのパーティは？」
「ジジが生き残り、全員が駄目だったわ。」
「ジジは白巫女の資格もあるが、レレイよりも格が上なのか？」
「馬鹿にしないでよ。彼女は司祭長。私は大司祭よ。片手間でやってる女と一緒にしないで！」
「さあ、南の王子に説明するか…」
二人を乗せたユニコーンは海辺に有る南の王宮に降りて行った。

「何回目よ！トモの胸ばかり抉られて部屋に戻されるの！」
「直ぐに布で包んで！」
トモの胸は元に戻り乳房が張り母乳が出るようになると女が連れ去り、数時間後に胸を抉られて部屋に戻される。
「…もう…しにたい…」
「トモ！頑張って！」
「…あのう…コレも使ってください…」
「ありがとう。」
監禁部屋には、マサヨ達の他にもグループが2つ有り、マサヨ達のグループが一番、人数が多い。
「あたし達は東京のOO女学院。貴女達は？」

「私達は熊本の＊＊＊学園。あの子達が一番古く、北海道の◇◇学園の子達。」
「え！日本全国から此処に集められたの！」
「アタシ達も最初は１６人、居たんだけど今は5人だけ…あの子達も１８人居て今は３人…」
「ねぇ！本当に王子達、攻めて来るの？」
「アグッアグッアグッ…」
「ねぇ！ちゃんと話を聞きなさい！本当、悪食とはよく言ったものだわ。」
「アヮ…アァ…」
丸い白桃のような乳房を舐め回し、一気に歯を立てる。
「バグッ…ひぎ…千切れる…」
「ギャー」
少女の白い乳房が噛みきられ男の口からは神経線維が乳房が有った痕跡に伸びている。
「食べるか話すかしなさい。」
「姉上！私のカワイイ黒巫女ララからの情報です。」
「ララ？タダのＡ級の黒巫女じゃないの？」
「隠密行動はＳクラスです。」
「北の王子にはバムと黒巫女レイナが行ってました。」
「後、素性が分からないＡ級勇者とＡ級白巫女。」
「そこに姉上が放った魔女ヨーコが向かい中庭の兵は駆逐しましたがヨーコは退治されました。」
「バムが退治したのか？」
「いえ、Ａ級勇者と白巫女が対峙した瞬間に辺り一面が霧に覆われて晴れたらヨーコは魔鉱石に変わっていたと…」
「ララは闘いを見たのか？」
「嫌、ララにも見えなかったらしく。」
「後、聖獣ユニコーンに乗り込み南に飛び去ったと…」
「ユニコーン？唯のＡ級勇者が召喚だと？」

「そのもの本当にA級か？」
「さぁ、王国の勇者台帳には有りませんし唯のマグレでしょう。」
「おい！もう良い！連れて行け！」
「この娘は？」
「あ？ペットのエリザベスに与えよ」
黒い頭巾の女は乳房が噛みきられた少女を王宮食堂の横に有る水槽に連れて行き、水槽に突き落とした。
「バシャバシャバシャ！」「わっぷ！アッベ！」
溺れかけるが急に体が下から付きあげられて下半身迄、見えた。
「ビギャー」
股間には丸太のような黒い棒が刺さり身体を水中から押し上げている。
異世界に住む肉食ウナギが少女の股間に潜り込むために全身の筋肉を使って膣口を付きあげていた。
バット大も有る丸太は少女の幼い亀裂には大き過ぎて少女は水面に浮いて来たが「ガッガッガッ…」
「アガアァア～」
ウナギは口を開けたり締めたりしながら少女の膣壁等を噛り中に潜り込む。
苦痛に歪める顔から涙を流しながら少女は水中に消えた。
そのさまを満悦な顔で見ている悪食のジバ。
一応はラクナ６大勇者の一人だが何でも食し、残虐で有名な男。
王妃ジジの実弟でもある。
「ジンバ！南に黒巫女ララを使わせ動向を探らせて！王宮付きの勇者ガルムと黒巫女ゾフも付けて良いわ。」
「姉上！唯のA級如きに大層では？」
「ジンバ！帝国の勇者管理は自己申告だわね。もし、S以上の勇者でも申告しないとわからないわね。」
「あ！確かに実力者で申告をしない者は昔にもいた！」
「早く使わせてその者を始末しよ！」

南の王宮は熱帯雨林の先の海辺にそびえ立つ。
木で出来た王宮だが異世界一硬い木で出来ている。
「久しいなシャナ！」
「ご無沙汰してます。レイさま。レレイさまもお変わりなく。」
勇者シャナはレイの弟子に当たる。
見た目は二人とも変わらないが、シャナが少年時代からレイは変わっていない。
「相変わらず異世界の門を通り穢れたメスを連れ去っているのか？」
「私の使命なれば」
「そうだな…」
「早速、南の王子に合わせてくれシュナ」
「分かりました。王宮に…」
シュナ、レイ、レレイと王宮に入って行った。

「あーん。駄目よ。崩れて来るよ」
「何なのよ！」
トモの大きな乳房がポロポロと崩れて来る。
「もう…良いよ…このまま…くずれたい…」
弱々しくトモは呟いた。
一番古い北海道の生徒達はいなくなった。
熊本の生徒も一週間に一人、連れて行かれる。
「トモ！」
乳から崩れだしたトモは全身がポロポロと崩れて消えた。

４２食

真っ裸の女が蜘蛛の巣状の荒縄の中央に四肢を伸ばし磔にされている。

丸坊主に全裸。

全ての毛が剃られている。

女の突起する部位に糸が結ばれ全てがレイナの足元に集まる。

糸を引っ張ると乳首が伸びたり、クリトリスが伸びる。

糸は異世界最強の強度と細さを誇る異世界の蜘蛛の糸に術をかけ、鋭利な切れ味も兼ね備える。

「アアアァー！イヤー」

「アア！イダイ！千切れるー」

「早く言いなさい。誰の手の者？王妃ジジ？帝国のガルム？」

「い…言わない…」

「そう？コレでどう？」

「ドン！」

「ブチン！」

「アガガガアア！イダイ！」

乳首が紐と共に宙に飛んだ。

「次はこの糸にしようかな？」

「あ…あ…」

「ここって無くなると快感もなくなるのかな？」

「足で糸を踏むと女のクリトリスがビョンビョンと伸びる」

「早く誰が主人か言いなさいよ！」

「ドン！」

「アァゥ…」

「気絶したわ。」

「コレだけ痛振っても喋らないなら自白草を使おうか?頭は使い物にならなくなるけど…喋ると呪文で消されるのかな?」
気絶している女の耳に種を入れ呪文を唱える。
パチッと眼を開け女は喋り出す。
「私は悪食のジバさま直轄の隠密。来春の反乱の企てを調べている。」
「悪食のジバってジジの実弟の?」
「何処まで調べた。」
「北の王宮にいた謎の勇者が南に向かう迄…」
「パチッ!」
隠密の女が眼を覚ました。
「バム!何か噛ませて!」
バムは近くに有った木のスプーンを口に咥えさせた。
「勝手に自害されたら困るわ。」
黒い袋からレイナが四つ又の十手のような物を取り出した。
「この子で実験よ」
十手手の先を隠密の女の股間に当て、一番長い先をセピア色の肉ビラの間に入れて十手を股間に差し込むと膣は何も起こらない。
尻の穴に刺さっても変わらない。尿道口に入っても変化は無かったが、尿道口とクリトリスの間に有る窪みにズブズブと刺さっていくと女がビクビクと震え、窪みからは血がしたたる。
その瞬間、空間に亀裂が走り漆黒の闇から腕が出て女を握り亀裂に引きずり込んで消えた。
「アレが暗黒神の掟を破った奴の最後かよ…」
「そうよ。貞操は神に捧げて黒巫女になるの。子供を作る事も女の喜びも知らない。その代わりに力を頂くの。」
「上手くジジの処女を奪ってこの世から消さないとな。」
「四つ又でも手こずるわ。ヤマタの槍を作らなくちゃ」
「確かに接近戦で突き立てるのは難しいな。でも、悪食のジバか…厄介だな。」

「何故なの？」
「アイツ、相手の術まで食うんだよ。ほんとに悪食だよ」
「最初はヤラれれるんだが、最後に相手が必殺技とか必殺術を出すとソレを喰い、相手に返すのさ。あの分厚い脂肪で切っても効かない。面倒な奴だよ。」
「早く、魔女に成ったありさを退治して春に向けて準備しないとな」
「明日には西の都に着くわよ。」
「バム！キスをして！」
「別に構わないが神様はキスを許すのか？」
「黒巫女から白巫女に改宗は無理なのか？」
「改宗は可能だけど…魔の血が混じるおんなが太陽神にはつけないわ。」

「グァ！アァー」
「足らないわ！何なのよ！普通のペニスじゃないの！」
湖畔の漁師小屋で男女が交尾していた。
嫌、交尾と言うより女が男を犯している。
「まま…待って…もう出ない…」
「何なのよ！貴方！誘ったのは貴方よ！」
屈強な肉体に太い手足、マビトにしてはたくましい男が泣きそうに嘆願する。
「縮んだわ！」
女が男から離れてペニスに顔を近づける。
黒い髪に切れ長な眼をし、普通に見れば清楚な女性だから誘った男は普通にセックスが出来るんだと思った。
縮んだペニスが小さく男の股間で干乾びている。
「こんなの要らないわよね。」
美麗な顔に付いた赤い小さな口がガハッと小さかった口が大きく開き
「バッン！」

「アガガガ！」
男の股間からはペニスと睾丸が無くなり真っ赤な赤い穴が空き男は気絶している。
「アハァん…ガイが愛おしい…」
小屋で身なりを整え、ありさは小屋から出た。
「クン…クン…」
甘美な匂いが湖から匂ってくる。
「久しぶりの処女だわ！旅の一座でも来ているのかしら」
「バシャバシャ！アハハ！」
キャッキャキャッキャと裸の女が水遊びをしている。
一人は黄色の少女。もう一人はマビトの女性。
二人とも処女の女。
「ゴクン！」
無意識にありさの喉が鳴った。
「アッ痛！」
「どうしたの？」
「バシャバシャ！」
「どうしたの？」
「足を切ったみたい…」
「どれ？」
少女の足を持ち上げ、傷口に唇を付けた。
「あ…あ…」
甘美な甘さと旨さが口に広がる。
…凄い美味しい！何？この子！絶対に食べたい…
理性が変化を解いて行き、ザワザワとありさの身体にウロコが現れる。
「サワ！直に水辺から上がりなさい！」
ラムが矢を射ながら大声で叫ぶ。
「ゴアー！」
サワは何とか陸地に上がったが、マビトの少女は脚を噛まれ水中に

引きずり込まれようとしている。
おびただしい血で水面が赤くなる。
「爆」
レイナが術を唱えるとマビトの少女の下半身に仕込んだ爆弾が爆発した。
「バシャーン！」
大きな水柱が上がる。
顔から下、顎が欠けたありさが水辺に立ち上がる。
衣服を脱ごうとしている。
「泥縛！」
水辺の泥がありさにまとわりつく。
「アガガガ…」
「ありさ、悪く思わないでね」
尻のブラウスを捲り、レイナがウロコが生えたありさの膣に手を入れて子宮玉を抜いた。
「ガイ！首を落として上げて」
レイナが自分の剣を渡すとガイはありさの首に剣を振り降ろした。
「ガイ…会いたかった…」
水辺で泥のように崩れて波がありさの痕跡を消した。

ミツエの最後

４３食

「ペチャニュチュニチャ…」

「アン！ヤン！あぁ…」

ボサボサ髪に髭面の豹の皮を無造作に裸に羽織った大男がアナコンダのようなペニスを女に含ませ、左右の指で女の股ぐらに入れて弄っていた。

「若！客人の前ですぞ」

白髪の老人が戒めるが辞めない。

「構わないよ。王子は何時もこうだ！」

レイは笑いながら言った。

「今日はアノ話か？」

レイの後ろにいるレレイは恥ずかしそうに顔を伏せている。

恥ずかしそうに腰をモジモジと動かす。

意識はしていないのにアソコがジュンっと濡れる。

「恥ずかしがらずにして良いよ。ビャクの体臭には催婬作用が有るから女性は興奮状態になる。」

「人払いできないかな？ビャク」

太い腕をサッと上げると女達はスッと何事も無かったかのように立ち上がり、白い肌着をただし、部屋から出た。

「レイ！爺は良いだろ？」

レイは頷き、話始めた。

「北の第三王子には話は付いている。王妃ジジを討つ段取りだ。」

「ビャクには西の王子の説得をして欲しい。」

「俺は東の王子を説得する。」

「東西の兄者達が話に乗るか？」

「両国共に子供を暗殺されているんだぞ。乗るだろ？」

「四方からの兵力で帝国兵と諸国兵の兵力差は無くなるが、問題は勇者達がどちらに付くか？だな。」
「帝国には王宮付のガルム。それとジジの弟、ジンバ。」
「厄介な二人だぞ。それにお前の弟子、シャナ。」
「シャナは妹がジジの下に付いている白巫女だから人質を取られているようなものだ。レレイに太陽神神殿庁に掛け合いレレイの下に付くようにした。」
「後、北の王宮で知り合いになったバムとレイナ。」
「ほぅ、あの狂い巫女を味方にしたか！」
黒巫女レイナの異名の方がラクナでは知れ渡っている。
「３対３か、後のＳ級は？」
「オイ！ビャク！お前は戦わないのか！」
「ああ…引退したし、南の王国に侵攻して来なければ構わん。」
「ビャク、ソレがお前の国だけの問題だけでは無くなっている。ラクナが消え去る危機なんだ。もう、異世界の門から崩れかけている。」
「どう言う事だ？」
「最近、異世界の門の近くの草原で人間界のバスと言う乗り物とヒトのオスの遺骸を良く見かける。シャナも関係していたようなので聞いたら、穢れ無き者を異世界に連れ去りジジが食している。」
「何？穢れ無き者を連れ込むのは創造神の掟に反するではないか！」
「今までで およそ１００人・・」
「創造神の怒りは太陽神、暗黒神の怒りより止めようが無いぞ…」
「仕方ない。春まで待たずに来月、決行しよう…」
「儂は今から西の兄者に会いに行く。」
「セン！西の兄者の所に行くぞ！」
「わ…かりました」
白髪の老人が立ち上がりながら手足が伸びて皺は無くなり、胸が盛り上がってくる。
銀色に輝く長い髪をたらし白い衣装を纏う美麗な顔立ちの女性に変

化した。
「ビャク、この方は？」
「お前、クリアマン退治の時に会っているぞ。」
「あの時は賢者のさっきの老人…」
「俺の相棒、白巫女のセンだ」
「セン！グリフォンを呼んでくれ」
「センが窓際で呪文を唱えると雲間から赤い炎を空に足跡のようにライオンの身体に鷲の頭、翼を持つ聖獣が降り立った。」
「お前！その格好で兄王子に会うのか？」
「お、おう！着替えを！」
従事が衣服を揃えて何人もの女がビャクの身体を拭き、髭を剃り、髪に油を付け王家の正装を施し、腰に剣を付けた。
海賊の棟梁のような容貌が今は一国の王の風格を纏っている。
ビャクがグリフォンに跨り、センもビャクの後に跨がるとグリフォンは天空に消えた。
「レレイ！僕等も東に行こうか」
「ピーッ」
レイが口笛を吹くと雲間からユニコーンが降り立った。
レイが跨り、レレイが後に跨がるとユニコーンも天空に消えた。

王宮処女小屋…

「…あたしたちのクラスメートだけになったね。」
処女部屋にはマサヨのクラスメートだけになった。
「ガチャン！」
黒い頭巾の女が入り、マサヨ達を品定めする。
残り１０人から少し胸が大きなミツエが選ばれた。
「ああ…嫌！死にたくない！」
「スラン…」

女が腰の剣を抜き、ミツエのツインテールの右の髪をサクッと切り落とした。
「今、首を落としても良いが…」
ミツエは啜り泣くが他の者たちに抵抗するすべは無い。
「コチラも要らんだろ」
「ザクッ」
ツインテールを切り落とされショートの少年のような容姿になり泣き崩れる。
「ほれ！立て！」
剣の峰で尻を叩くとスゴスゴと立ち上がり、頭巾の女に付いて行った。
ミツエが連れて行かれたのは王宮の大食堂。
中央テーブルには王妃ジジや他の妾が座っている。
「その台に俯せになれ」
施され台を抱きつくように覆い被さると手首、足首と固定される。
「ああ…嫌…死にたくない…」
ガララガララガララ…
台車に乗せられた若い男が連れて来られた。
「いいやだ！宦官には成りたくない！兵士でいたい！」
「ビシ！」
「お前の意志は要らない！王妃さまの命令だ！早くペニスを起てて女に突きさせ！」
突きさしたら最後、ペニスは切り落とされる。
そのような状態で経つ男はいない。
「ホレ！」
男の尻の穴に黒い棒が差し込まれた。
「…ホースワームよ眠りから覚め蠢け…」
糞を主食のホースワームが男の直腸で蠢く。
男の前立腺が刺激され。意思とは関係なくムクムクと大きくなり天を付くように勃起した。

「ああ…いやだ…」
「最後にメスに入れれるんだ！喜べ！」
「ああ…痛いよ！痛い！」
ペニスが男の経験の無いミツエのピンクの肉のヒダ、穴の入り口を無理にかき分け、処女膜を破りながら埋没する。
「あうう…」
頭巾の女は剣を振りかぶり男のペニスの根元に振り降ろした。
「サッ」
「ギャー」
ミツエの肉のヒダの間に赤いペニスの断面が見える。
白い衣装の女がペニスの断面をミツエの膣に押し込んだ。
「アイ！」
ペニスを含んだ肉のヒダは左右から閉じていくと、白い衣装の女がヒダを右から左に針を突き刺した。
「アァ！痛い！痛いよ！」
手早く女は肉のヒダを縫いペニスを加え込んだままにミツエの秘所は糸で縫われ塞がれた。
「ああ…痛い…痛い…」
ガラガラと台車事、ミツエは運ばれ大きな鐘状の土製の容器に顔だけ出したまま固定された。
土製の容器の下は空いていて白い衣装の女が穴に香草や木を入れ火を付けた。
最初はポカポカとしていたが段々と熱くなる。
「あづい…あづい…あづい…」
声は次第に小さくなった。

ミツエの最期2

４４食

「ガラガラガラガラガラ…」

台車に土製の鐘を乗せて白衣の料理人が大食堂に押して来る。

鐘の上から女が頭だけ出して笑っている。

ミツエが短い髪を振りながらあどけない顔で辺りを見渡して笑っている。

「アハハ…あの人、オッパイ丸出し！」

王妃達のテーブル前で台車は止まり、料理人が木槌で土製の鐘を叩いて行く。

「ガッン！ガン！ガン！ガッ！」

「ガラガラ…バラバラバラバラ…」

ミツエが収まっていた土製の器は粉々に砕け散った。

中には串に刺さるミツエが裸で現れた。

太い丸太に股間を食い込ましても痛みも無いのか、ニコニコと笑っている。

台車に刺さるミツエをユックリと大きなまな板に乗せ、丸太を股間から抜く。

ポッカリと赤い穴が股間に開いている。丸太は尻の穴に刺さり、縫い合わされた性器からは湯気が上がっていた。

料理人が縫い合わした糸を切る。

赤いアワビに似たミツエの性器が股間に付いている。

料理人の女が肉切りナイフをユックリとミツエの恥丘、クリトリスの上から恥骨と肉の間にスッと差し込む。

蒸された肉は柔らかく、スッと入る。右の大陰唇の縁に沿って上から下にナイフをユックリと下ろす。

左も同じに縁に沿って切り込む。

人差し指と親指でクリトリスを摘んで手間に倒すとパッタリと股間から外れる。
皿に乗せて運ぶ途中、ミツエの顔の横を通った。
「ミツエ！貝好き！アワビ？欲しい！」
料理人が王妃の顔を見る。
笑いながら
「一口、食わせてやれ！その者の肉じゃ」
料理人がクリトリス辺りをナイフで切り、一口大をミツエの口に運ぶ。
「ありがとう！」
口に含むと笑を浮かべ自分の女性自身を咀嚼し飲み込む。
「コレ、貝じゃ無い！お肉だ！」
幼児返りをして喋る言は幼稚園児だ。
王妃達は笑いながらそのさまをみている。
「それより、ジジさま。霧の勇者、シュナが王妃の命はもう聞かないとか？」
「アヤツの妹、白巫女を我が配下にしていたが太陽神神殿庁から神殿庁付の巫女にすると命が来て神殿庁に渡した」
「邪魔な神殿庁を襲撃しましょう。」
「馬鹿者！信者、神兵、白巫女を相手にして帝国兵だけで勝てぬわ！」
「では…もうヒトの処女は無理ですね…」
「後、四方４国の王子達が王妃に謀反を企てているとお聞きしました！」
「ああ、北に放った間者が北の王子と勇者バム、黒巫女レイナと話していたと。ソコに私が作った魔女ヨーコを襲撃させた。」
「どうなりました？バムに退治されたとか？」
「ヨーコは退治されたがしたのはバムでは無い。銀の登録標のＡ級勇者じゃ。」
「そやつと白巫女がヨーコに攻撃した途端に辺りが真っ白に霧に覆

われ、間者もどのように殺られたか見ておらん。」
「最近、帝国直轄の売春宿に賊が入りヒトのメスばかり連れ去る事とも関連が…」
「無いとも言い切れん。全て霧に紛れてヒトのメス、バスのメスばかりが連れ去られた。」
「抵抗策は？」
「一体、化け物を作る準備をジンバにさせている。今はヒトの世界に行かせている。」
「又、クリアマンのような者を作るのですか？」
「クリアマンより残虐、残酷な奴だ。その為に地下牢のダークエルフ、ガズを使う」
…ヒトの世界ニューヨーク…
「ああ…いつ来てもこの街は良いな。街から黒いオーラが立ち込めている。」
「良いヒトのオスはおるか？」
「ハイ、ジンバさま。あのビルの２０階から真っ黒いオーラが立ち込め私も濡れてしまいます。」
「そうか！ではジル、行くか？」
ジルがビルの屋上から飛び出すと大蝙蝠に変化した。
ジンバの巨体が大蝙蝠に飛び乗ると目的のビルを目指してニューヨークの暗夜を飛ぶ。
「ノー！助けて！アタシは殺しはしない！アタシもギャングに脅され情婦になった」
金髪を振乱し、女が半狂乱で泣き叫ぶ。
情婦は本職はポールダンサーをしている。
部屋には入り口に二人、金髪の情婦のポールの近くに一人、額を撃たれ倒れている。
全裸にされた金髪の女がポール上部にポールを握り太腿をポールに巻きつけぶら下がっている。
「アゥ！」

ポールは誘拐したり拐った敵対勢力の女や男を拷問するのにも使う。
天井からはワイヤーが降り大型魚用の釣り針が付いている。
その釣り針が大きな女の乳房を突き刺している。
少し力を緩めると釣り針に乳首が引っ張られ、千切れそうになる。
「流石にポールダンサーだな。俺も暇では無いんでな」
男は部屋の端の帽子掛けを裸にポールにしがみつく女の横にお聞き
腰の上辺りで帽子掛けの上部を斜めにナイフで切った。
「何？何するの！」
女の尻の肉を割、肉厚の破れ目に尖った先を刺してポールの下に置
くと女の股間から木が下がっているように見える。
手を緩めると膣を通り抜け子宮を突き破り内蔵、心臓を貫く。
ユックリと台所に歩いて行き、緑の瓶を持って女に近づいた。
「手を離せば楽に死ねるぞ」
そう言いながら瓶の中身をポール上部から棒に沿って流した。
「オー！ノー！」
瓶の中身はオイル。
上部から滴り手に付くと掌が滑り力が入らない。
「ああ…」
ユックリと下に下る。吊るしていた乳房が上に引っ張られ乳首が女
の顎近くに来た。
「ブツツ！」
「ウグ！」
掌の力が抜ける、ズルズル…
タラタラと太腿に油が太腿とポールの間に流れる。
ズルズル…ズルン…
「オゴ！」
膣から出ていた血がトロトロからドバドバ…と大量に吹き出した。
「ゴゴ…ゴゴ…ゴゴ」
ズルズルと女の身体が下る。
天井を見ていた女の眼がギョロンと裏返り開けた口から木の尖端が

見えた。
「パチパチパチパチパチパチパチ…」
「誰だ！お前ら！」
ビルの２０階の窓が開き、黒い頭巾の女と太った男が窓辺に座り笑っていた。

４５食

「パチパチパチパチ…」

「☆★◀▽◀▼◁あ…え…お、お前…面白いな！」

大柄な男が黒のフード、黒のスニーカーの男に対してそう言った。

「お前？なんだ？ドコから入って来た？ココはビルの２０階だぞ！」

「おいおい！物騒な物を向けるなよ！」

「それにしても最高の殺し方だな。」

「パン！パン！」

向けていた大型拳銃でジンバを撃った。

「ウゼェ！」

身体を叩くとポロポロと弾が床に落ちた。

フードの男は持っていたナイフを素早く、ジンバの首に当てて挽いた。

「大人しく付いて来そうもないですね。手足を落としますか？」

「待て待て！生け捕りにするから良いんじゃないか！」

「オイ！リー・ジョンソン！少しお前の性器を貸せ！」

「何だ？お前！何故、俺の名前を知っている。ギャングの手先か？殺し屋か？」

「違う！違う！ただ、お前に子作りして欲しいのさ。」

「コレは褒美だ！」

「ゴトン！」

拳大の大きさのダイヤモンドが床に転がった。

…銃も効かねぇ。ナイフも通らねぇ。オマケにアノ、黒の頭巾の女の殺気、殺されるかも知れねぇ…

「分かったよ。お前達に付いて行くよ。何処だ？モーテルか？ホテルか？」

「ハハハハハハハ…違うよ異世界だよ！」
女がマントでリーを覆うと大蝙蝠に変わりリーを連れてビルから飛び降りた。
「おい！死ぬ気はねえぞ！」
落下途中で蝙蝠は時空の狭間に消えた。
…何だ？ここは？牢の中じゃ無いかよ！…
「ホウホウ…リー・ジョンソン。アフリカ系とチャイニーズ系のハーフね。両親は幼少時代にギャングに惨殺。その後、母親の親類に預けられカンフーを習得。その親類もミカジメ料を拒否し殺害。その後、軍隊にね…」
「オスが４０人。メスが２０人ね。メスを虐殺するのは中東で捕まえた女スパイを拷問した時に異常に興奮し、普通にセックスが楽しめ無い。ギャングしか殺さない…」
「普通じゃねえか？ジンバ？」
「ああ？言い過ぎじゃねえか？ロム？姉上のお気に入りだか知らんが…」
「まぁ、セックスして怪物を造って貰えれば文句は無いがね。」
「おい、ダークエルフを連れて来い！」
首に鎖を掛けられたダークエルフが５人、部屋に入れられた。
「いまからコイツラを孕ませろ！こうした方が雰囲気がでるか？」
ロムが呪文を唱えると地下牢が中東の戦場に有った拷問部屋に変わった。
「好きにコイツラ、いたぶって良いぞ！ヒトと違って簡単には死なん。」
ダークエルフの肌は褐色で髪の色は黒や栗色。
目鼻立ちは彫りが深く中東系のエキゾチックな美人が多い。
残酷な性格で無ければ、娼館やメイドに出来るが、同族以外に好意は持たない。寧ろ殺意を持っている。
ダークエルフでも術の才が有る者は暗黒神の下僕になり黒巫女になるが、殆どが盗賊か身体を売り、相手を殺害して金品を奪う。

牢に連れて来られたダークエルフは全員が殺人を犯している。
「耳が尖っているだけで、姿形はゲリラの女やスパイ女と全く同じだ！」
リーは黒人のハーフだが、黒人の女は抱かない。
彼の中には黒人＝母親と言う概念が有る。
殺しにも現れ、黒人系ギャングや女は銃で直に殺すが白人、スパニッシュ、アジアは全て男は直に殺し、女は拷問や残虐な殺し方をする。
残虐に殺しながらセックスをするのが性癖になっている。
「最高じゃねえか…」
エルフの首に付いた鎖を壁の輪に繋げ、後ろ手に縛り上げる。
「何しやがる！下等なヒトが！」
「生きがイイね！ソソるよ。」
足首に刺しているアーミーナイフをエルフのデカイ尻の丸々とした褐色の肌に突き刺した。
「ひぎ！痛え！抜け！」
ダークエルフだけ有って痛みには強い。
リーは突き刺したナイフをグリグリと廻し、尻にもう一つ穴を開けた。
ズボンを降ろすとビン！と黒いペニスが天を突いた。
「ヒェ！何？アイツ、ヒト？」
デカイペニスはハイゴブリンやマビトにもいるが、フニャンとしている。
黒い棍棒が股間から伸びている。
「いくぞ！」
「オイ！ヤメロ！」
傷口にペニスを押しあて、グリグリと押し込んでいく。
「ウグァー！」
「入んねえな？尻が硬すぎか？」
「普通に入れるか？」

「イギギ…テメェ…覚えテロ！」
褐色の割れ目にぱっくり開いた秘所にペニスを押し当てる。
エルフ族はマビト達に比べれば性器は小さい。
「入んねぇじゃねえか…」
ナイフを割れ目に入れザックリと割れ目を切り裂く。
「ガアァー！」
拡げた穴にペニスを突き刺す。
「拡げ過ぎたかな？」
エルフの首を左右の腕で締める。
「ググ…ググ…」
「オ…オオオ…ヒトの女と同じだ…締まる締まる」
「ジンバさま、普通に交尾せずにダークエルフを殺してますが…大丈夫ですか？」
「ジル、あれで良いのさ。もっと黒いオーラを出すようにしないと、地下牢の最凶のダークエルフ、ガズの毒気に殺られるわ！小奴ら、ダークエルフはリーの残虐性を引き出す餌だよ。」
「次は直に子宮だな！」
リーはダークエルフの下腹にナイフを突き刺した。
腹に赤いスジが出来る。
ソレを指で拡げ自分のペニスを子宮の傷口に突き刺した。
「ゴガア！」
「アイツのメスに対する扱いは凄いな。ガズに取り込まれなければ王宮の拷問人にしよう…」
地下牢の中は血塗れでダークエルフの遺骸だけが転がり、一人だけ残る最後のダークエルフはガタガタと震えている。

リーの新しい体

４６食

「何だ？もう終わりか？中途半端に狭いし、拡げたら死ぬし、何だよ！射精も出来ねぇじゃねえか！」

「オイ！ソコの女！お前でも良いぞ！」

「無礼者！黒巫女ロム様に向かって！その性器だけ切り取ってやろうか！」

「辞めておけ！下等なヒトだ。それよりもガズの転送を行う…」

「…地下に横たわる…」

ロムが呪文を唱えると、ダークエルフの遺骸が時空間の狭間から出て来た腕に捕まり全て消え、代わりに靄のようにヒトの型が薄く見え出した。

「…ブーンー…」

細かく振動しながら次第に薄い靄は濃くなり褐色の肌に赤い髪をした彫りの深い、青い目の切れ長の眼にアイシャドウを塗り、古代エジプトのクレオパトラのような女が現れた。

大の字に宙に浮いているが両腕、手首の先は霞がかかっている。

脚は自由に動かせるが足首に鎖が付き、逃げられないようになっている。

「良い女が出て来たじゃねえか…オイ！手足も自由にしろよ！セックス出来ねぇじゃねえか！」

ロムが少し声を荒げた。

「オイ！ヒト！その女の手を自由にすれば直にお前の頭は無くなるぞ！脚も鎖が無かったら太腿で締められて下半身が無くなるぞ！虫のようなヒトが強がるな！

ただ、その女と交尾して射精するだけで良い！」

「オイ！ナイフは？愉しめねぇじゃねえか！」

裸の腰にサバイバルナイフが巻かれた。
「先ずは、この乳首を食いちぎってやる！」
褐色のパンと張った乳房にピンクの乳首がチョコンと乗っている。
黒い顔に赤い唇。歯が白く光り、薄暗闇に蝋燭に照らされ余計に目立つ。
「ガジッッ！」
肉の感じはしない。
ゴム製の玩具を噛んだような硬さだ。
「ワラワの乳首を食いちぎるんじゃ無いのか？」
笑いながらガズがリーを挑発する。
「てめぇ！」
大きな乳房に噛りつくがゴムボールのような感触。
頑丈なリーの歯がガズの肌には跡さえ付けれない。
「チッ！もう入れるぞ！その前に拡げてやる！」
腰のサバイバルナイフを抜きガズの割れ目に差し込むが切れない。
そのまま、全ての刃が膣内に収まり、血も流れない。
「クソ！つまらねぇ！俺の１２インチのペニスを打ち込んで内蔵を潰してやる！」
３０センチオーバーの真っ黒いペニスを褐色の股にパッタリと開いた亀裂に押しあてて突っ込んだ。
普通の女なら膣は裂けてペニスは子宮を押して内臓をお仕上げ、内臓が損傷して気絶するか、心臓を圧迫し殺す事も。
だが、女は笑うだけで叫び声は勿論、喘ぎ声も出さない。
「何だ？何か妾に入れたのか？速く入れろ。」
リーは侮辱され腰をグライドさせて、ペニスを根元まで押し込んだが女は反応しない。
「つまらぬ！コチラからいくぞ…」
急に女が腰を自分で動かし出した。
「オゥ！」
リーのペニスが女の膣内で柔らかな肉の手でしごかれ出した。

次第に膣内が震え出し、リーは射精しそうになったが堪えた。
「ハグッ！」
今度は膣内で亀頭部分をユックリと舐められる。
…口に入れたのか？…
リーの眼の前には切れ長の女の眼が微妙に笑いながらリーを見つめている。
「アァアァアァア…」
リーは自然と声を上げていた…
…駄目だ…溶けそうになる…
「ほれ見ろ！取り込まれ出した。」
リーの体が小さくなり出した。
２メートル有る体は１５０位に小さくなり、身体が蝋燭のように溶け出した。
「ハアアァアァ…」
…このまま…溶けそうだ…
みるみるリーは萎み、最後はガズの膣に吸い込まれた。
「まぁアイツも明日には化け物として再生するだろう。」
ガズの腹は段々と大きくなり始めた。
翌朝、門番らはガズの絶叫で目が醒める。
「何だ！ガズともあろう者が！絶叫など…」
ロムがガズを叱責するが、
「アガガガ…」
ガズの腹が膨らみ風船のように破裂した。
「グエ！」
裂けた腹からは黒い煙が立ち昇る。
ガズは腹が裂け白く眼を反転させ絶命していた。
黒い煙は檻を抜けてロムにまとわりつく。
「…暗黒神の名の…グキッギギ！」
黒い煙から男の腕が伸びてロムの股間に伸びている。
「ボタ…ボタボタボタボタ」

ナイフはロムの股間、膣に突き刺さりグリグリと傷口を拡げて行く。
「ガハ！」
ナイフの先が黒いロムのブラウスを破り胸の下から飛び降りた。
牢番や何人かの黒巫女達が術をかけても煙には効かない。
「何だ！騒々しい」
ジンバとジジが伴を連れて牢に着くとロムと黒巫女達が股間を切り裂かれ息絶えている。
黒い煙がジンバの後のジジに近づいて行く。
「姉上！」
「馬鹿者！うろたえるな！」
「フッ」
掌の煙を黒い煙に向けて吹く。
「イギギ…」
煙が一つに集まり人の形を形成していく。
「痛え！何だコレは！」
人の形はリーになって行く。
首には銀の鎖が巻かれて首に食い込んでいる。
「あ！お前…ガズに取り込まれたんじゃないのか！」
「知らねえよ！気付いたら真っ黒い場所だったんで腹を裂いて出てきたんだよ。」
「そいつ等は身体が鈍ったから練習で殺したんだよ」
「リーよ！妾の為に働け！」
「嫌なら？」
「お前の首の鎖がお前を喰い尽くす。煙になってもその鎖は取れん」
「仕方ねぇなあ！いつ迄、この世界で働けば良い？」
「いまから言う四人を殺せば、元の世界にその体で戻してやる。」
「自在に煙になる体は魅力的だ！分かったよ。で、殺すのは？」
「東西南北に有る国の王達だよ。
お前にはジンバを付ける。
全て殺せば良い。王妃はお前の好きにすれば良い」

「分かった。」
そう言うとリーは煙に変化していった。

西の国王惨殺

47食

「ペチャペチャ…ヌチャ…」

「アァアゥァ…」

豪奢な寝室で男と女が裸で絡み合っている。

女が男のペニスを吸い、舐め回し舌を亀頭に這わす。

「ハアアァ…」

負けじと女の股ぐらに顔を埋め、肉のビラを唇で噛み敏感な豆を吸い、チロチロと割れ目に舌を出し入れする。

部屋の隅には護衛の黒巫女が立っていた。

股間に手を入れ自分の手で肉ビラや肉豆を揉んだり摘んだり自慰にふける。

別室にはバム達が泊まっていた。

バムは西の魔女ありさを退治したあとに西の王子に北の王子の提案を喋っていた。

夜が更けたが何故か胸騒ぎがしてバムは眠れない。

同部屋のレイナは不穏な空気を感じて王宮に自分の分身のドラゴンを放っているので神経を集中させていた。

相変わらずに王子の寝室からは喘ぎ声が聞こえる。

部屋の端の黒巫女は指で陰部をイジる力が少し強まった。

「アァイタッ！」

自分の細い指では無く明らかに芋虫のように太い。

「ハグッ」

真っ黒い手が口を塞ぐ。

「ウグッ…ググ…」

声が出せ無ければ術も助けも呼べない。

「ブチン！」

股間の指が黒巫女の肉の豆を引きちぎる。
「アガッ！」
心臓を一突きされ黒巫女は事切れた。
廊下の衛兵、黒巫女も全員が胸を刺され絶命している。
黒い靄のような煙が西の王子、ゼンに忍び寄る。
靄が第三婦人ヤムの尻を覆う。
真っ黒い霧ではなく煙が漂うようにヤムの若い尻に絡み付く。
ヤムは最近、市中の置屋から王子が連れてきた若い妾だ。
東西の王国は栄え、税収も南北の国とは桁違いに違う。
だから、中央帝国の王妃ジジに反旗など余り気が乗らない。
このまま、王宮で王妃達、妾を抱きたいだけだ。
北の王子のジジが暗殺者を送り込んでくる話も余り信じていない。
若さでパンと張った尻を靄が撫でながら尻の穴、ピンクの秘所に入っていく。
王妃にフェラチオされている王子には異変が気づいていない。
バム、スレイ、レイナが王子の寝室に急いだ。
「ガハッ！」
ペチャペチャ舐めていた、王妃の舌が止まった。
「どうした？王妃、何故、止める？」
「アガガガガガ…」
王子が王妃の顔を見ると眼を見開き、血の涙を流しならが口をパクパクとさせている。
「グッグッグ…」
王妃の尻が大股開きのままに上に持ち上がる。
蝋燭の灯りに、黒い顔が見えてくる。
裸の黒い男の腕が王妃の尻の穴と膣から生えたような状態になっている。
ニタリと笑うと
「バリバリバリバリ…」
尻の穴と膣から王妃の身体が裂けた。

「バチャバチャバチャ！」
「ヒェ…誰か！出会え！であ…」
「ヒュン！」
西の王子の首から血しぶきが上がった。
「バン！」
「コノヤロー！」
スレイが黒い男の身体に斬りつけるが、身体が薄くなり剣にも手応えが無い。
「スレイ！離れろ！」
「シュン！」
空間から出た腕がスレイの首を一瞬、薙いだ時にはスレイの首は体から離れてユックリと落ちた。
その後に体から力が抜けて倒れた。
「クッ！」
「イェイ！」
レイナの鎌がシュンと空を切るが黒い煙は切れない。
「レイナ！部屋から出ろ！結界を張れ！」
「バム！」
「速く出ろ！」
レイナは部屋から出て部屋に結界を張った。
「ロム！頼む！助けてくれ！」
バムの体から黒い霧が上がる。
「ガチン！」
煙と霧が交わると空間に火花が散る。
バムには闘いを見るしか無かった。
「ガアー！」
霧が煙を侵食しだした時、部屋に亀裂が入った。
煙が素早く亀裂から出ていった。
「ロム！追わなくて良い。」
「バム！大丈夫なの？」

スレイが部屋に入った時には霧はバムの体に収まりきった後だった。
「…スレイ…」
「レイナの術でも回復は無理だろ…」
レイナはコクリと頷いた。
「何が有った！」
西の王子の児、第一王妃との間に産まれた若者が部屋に入って来た。
部屋の中は惨殺された黒巫女が二人、身体を裂かれた第三王妃。
首を切られ絶命した、王子。
同じくスレイの遺体が横たわり、廊下には衛兵達の惨殺された遺体が横たっていた。
「何が有った！勇者バム！」
「昨日、謁見した時に話した王妃ジジからの刺客が襲って来ました。」
「ソナタの話は本当だったのか！」
「王妃ジジはラクナ全てを手中にしたいのです。」
「明日には南の叔父上が来る。明日、叔父上とも話す。」
「誰か！王と王妃、あと廊下の衛兵達の遺体を地下に安置しろ！それと周囲の警戒に当たれ。敵を見つけても伝えるだけで良い！」
「ソナタの伴も殺られたのか？」
「ハイ…あ奴はこのラクナの住人では有りません。術も剣も効かない。伝え聞いたクリアマンに似ています。」
「クリアマンは退治したぞ。新たにラクナに現れたのか？」
「王妃ジジがヒトのオスとこの世界のメスとの交尾で出来た新たな化け物かと…」
「ソナタ達も休め。伴の亡骸は丁重にもてなす。」
「バム…」
レイナの発言を止めてバムは一人、部屋に戻った。
翌朝、南の王子ビャクがセンと西の王宮に付いた。
「兄者…酷たらしい…賊は？何人だ？」
「叔父、一人です。」

「何？S級勇者のパーティと黒巫女レイナがいても無理だったのか！レイの言った通りだ。次は北の弟が危ない！バム、兄上の長兄、次期王の護衛を頼む。ワシは北に向かう！」

「セン！直に乗れ！」

グリフォンに乗ったビャクは北に飛び立った。

リーの実力

４８食

「キン！ガキン！カン！」

「クソ！硬えな！」

不意を付かれ右腕は切られたが北の王子イツはＳ級勇者並の実力と氷を扱う術を使える。

真っ白な夜の無い白夜と氷の世界に黒いリーは目立つ。

見えれば簡単には殺られない。

「ドスン！」

地面が揺れ氷が砕けて飛び散る。

「何だ！リー、まだ殺せぬのか！」

ニタニタと笑う、ジンバが立っていた。

「うるせぇ！コイツ、氷を操るとは聞いてねえぞ！」

…この黒い煙男だけでも手強いのにジンバまでか…どちらか一人は倒さねば…

「氷壁！」

先にジンバの四方に氷の壁を作り足止めにしたが、余り保たない。

「ドカ！ドカ！ドカ！」

…煙を凍らす方法…

「ガシャン！」

ジンバに充てていた氷壁が砕けた。

ジンバが剣を抜き王子に襲いかかる。

「ガハァ！」

ジンバの足元に火球が落ち炸裂する。

「なに！」

天空にビャクとセンを乗せた聖獣グリフォンが舞っている。

「兄者！」

「よく凌いだな！」
「水結晶縛！」
逃げよとするリーが煙になった時に粒子の一つ一つが水に覆われた。
「ジユ！先にジンバを倒すぞ！」
「水流下降！」
「ガハ！」
みるみるうちにジンバの脂肪で太った上半身は痩せ、下半身は段々と太り出す。
「ジユ！下半身を凍らせろ！」
「氷！」
バキバキ…
上半身は痩せて下半身だけ太ったジンバの下半身の水分が一瞬で凍った。
「イエイ！」
グリフォンから飛び降りたセンの剣がジンバを頭から真っ二つに切り裂いた。
「氷塊！」
ジンバの遺骸を氷で固めると二本の柱が立った。
「あの煙の男は？」
水で包んだ黒い粒子は跡形も無く消えていた。
「兄者！西のバン兄者は？」
「あの黒い男に殺られたよ。」
「東は？」
「東には我が友、レイが行っている」
「あの氷柱はどうするんだ？」
「あのジジの弟です。地下にジジを倒すまで安置します」
「ジユ。油は水に反発する。あの男、生きておる」
「火球！」
「ゴハァ！」
グリフォンが口から火球を数発、ジンバに放った。

「ジュ～…グゲ！」氷の中から半分のジンバが飛び出し氷の上を転げ廻る。
「ゴバァ！ゴバァ！」
数発、グリフォンが蠢くジンバに火球を放つ。
ジンバは黒い炭になり氷の上に横たわる。
「倒せたのか？」
「わからん。」
「兄者！助かった。」
「兄者！あの黒い男は…」
「ああ、似ている。クリアマンの時にな…挙兵を早めなければ私達が殺られるぞ。」
…王宮大食堂…
「ア…アァァァァ…」
スザンヌは自分が何故、食堂のテーブル上に居て、四肢を固定されているのか分からない。
ブロンドの髪は頭から垂れ下がりテーブルに付いている。
形の良い乳房は釣り鐘型をして重力で鐘のように下り、先にはピンク色の乳首が小さく付いている。
股間の陰毛もブロンド。
オシャレにカットされている。
白人特有のくすんだ割れ目にピンク色の亀裂が濡れてひかる。
ついさっき迄、ブルックリンの街をキャシーと歩いている。
ビルの角を曲がった途端に黒い頭巾の女達に拐われた。
「アア…嫌…噛まないで…」
「ヒィ…ヒギィー！ちぎれる！」
キャシーの悲鳴が頭の後から聞こえる。
「何してるの？」
「アグッ！痛い！そんな所に入れないで！」
尻の穴にソーセージ製造用の管を入れられ、中のミンチを尻の穴に入れられて行く。

「オゴッ！お腹が痛い！」
ミンチには軟骨が混じりゴリゴリとしている。
「アガガガ…」
腹が見る見る膨らんで行く。
「オゴェ！ゴバッ！」
腹がミンチで充満して胃を持ち上げる。
胃の内容物が口から顔の下に置かれた桶に吐き出す。
腹が妊婦のように膨らんだ状態でリーの前に運ばれた。
「貴方？アメリカ人なの？」
「そうさ。」
「ねぇ！アタシを助けて！お礼はする。アタシを抱いても良い！」
「ああ？今から食う肉に助けてと言われてもな？」
「え？」
パカっと股を開き、ピンク色の割れ目に舌で舐めた後、少しベージュがかって窄んだ尻の穴に口を着けた。
「フーッ！」
「オゴゴゴゴゴ…」
スザンヌの口から黒い煙が漏れ出してきた。
鼻や耳からも黒煙が立ち上がる。
「オオオオオオオ…」
腹が萎んで行く。
真っ白い肌が燻製のように薄茶色に変わる。
白い肌にブロンドの髪が目立ったスザンヌの体は薄茶色に黒い髪に変わっている。
薄茶色の腹に銀のフォークを刺し、ナイフで腹を裂くと太く長い腸詰めが出来上がっている。
「ったく！こんな体にされたからビーフステーキが味がしねえじゃねえか！」
スザンヌの腸詰めを切り分け、口に運ぶ。
「美味え！メスの肉ってステーキより美味えじゃねえか！」

「それよりもどうするんだよ。お前の弟、焼かれたぞ！」
「バン！」
大食堂の扉が勢いよく開き、スキンヘッドの筋骨隆々の男が食堂に入って来た。
「よう！姉上！北の王子が氷使いとは聞いていないぞ」
「ジンバ！よく帰ってきた。」
「S級以上の勇者や術者は登録を厳密にしないと…ヤラれると思ったぞ！」
「お前、ジンバか？」
「ああ、リー。逃げれたか？どうだ？脂肪が焼かれて動き易くなたわ！」
手掴みでスザンヌの腹から腸詰めを引きずり出し、かじった。
「ヤッパリ、ヒトの白いのは雑味があるな？ヒトは穀物を喰わせて雑味は取らないと美味くねえぞ。」
「姉上！もう少しリーみたいなヤツを作る必要が有るぞ」
「ジンバに任す。ヒトの世界で適用者を探せ」
ジンバとリーに喰われスザンヌの腹は皮だけになっていった。

４９食

「ギシギギ…ギシギシ…」

天井から下げられた滑車から伸びた荒縄が竹の四方に固定され、竹の先には磔のように若い女が縛られていた。

口に手拭いを咬ませられ、水をかけられた裸体は光り、濡れた髪が顔に張り付き、眼はヌメヌメと銀色に鈍く光る日本刀の妖艶な光を放つ太刀を見つめている。

「おう…押さえい！」

「へイ！」

裸にフンドシの若い男が白髪の男を押さえ付けフンドシを外す。

シワシワの陰茎に黒と白の陰毛が皺になった肩口の桜の入れ墨の皺を際立たせた。

「おい！勃たせろ！」

「へ？私がですか？」

「手でも口でも勃たせろ」

仮にも数時間前までは親分と呼んでいた人物の一物を勃たせる。

困り果てた若いのは転がっていたバイブを初老のヤクザのシワが目立つ尻の穴に突っ込みスイッチを入れた。

「グニャグニャ…」

尻の穴からくぐもったモーター音が聞こえる。

「痛え！こら！はずせ！」

縮んだ陰茎はムクムクと鎌首を上げてきた。

さっきまで小夜とやっている最中で眼の前に磔にされた全裸の小夜がいる。

初老にしてはギンギンに立った。

「ヒュン！」

「パチン！」
「いぎぃー！痛え！テメェ！親に向かって！本家に言ってててめぇも殺す！」
頭を叩き初老のヤクザを黙らせた。
「コッチは本家の幹部に言ってからお前の始末してんだよ！組の上納の着服に他組織にタレコミ。挙げ句に子分の女を豆泥棒だ！」
「組員の総意だよ！オイ、そのチンポを咥えさせろ」
「もぁ…アガア…」
口の中に自分の一物を咥えさせられて頭を振る初老ヤクザの首を目掛けて銀色の太刀が振り落とされる。
「ゴロゴロ…」
短髪に白髪が交じる頭が広い風呂場の床に転がる。
小夜は眼を剝いて、さっきまで自分を舐めていた男の首が転がるのを見ている。
「オイ！うつ伏せに女を倒せ」
大浴場は普段は組員が風呂に使うが、組員の処刑や対立組織の処刑、逃げた女達の処刑やリンチにも使う。
大量の水で血を洗い流せるし床の掃除もしやすい。
だから必然的に天井には滑車や磔等の拷問道具が隠されている。
「ガラガラ…」
滑車が回り小夜の身体が倒れて形の良いプリンとした尻が一段と強調された体制になる。
「アンタ！辞めて！助けて！」
「別に小夜が強引にヤラれたなら仕方がねぇが自分から近づいたって聞いたがなぁ」
「そんな事は俺は気にしねぇ…だがな…」
「シュン…」
小夜のプリンと突き出た尻の山が消えていた。
ジワリと切り口から血が滲み滴る。
遅れて小夜が絶叫を放つ。

「俺の行動がコノヤローに筒抜けじゃねえか！何人、盾になって死んだと思ってんだ！」
「オイ！仰向けにしろ！」
「ガラガラ…」
音を立てて滑車が動き小夜はうつ伏せから起き上がり、後頭部から倒れて行った。
「ああ…嫌…辞めて！何でもする…助けて！」
普段、ジムでトレーニングする体は腹は締まり太腿もスリムで仰向けにされた全裸のからだからはこんもりとしたドテとピンと張った乳房が誇らしげに乳首を尖らせていた。
「お前！ココも舐めさせていたな？」
「ヒュン」
日本刀がドテの陰毛を凪いだ。
「ズルん…」
「ヒギィー切れた！切れた！アタシの切れた！」
もう一度、横に刀を振った。
乳房の周りに赤いスジが走り血が滲む。
「ズルズル…ボト！ボト！」
「アガアァー！オッパイ！オッパイ！イヤ！痛い！」
「うるせぇなあ。」
肉ビラの縁が黒ずんだ小夜の亀裂にゆっくりと日本刀の鈍い銀色の鋼が沈んでゆく。
抵抗も無く、刀を鞘に納めるように小夜の体に沈む。
「ビクッ」
小夜が黙り動かなくなった。
「パチパチパチパチ！」
「▽◀◆♡す、…素晴らしい！それが日本刀か？」
「何だテメェ！どっから入った！」
スキンヘッドに筋骨隆々の男が黒い頭巾の女と立っていた。
頭巾の女が若いヤクザに手をかざすとガクンと膝から崩れ落ちた。

「りゃ！」
「ガキン！」
ジンバが日本刀を手で払う。
「危害は加えない！ただ、子作りをして欲しい。
一緒に来てくれたら礼はする。
その若いのは寝てるだけ」
「この遺体は消してあげるよ。オイ！」
頭巾の女が呪文を唱えると風呂の水が割れて黒い腕が何本も伸びて
小夜、初老ヤクザの以外を割れ目に引き摺り込み、風呂の水が自ら
増えて波を立てて血を洗い流した。
ヤクザはこの世の住人では無い者と闘っても無駄だと悟り、
「分かったよ。何処でするんだ？その女とか？」
褌を外し全裸になった。
「おぅ！ペニスがボコボコね！面白いよ貴方！乾銀次！」
初めて会うのに名前も知っている。
「ココじゃないよ！そして、相手は彼女じゃない！」
いつの間にかスキンヘッドの男に肩を組まれていた。
「お！背中には炎をまとう神か？オイ！」
黒い頭巾の女が風呂に呪文を唱えると風呂の水が無くなり真っ黒い
穴が風呂の底に空いていた。
「ほれ！」
ジンバはヤクザ者、銀次と穴に飛び込み、女が続いた。
「ゴボン…」
どこからとも無く風呂に水が溜まって行く。
気絶させられた若いヤクザが目を覚ますと風呂に一人、残され遺骸
も地溜まりも兄貴分も消えていた。
兄貴分のいた場所には金塊がゴロンと石のように転がっていた。

銀次の変化

５０食

「ヒギィー！」

鈍く光る日本刀の刃先が幼いダークエルフの褐色の少し膨らみかけた乳房を撫でる。

撫でられた跡は赤い筋に成りジンワリと血が滲み出て来る。

背中全部に入れ墨を入れた銀次は大人になりかけのメスにしか興味が無い。

東京では簡単に手に入る。

いたぶり、凌辱後は裏の売春宿に売ったり、東南アジア、某国に売り飛ばした。

気分が昂ぶると切り刻み苦痛に歪む顔と金切り声の悲鳴で絶頂に達した。

褌を破らんばかりに達した怒張を開放し、血塗れで無くダークエルフの股間を開き褐色に栗色の産毛のような陰毛の下の割れ目に当て、腰を沈めたがエルフ族はタダでさえ狭い。

成人になってもガバガバには成らない。

「ヒギィ…さ…さける…」

「ビチビチ…」

無理に拡張され割れ目が限界まで開き赤い血が滲み滴る。

「ブッン！」

膣と肛門の境を引裂き繋がった。

「ぎぇー」

激痛の為に気絶したのかダークエルフの少女は反応しなくなった。

「つまらんの！」

手にした日本刀を少女の産毛の生えた恥骨上に置きスッと少女の腹を切った。

褐色の肌に赤い筋が浮き血が滲む。
「フン！」
銀次は右腕をズブリと少女の腹に突っ込みダークエルフの幼い子宮を掴み、直に自分のペニスに被せてガシガシとオナニーを仕出した。
「アガアー！」
幾らヒトよりも頑丈なダークエルフも腹を裂かれたら生きてはいない。
「オゥ！」
銀次の身体がブルンと震えた。
「オホゥ！真っ黒いオーラが凄く立ち上がりよるわ。今だな。ガズを呼び出せ！」
「ブーン！」
空間が振動して人の影が空間に浮かんでくる。
血塗れで倒れているダークエルフの少女達の部屋に四肢が消えたクレオパトラ似のダークエルフ、ガズが浮かび上がる。
「ジンバさま。ガズは前の出産で腹を裂かれしんだのでは？」
「ダークエルフの最凶の女が腹を裂かれただけで死ぬものか…オイ！銀次！子作りの相手だ！」
「ほぉ～良い女じゃねえか…幼い女も好きだが、熟れた女を嬲るのも悪くねぇ…オイ！この女も切り刻んで構わないのか？」
「あぁ良いさ！お前の刀で好きにすれば良い。」
銀次の右腕には血塗られた太刀が握られている。
「お前は何処まで耐えれるかな？」
プリンと張った大きな乳房に日本刀を置き引いた。
ガズの胸には筋も付かずに…
「アハハハハハ！こそばゆいわ！」
ピンク色のツンと尖った乳首を切り落とそうと乳首を摘み、伸び切った所に刃先を当て引いたが切れない。
「そんな、なまくら刀で妾がきれぬわ！」
銀次は顔を真っ赤にしてガズの股間に刀の刃先を当てて膣に押し込

んだ。
小夜は直に死んだが…
女は笑っている。
ズブズブと日本刀を女は膣に吸い込んだ。
「早く、そのイボマラを入れぬか！」
「ち！俺のイボマラでグチャグチャにしてやる！」
ズルんとガズの割れ目に銀次のイボ付のペニスが入った。
「！なんじゃこの穴は！」
膣壁の肉がペニスにまとわりつき、膣奥から舌のようなヒダが亀頭を舐め回す。
「アァ…溶けそうだ…」
実際、銀次も蝋燭のロウのように溶けていき、身体が萎んでいく。
「あう…」
ドロドロに溶けた銀次はガズの膣に身体ごと吸い込まれた。
「アグッ」
ガズが眉間に皺を寄せるとみるみると下腹部が膨らんでいく。
「あの男も上手く妊娠したようですね。後は生前の記憶を残すか？消しさるか…」
「ジンバさま、まだ化け物を作るのですか？」
「いや、これ以上、作って謀反を化け物達に企てられたら困る。数年前のクリアマンの始末で手こずった」
ジンバもレイ達と共に討伐に向かったがジンバは姉に言われ他の勇者より先に始末する、結局は数人の勇者と黒巫女、剣士が倒したが百人余りの勇者、巫女、剣士達が一人の化け物退治の犠牲になった。
銀次がガズに取り込まれた翌朝、ガズが苦しみだした。
「アグッアグッ…アツイ…アツイ！」
「オイ！産まれるぞ！ジンバさまとジジさまを呼んでこい！」
衛兵達が慌ただしく動き出した。
「アガガガ！」

膨らんだ腹が紅く発熱する。
「…アァ…寒い…」
今度は腹が霜が降りたように白くなり冷気を発する。
「アガッ！アグッ！」
「ブシャ！ブシャー！」
勢いよく産道を通り黒い液体がビシャビシャとガズの股から噴き出す。
「何だ？失敗か？」
ジンバが液体を見てそう答えると…ズルズルと液体は牢屋の隙間をすり抜け、ジンバの隣にいた黒巫女の脚にまとわりつき、脚から太腿、股間へ登りズルズルと肉の亀裂をかき分けて膣に潜り込んだ。
「何？気色悪い！冷却！」
黒巫女が液体を凍らせた。
「アガッ！アツイ！アツイ！」
黒巫女の黒い着衣の下腹部から煙が上がり
「ボン！」と燃えだした。
「人を凍らせたり、失敗だの好き勝手に言うな」
液体が変形して銀次に変わって行く。
「おう…この女は俺を凍らそうとしたからお仕置きで焼いたぞ」
「ほう…炎と冷気か…面白い奴が出来たな。」
ジジがジンバの後から声をかける。
「ホレ！御褒美じゃ」
短刀を銀次に投げた。
「サクッ」
銀次の肩に短刀は刺さった。
「痛えなぁ！このアマ！」
銀次は短刀を抜こうとするが抜けない。
液体に変わると短刀も液体化して銀次に混ざった。
「イテテ！何しやがった！」
「お前には首輪を着けなければ勝手にいなくなるだろう！その首輪

さ！私の念でその短刀はお前の心臓に刺さる。液体になっても逃れる事は出来ない。」

「一つ、仕事をやる。東の王国の国王を暗殺しろ。東の国にはジンバが連れていく。東の国を制圧したらお前にやろう。財宝も女も全てがお前の物だ！」

「ジンバ！連れていけ！」

同時期に東の国にはレイとレレイが訪れていた。

銀次対レイ　囚われたトモコ

５１食

東の国は一年中、温暖で夜も寝苦しく無く裸で寝る人が多い。
トモコは一年前に異界に拐われた。
拐ったのはスキンヘッドの男と黒い頭巾の女達。
トモコは有る女学生の担任だった。
生徒達は黒い頭巾の女達に連れ去られ、トモコは奴隷商に売られ東の国まで運ばれた。
骨組みだけの馬車の荷台から外を見ている姿を東の王に見染められて王の専属娼婦になった。
王宮内に専属の部屋も与えられ、王も威張らずに寛容で優しく接してくれた。
生徒達は気になるのが自分のチカラだけでは異界ではどうする事も出来ない。
「ガチャッ」
王が寝室に入って来た。
王は不安や心配事が有ると王妃の所に行くよりトモコの元に来て愚痴を言う。
王妃は帝国王妃ジジの縁で来たマビトで冷たい視線や家臣に対する態度が王には余り好きにはなれない。
裸になり、真っ裸のトモコの横に寝そべり背中にペタリと肌を付けた。
「昼間に客人が来ていましたが…」
「ああ。弟王の友人だ。西の兄者が王妃ジジの配下に暗殺されたと言っておる。早馬が来て本当の事だった。北、西、南の兵はすぐにでも中央帝国の王妃ジジを討伐するらしい。私も誘われたが、我は闘いは嫌いじゃ。」

トモコのふくよかな胸を触りながら王は愚痴を言った。
天井から下がっているシャンデリアの隙間から少し液体が垂れ出しているのも気付かず二人で抱き合っている。
「レレイ？気づいたか？禍々しい気がする。」
ベッドから飛び出し、剣を取りレイは王の寝室に走った。
「私も！」
裸に薄いガウンを着ただけでレレイもレイの後を追う。
天井から垂れた液体がトモコの首にタラタラと巻付きユックリと床に落ちる。
「ぐぇ！く、苦しい！」
液体が膨らみ男の腕になる。
「何じゃ！おぬしは！」
首に巻いた腕から人の形に変わる。
「御免！」
「オオ！レイ！良いところに来てくれた！コヤツを成敗してくれ！」
「成敗？この女がどうなっても良いのか？」
首に巻いた腕をスッと下に下ろしトモコの胸を鷲掴みにした。
「アッ！」
もう片方の腕を股間に伸ばしトモコの肉ビラから膣に指を入れた。
「レイ！」
レレイが遅れて入って来た。
「ほう…そちらの半裸のねえちゃんもソソられるな！」
「☆★◇…」
男の肩に火が着く。
「お？不思議な技を使うね？」
炎に息を吐くと白い冷気が炎を消し去った。
…コイツの術は冷気か？…
「俺もなこんな技が使えるのさ」
「あ！アッアツイ！アツイ！」
トモコの股間から煙がでて来る。

「アギャー！焼ける！アソコが焼ける！」
トモコが泣き叫ぶと同時に陰毛が燃え上がる。
「爆霧！」
「布縛！」
霧が部屋に立ち込めると同時にレレイが男に羽織っていたガウンを投げた。ガウンは飛びながらバラバラに糸が解れ投網状になりトモコと男に巻き付いた。
「パキン！キン！」
レイの霧が晴れて来た。
普通は爆霧を部屋全体に放てば窓を開けない限りは1時間は霧は晴ない。
その霧が薄くなり小さな氷の粒として落ちる。
裸の男が真っ白く凍ったトモコを抱き肌からは白い冷気を放っている。
「レレイ！王に転移魔法を掛けろ！」
「太陽神の…」
男が氷の短刀を投げると同時に王は薄くなり消えた。
…レレイ！俺が暗霧を出す。直に逃げるぞ！コイツは異界にはいない存在だ！…
「暗黒霧！」
部屋中が漆黒に包まれた。銀次の目にも何も見えない。
「レレイ！王宮中の巫女に念で寝室に結界を張るように伝えろ。時間稼ぎにしか成らないが…早く」
王宮中の巫女がトモコの寝室に結界を何重にも結界を張った。
「消えろ！」
スキンヘッドのジンバが部屋に入って来た。
手で霧を払うと漆黒の霧は晴れていく。
「今日は仕方ない。撤収だ。これ以上、結界を張られたら俺でも逃げれなくなる。後、レイがいたのは誤算だった。」
「オイ！オッサンよ。この女は連れて帰ることは出来ないのか？」

「凍ったヒトおか？」
「急速冷凍したし。お前達なら蘇生出来るだろ？この乳がたまらん。」
「分かったよ！」
「移転陣！」
床に魔法陣が浮き上がり、ジンバ、銀次と銀次に抱かれたトモコが魔法陣に入り消えた。
…中央帝国宮殿内監禁部屋…
「う…ううん…」
「サクラさん！トモコ先生が気付いたわ。」
トモコの目の前には王宮地下で選別され連れて行かれた生徒の一人、サクラがいた。
「先生！」
「あ！アヤさんも無事だったのね。」
「他の子達は？」
「解らないです。一週間に一人ずつ連れて行かれ帰って来ません。」
「あの子達は？」
「あちらは東京の学校の生徒でアチラが九州の学校の生徒です。」
「彼女達も選別されてココに連れて来られました。」
「貴女達は、いつ連れて来られたの？」
「2ヶ月前位に…」
「先生は？」
「担任は斬られ、副担任は拷問で…」
…まだ、アタシは東の王に拾われて良かったみたい…
「先生！胸の痣は？」
部屋にいた生徒達に別れてからの事も連れ去られた事も話をした。
「この異世界にも、女性を拐う事に反対する勢力はあるから…助かるから…」
女生徒達は抱き合い、励まし合った。
…王宮大食堂…

「アギャー！おま…燃える！」
銀次が金髪にヘソピアスをしたギャルの膣に指を入れて掻き回している。
指は焼き火箸みたいな高温で膣壁から子宮迄を触りながら焼いて行っている。
金髪ギャルは涙と鼻水、ヨダレ等垂れ流しメイクは崩れボロボロの顔で痛がっている。
銀次が指を亀裂から抜くと亀裂の色が肉を焼いたような茶色に変色している。
「ザクッ」
大陰唇にフォークを刺し、肉のビラビラをナイフで切り口に運ぶ。
だらりと力が抜けたギャルは自分の性器が喰われている事に気づかない。
「やっと肉らしい肉の味じゃ！こげんな体になると牛や豚は食えんのか？」
「ソレよりもあげな、霧やら魔術やら使える奴がいるなら先に言わんか！」
「姉上！あのクリアマン退治にいた、レイが東の王宮にいました。」
「やはり、霧を扱う奴はやつしかおらぬな。」
「もう一人のリーは何をしてぉる。」
「奴は中東で捕まえた女ゲリラを探して惨殺、拷問にふけってます。弱すぎてつまらんとも…」
「全軍に触れを出せ！西の代理王子はまだ幼い、全軍で侵攻する。時期は来週！」
王妃ジジの号令で王宮内は戦闘準備に入った。

子宮玉確保。ミレイの拷問癖

５２食

レイは夜空を見ながら考えていた。

子宮玉を食べてランクを上げるべきか…。

昔からの信条で言葉を発する物は食べなかった。

何十年も修行しても上がらないランクが一つの子宮玉で直に上がる。

他の勇者や術者らは食す者が多い。

今回の敵、温度を自在に操る奴は異世界にはいなかった。

ＳＳランクの自分でも勝てるか解らない。

「何を考えているの？」

「ん？あの怪物の始末さ。

なぁ、レレイ。俺がマビト以外になっても変わらず接してくれるか？」

「食べるの？貴種の子宮玉？」

「ふぅ…今のレベルでは温度を操る奴は倒せない。奴がいるだけで犠牲者が何人出るか…。」

「じゃ…行くわ！護衛は頼むレレイ。」

…言葉を発する物は食さないという戒めを破らないと倒せない敵…

レレイはレイを止めなかった。

…西の王宮内バム宿営地…

布地に包まれたスレイの亡骸にガイは祈りを捧げていた。

バムはマイに残酷な言葉を使った。

「マイ！お前の子宮玉を貰う。一年で元の世界に返す約束は無しだ！」

「え！子宮玉を抜かれたらアタシ…消えて無くなるんじゃ…」

「いや、消えて無くならないように真鉱石を入れて、意識有る魔女に変えてパーティには置く。王妃ジジに負けると全員がスレイのよ

うに殺されマイは喰われる。」
黒い影が床を這ってレイナの影に入る。
「バム！大変だわ。来週、中央帝国が総出で西のこの国に侵攻するわ。」
「本当か？すぐに東、西、北、南の王宮に使い魔を出して知らせてくれ。動き出しが早いな…やはりアノ化け物を作って勝てる気でいる。西の王はまだ幼い、この気に西から侵攻か…」
「レイナ！マイの子宮玉を取り出してくれるか！」
「ガイはフリーの勇者を集ってくれ！」
「俺は…スレイと二人きりにして欲しい…」
部屋に二人きりになるとバムの体から黒い霧が吹き出しスレイの身体を包んだ。
スレイの体は跡形も無く消えた。
レイナの部屋に連れて行かれたマイは裸にされて四つん這いになっている。
「マイ…こんな事になったけど、運命と諦めて。バムの専属魔女なら退治される事も無いし、ここでは生きていける。」
…人間では無くなるのね…
「いくわよ！」
レイナがマイの股間に手を当て呪文を唱えた。
「あ…アア…子宮が蠢く…気持ち悪い…」
「がは！げは！」
下腹部がボコボコと蠢く。
段々と下腹部の蠢く物が股間へ移る。
「アガッ…ひろがる！痛い！」
マイの褐色色の肉のビラビラが開き赤いヌメりを帯びた膣口が開くと薄いピンク色の子宮が顔を出して来た。
「く…苦しい…割けちゃう！」
「ゴボン！」
瓢箪型のピンク色の肉の塊が両脇に肉の紐を付け先端に黄色い袋を

付けた状態で飛び出した。
直にレイナが魔鉱石を子宮の有った空間まで押し込む。
「アガッアー」
レイナの肘までマイの股間が加え込む。
「ハァハァ…」
取り出した子宮に呪文をかけて丸い赤い玉にレイナは変えた。
「どう？気分は？ヒトと変わらないでしょ？魔法は徐々に教えるわ。」
そう言ってレイナは子宮玉を手に部屋を出た。
…これで異世界の住人かぁ…
自然に涙を流していた。

（関西某所）
「アズイ！アァアズイ！」
肉の焦げる匂いが部屋に充満していた。
関西の焼肉屋が集まる地帯の雑居ビルの一室。
下にはカラオケルームが入る。ビル横には電車が走りどんな絶叫、悲鳴も聞こえない。
切れ長の眼にアイシャドウを塗ったＫＰＯＰアイドルのような美麗な顔立ちに金髪姿の若い女性が手にハンダゴテを持ち同性の性器に近付けて笑いながら若い女性の尿道を焼いている。
「ミレイ！やり過ぎだよ！」
外国語で別の女が嗜める。
「ストローかゴムの管を入れてれば排尿は出来るよ！マニアの客にはマ●コと尻があれば喜ぶんだ。飽きたら千円に売れば良い！」
ミレイの親は外国に拠点を置く暴力組織のボスで雑居ビル一帯は実質、ミレイが仕切っていた。
尿道を焼かれた女は小さい穴から白煙を上げている。
「ストロー…ソコのコンビニの奴が有るだろ？早く入れないと肉が引っ付くんだよ！」

先端が蛇腹になったコンビニのストローを焼けただれた尿道に入れる。
「イギーギギ…」
「ほーら、先が蛇腹だから前後左右に動し立ちションも出来るよ！」
「次はヨン！連れて来な！」
異国で勝手気ままに育ち、美人の娘達を見つけては友達になろうと近付き薬漬けにして客を取らせた。
逃げた奴は拷問、リンチで殺した人数も十数人はいる。解体する機械は潰れた店にいくらでも有る。
今日はヨンで3人目だ。
ビルの外がまだ夕暮れ前だと言うのに暗くなる。
「助けて！お金は返す！」
「ホストに狂うから店から金を奪うんだよ！ホストに行けないようにマ●コ、縫い合わせてやる。パンツズラして脚を押えろ！」
3人掛かりでヨンを押さえつけて一人がズボンとパンツを一気にズリおろした。
剛毛が恥丘にモッサリと生え肉のビラも亀裂も見えない。
「面倒臭いなオマエ！バーナー持って来て」
居合わせる坊主頭の男がバーナーを手渡す。
「オマエ、１０万でコイツ、買う？」
「え？１０万っすか？一万の分割払いじゃ駄目っすか？じゃ要らないっす。病気、持ってそうだし」
黒髪ロングの女がスッとウォッカの瓶を渡した。
「気が利くね？お前は」
蓋を開けウォッカをドバドバと剛毛にかけて、缶のバーナーに火を付けた。
「ボッ！ボボボボ…シュー」
真っ赤な炎から青い炎に変わる。
剛毛のチリチリの陰毛に這わせると
「ボン！」

「アガッアー！アガッアアアア！」
一気に剛毛が燃え上がりバタバタと暴れるが両手足は押さえつけられ尻を左右に揺さぶりもがく。
「オイ！針にテグスを通して持って来い！」
畳針より小型な針に透明のテグスが通った針が手渡される。褐色に縁が黒紫の肉のビラビラを引っ張り右から左に針を刺す。
「グッ…ググ…」
陰毛を焼かれた痛さで針を刺された感覚が余りヨンには伝わっていない。
ミレイにとって苦痛を伴わない拷問は無いに等しい。
「やっぱ、縫うの無し。よく切れる肉切りハサミ持って来て！肉のビラと豆を全て切り取るから！」
「ああ…嫌！いや！」
「痛がれよ！テメェ！」
ヨンの頬を数発なぐる。
「ミレイさん。」
「オウ！」
数人の男達は前屈みになって見ている。
逆に女達の方が冷めた目で拷問を見ている。
女達はミレイの組織の幹部で全員が人を殺めている。
銀色のハサミが恥骨下の亀裂上部にある肉芽を挟んだ。
「あわわ…やめて…ミレイさん」
「ジョギッ」
「ギヤーイダイ！イダイ！」
「喧しいな！口を押えろ！」
男がヨンの口を塞ぐと
「ジョギッジョギッジョギッ…」
肉切のハサミで綺麗に肉ビラを切り落とした。
股間からは真っ赤な血が滴り落ち、ヨンは気絶している。
「次は穴を焼くぞ」

「やる事がエグいなお前達！」
ヘヤの片隅に顔を布で隠したレイが立っていた。

子宮玉狩り。

５３食

「な！何だお前！」

男達は急に現れたのかレイに幽霊とでも遭遇したように驚く。

女達の方が度胸がある。

黒髪の少女が投げナイフをレイに投げる。

「ガイン！」

手にはめた鉄製の小手で叩き落とす。

「いきなり酷いな。僕に気にせずにその子を痛ぶりなよ！次は焼くんだろ？」

顔に巻いた布をレイが外す。幼い顔が見える。

男達は急に強気になり声を荒げる。

「ガキが何処から入った！」

「殺すぞ！」

レイが手を叩く

「侵眠！」

「バタバタ…」

男達は膝から崩れ落ち、イビキをかきながら寝ている。

「何を寝てんだよ！」

ショートボブに紫と金に染めた少女が男達を足蹴にするが起きない。

「ほぅ…紫が３人、黒髪が６人。お！金髪は１０人か！殺したね！」

「あれ？ソコの股から血を流しているのも１人かぁ…でも傷物だからいらないや。」

ミレイは驚いていた。今まで殺した人数が合っている。

他の少女達も同じだ…。

３人の少女達が手に凶器を持ってレイに襲いかかる。

「暗霧！」

少女達の眼の前が真っ暗になる。
「転異！」
少女達は暗闇で上下左右の感覚が無くなり波に飲まれたように感覚が麻痺し気絶した。
「ギチギチギチギチ…」
縄の軋む音が部屋に木霊する。
「ううん…あ…あ、痛い！」
天井から両乳房の根元と両手を縛られミレイは吊るされている。
ショートボブのヨンも同じように吊るされている。
ヨンは仲間内でも爆乳だけ有って根元で縛られた乳房が伸びロケットのように天井に乳首を向け紅くなった乳房に青い血管が浮き上がっている。
黒い長髪の雪がいない。
「オイ！ババア！雪を何処にやった！あと、あのガキ何処だ！」
「おいおい！餓鬼って失礼だな。お前達より年上だぞ」
「雪は何処だ！手を出すなよ！」
「随分とあの娘には優しいんだな？」
「アイツは男アレルギーなんだ！」
「それで処女か？」
「お前！見たのか！」
「シュン！パシッ！」
「アグッ」
「喧しい女だね！少しは黙りなよ！見たのはアタシだよ」
真っ白な女性が吊るされたミレイを見上げる。
白い髪に更に白い肌。
長いまつ毛に緑色の眼。
白い肌に赤いルージュが映えて真っ赤な唇をしている。
同性から見ても惚れ惚れする女だ。
…この女なら幾らでも高値で売れる…
「はっ？アタシを売るって？凄いねアンタ！一番、痛く子宮を引き

抜いてあげるよ！」
「アンタは１０人、殺したから一人の体重が４０位で４００キロだね。」
「じゃあ、付けるよ。」
「ズン！」
内臓が下に引っ張られる。
「い…痛い！重い…内臓が引っ張られる！」
「自分の股を見なよ。」
股間から糸が出てその先に小さな文銅が付いている。
糸は肉の亀裂の奥、子宮に巻き付いたような感じで子宮自体を下に引っ張る。
「先に髪の毛が派手な娘を引き抜いて見せようかな?何キロまで持つかな?３　人なら１２０キロか…
先にタプンタプンな乳房に付けようかな?」
ヨンの乳房に透明な蜘蛛の糸のような糸が巻き付いている。
「ホイ！」
糸の先に４０キロの小さな重りをつける。
白髪の女は指先で摘んでいる。
…指先で持てるなら４０キロはないだろ?…
小さな重りを糸の先に付ける。
「グン…」
「ハグッ！ち…千切れる！」
小さな重りで乳房が千切れるほど引っ張られ伸びる。
「ビチビチ…ビチ…」
「ギ…ギレル…」
「ブッン…ボタッ！」
「ギャー！千切れた！アタシの胸が千切れた！」
「ははは！アンタが殺した女の体重分の重さがこの重りには有るのさ！も一つ！」
「ヒギィ…ギ…ギ…」

「ブツン…」
「アガガガガガ！」
「ボタボタ…ボタボタ…」
「次は子宮、行くね。焦らす？一気にいく？」
「ほい？」
「ブチブチブチブチ…ブツン」
「一気に行ってあげたよ。感謝しなさい。」
両乳房跡と股から血を噴き出し泡を吹いて絶命している。
「ガチガチガチガチ…」
「あら？震えているの？貴女は重りで行く？アタシが取り出してあげても良いわよ。どちらにしても死ぬけどね。貴女が貴種なら生き残る事もあるわ。」
「どっち？アタシ？重り？」
「アタシ？わかったわ。」
「いくわよ！」
ミレイの体液と愛液、血が混じった股から垂れる液体を手に塗りたくり、ミレイの肉のビラと亀裂を手の先で音が出るまでこねくりまわして一気に肘関節まで入れた。
「ズボ！」
「アウ！」
白い指先がミレイの子宮口を探り、指を付き入れ人差し指が入った所で鍵状に曲げて、引き抜く。
「ズルズルズル…」
「ゴバッ！」
ピンクの肉の塊が引き摺り出て来る。
「普通のヒトなら消えるけど…どうだろ？」
ミレイの身体が透明に透けて崩れ去った。
「さて…黒髪の女だね。」
黒巫女ジュバはマビトから黒巫女になった珍しいタイプだ。
普通の黒巫女はダークエルフかエルフの最初から術が使える者が成

るがジュバはマビトで在りながら念のような力を持っていた。
普通、白巫女を目指すが生まれ付きのサディスティトで女をいたぶる目的の為に黒巫女になった。
「さて…どう子宮玉を抜こうか…珍しくレイの依頼だからね。」
横たわった雪の左右の脚を膝立ちにして左右に開くと薄い陰毛とキレイすぎるピンクの割れ目にピンクの肉ビラ。余りに綺麗すぎる。
両手で亀裂を開き覗くと紅ピンクの膣壁にピンク色のドーナツ型の膜が見える。
「あら?珍しく処女じゃない。抜かずにレイに言わないと…貴重だわ。」
黒いドレスのポケットから黒い蛇を出し床に放った。
レイは星空を見ていた。
本当は戦い等は好きでは無い。
ヒトの子宮玉を食したくも無い。
だが、ランクを上げなければ殺られる。
自分達が殺られると、帝国はジジの物となり、異世界の罪を侵していない者まで連れ去られる。
ラクナの秩序の為に倒さないといけない。
「レイ!来てよ…」
足元の蛇がジュバの声を発した。
「ジュバ!何かあったか?」
「レイ!この子、処女よ!」
「へえ!珍しいな?ヒトを6人も殺めて処女は珍しい。」
生まれ付きのシリアルキラーのような少女や幼女はいるが雪は二十歳は超えている。
雪から湧き出す黒いオーラに目を凝らした。
「最初は15…義父に犯されそうになり殺害。怒り狂った自分の母親が包丁で殺そうとして誤って殺害。この子の殺人は全て自分を護るためか…ジュバ!この子の子宮玉は抜くのは待ってくれ」
「相変わらず優しいね、レイは!」

「その優しさが無ければ最凶な勇者になるのにね」
ジュバがニコリと微笑んだ。

ガズの開放と銀次の最後

５３食

「ジュバ！その子、回復魔法をかけて回復用の強化肉にしてくれ。西の国の戦に連れて行く。」

「あれだけ嫌がった、言葉を発する動物を喰うのかい？」

「ああ…今の実力ではジジの作った化け物は倒せない。」

「その事なんだがな…レイ、産み出しているダークエルフを解放すればどうじゃ…自分の産んだ子の弱点も解るぞ。」

「ジュバ！化け物を産み出しているメスが解るのか？」

「ああ…一部のダークエルフしか知らぬがエルフの女王のガズが産んでいるのさ…

帝国国王が捕獲し地下牢にある時空の狭間に閉じ込めている。」

「ジュバ！助かった。仲間の勇者を分けて西に向かわす戦力と王宮に忍び込む戦力に分ける。」

レイは懐から使い魔を出し、ビャクに王宮の方を頼む事にした。

ビャクは南の王で有りながら修行を積みＳＳ級勇者に迄なった。

数年前のクリアマン王族暗殺事件後は自分の王国の事だけを考えたが、西の兄者が暗殺され甥が代理をしている。

その甥まで殺そうとジジが侵攻する。

ビャクの怒りは頂点に達していた。

ソコに、レイからの使い魔が届く。

確かに化け物を産むダークエルフがジジの物なら何回も暗殺されかける。

使い魔が白い下着をセンに渡す。

ラクナは下着を付ける文化は無い。

「セン！嫌でも履いていろ。相手に煙の奴がいる。体に入り中から攻撃する厄介な奴だ。そのパンツには防御呪文がかけられている。」

「なんか…ゴワゴワするわ。あたし達は履かなくても大丈夫でしょ？」

「いや！履いた方が良い。西の王宮の警備の黒巫女達は殆どが膣や肛門から攻撃されて死んでいた。煙幕を張られ擬態して襲われたら防ぎようが無い。男達も履く。」

「私達は王宮に忍び込んでダークエルフの解放でしょ？」

「敵の化け物が温度を変化させられる奴なら対応は出来るが、どちらのタイプか解らない。」

「仕方ないわね。」

「後、黒巫女エルムとジャックが合流する。」

「え！あの狂乱のエルムがつくの？」

「レイがジャックとエルムを説き伏せてくれた。」

「黒巫女エルムなら時空の裂け目に煙の男を閉じ込める事が出来るわね。」

「明日、中央帝国から軍が出る。王宮付きの勇者ガルムも遠征に出る。奴がいないだけでも楽だ。」

「明日、早朝に聖獣に乗り、空から王宮に降りる。ジャックとエルムは暗闇に紛れ今夜には潜入している。」

…王宮中庭深夜…

深夜まで王宮内部はガチャガチャと鎧や剣、盾を動かす音が聞こえている。

松明の炎が揺れて中庭の守備兵の銀色の鎧をオレンジ色に照らす。

東塔から地下牢に行く隠し出入り口が有る。

代々の王子達は場所を教えられていた。

帝国国王から王子にしか教えられない。王妃ジジは知らない。

炎に揺られる守備兵の影が塔に向かって不自然に伸びる。

…本当に守備兵も少なく、結界も簡単な物だ…

安易にジャックは塔の入り口から塔に入った。

体は影に全て沈めている。

夜の活動を得意としているジャックにしか出来ない術だ。

塔の中は蝋燭が数本、等間隔に置かれ全体的に暗い。
地下最深部の地下牢に敵に遭わずに着いた。
守備兵と黒巫女が数人、ダークエルフガズの牢屋の前にいるだけだ。
先に黒巫女を始末する。
ジャックは黒巫女の影に移動して黒巫女の影の首を捻る。
「ゴギ！」
倒れる時もゆっくりと倒れるように影で補助する。
ゆっくりと黒巫女は座っていく。
二人の黒巫女を始末し、兵士は術で深い眠りに落とした。
…コレはエルムしか無理か…
時空牢を見ながらジャックは呟いた。
影からスッとジャックが出て来る。
ポケットに手を差し入れ一羽のコウモリを取り出すとコウモリは飛び出し、黒巫女エルムに変わった。
「久々に見たわ時空牢。」
「エルム！どうにか出来るか？」
「時空からガズを出すまでは出来るわ。その後の手足を外すのに時間がかかるわね。」
「とりあえず、ガズを出してくれ！」
エルムが牢屋中央に向かって呪文を唱える。
「ブーン…ぶぶぶ…ジジジ…」
ノイズのような影が人の形になり段々と人型に変わる。
完全に人型に成っても手足の先は消えている。
「ひさしいの…エルム！」
「ハハ！女王ガズさま…」
「そちらのオスはお前の伴侶か？」
「ジャック！跪いて！」
ジャックが座ると直ぐに遠くで声が聞こえた。
「地下特別牢に賊だ！ジジさま！ジンバさまを呼べ！」
「ジャックとやら妾の両手、両足をその剣で切れ！」

「腕に自身が有るソナタ達でもジジら3人の相手は無謀じゃ」
「ジャック！女王の命令よ切って！」
「ち！エィ！オリャ！」
「バス！ズシャ！」
ジャックがガズの四肢を切った。
ガズは落下せずに空に浮いている。
「オマエはジャック！」
「よぅ！ジンバ！随分と痩せたな！」
「ヌググ…エルム！」
ジンバの後でジジが悔しそうに呟く。
「ひさしいの…ジジよ…」
黒い頭巾のダークエルフの女王ガズが牢屋から抜け出しエルムの後ろに立っている。
「ヒ！ジンバ！そいつには敵わぬ！逃げるのじゃ！」
「情けないね！俺がもう一回、孕ませてやるよ！」
温度を操る男、銀次がガズに抱きついた。
「よせ！」
「ジンバ！その男では無理じゃ逃げるぞ！」
「下等なヒトの分際で？妾を抱くと？」
銀次の身体が真っ赤に高温になる。
「へへ！焼け死ぬぞ！」
「笑わすなヒト！」
「ボン！」
銀次の赤い身体が火を吹いた。
「アァ…アツイ…トメラレネエ…アガ…アアゥ…」
真っ赤に火を吹きながら銀次の身体が炭の様に変化していく。
「ガラガラガラガラ…」
銀次は木炭のように崩れ落ちた。

中央帝国の最後と新章地球篇

55食

「敵襲！夜襲だ！」

「何処の軍団だ！西か？」

「嫌！北の軍！東も合流している！」

ジャックがダークエルフの女王ガズを救けると同時に東西南北の軍団が一斉に中央帝国王宮に襲いかかった。

「帝国国王の宮殿で有るぞ！」

勇者ガルムが大声を上げるが各軍団の兵たちは手を止めない。

特に若い代理王子を先頭に奮闘する。

「ガルムよ！オマエは王に付いているのか？王妃ジジに付いているのか？」

南の王ビャクがガルムに大声で訪ねた。

「私は王直属の勇者なり！」

「我が父王は生きているのか？」

ガルムは一年以上、王に謁見していない。

「我達と王妃ジジのどちらに付く！答えよ！そなたの任は王の警護ぞ！」

ガルムは長い間、王に合わせて貰えない。

モヤモヤした王は崩御したのではという疑問が上がり…

「帝国国王軍よ！戦はやめい！王妃ジジ、勇者ジンバを拘束しろ！」

全兵士が剣を納め、王妃ジジの探索に廻った。

第2王妃など妾達は直に拘束出来たが黒巫女の一部は抵抗を続ける。

「全黒巫女に次ぐ！暗黒神神殿庁よりのお告げだ！ジジは神殿庁より破門！黒巫女の長に非ず！」

暗黒神神殿庁より来た巫女が大声を上げ、抵抗する黒巫女に抵抗を辞めるように告げた。

「どうするよ！姉貴！」
「ジンバ！奴らに捕まれば処刑されるだけじゃ！異界の門を通り異界に逃げるぞ！」
「異界に逃げてどうする？」「リーのような化け物をアタシが作る！」
「異界で化け物軍団を作り再びラクナに侵攻する。」
「私は暗黒神を破門になった！セックスしても罰は下らん！早く門に移動するぞ！」
「リー、お前も早く来い！」
王宮内の戦闘は投降者が出て戦闘は収まっていた。
「ジジを探せ！」
兵たちがジジを探す。
王宮の各所に隠し魔法陣があり他所に移動できる。
ジジは伴の黒巫女二人、ジンバ、ジンバの黒巫女ジル。リーを伴い異界の門に移動した。
門を警固していた勇者はリーの力で全て倒し異界の元王妃とジンバ達は異界、地球に門を通り移動した。
移動時に門の一部を破壊し直に追ってが来ないように異界に逃げた。
王宮内は静けさを取り戻し、王宮内に監禁された、連れ去られた学生達も解放された。
「ビャク！ジジが異界の門から逃げた！門は破壊され修復には数カ月はかかる！」
ジャックがそう伝えにビャクに言い寄った。
…異界の門の先は地球。地球には食糧のヒト、そしてジジはダークエルフのハーフ。最悪、化け物を作る材料には事欠かない…
「ビャク！王の子よ！妾を捕縛したのもソナタ達、解放したのもソナタ達。遺恨は不問に致す。其れとコレをソナタに渡す。ダークエルフの血が流れる者を指すとその者は消滅する破滅のクサビじゃ！後はソナタ達に任す、我はダークエルフの里に帰る。」
「女王さま、ダークエルフが産むヒトとエルフの血が混じった者を

退治するには…」

「純血の煙になる男は私から産まれた純血。奴は時空の狭間に閉じ込めるしかない。後のダークエルフが産んだ者は紛い者。異世界では技は使えて十分ほどよ。ヒトに戻れば倒せる」

そう言うとダークエルフの女王ガズは霧のように消えた。

新章　地球篇　第一食

「アガガガ…」

中央アジアに有る砂漠のオアシスにゲリラ組織黒い頭巾のアジトは有る。

元はアラブの金持ちの別荘だったが今はゲリラに徴収されている。

黒い布で顔を隠した女が太った男を側に置き、眼の前の女の苦痛に歪む顔を笑いながら見ている。

女は敵対するゲリラの部隊長。

自分の身体を武器に、黒い頭巾の幹部達をベッドで暗殺していた。

「アガ…ガガ…アゥ…」

ハンドカッターの先にディルドを付けて女の膣をグチャグチャと捏ねていた。

「早く良いなよ！お前達のアジトを！」

元黒巫女ザンマが浅黒い細腕に大きな電動カッターを持ちペニス型の先で女の顔を突く。

「ザンマ！その女、喋る気は無いわ。望み通りにバラバラにしてあげなさい。肉片はプールのペットに…嫌、アソコを切った状態でプールに投げ込みなさい。その様子は撮影して闇ルートに流しなさい。」

「ハァハァハァ…言うわけ無いでしょ…」

「あーもう良いよ喋らなくて！マ●コをズタズタにして餌だから！」

「コレ！何か解る？小麦を練った張り型。今度は付け替えるから…アナタ、濡れやすいから何時までもつかな？」

電動カッターの刃に付いた特殊シリコンゴムから小麦製に変えた。

「カチ！ドルン…ドドドドド…」

「ガガガガガガガガガガガ」
電動カッターの刃は元々、スチールを切る刃に成っている。
肉は勿論、骨も簡単に切断する。
褐色の肉ビラに当たり、ビラがブルブルと震える。
「アァ…アァアアア…」
「ブルブル…」
太股、股間、肉ビラ、大陰唇がブルブルと震える。
「ブブブ…」
濡れやすいのは本当で機械に合わせて体液が飛び出している。
体液に白い液体や塊が見えて来た。
「ブブブブブブ…シャシャシャー」
音が変わった途端に女は絶叫をあげた！
「ァギャー！アガガガ！」
褐色の肉ビラから真っ赤な血が噴き出す。
カッターを持った女は笑みを浮かべている。
「死ぬよ！おやめ！」
「ハッ！」
機械を止めて刃を抜く。
小麦製の張り型は崩れ銀の刃には真っ赤な血がベッタリつき体液と混じり粘着でカッターと刃に赤い糸が引いている。
「ハァハァハァハァ…」
ダランと力なく身体からは力が抜けている。
「死ぬ前に打ち込みなよ」
半地下の拷問部屋からは外のプールの中が見える。
迷彩柄の軍服を着た兵士が来て股から血を垂れ流し、肩で息をしている女部隊長を抱え上げてプールに運ぶ。
アメリカの週刊誌にも美人な部隊長と載った美貌が鼻水をたらし、ヨダレと涙で顔はグシャグシャになっている。
「ホーレ」
男達は手足を持ち左右にゆらしプールの中央に落とした。

「ブハァ！ハァハァ…」
透明のガラス張りのプール横のガラスの底には土管が沈めてあり、中から細長い魚がクネクネと身体を悶えさせながら水面に向かう。水の中で部隊長のプリンとした尻の間からは煙のように血がユラユラと出ている。数匹が一斉に尻を目掛けてユラユラから垂直に水中を水面に向けて水中銃の様に真っ直ぐに股に向かい突き刺さる。
「ガバ！ゴバ！」
他の魚も一斉に女の穴に襲いかかる。
眼、鼻、口、肛門、耳、穴と言う穴に入って行こうとする。
まるで目や口から金色の饂飩を出している状態に成っている。
女は動かなくなり、水中に沈む。
ゆっくりと底につきても腹はモコモコと動いている。
女が白骨化する迄、１０分もかからなかった。

新章　2食　マイ魔女からヒトへ。

新章　2食

S級勇者、術者、巫女が異界との門に集まり破壊された門を修復作業に入っていた。

門の前には各パーティが集まり、テントを張り一つの街になっていた。

マイが他のパーティのレーション（非常食）の女性達と仲良くなり話をしていた。

「異界の門が直ったら、私達、地球に帰れるのかな？」

「アナタ、回復魔法をかけられて子宮玉を抜かれているでしょ。地球に帰ってヒトの肉、食べれる？」

ジャックのパーティのアイがそうマイに言った。

「何？それ豚とか牛とか魚って食べれないの？」

「アナタ、今はヒトじゃないのよ…

子宮に魔鉱石を入れた魔女だから…ヒト以外は栄養素に成らないのよ。」

「貴女は？」

「私は回復魔法だけだけど…ジャックが手放さないわ。それに地球で6人も殺したから捕まれば死刑よ」

「今日、バムに聞いてみる…」

マイの帰還の夢は儚く散った。

「バムさん、あたしは元の世界に戻れないの？」

「戻れない事は無いが、ヒトを喰わないと生きて行けないぞ。子宮玉を抜いているからな。今は魔女だ。

この世界なら食糧は有るが…なに？戻りたいの？」

…やっと芸能界に入りグラビアでも名が浸透してきた。あの華やかな世界に戻りたい…

「バム！元に戻す方法は有るけど、途中で死ぬ確率の方が高いし激痛で死ぬ事もあるよ。バムが良いならやってあげても良いけど…」
「殺した事は事故みたいなものだし、激痛に耐えて生きていれば門が修復したら返してあげるよ。」
…別に王妃ジジがいなくなれば闘いは減って、貴種の需要も無いだろ。一年、仕事も肉も提供してくれたし…
「レイナ！魔鉱石を抜いてヒトに戻してあげて。」
「バム！サワはどうするの？」
「あの子は駄目だ！実の母親、妹、幼子など産まれながらの殺人鬼の貴種だ。あちらに戻したら又、殺るよ。」
「おいで！マイ！これから子宮の代わりに入れている魔鉱石を抜いて、子宮玉を入れる。イイ！魔法、術は一切使えない。術が石に干渉して上手く行かないから、アタシが手で魔鉱石を抜き、手で子宮玉を入れる。凄い激痛が貴女を襲うわ。下手をしたら死ぬ。それでもする？」
マイはユックリと頷いた。
「じゃあ来なさい。」
門の前に建てたレイナの館にマイは入って行った。
「ソコの台の上に裸に成って寝て。」
言われた通りにマイは全裸に成り横に成る。
レイナは両腕を台に固定して、両足を左右に持ち上げると頭の横に有る拘束具に固定した。
マイの性器が天井を向く格好にして口に姪樹木の木片を噛ますと…
「イイ？樹木から流れる汁には催婬効果が有るから多少は痛さは和らぐから、取り出すわよ。」
元々、マゾ気質のマイは又、レイナにフィストされると思い興奮している。
割れ目はふっくらと膨らみ性器が興奮しているのが分かる。
「ズブ…ズブズブズブ…」
レイナの腕はマイの股間に肘までズッポリと入った。

「アァ…」
後の苦痛を考えずに思わず声が出る。
下腹部内でレイナが石を探るのが分かる。
「抜くわよ！」
「ズボ！」
「アガガガァガガー」
内蔵を引き抜かれた激痛がマイに襲いかかる。
「アガー…」
白目に成りアガアガと震えている。
次にソフトボール大の子宮玉を股間に当て力を込めて亀裂に押し込む。
「ミリ…ミリミリミリ…」
「グゴ…ゴゴゴゴゴゴゴゴ…」
魔術で小さくしたら子宮玉の効力は無くなる。
ソフトボールを無理やり子宮の位置、レイナの肘まで入れないといけない。
「ふぅ…やっと入った。後は子宮玉が子宮に再生するのを耐えて。耐えられればヒトに戻れるから。」
「ウグッ…ウグウグ…」
ソフトボール大の子宮玉が狭く成った子宮後で元の大きさに戻り、卵巣、卵管まで再生させて血管、神経まで再生するのに一晩はかかる。
再生には激痛が伴い、回復魔法等が切れたマイには地獄の苦しみが一晩、続く。
「アガァ…ガ…」
子宮玉が元に戻りだした。
モコモコと下腹部が動き出す。
細かったウエストが段々と膨らむ。
「アガ…ウグ…」
順調に再生していくが最大の苦痛は神経と血管の再生時に訪れる。

まだ神経は繋がっていない状態なので中段階の痛みだ。
１２時間位、経つと痛みが麻痺しだしたが針で内蔵を生きたまま刺す激痛がマイを襲った。
「ギャー…ググ…グゥ…」
口から木片が落ちる。
床に落ちた木片を拾い猿轡に加工してレイナはマイに噛ませた。
朝方に成ってマイの苦悶の表情が無くなり呆けたかおで天井を見ている。
「頑張ったわね。子宮が定着してヒトに戻ったわよ。バムから言われているから異界の門が修復したらヒトの世界に返してあげるよ。」
門が修復する迄、一月は掛かった。
…中東某所、ジジの屋敷…
「何じゃ！この肉の臭さは！ケダモノ臭がする。」
浅黒い女性の肉を切りながらジジは苛立っている。
「ジジさま。この辺りは主食が獣の肉ですから獣の匂いは香草で薄めて食して下さい」
「はぁ…早く、この国を制圧しよ！何ヶ月もかけるな！」
「ジジさまに従った黒巫女は普通のダークエルフ。使える術も限られます。今、ジンバさまとリーがこの国の首都に攻撃を仕掛けてますがヒトの軍隊も応戦して…もう少しお待ちを…」
「久しぶりに貴種の子宮肉を食いたいわ…」
そう呟くとフォークを投げて女の胸に刺した。

新章3食　拐われたマイとジジの食事

第3食
ジジ達に壊された異界の門が修復された。
ジジに悪食の勇者ジンバ。
元黒巫女、ダークエルフ達に煙の化け物リー。
後、地球で作ったで有ろう化け物達。
人数は応急処置の門の為に、S級勇者バム、レイナ、勇者ジャック、エルム、SS級勇者レイ、レレイ。
南の王、ビャク、セン。
後はマイ、新たな強化食に成ったサワ。
後は囚われていた学生達とトモコ。
総勢で二十人弱にはなる。
異界の門は日本に繋げた。
「ガイ！すまぬが留守を頼む。」
ガイにレイコを任し、一人ずつ異界の門をくぐった。
前方に光りが見えるだけで左右の壁から床、天井まで黒く蠢き夜空のように光ている。
最後の学生とトモコが門から出た。
遠くに富士山が見える草原に一行はいる。
…やっと地球、日本に帰れたんだ！…
マイはボロボロと涙を流した。
他の拐われた学生達もいつ喰われるか解らない恐怖から解放され安堵で泣いていた。
「バサバサバサ…」
真っ黒い物が学生、マイ、サワ達の肩を掴み空に舞った。
「ハァ！」
「ギェー！」

レイナが天空に飛び上がり、翼を切り落とした。
「バザーバサバサ…ドン」
レレイ、エルムも飛び上がり黒い者を切り地上に落とした。
「何人！連れ去られた！」
レイが叫ぶ。
レイが霊獣を呼び出し後を追おうとした時に黒い者達は黒い雲に潜り込むと姿が無くなった。
「やられた！ココに門が開くようにされていた。」
レイは悔しがったが、ヒトは早く家に返さないと行けない。
レイはトモコに現金を渡してココから引率して各自を家に返して欲しいと頼んだ。
連れ去られたのは学生のマサヨとナオそしてマイが連れ去られた。
「アイツらのアジトは何処だ？そして、相手に黒巫女もいるぞ。黒いコウモリにはダークエルフでも変幻出来るが雲に隠れて瞬間移動は術も使える勇者か黒巫女、賢者にしか出来ない。」
「ダークエルフの生き残りは？」
とっさにレレイは相手の胴を切り落とし、エルムは首を跳ね落としていた。
「アタシだけね。上手く翼を切ったのは。」
「クソ！アガッ」
「死なせないわよ。コレから自白して貰うんだから…アタシはレイナ。元黒巫女ならアタシの噂は知っているわね。」
真っ赤な唇を舐めながらダークエルフの術が溶けて全裸に成りかけの裸体を見ていた。
「嫌！喋ります！喋りますから拷問は辞めてください！」
「レイナ！すぐに追わないと3人が喰われる。特にマイは希種だ！喰われて特別な力を宿られては面倒だ。」
「面白く無いわね。奴隷の術はかけるわよ？名前は？」
「ダムラ！」
「暗黒神の…」

ダムラの身体が黒く靄を出すと身体に龍の模様が浮き出て消えた。
「バム！直に追うぞ。」
レイ、ビャクは霊獣を呼び、レイナは龍、エルムは怪鳥を召喚した。
「ダムラ！ジジの居場所は何処よ！」
「中央アジア◆◆◀◀共和国。」
それぞれが聖獣、龍、怪鳥を召喚しジジのアジトに向かって飛んだ。
トモコは飛び立った異界の者たちを見送りながら、自分がまだ夢の中にいる気分だった。
「先生！帰ろうよ。」
自分がココに居て、また捕まれば助けてくれた人達の足手まといになる。
草むらを抜けて車道に出るとバス停が有った。
トモコ達は来たバスに乗り込み駅前の洋品店で服を買い生徒達も各々が洋服を買い東京の生徒を送る為に電車に乗り込み電車の椅子に座った途端に涙が流れだした。
「バム！マイにはアタシの龍の分身をアソコの穴に忍ばせたの…直に分かるわ。」
バムは術でジャック、レイ、ビャクに伝えた。
…某所ジジの秘密基地…
白い肌に金色の陰毛が映える。
ゲリラに襲われ頭を殴られたまでは覚えている。
ジャネットがリポーターとして戦地に来たのは先週の事だ。
中央アジアの小国。
軍事クーデターが起きてすぐに政府軍、反政府に外部からゲリラが入り、最近は新しい武装集団も出きた。
黒い頭巾の女性が多い武装集団だ。
ジャネットが接近を試みたのが女性だけのゲリラ組織。
何処からとも無く現れ、次々に小さなゲリラ組織を吸収して第三の勢力にすぐに成った。

同じ同性と言う安易な考えで接近を試みたがガイドは殺され、カメラマンのカーリーしか生きていない。
ジャネットは裸にされていた。
ステンレス製の手術台のようなベッドに寝かされ両手両足を縛られて目隠しをされている。
チロチロと乳首を舐める感触がずっと続く。
まるで蛇にチロチロと舐められているような感触がする。
…まさか…レズビアン？女性が多いゲリラならそのような事も有るかも知れない…
まだ、コレから自分に起こる事を簡単に考えていた。
急に胸を鷲掴みにされジャネットは驚いた。
でも相手の手も柔らかい女性の手だ。
犯される事は無い。
「アァ！」
股間に肉の棒を押し当てられる。
…え？男？…
かなりの太さの肉の棒。
ジャネットも学生時代、結構、遊んでいる。
黒人とのセックスで独特な大きさも経験済みである。
「グッ！」
押し当てた肉棒が亀裂を分けてズブズブと入ってくる。
大きさは黒人に近い巨根だ。
…キツイ、でも殺されるよりは…
ズンズンと押し入り子宮に当たる。
ジャネットは子宮を突かれるのが好きだから歓喜に喘ぐ。
肉棒の尖端が上下に膣内で開きジャネットの子宮に噛み付く。
経験した事が無い激痛がジャネットの下腹部内で起こる。
「アガッ！イ…イタイ」
顔を振り回すと目隠しがズレた。
褐色の顔に赤っぽい瞳。

切れ長の眼が笑っている。
中東、アジアとも違う。
小麦色に焼けた白人系の顔。
ハリウッド女優のような美しい女が笑っでいる。
違和感は耳が長い事。
「アガッカ…ガハッ…」
下腹部の激痛が徐々に上にあがり心臓に達した時にジャネットはカッと眼を見開き絶命した。
「久々に美味いわ。やはり草食主義者の肉は臭みが無く良いわ。その捕まえたヒトも穀物を与えて臭みを取れ。」
壁際には捕まったカメラマン、カーリーが首輪をされジャネットが食われるさまを見ていた。
「ズル…ズル…」
立ち上がる女の股間に立派なイチモツが鎌首をあげて先端が口を開いている。
「子を産むと肉体も変わるわ！」
ジジが笑っていた。

新章４食　囚われたマイ達

新章４食
カーリーの眼の前で大蛇がジャネットの白い乳房を貪り喰っている。
大蛇に目は無く、赤い胴体に先端に口が付いて居るだけで胴体に鱗は無く、真っ赤な色をしている。
まるで女の内臓が飛び出し大腸が人を喰っているような感じだ。
戦場カメラマンをしているカーリーは時々、腹に傷を負い内臓を出した遺体を目にする。
女から飛び出した大蛇はまさにその色をしている。
「ガッチュグッチュガッチュ…」
咀嚼音がカーリーの所に迄、届いている。
カーリーは口にホースを着けられ、尻からは黒いホース状の虫が腹の中の汚物を貪り食い、四六時中、腹は蠢き尿は股間に貼り付けられたヒルのような虫に膀胱まで管を通され直に吸われている。
「ジルよ！菜食主義者の肉は臭みが無いから白いヒトでも喰えるわ。でも、黄色いヒトの処女肉も喰いたいの…。」
「ジジさま。門の出口で見張っていた者たちが黄色いヒトを４人、捕まえたそうです。今夜は黄色いヒトが食せますよ。」
「出来したぞ！」
「この家畜共も一週間で臭みがとれる。子を産んでから下の口からしか食えぬわ。ペニスのように産道はでるわ。大変じゃわ。」
ケラケラと笑う女の身体は引き締まり、キュッと絞れた腹筋、プルンとした締まったお尻、ツンと上を向いたピンクの乳首が付いている大きな乳房。
エキゾチックな切れ長の目に褐色の肌。
ツンと尖った耳がヒトとは違うだけでパリコレのモデル並みの美貌を持った女性に生える赤い象の鼻のように自在に蠢いているペニス

がヒトとは違う生物を感じさせた。
家畜のように自由を奪われ口にホース、尻には人糞を食す虫を刺された女性達は１０人はいる。
殆どが現地のゲリラの女性戦闘員が捕まったか、取材に来たリポーターやクルー達だ。
白人系のリポーターはジャネットのように意識的に菜食主義者が多い為に直に女達に喰われる。
動物を食す現地人達は臭みを消す為に口に強引にホースを入れられ、体を一週間かけて匂いを取られて臭みが無くなれば女達に食される。
カーリー達は昨日、捕まり現地人のカーリーは家畜にされ、菜食主義者のジャネットは眼の前で喰われた。
全世界に、このゲリラ達は危険な異世界人と知らしめなければ危険だが、ゲリラの広報担当者が優秀過ぎて世界中から取材のオファーが来ている。
異世界の食人達からすればエサが自分達に近づいて来ている状態だ。
「ドガン！」
地震のように建物が揺れた。
「姉上！貴重な黄色いヒトの希種が手に入ったぞ！姉上が好きな黄色いヒトの処女も三人だ！」
「お、お、お、良くぞ！良くぞ！でかしたぞ！ジンバ！」
カーリーの眼の前にアジア系の少女が４人、黒い頭巾の女達に連れられてやってきた。
食い散らかされたジャネットだった亡骸を見て少女達は泣いている。
一人、ジジを睨んでいる胸の大きな女がいる。
「この娘が希種か？では勇者バムは来ているな。黒巫女レイナもか？」
「姉上、レイナには1人切られました」
「アヤツも魔界の血が混じった化け物よ！他には、他は見ずに黒巫女ジャムに任せました。」
「ジャムか？レイナの相手になるか？」

「時間稼ぎにはなるかと…」
「ドカドカドカ！」
軍服の男達が肩に四人、迷彩柄の軍服を着た女を肩に部屋に入って来た。
「今日は４人だ！最近は少ない。もうこの辺には男の敵しかおらんぞ！来週辺りに隣国に攻めた方が効率よく食料が手に入る。」
リーがそう言いながら部屋に入って来る。
「ほぅ！珍しく少女達がおる。ラクナからの追ってか？」
「ああ、隣国に攻めるよりも厄介な奴がこの世界まで追ってきた。」
「まあ、いいわ。久々に子宮玉を食べるからそのゴミを片付けて！」
ジジは裸に黒いガウンをまとい、血のように赤いワインを飲む。
まだ、股間にはペニスが垂れ下がりガウンの裾から赤い肉を覗かせている。
「姉上！この奇種、回復術をかけて、強化食にしないか？コレから追っ手と戦闘に成れば強化は必要たぞ。」
「それもそうじゃな？ジンバは回復術を使えるわな！」
「まあな。その女、裸に剝いてその台に寝かせろ。おい！早く、食いカスを片付けろ！」
褐色の幼女達がジャネットのバラバラに成った肉片を拾い集めバケツに入れ部屋から出ていく。
…なんなの、ここは？やっと人間に戻れて地球に帰れたのに…
また、肉を削がれ乳房を喰われる痛さを思い出したらマイは泣きそうに成った。
「バシャン！」
ステンレスの血塗れの台にバケツの水をかけて小さな手で少女達が台を拭いていく。
「自分で脱がんか！それとも、服を剝いで欲しいか？」
「リー、その処女肉を部屋に入れて監視していてくれ。絶対にバム達が奪い返しに来る。バムならお前でも倒せる。」
カーリーは眼の前でアジア系の女が何をされるのか見ていた。

あの台に寝かせられた女達は全員が喰われている。
震える手で自分で服を脱ぎマイはステンレスの台に自ら寝転がった。
ジンバがマイの足元に立って呪文を唱え出した。
呪文が段々と大声に成った時に…
「バチン！」
マイの足元に魔法陣が現れ火花を散らした。
「この女、巫女か？」
「アッ！」
マイの股間に有る亀裂を拡げながら黒い蛇状の物が出て来た。

新章5食　中東での戦い…そして日本へ

新章第5食
中東上空を光が3個、飛んでいる。
レイナは自分の暗黒龍の防御呪文の発動を感じた。
「…わが龍の息吹…」
呪文を唱えると中東某国の都市が小さく光る。
「有った！アソコよ！」
雲の間に赤い光、黄色い光が光る。
念でレイ、ビャクに知らせると各々が聖獣、龍を光る場所を目掛けて降下させた。
地上の者たちには速すぎて目視した者はいない。
「この女！アソコに暗黒龍を仕込ませやがって！術が全て跳ね返すじゃねえか！」
「何じゃ！ジンバ！女一人に…何じゃこの龍は…！」
「姉上、レイナの持ち龍です。もうすぐ、追っ手が来ます。」
「私の子供達に相手をさせよ！他のダークエルフは時間稼ぎに足止めしよ！」
…回復術をかけずに奇種の肉片だけでも…
果敢に龍にジジは飛びかかるが龍はマイの全身に巻き付き、ジジをシッポで叩くと壁に吹き飛んだ。
「姉上！今は黒巫女では無いのですよ」
「すぐに撤退しましょう。
私が転移術を使います。」
「妾の子達がおるではないか！」
「ドドン！ドドン！」
聖獣がジジのアジト前に舞降りた。
ゲリラの兵が機銃で応戦するが異界の獣には通用しない。

アジトからダークエルフ達も出て来る。
プールの水が膨らんだのを見たレイが
「瞬氷！」
術を唱えた瞬間にカチカチに凍った。
プールの水の中にジジが産んだ一人、液体人間がいたが瞬間に凍り、
目鼻だけがレイを睨む。
「炎弾！」
レイナの暗黒龍が凍ったプールに火炎の球を吐く。
「ジュン！」
一瞬にして液体人間ごと蒸発させた。
「バチン！」
次に電気を使う男が出て来たが、電気を好むグリフォンに全て電気
を吸われ男もグリフォンに、ひとのみされた。
「口惜しや…口惜しや…この処女肉だけでも…」
奥の部屋に囚われた女学生に襲いかかるが…
「バサン！」
少女の胸からオオコウモリが現れ囚われた女学生を翼で覆った。
「エルムのオオコウモリでは無いか！」
「姉上！バムだけなら何とか成りますが、レイ、レレイ、ジャック、
ビャク、センまで来ています。ここは逃げて体制を立て直さないと
…姉上！」
渋々、ジジは転移ゲートに逃げ込んだ。
リー、ジンバ、ジジ、黒巫女とダークエルフを3人引き連れ転移術
を使い逃げた後はヒトとダークエルフが数人しかいない。
ヒトは眠らせ、ダークエルフはエルムとレイナの撫で切りで全て殺
された。
「良く護ったね、アギョウ！」
「アギョウ？」
「その子の名前さ。ジジ達は転移術を使い逃げた。アンタには、ま
だ狙われる可能性があるよ！アギョウを暫く貸してあげるからね。

あ…交尾はしても構わないけどアギョウをアソコからだして首に巻きなよ！アギョウがアソコにいる時に男のペニスが入ったら喰いちぎるからね。」

「アンタ達も大丈夫かい？」

奥の部屋にいる女子生徒に声をかける。

…レイナさん、おっかないけど優しいんだ…

「レイナ！大方の敵は倒したよ。で？この女達はどうする？」

「エルム、殺せないだろう…でも何人かは人を殺めてるね。そいつ等はラクナに連れて行こう。帝都復興には人がいるからね。」

「ヒュン！ヒュン」

エルムの剣が尻のワームを切り裂き、口のホースを断ち切る。

「バム！取り返した子達はソコの車に入れて私の龍に捕まらせるよ。ビャク！この黒いオーラの褐色のヒトはラクナに連れていくからエルムの怪鳥と貴方のグリフォンに乗せて。」

「ビャク！俺は移転術を使った場所を調べて後から戻るよ。」

ビャク、センが乗ったグリフォンが現地の女ゲリラを乗せた車を掴み天空、高くに飛び立つと、ジャック、エルムの怪鳥も空に飛び立つ。

「バム、レイナ、その子達を頼むよ。」

レイがバムに声をかけて転移術を使った形跡の有るアジトに入って行く。

「レイナ、東京の近郊まで行って開放だ！」

レイナの暗黒龍が空に飛び立つ。

レイ、レレイは転移術をかけた痕跡の場所を探し術をかけたが…薄っすらとしか見えないが、日本語…東京…と言う文字が見えた。

「あ奴ら日本に逃げた。あの国ならヒトも食い放題だし、東京は黒いオーラの者たちが多くいる。うってつけの場所だ！」

「レレイ！バムの後を追い奴らの捜索はバムとレイナに任せよう。俺達は一度、ラクナに戻り体制を立て直さないと…」

「この子達は？」

「レレイ、記憶を消去してくれ。すぐに自分の居場所に帰るだろ」
残りの捕まった現地の女に術をかけてレイ達は中東から飛び立った。
…東京・某所…
「帰りにマック行こうよ！」
「え～カラオケにしない？」
キャピキャピと学生達が夕暮れ時に校舎から出ていく。
「あ！ジョン先生！さようなら」
「さようなら！」
真っ黒な黒人が生徒達に手を振る。
黒人の眼は笑っていない。
廊下を歩き、保健室に入って行く。
「相変わらず、処女が好きだな？あ！喰うなよ！今から生徒が消えたらココに居れなくなる。」
「分かっておるわ。処女膜だけ喰っておるわ」
女から伸びた蛇のように長いペニスが女子生徒のスカートに入り込むみパンティの脇から産毛が生えた肉の丘を越えて狭い薄ピンクの秘所に潜り込み蠢いている。
生徒は眠らされて自分が何をされているのか解らない。

新章６食ジジの新たな餌場

新章６食
「礼！」
「あ、サヤカさん。今日から保健室に行く週ね。ジュジュ先生、ハーフだけど日本語は流暢だからしっかりね。」
「はい。先生。」
サヤカの通う私立女学院は中高一貫校で専門の寮が学園の敷地内に有り、医療専科、普通科、保育科等が有る。特に普通科、医療専科は進学率は高く毎年、普通科は日本有数の大学に医療専科は医大に合格者を贈り出している。
サヤカは中高で寮に入り通っている。
最近、外国人の職員が学園に増えてきた。
「ごきげんよう。」
廊下は歩いて挨拶。
男女交際禁止。
寮と学園との往復のみ、異性との交流は部活動での大会の場だけだが話しただけで処罰される。
厳格な校則が父兄に信頼され全国から受験生が年々、増えている。
最近、新設された芸能コースにはタレント、アイドルのタマゴが入学して来る。
校内に女性ガードマンを配置しているのも父兄や芸能事務所からしたら安心する。
綺麗に掃除がされた廊下を歩きサヤカは保健室に入った。
「失礼します。医療専科１年の島サヤカです。」
「島さん。宜しくね。
別段、今日はして貰う事は無いわね。今から紅茶を飲むところなの。貴女も飲みなさい。」

「先生…まだ、授業中では？」
「ふふふ…保健当番も授業の一環だけどここでの先生はあたしよ。構わないわ」
そう言いながら紅茶を入れてテーブルの上に置いた。
アンティーク調の家具が置かれ、ベッドも普通のパイプベッドでは無くホテルで使用されているベッドを置いている。
学園の校舎の中とは思えない作りをしていりる。
「ビックリするでしょ。ここのインテリアに…アタシは理事長の親戚だから殺風景な部屋では生徒が落ち着かないからって変えたのよ」
「はぁ…」
サヤカはゆっくりと椅子に座り出された紅茶に口を着けた。
「サヤカさんは中学から学園の寮での生活でしょう。異性は興味は？」
「ありません。小学生から受験で直にこの学園に入学しましたから…」
「あら…そうなの…」
ジュジュ先生の眼の奥に妖しい光が光った。
「アネキ！その鏡台に其処のネイルや化粧品を入れて！」
「本当に貴女、人使い荒いわね。」
背の低い身長にしては大きな胸がゆったり目のTシャツの胸を押し余計に胸を強調する。
「アネキ！3日も何処に行っていたの？男と旅行？」
「本当に覚えて無いんだよね。気が付いたら部屋で寝ていた。」
「アハハハ！高校生じゃ有るまいし寝過ぎでしょ！それに胸が又、大きくなっていない？まだ、成長中？」
「少し太ったかな？来週、撮影会が有るから体重、減らさないと…」
姫野マイがそう言いながらダンボールから化粧品を鏡台に移す。
「それにしても貴女がアイドルなんて…」
「そうなのよ！地元を歩いていたらアイドルが来てミニライブしていて見ていたら声、かけられて…地元にいてもパッとしないから出

て来た。」
「お母さん達が良く許したね。」
「それはグループがメジャー出し、学校がこの学園だからでしょ。あ！あたし、芸名を着けるから。姫野だったら芸能雑誌がアネキと姉妹とばれるでしょ。アネキは仕事が増えるかも知れないけど、アタシには着エロアイドルのアネキはマイナスだから…ね。」
「そうだね…芸能界は狭いからね…」
マイの妹、アヤはマイより痩せて出るとこは出て、引っ込むとこは引っ込むメリハリボディにクリクリの眼、長い黒髪に白い肌、マイには無い魅力を全て持っている。
そして、マイより気が強い。
芸能界には合っているような少女で有る。年も一回り近く離れ両親もアヤを溺愛している。
「片付けは終わりそうですか？」
寮母の女性が玄関先から声を掛けてくる。
蛇のような眼で二人を舐めるように上から下に見る。
…珍しい！奇種が二人もいるとは…
寮母は異世界の住人、黒巫女エレだった。
異界の門は1箇所だけで無く王宮の地下の秘密の部屋にジジが開けた門が有った。
レイナが黒巫女の上級司祭に成り規律を見直したが反発する黒巫女も数人、出て来ている。
彼女は元々、ジジ配下でありジジが司祭をしていた時よりも規律がキツく成った事に反発していた。
ジジは中東での戦いで殆どの配下を失ったがエレのような配下を異界から呼んでいた。
変化術が使える黒巫女達は日本人に変化し学園は異世界の人間とジジに変えられた人間が職員、教員として働いている。
リーも英語教員として働いている。
学園自体がジジのアジト兼餌場の状態で有る。

ジジの弟、勇者ジンバは暴力団の組長だった銀次に化けて銀次の組で組織内での地位を上げていっていた。
…新宿・某所雑居ビル地下…
「アギャギャギャギャ！」
女が絶叫を上げる。
尻を天井に向け女の秘所を見せた状態で両手を頭の上、脚も手の横に固定され、台に繋がれている。
赤子がオシメを変える時のように両足を頭の方に上げた状態で固定されている。
銀色の針金状の物に紅く成った棒状の物を近づけると、銀色の針金は先端からクルクルと球状に形を変えポトンと女の白い胸に落ちる。
「ジュ！ジュジュジュジュジュ」
「アガー！アグアグアグ…」
何滴か落とされた胸は白い肌に赤黒くヤケドの跡が残る。
茶髪にカールしていたと思われる髪は振り乱してグシャグシャになり、鼻水、涙、ヨダレで普通なら美人に属する顔がブサイクになり弱々しく嘆願する。
「本当に知らないの…◆◆会の会長はアタシの友達の親で、絡まれたら名前を出していたの…」
「オヤジ！どうやら本当らしい。本物はこの地味な娘の方だ。」
「馬鹿が！敵対勢力も有るのを知らないのか？」
ジンバの化けた銀次は持っていたハンダを女の膣に押し込み、ハンダゴテを付き入れた。
「あ…イヤだ…イヤだ…ギャギャー」
「アギャーギャーギャー」
暫く尻を振っていたが泡を吐いて眼を剥いている。
股からは白い煙が立ち上がっていた。
煙に混じり肉の焼ける匂いもする。
「おい！この女は学園に、後は本物も拐え！」
「ヘイ！」

女は麻袋に入れられ部屋から連れ出された。

新章7食マイとバムの再会。銀次の食事

新章7食
「シャーシャーシャー」
「どうしたのウンギョウ？」
レイナが暗黒龍のウンギョウに呪文をかけると言葉を発し初めた。
「アギョウの近く…黒巫女…遠くに…ダークエルフ…」
「え！まだ、あの子を地球に送って半年よ！はぁ、余程、希種って美味なのね。」
「バム！バム！アギョウが黒巫女と接近したって！」
異界と繋がった鏡に映るバムにそう伝えた。
「それより、若いわね。幾ら何でも地球の高校生？ぐらい？」
「仕方ないだろ？年を取り過ぎても動きヅライしちょうど良いんだよ。すぐにマイに会うよ」
「詳しく分かったら、レイやビャクに連絡を入れるわ。」
「そっちは？」
「ジジがいなくなり平和よ。でも、ジジの配下の黒巫女が姿を消している。」
「やはり、また地球でアジトを作っているな？取り敢えずマイと会うよ」
「アタシもスグに説明して、行くよ。」
「ラクナの状態は？」
「中央帝都の復興中、王は東の王が仮でなって合議で決めるんだって…」
「不満そうだな、レイナ？」
「敵を斬れなくなるからね平和よりは…ね。」
「スグに地球で戦いが始まるよ。大人しくジジが捕まらないし、黒巫女が何人、来ているかも分からない。A級あたりのあぶれた勇者

がジジに付いているかも知れない。」
「そうだね…」
レイナはそう言いながら鏡から離れ自分の屋敷から出て暗黒龍を巨大化させる呪文を唱えた。
真っ黒い龍に跨り声を掛けると龍は天空に飛び上がり南の王宮を目指した。
…東京・某所撮影スタジオ…
「パシャン！キュィーン。パシャン！パシャン」
マイが乳首と恥丘だけ小さな布地のビキニ姿で写真を取られていた。
何ポーズもポーズを替えながら、最後は胸のビキニを外し手で隠すだけのポーズを決めている。
「相変わらず、裸になるのが好きな女だな…」
バムがスタジオから1キロ離れたビルの上からマイを見ている。
「お疲れ様…」
ガチャリとスタジオからマイは出て帰路に付く途中、マイの前に赤い髪の少年が立っていた。
…ファン？高校生ぐらいかしら…
「マイ！元気そうだね。」
「誰？貴方？ファンの方？」
「あ？レイナに記憶を消されているか？」
バムが呪文を唱えた。
「あ！貴方、バム！どうしたの？」
「マイ、最近、誰かに会った？それか変わった事が有った？」
眼の前のバムは大人の姿をしているが他の人には、２５の女性が少年と喋っているように見える。
「マイ！どうした？その子は？」
スタジオから出て来た事務所の男が声をかけて来た。
「私の従兄弟です。田舎から出て来たのでスタジオ前で待ち合わせしていたのです。」
バムはペコリと、頭を下げた。

「場所を変えようか？」
「わかった。」
マイはバムの手を握った。
「ギュオン…！」
二人の残像を残しマイは消えた。
「は！」
眼の前にはベッド、ソファ、テレビ等が有る。
「凄い部屋…」
「マイ！パンティを脱いで！」
…え！バムとセックス？助けて貰ったから、別に良いけど…
「違うよ？パンティを脱がないとアギョウが出る時に破るよ。ノーパンで帰る？」
「あ！」
心の中を読まれ、頬を赤らめながらパンティをズリおろした。
「アギョウ！」
「あっ！いたっ！」
マイの下腹部にチクリと針のような物で子宮を刺したような痛みが走り、膣壁にウネウネと蠢く物が膣口に目掛けて這い上がる。
「アン」
太股を這い下がり床に降りた時には蛇程の大きさになっていた。
アギョウに呪文を唱えるとカタコトの日本語で話しだした。
「ク、黒巫女…学校…妹…餌場…ジジ…」
「マイ。妹と学校って何だ？」
「あ、あたしの妹が田舎から上京して学校の寮に入ったの。その時、アタシも引っ越しの手伝いに行って…寮母さんに挨拶したけど…」
「マイ、妹の髪の色は？」
「栗色だけど…生まれつき…」
バムは瞬時に理解した。
学園は新たなアジト兼餌場。
確かに中学からなら処女も多い。

後、女子学園なら職員に黒巫女をやらせられる。
「マイ！妹に逢うには？」
「え！アイドルのタマゴだから今の時間はダンスレッスン中。」
「場所は？電話で聴いて、急がないとお前の妹、喰われるぞ！」
「それと、レイナやレイ達が来るまでこのホテルから出るな！お前が捕まればコチラが不利になる。」
「し、仕事は？」
「お前、喰われたら仕事も出来ないぞ。」
「わかった。」
「アギョウ！又、マイの子宮に隠れて守ってくれ！」
「あ！アヤ？今、何処にいるの？渋谷のスタジオ？少しレッスンが終わってもそこにいて！良い！絶対にいてよ」
「バム！アタシも行く！」
「駄目だ！俺一人では二人を守れない。アギョウも防御しか出来ない。お前が捕まればややこしくなる！絶対に部屋から出る。あの撮影スタジオにも黒巫女はいたからな！ここには結界がはられているし、明日迄の食事は冷蔵庫に有る！」
渋々とマイは頷いた。
…都内新宿焼肉屋…
「やはり、若いメスは美味いね。」
元銀次の組の若頭、道満がそう言いながら鉄板の肉を喰らう。
「で！会長さん。一筆、書くの？書かないの？」
「書けば組の傘下に、書かないと吊るされた娘は私達の胃袋…アンタは魚の餌だ。」
「ウグッグッ…」
「ギシギシ…ギシギシ…」
「誰がテメェの配下に…」
「はぁ…プライド？一応、元会長だから温情で二択なんだけどな…組員、家族、全て皆殺しで娘は喰うってのも出来るんだけどよ！」
紙袋から人間の頭を取り出し鉄板の隅に置きユックリと頭を廻した。

「アァアー！ユミ！」
「そう。アンタの新しい愛人のユミちゃん。で、今のお肉がユミちゃん」
舎弟頭、ライジがテーブルの大皿を椅子に縛られた初老の会長に見せる。
銀色の大皿には赤い肉と両乳房が乗っている。
「あ！」
白い乳房、乳首の横にホクロが2つ並んでいる。
…ホンマにユミの乳や…
「だから…本当だと言ったろ。オッサン」
前から銀次には凄味が有ったが今の銀次には人間では出せない畏怖する凄味が備わっている。
「おい！吊るしてる娘のま●こ、切り落として、鉄板で焼け…戦争が希望らしいわ…このジイサン…」
「ヘイ！」
ライジが腹からドスを抜き木の柄を上にゆっくりと上げると…ヌラッと銀色の鈍い光を放つドスが光った。
「ヒ！」
「プシャー」
吊るされた娘は放尿しだしたが
「コラ！」
道満が爪楊枝を3本、尿道口に詰めて…
「我慢せんと焼くぞ…」
娘の耳元で呟くと震えながら尿は止まった。

新章8食ヤスヨの命運

新章8食
「で？どうするのかな？」
「おい…もういいわ…その女のホルモン、喰おう…」
「か、書く！書くから助けてくれ！」
「オマエ、素直に書けよ！」
銀次がスマホで何処に連絡をすると、黒ずくめの黒のライダーズスーツにヘルメットの数人が部屋に入って来て、吊るしている娘の縄を解き、頭から袋を被せ部屋から出ていった。
「オイ！開放するんじゃねえのか？」
「人質だよ。オマエら愛人や嫁を拐っても殺しても心は傷まねえだろ？だが、娘は違う。大概は言う事を聞くよ。血を分けた子供だもんな。」
「ホレ！会長職の引退。名誉会長で喰うだけのシマは残すよ。それと娘の転入届。」
「何だよ転入届って！」
「ウチの関係の女子学園だよ。ソコの寮に入れて学校も大学卒業迄、見てやるよ。普通にバカ娘、大学は出れねぇぞ。ソレを卒業まで見てやるよ。至れり付くせりじゃねぇか？」
「お前！この学校も関係しているのか！」
ジジがアジトに使っている学園は関東圏でも有名な進学校である。誰もが知っている学校名に驚いている。
数年前まで組員２０人の３次団体が組織のトップを引き摺り降ろした。
「おい！本当に娘は無事に生活、出来るんだろうな。」
「お前の娘以外も寮に入れているよ。」
パサンと投げた写真にはコワモテのかおをした男と少女が映る。

「コレは関西の…コッチは四国…」
「あんたんとこを吸収でウチは全国イチの組織になったよ！」
「ワシは…引退するが…若頭のキトウが…」
「あ！お前の娘を教えてくれたのキトウちゃん。お前より素直だわ。」
袋に入れた娘をライダーススーツの者達が担ぎ上げて運び出す。
ピッタリしたスーツは身体に張り付き、胸は出てクビレが有り、尻はパンと張っている。
…銀次、女の兵隊もいるのか？…
「さぁ、帰るか！おい！この女の首も処分しておけ。」
黒ライダーススーツの女が元会長の愛人の首を袋に入れ、余った肉もテーブルから集め無造作に袋に入れた。
「ありがとうございました。」
店員は顔色も変えずに銀次達を見送る。
銀次達が店から出て来た。
店は繁華街から少し離れた所に有る。
「オリャー死にさらせ！」
「パン！パン！パン！」
乾いた音が路地に響くが繁華街迄は聞こえない。
「ははは！久し振りに撃たれたわ。まだ、いるんだな。ライジ、捕まえろ」
ライジがゆっくりと男に歩み寄る。
「パン！パン！パン！」
パシン！パチッ！
ライジの体の前で青い光がフラッシュのように光る。
「あわわ…」
男は逃げようと振り返った途端、バチンと男の身体に電流が走りその場に倒れた。
「ライジ！車に男を積んで学園に連れて行ってくれ」
「親父は？」

「俺はこの男の愛人、嫁、妹、その子供を全て捕まえてくる。ババァは殺すがな！」

「ブゥン！」

銀次は転移術を使い男の愛人を捕まえに行った。

黒塗りのワゴン車が学園の敷地内に入り父兄来客用の駐車場を通り過ぎ学園の体育館の壁の前に停まる。

ライジがリモコンを車内から押すと体育館の壁が左右に空いて行く。

中にはボディガードの黒巫女がいる。

「トラブルですか？」

「ああ、関西◆◆連合の会長の娘がいたよな。1年だっけ？連れて来てくれ。」

黒巫女が寮母に念を送る。

「…ん、わかったわ。スグに連れて行く。特別拷問スタジオを使うのね。」

「久々に処女肉よ！」

微笑みながら関西の暴力組織の会長の娘の部屋に向かう。

学園寮は3棟に別れ、普通の生徒。セレブの生徒。

人質の生徒と棟で別けている。

大体の人質の娘は親の威光でグレて非行に走るか、大人しく普通の生徒になるかの2パターンに別れる。

今回の会長の娘は大人しい普通の娘。

匂いで処女と分かる。

寮母が部屋の前に行くと若いメスの愛液の匂いがする。

「あら、オナの最中かしら…」

「あん…、あ…あ…あぁ…」

「コンコン…」

行く途中に部屋の扉がノックされた。

寮母はもうじきイクのがわかった為にワザとノックした。

「ヤスヨさん。学園長が呼んでいるの、ちょっと出て来てくれない？」
「分かりました。」
ヤスヨはジャージに着替えて部屋から出て来た。
…まぁ、メスの匂いがムンムンしてるわ。
ジジさまが喜ぶ匂いだわ…
長く伸ばした黒髪に真っ白い肌、ヤスヨの母親は芸娘をしていて関西の組織の会長の愛人をしていた。
ヤスヨに似た黒髪の花街では売れっ子芸娘を半ば強引に愛人にし、産まれたのがヤスヨだった。
「さあ、ヤスヨさん車の後部座席に座って。」
ヤスヨは高級車の後部座席に座った。
学園内は広大な為に移動は車、バスを使う。
生徒はバス通学。
学園職員は車を使用している。
「あれ？寮母さん。ココって体育館の裏ですよね？」
寮母がリモコンを操作すると体育館裏の壁が開き車は中に入って行った。
「ヤスヨさん。降りて。」
革のシートを尻で滑りながら両足を着きヤスヨは車から降りた。
「あ！お父さん！お母さん迄！」
父親は寝間着姿、母親はピンクの長襦袢姿で椅子に座っていた。
広大な駐車場の中心にはリングが有る。
数台のカメラがリング中央を映している。
「ブァン！ブォン…ブァン！」
リング上に黒いマント姿の女性が現れマントの中から裸の派手な女性。ヤスヨと同年代のギャル。
中年の寝間着姿の女性と一人に一人ずつマントから出て来た。
「ああ！親父！許してくれ！」
若頭のオニツカが泣きながら詫びを入れている。

「てめぇ！何をした！」
「鉛玉なら銀次を殺れると思い…すまねぇ…！」
「あれ程、手出しするなと言っただろ！お前は破門だ！」
「おいおい！破門かどうかの処分を決めるのは銀次組長だ！てめぇらで決めるな！」
「組長！どうします？」
「おい！その裸のケバいメスは誰だ？」「パパ！何！コレは！助けて」
「おいオニツカ！アレは誰だ？」
「わ…わしが囲っている愛人です…」
「じゃあ、見せしめにしても構わんな？」
「へ…へい…」
「おい！特殊水槽に投げこめ！」
マントの一人が裸の女を担ぎ上げ空に舞うとリングから十数メートル離れた場所に総ガラス貼りのプールが姿を表した。
「おい！モニターを降ろせ」
リングの上から四方にモニターが着いたゴンドラリフトが降りた。
モニターには水中、空に浮く女。女のアップ。
水中に蠢く小さなメダカ状の魚が映し出される。
メダカにしては細長く、体のウロコが妙に大きい。
「落とせ！」
「うひゃ！」
「ドボン！」
「もう！何よ？何なのよ！」
「クソジジィ！アタシから縁切りよ！」
女は週に数回、スイミングスクールに行くだけ有って身体の力を抜き頭を水面から出していた。
「ビクンッ！」
水槽の底に固まっていた小魚が一斉に水面下に浮いている裸の女を目掛けて黒い塊で浮上していく。

水中モニターが黒い塊が裸の女を覆うのが見える。
「何?痛っ!痛っ!」
メダカ大の大きさな上、口もメダカ位に小さいから噛まれても針に刺されている程度の痛さだったが…
「アア!イダイ…オマ●コに潜り込む!イヤだ!お尻にも入った!」
「アダ!あだ!」
見る見る、女の下腹部が膨らんで行く。
「アーハチキレル!イギャー」
「ボフン!」
女の腹が破れ真っ赤な破れた腹の中で黒い塊が蠢き
「ペチャ!クチャ!ペチャ!ペチャ!」
小さな咀嚼音を上げている。
「改良型の魚の方が綺麗に食切るな…」
いつの間にか保健教師のジュジュが黒い黒衣姿でリング横にたっていた。

新章9食ヤスヨ覚醒。傀儡サヤカ

新章9食
「さあ、ヤスヨさん。裸になってリングの上に上がって…上がって貰わないと、貴方のお父さま、お母さまが、あの様な餌に成るのよ。」
「わ…分かりました。」
「そっちの紫の髪の娘もわかる？早くリングに上がらないと不戦勝だからね…」
「何だ！タイマンか、そのジャージと！アタイに勝てる分けねえだろ！」
リングへと続く階段を震えながらヤスヨは上がって行った。
モニターには、俯き震えながら上がるヤスヨと肩で風を切るように上がるオニツカの娘、サヤカ。
二人がリングに上がった。
リング中央にはバット、木刀、電流が流れる特殊警棒、縄がリングの床に置かれている。
「これから娘達に闘って貰う。全世界が喜ぶキャットファイトだ！ヒトのメスは股間から液体を噴き出すらしい。相手の股間から液体を噴き出した方が勝ちだ。尿でも愛液でも潮と言われるモノでも何でも良い。」
「両者共に全裸に成り闘って潮を吹かせた方が勝ちだ。早く脱げ！」
ヤスヨは脱ぎながら震えている。
オニツカの娘、サヤカは豪快に服を脱ぎ捨て、リング中央のバットを手にして震えているヤスヨに殴りかかった。
「サヤカ！殺すなよ会長の娘だ！」
「ヤスヨ！殺したら駄目よ！」
…何をコイツは言っている！どう考えてもヤスヨが殺られるじゃな

いか…
ふぁんとサヤカの身体が空中に浮き上がるとバタンとリングに背中から叩き付けられた。
若頭のオニツカその妻、会長は呆気に取られてリング上を見ているが、妾のヤスヨの母親のスズはヤスヨの性格が自分に似ずに関西の暴力組織を一代で纏めた父親に似ているのを小学生から習わせた古武術の館長から聞いていた。
普段は大人しいが、頭に血が登ると性格は真反対に成り残虐性も出て来ると聞いていた。
女だからと虐めた年長の男子の指を躊躇なく折ったらしい。
館長は厳しく躾たが持って生まれた性格は直らない。
皆がリング上を見て驚いている中、ジジはヤスヨから黒いオーラが漂うのを見ていた。
それは銀次、ジンバも気づいていたからキャットファイトを提案している。
「ゴシャ！」
呆気に取られサヤカの顔面を容赦無く踏み付ける。
「アガ！」
直にサヤカはヤスヨの脚を振り払い立ち上がり、木刀を手にした。
「本当に殺してやる！」
振り上げた木刀を躊躇なくヤスヨの頭に振り下ろす。
「バチン！」
ヤスヨは自分の長い髪の毛を両腕に握り木刀の一撃をかわすとサヤカの腹に蹴りを入れた。
「ガハッ！」
爪先で相手の鳩尾を狙った喧嘩慣れしている蹴りをくらいサヤカはリング上を左右に転げ廻る。
ヤスヨは電流が流れる特殊警棒を広いドスンとサヤカの腹に座った。
陰毛を三角にカットしたしたに有る淫水焼けで茶色い縁取りと真ん中でだらしなく口を開く穴に特殊警棒を突っ込み、電流を流した。

「バチバチバチバチ！」
腹から腰を上げると
警棒の柄の部分を蹴り上げた。
「ぶちゃ！」
腹から砕けた音が聞こえ、股間からは血が吹き出している。
「覚醒したわ！奇種が！」
サヤカは白い眼をむきビクビクと痙攣している。
「おい！ソコの転がったメスとだらし無く座ってるツガイを水槽に落とせ！」
銀次はゆっくりと会長の所に来て
「オマエが俺たちの真の仲間に成ればゴタゴタは無い…」
「姉上！このオヤジ、生まれ変わらせるか？」
「仕方ないわね。やるわ。」
会長はポタポタと涙を流している。
自分が助かった涙では無く自分の最愛の娘が人を殺めた事を悔い泣いていた。
「お前は真の仲間に成れ！家族の事も忘れる。」
そう言いながら会長を立ち上がらせダークエルフ達が連れて行った。
「このメスは？」
「この儘、餌でもな！」
「バサッ」
リングを飛び降り銀次の前にヤスヨが立ち塞がった。
「オマエ！殺したら親は助けると言った。助けないと…」
「どうする？」
「ブチン！」
ヤスヨは自分の舌を噛んだ。
「おい！早く校医に見せろ！死なれたら奇種の価値が無くなる！」
「分かった。助ける」
「オイ…」
黒巫女がピンクの襦袢姿のメスを抱えて飛び去った。

「なんてガキだ！でも度胸もあるし奇種で肉にするのは惜しいな。子宮玉を抜いて魔鉱石を入れて魔女にするのが良いな。」

…しかし、各反社会的組織の長の娘を人質にして中からヤスヨの様な奇種を見つけるとは姉上は凄いわ！父親、母親の何方かが人を殺めた者の娘に奇種が生まれ安いのは分かった。

寮にいる人質の娘達で殺し合いをさせたら奇種が見つかるな…

「やめてよ！」

オニツカの妻が黒巫女に首を捕まれ水槽の上に連れて行かれ落とされた。

「ドプン！」

「アギャ！入る！イダイ！ギャー。」

「アガアガアガ…は、腹が…」

「ボフン！」

「オイ！その転がった娘は新改良した食人魚に食わせろ。」

「フン！」

銀次が股間に刺さった特殊警棒を引き抜き、腹を蹴ると瀕死だがサヤカは生きていた。

銀次が水槽に向かい呪文を唱えると小さな食人魚は水底に塊り、水槽横の穴から銀色のキラキラ光るタチウオ状の魚が出て来た。

「オイ！投げ込んでこい」

黒巫女がサヤカの髪を掴み空中に飛ぶと水槽の上に連れて行きサヤカを落とす。

虫の息のサヤカは頭だけを水上に出してボンヤリしている。

水槽内カメラが、サヤカの股間にズームされる。

血が股間からユラユラと流れ出て水中を揺れながら拡散する。

銀色の魚が血の匂いに気付きサヤカに近付く。

小型魚のようにすぐには襲わないが脚、太股に触れる。

すると鋭利な刃物に切られたような傷が触れられた所に付き、血が煙のように立ち上がる。

まさにタチウオの太刀のように上下のヒレは鋭利な刃物のように改

良している。
暫くは胸や腹などに当たり、鋭利なヒレで傷を付けていたがサヤカの真下に潜り平たい体を変形させていった。
太刀が槍のような棒状に成り水中を水中銃のような速度で泳ぎ、体をサヤカの秘所に突き刺すとストンと体内に入った。
サヤカは身動き一つせずに浮いている。
数分後、サヤカの体が動き出し自分で泳いで水槽の縁を目指している。
あれだけ付いていた傷もなおっている。
「ザバッ！」
高さ6メートルの高さから飛び降り銀次に近づき跪いた。
「ナンナリトおお…仰せください。」
「うむ！サヤカよ関西のお前の兵隊達をこの学園に集めろ！」
「サ…サヤカ！」
オニツカは死んだと思った娘が生きているを驚きで見ている。
「サヤカー」
サヤカに近付くとサヤカの手刀がオニツカの首にスパッと日本刀のように入り、ゴロゴロと頭が転がった。
サヤカの手刀は縁が刀のように鋭利な形をしており魚の特徴を持っている。
「集めるだけ集めよ！サヤカ！」
サヤカに入った魚は寄生生物で身体の中で脊椎に同化し脳を乗っ取り、身体的な変化も身体に与える。
…渋谷・ダンススタジオ前…
「お疲れ！」
若い可愛い子、美麗な娘達が夕日に照らされたビルから出て来る。
栗色の髪をした体が小さいが豊満な胸を持った少女がビルから出て来た。
「ねえ？君がアヤ？俺はバム。聞いているだろ？」
…え？高校生？中学生？お姉ちゃん、淫行じゃないの？…

「え？聞いているけど君がバム君？」
「何かな？」
アヤがバムに近付くとバムがアヤの身体を瞬時に抱き抱えて空中に飛び上がった。
スタジオのビルの影に黒巫女が潜んでいるのをバムは瞬時に察知していた。

新章１０食　レイナの遊び

新章１０食
「ああ！空飛んでいる！」
「絶対に手を離すなよ」
…うわぁ…よく見たら栗色の髪に褐色の肌、目が二重にパッチリ、芸能人にもなれるよこの人…
「お前さ…あの芸能事務所、裏に良からぬ集団が付いているの分かっている？」
「え？なんですか？それ？」
「反社会的勢力！」
「君の言っている学園も裏で仕切っているな？取り敢えず、空中で話す話ではないからマイの家に行くぞ！」
バムは身体を引き寄せ胸に廻した手に力を入れた。
…アイツの一族には牛でも居たのか？妹も子供に肉の乳を着けた体型だな…それに発情すぐするな、マイに似ているわ…
マイのマンションの前に着地して、バムとアヤはマンションに入って行った。
マンション前に停められた車の影に潜む黒巫女を気にしながら入りすぐに結界を張った。
「マイ！開けろ！無事に妹を連れて来た」
「アヤ！」
「お姉ちゃん、この人、誰？空を飛ぶし子供にも化ける…なんなの？」
マイは交通事故の事、異世界に飛ばされた事、バムが異世界の住人な事。異世界戦争の事、元王妃ジジが地球に逃げた事等を話した。
「話は大体、分かったけど…何でアタシが狙われるの？」
「貴女もアタシと同じ奇種なの！だから、彼女達に見つかれば食べ

られるの！」
「お姉ちゃんは何故、学園にその、人食い王妃が隠れているとわかったの？」
「その、異世界の黒巫女レイナの暗黒龍を身体に飼っているの。その龍が貴女の転校した学園の寮に引っ越しをした時の寮母が黒巫女だとレイナに報告してバムに知らせたのよ。」
「え！お姉ちゃん、龍を身体に飼っているの？」
「おい？マイ、鏡を借りるぞ」
マイの部屋に有る姿見に呪文をかけるとレイナがボンヤリと浮かび上がった。
「レイナ！ジジ達は此方の世界でアジトも構え、女学園も乗っ取っている。黒巫女も結構な人数が来ている。そちらに仮の隠しゲートがあるな？」
「女学園って？」
「若い娘達が集まり学ぶ場所だよ。女になる前の娘達を寮と言う建物で管理している。言うなら、家畜の自己管理だな？」
「後、芸能事務所とか、裏に暴力組織も仲間にしている。」
「来週、格闘技大会が有るよ！」
「何じゃ？その乳娘は？」
「マイの妹だよ。何だ？その格闘技大会は？」
「アタシの学校、特殊クラスが有って学生の親は日本各地の暴力組織の長の娘達だけなの。勝てば学校から賞金が出るって」
「バム！コレって！」
「ああ、蠱毒みたいに潜在意識に奇種の要素が有る娘を戦わせて奇種を探すな。親、祖父達が残虐性が有れば奇種に成る確率は高くなる。奇種の肉を喰えばＡクラスの黒巫女でもＳクラスだ。面倒だぞ」
「オイ…アヤ、何時に格闘大会は有る？」
「今週の日曜日に…父兄も来るからボディガードも日本各地から来るよ」
「聞いたか？今週金曜日にジジを退治する。Ａ級勇者、巫女を集め

てレイ、ビャクにも今週、奇襲をかける連絡をしてくれ。ランクアップした黒巫女が多いと太刀打ち出来なくなる。」
「バム！そちらのウチラのアジトはどうする？」
「取り敢えず、マイの部屋に異空間を作って入って貰う。兵隊は要らない。
相手はダークエルフと流れの勇者ぐらいだ。黒巫女も暗黒神の加護を解除したら魔術は使えないだろう。敵はダークエルフの女王が作った煙の男とジンバ、ジジ位だよ。」
「分かったわ。ビャクに連絡を入れて直ぐにそちらに行くからね。」
会話が終わりバムが異空間を作る準備をしていたら、鏡の中からレイナがヌッと出て来た。
「うわ！人が出て来た！」
マイは慣れているがアヤには夢を見ている感覚。
「なんだい？この肉の乳は！今夜のディナーかい？」
「ゲ！」
「レイナ！驚かせ過ぎ。マイの妹だよ。」
「それよりも外の車の下の影に黒巫女が潜んでいるのがわかるか？」
「丸わかりだよ。初心者だね。」
「生け捕りにしてくれないか？拷問して知っている事を聞く」
「わかったわ。マイ！ベランダの窓を開けて！」
「え！ここ１０階だけど！」
「関係ないわ！」
「ガラガラ…」
窓を開けた途端にレイナは窓から飛び降りた。
地上に着くまで数秒。
懐から大鎌を取り出し車の影に潜む黒巫女に突き刺すまで数秒しかかかっていない。
「アグッ！」
車の影から地が滲み人が浮かんで来る。
鎌を掴み苦痛に歪む黒巫女の首を掴むと宙に跳び、マイの部屋の窓

から入ってきた。
「ほら、捕まえた。」
「さて、乳を剥ぎ取ってペタンコにしようか？オマタの亀裂を伸ばそうか？あ！エルムが来るのを待ってエルムに処分してもらおうかな？」
捕まえた黒巫女はガタガタと震えている。
狂乱のエルム、暗黒のレイナ、残酷残虐性は黒巫女の間でも有名な二人だ。
「まずは服を焼き…」
「ボッ！」
「レイナさん！室内です！」
「分かっているわ。翠の炎でしょ。黒巫女の服しか焼かないわ。熱さは普通に熱いけどね。」
「アッアツイ！アッアッアツイ！」
黒巫女の服は焼け褐色の裸が見えた。
「黒い頭巾は？自分で剥がす？」
震えながら自分で頭巾を外すと短髪に褐色の肌、見た目は東南アジア系の人にしか見えない。
「貴女もダークエルフなの？」
「さぁ、喋るかな？」
褐色の乳房に小さく膨らむ乳首を捻る。
「こら？アヤ、見たら駄目よ！」
「姉妹揃ってスケベなメスだな？小さい肉の乳メスはもう股を塗らしている」
「何を学園でしている？」
「……」
「もう良いわ。股を割いてあげるから！」
「ああ！喋る！喋ります」
「アタシ、短気なの」
短刀を黒巫女のツルツルの恥骨下に小さく開いた割れ目にスッと入

れて後ろにザクッとレイナは力を入れた。
「アガ！アガー！」
「ほら、尻とアソコが繋がった。
次は前に裂いて穴を一つにしようかな？」
レイナは顔色も変えずに刃先を前方に挽いた。
「ビチッ！」
「アガガガガ…！」
尿道の筋肉が切れ股からは血に混じった尿をダラダラと垂らしながら囚われた黒巫女は泣いている。
「まだ言わないでね！」
笑いながら短刀の刃先を乳首に近付けた。

新章１１食　レイナとエルムの拷問とアンの最後

新章１１食
「アガガガガガ…」
「ボタボタボタボタボタボタボタボタ…」
…なんなのこの人！オ●ンコを笑いながら切り裂いた！信じられない…
「信じられぬか？でもお前、興奮して穴から汁を垂れ流しているぞ！」
「え！」
背後に赤毛の女性が立っていた。
「エルム！来たのか？」
「アヒィ！」
拷問されている黒巫女は股から赤い血が混じった尿を勢いよく垂れ流した。
「アンタ来たからコイツ、また垂れ流したわよ！」
「少し待て、回復させる」
「…ヒール！」
…え？傷が塞がって元に戻った！何なのこの人達…
「何じゃマイに聞いておらんのか？異世界ラクナの住人じゃ。お前の姉じゃの乳房も切り取り、良く喰ったわ！お前の乳房も喰いごたえありそうじゃの？」
「また、汁を垂らして、姉妹でマゾじゃな？」
レイナには考えている事が全て解り、アソコがどのような状態かも分かっている。
「さて！まだ、喋らないでね。ほい！」
レイナが囚われの黒巫女に術をかける。
「あう、あう！」

「あー喋らなくて良いからね！」
スラッと長い針を出し短髪の黒巫女に見せる。
「何処が良い？アソコに突き刺す？この乳房に横から刺し通す？」
「あー、あうう…」
「アソコ？」
短髪の黒巫女は首をブンブンと横に降る。
「じゃあ、乳房に刺したげる」
褐色の乳房を下から持ち上げ銀色に光る針先を褐色の肌に近づけ突き刺す。
「ブッツ」
「ウゥウゥウゥウゥウ…グ…」
ズブズブと針は乳房を貫く。
乳房の皮膚が尖る、ブッ赤い血が垂れ銀色の針先が顔を出した。
「う…ぅううう…うぐ…」
右乳房を貫くと左乳房の肌に針先を押しつけグリグリと針を突き刺す。
「アグッ」
レイナは笑いながら針を突き刺す。
アヤは無く短髪の女。
笑いながら女の乳房に針を通す光景を顔を赤らめながらも凝視している。
目が離せなくなっている。
マイも横に立ち見ている。
…レイナの拷問は女が見ても綺麗な責だからね…
エルムは次の拷問用の道具の準備をしている。
「…◀◆●◀☆★……」
宙に滑車が出て来た。
滑車には鎖が付いている。
鎖が突き刺し串団子を横にしたような乳房に突き刺した針の両先にかけると滑車のくさりを巻いた。

「ガチャガチャガチャ…」
前を向いていた乳首が段々と上を向いていく。
「ギチ…ギチ…」
「アギャー」
床に着いた足が宙に浮く。
「アグッ…ググ…」
「…解除…」
「ああ！言います！全て話しますから…アガー！」
「エルム？どうする？」
「待って！アタシが改良した特殊な虫を試したいの？そいつ、おろして！」
「ああ！イヤだー」
絶叫するが無視をしてエルムは準備をする。
「ガラガラ…ガラガラ…」
足が床に着いても膝から崩れる。
「ガチャガチャ…」
長い針の左右から鎖を外し乳房を串刺しにした針を抜く。
「うぐ…い…いたい…」
「レイナ、この板を、脚に嵌めて板に着いた手錠をかけて」
エルムに言われた通りに足枷と手錠を嵌めた。
褐色の尻がプリンと突き出された格好に成り上を股間が向いている。
「この子…ビショビショじゃない！濡れているわ」
「ちょうど良いわ」
褐色の股間にツルツルに毛の生えていない茶色いビラビラに瓶をズボッと突っ込み瓶の底をパンパンと叩き瓶の中身を全て膣内に入れる。
「エルム、何を入れたの？」
「アリ…」
「アリ？普通ね。」
「レイナ、地球の南米って所に軍隊アリって自分の身体以上の動物

を食べるアリがいるの。それに異世界の淫乱アリを交配させたの。食べられながら悶えるのよ。」
笑いながらエルムは説明する。
「あ…あん…あっ…あ…あぁ…」
「ほらアリが食べだした」
「クチャクチャクチャクチャ…」
腹の中から小さな音が聞こえる。
「ねぇエルム？全部、食べられたら喋れるの？」
「子宮迄で止めるわ。ソコに魔鉱石を入れて私達の魔女に変えるのよ。」
「あぁ…あん…あっ…」
黒巫女の腹が見る見るへこんで行く。
「もう良いわね。」
先程よりも胴回りが大きな瓶をビラビラの肉を左右に広げ突き刺した。
「わ…おっき…」
マイとアヤが声を出した。
粉のようなアリが爪程の大きさでゾロゾロと瓶に戻る。
瓶が埋まると抜いてカラの瓶を差し込む。
小瓶、一つ分のアリが太りウィスキー瓶、６本分に成長して出て来た。
「ジュク…ジュク…ズブリ」
「アーガ～アー」
肘までエルムの腕が黒巫女の腹に入り下腹部がモコモコと動く。
黒巫女の尻が褐色から真っ黒に変わる。
体中が真っ黒に成り短髪の髪が無くなり眼は紅く変わりアリのように変わる。
「影に隠れるのが好きだからアリに変幻したわ。」
「…黒巫女に変われ！」
エルムが言うとアリ女が元の黒巫女に変わった。

「そなたの名は？」
「わ…わたしは…元ジジさま付黒巫女アン。コレからは黒巫女エルムさまに仕えます。」
「ではアン！何故、車の下からこのマンションを探っていた？」
「はい！二人共に奇種のメスだからです。後、姉が異界でバム達の戦闘食だったのでバム達が現れるのはこの場所と探ってました。」
「ジジ、ジンバ達の兵は？」
「学園を乗っ取り、職員は全員がダークエルフと黒巫女です。後、ジンバ様が暴力組織を制圧して傘下にしています。あ…あとは…」
「ロックかけられているな？」
「だが、暴力組織の長の娘達なら奇種の可能性が十分だな。殺し合いをさせて奇種に変えるんだろ？」
「奇種から子宮玉を抜いて魔女に変えられたら退治が面倒になるな…」
「エルム！レイ、ビャクはいつ来る？」
「明日には来ると言っていたけど…何か切り札の人と交渉中らしいよ」
「切り札？まさか…ダークエルフの女王か？」
「そう王女ガズが来るよ。いま、仮の両手と両足をレレイが作っている。異界に閉じ込められた本当の足と手はジジを消滅しないと戻らないらしい。」
「このアンはどうする？」
「取り敢えず学園に戻して、戻った時に魔女に変えるさ。何人かのダークエルフや黒巫女を退治するだろ？」
「アン！学園に戻り黒巫女に相対した時は殺せ！」
「分かりました、エルムさま。」
アンは窓から飛び出し夕暮れの中を黒い身体で影に溶け込み消えた。
「ブツブツ…ブツブツ…」
「よう！アン、あのメスの監視はどうした？」
学園ではジャージ姿の黒巫女が影に潜むアンに声をかけた。

「ち…近寄って…くれ。やつ…らの情報だ…」
影に近づく為に黒巫女が腰を折りしゃがんだ。
丸い大きな尻がジャージを強調させている。
「ガハッ！」
真っ黒いアンの頭が影から飛び出し黒巫女の尻を噛んだ。「ギェー！」
他の黒巫女やダークエルフが近づく。
巨大なアリと化したアンは理性を失い仲間を噛み殺していく。
尻を噛みきられて倒れる者。
鋭い鉤爪で喉を裂かれる者。
魔女となったアンを倒すにはS級の巫女、勇者でないと倒せない。
「キシャー！」
制服姿の学生がアンの頭を持ち捻った。
「ブッツン！」
片腕にアンの頭を持ち黒髪の生徒が立っていた。
ヤスヨが素手で魔女のアンを倒したのだった。

新章１２食　決戦前

新章１２食
「ねぇ！お姉ちゃん！アタシ、ダンスレッスンもあるし、学校も有るのよ！帰ったら駄目？」
「オイオイ、マイ！お前の妹の頭はカラか？それとも乳に移動してんのか？」
「オイ！お前！さっきの出来事、見てなかったのか？学校は人食いだらけ。お前の芸能事務所も奴等の経営だ！」
「え！じゃあデビューできないの？」
「お前達のデビューでダンスをさせていない。肉付を良くして美味くなるように調教みたいなもんだ。いずれ喰われる。」
「明日には仲間が異界から来る。奴等を倒したら喰われずに生活出来るよ。」
「えー。じゃあ倒す迄、出れないの？」
「お前、五月蝿いな。レイナに言って裸で固定してやろうか？」
「え！良いのバム！この子の乳を喰いたいのよアタシ！」
「大人しくします…」
黒巫女アンの拷問を見ていたアヤは大人しくなった。
「じゃあ…事務所に電話だけでも…」
カバンからスマホを取出しかけようとした。
レイナが奪うようにスマホを奪う。
ジッとスマホを凝視するとＧＰＳが作動している。
「この機械はお前が買った物か？」
「いや…事務所から…持たされた…」
「バム！今夜、襲撃が有るかも知れぬ」
「バキバキ！」
レイナはスマホを握り潰した。

「あ…！怒られる！」
「マイ！お前の妹は頭が悪いのか？あの芸能事務所もジジの傘下と言うに分かってない。」
「勝手をされると困るので術をかけるぞ」
「…女は女らしく…」
「あ…ああ…苦しい」
アヤが着ていた学園の制服の前ボタンが弾け飛んだ。
「パン！バチン！」
「あ…いたい…オチチが張る…」
制服を破り、ブラも弾け飛ぶ。
「あ…お尻もオマタのクリも…いたい…」
みるみるうちにアヤの尻も大きくなりパンティがギチギチになって尻の肉に食い込む。
「ブッン！」
尻の大きさに耐えられずにパンティは破れた。
幼い亀裂が見え、亀裂の上、クリトリスの場所に幼子のペニスが生えている。
「あ～んオチチも重い…お股も痛い！」
「レイナ！あんた、何の呪文をかけたの？」
「メスを成長させる呪文！」
「ソレって、乳牛や乳ヤギにかける呪文じゃないの！」
エルムはゲラゲラと笑っている。
異世界の家畜にかける呪文をアヤはかけられていた。
例えるなら家畜用の性欲剤を人間が打たれるような物だ。
「レイナ！余り、コチラのメスをいたぶるな！」
「レイ！明日じゃないのかい？」
「時間軸が狂って来ているな。早くジジ達を捕縛、駄目なら抹殺してラクナに戻り門を修復し仮の門を破壊する作業が有る」
「本当にアナタ、下品ね！」
長い黒髪に肌の白い東洋系の顔立ちの女性がレイの後ろから出て来

る。
何時の間にか姿見は扉大に巨大化している。
「アナタ！サラじゃない！え！ララ？」
６大黒巫女のウチ、４人が集まる。
ジジは暗黒神神殿庁より巫女の資格は剥奪されているのでＳ級黒巫女が４人、集結した。
「解呪！」
サラが乳を肥大化させて泣いているアヤに呪文をかけた。
段々と尻も胸も小さくなる。
「本当、レイナは昔から悪趣味ね。」
何時の間にかマイの小さなマンション内は広い体育館並みに部屋が拡がっている。
「狭い所じゃの！」
図太い声の主が扉から出て来た。
半裸に鎧姿のビャク。
透けた白いドレスを纏った、セン。
同じような衣装のレレイ。
「ガチャン…ガチャン…ガチャン…」
黒い肌に金の甲冑を胸と尻に着けた、手首と足首は銀色の義肢のダークエルフの女王ガズが扉から現れた。
部屋の温度が数度下がる冷気をガズの身体からは出ている気がする。
黒巫女、白巫女、勇者達が一斉に跪く。
「バムよこの場所はもうジジにはバレておるのじゃな？」
「はい！今夜にでも奇襲があるかと…」
「皆、コレより逆に奇襲をかけるぞ！此処での闘いに成れば多数のヒトが犠牲になる。レレイは此処でそのヒトのメスを守れ！他の者はすぐにアジトの学園に行く！」
「レレイ！この二人を頼む。別行動の黒巫女に捕まったらめんどうだ…」
「分かったわ！」

黒巫女レイナが胸から黒い蛇を出すと窓の外で巨大な龍と化した。
黒巫女エルムは真っ赤な怪鳥。
黒巫女サラは真っ赤なペガサス。
黒巫女ララは大カラス。
各自が自分用の使役する聖獣を出し乗りうつり夕暮れの空に飛んでゆく。
「ガズさまは？」
わたしは…霧に変化出来る。
身体が黒くなり霧散して黒い霧になり部屋から消えた。
皆が部屋から出て直に玄関ドアがドンドンと叩く音がした。
「ちょっと？夢野さん？さっきから五月蝿いわよ！」
「はい！すみません！」
マイが玄関に行こうとした時にレレイが止めた。
「さっきまではこの部屋は異空間よ！他の部屋には振動も声も聞こえないわ。私が行くから…」
「はい！」
マイの声、そっくりな声を出しレレイがドアを開けた。
外には黒い頭巾の女達が二人。
「下僕！」
レレイが声を発すると大人しく黒い頭巾の女達は部屋に入って来た。
「マイ！この人形、もらうわね。」
人形と言うよりヌイグルミを黒い頭巾にわたし…
「捕まえた！」
「捕まえた！」
そう言いながら渡すと女達は部屋から出て行った。
頭巾の女達にはヌイグルミがマイとアヤに見えている。
「取り敢えず、第一弾は返したわ。
いい！マイ、アヤ死にたく無かったら部屋からは出ないで！私もレイナのような酷い事はしたく無いから！」
「特にアヤ！逃げる素振りを見せたら脚を切るからね。」

マイの部屋から出たバム達は夕暮れの空を東京から千葉方面に飛んでいた。
アヤの学園の寮は千葉の先に有る海辺に有るらしい。
半分程、海に太陽が落ちかけている。
海辺の一角に魔法陣の禍々しい光が見えて来た。

新章１３食　決戦女子学園

新章１３食
禍々しく光る学園を取り巻く魔法陣の上空に黒いコウモリが３０程、飛んでいる。
「何人、黒巫女を呼んでんだよ！」
「Ａ級でしょ！退治は簡単だわ！」
コウモリが先頭を飛ぶレイナ、バムに襲い掛かる。
「ガギン！」
「え？受け止めた！」
「まさか…希少種の肉を喰らいランクアップしたのか？」
…学園内体育館…
「アギャー！」
「ああ…お母さん！」
幼い透明に近い白い肌の少女達を褐色の肌の若い女性がナイフを持ち襲い膨らみかけの乳房に刃を入れそぎ切り、口に運ぶ！
「喰らえ！喰らえ！希少種も普通種もわからぬわ！処女のヒトならランクアップせずとも魔力は上がろうぞ！もう、希少種を探す時間も無いわ！喰らえ！喰らえ！」
数十人の真っ裸の褐色の女、白い肌の女達が尻を揺さぶり、乳房を上下に揺らし少女達を追いかける。
「いやだ…こわい…」
真ん中には、特殊寮に住んでいる各地の暴力組織の人質の少女達をバリボリと貪るジジ。
「アガ…ガ…ガ…」
少女達の裸の股には食手が一人に一本ずつ入り波打つ食手に合わせて少女達は泣きながら悶える。
余りにも多くのヒトを子宮に納めて化け物に変えたジジの子宮、膣

はヒトを食べる器官に変貌していた。
膣壁は外に飛び出し何本にも別れ肉の食手に変わり。
子宮は胃腸化していた。
「あ…あはぁ～」
ジジの食手の先の口からはヨダレのように催淫剤が垂れ流し、少女達は子宮を食われながらに絶頂に達していた。
反対に黒巫女、ダークエルフに喰われる幼い少女達は必死な形相で逃げ廻り、黒巫女やエルフに喰われる。
生きたまま腹を裂かれ子宮を貪る者、幼い外性器にかじり付き肉ビラを噛み切る美形の黒巫女。
普通にしていたらモデルのような美女が少女の性器を貪るがレズビアンの映像と違うのは少女から滴り落ちるのは愛液では無く真っ赤な鮮血。
体育館は地獄の様相になっていた。
その外には銃やマシンガンを持った、食われている少女達の父兄。
全国の暴力組織の長達が守っている。
上空ではバム、レイナらが口に干し肉を含み咀嚼して飲み込んだ。
「ほ～ら！アタシたちも激ってきたよ！」
レイナ、エルム、サラ、ララ達は地球に来るまでに作ったサワの肉を口に含みランクアップさせた。黒巫女全員がSSランクである。
「ソラ～」
「ガギン！バスン！」
S級黒巫女とSS級の黒巫女とでは天と地程の実力差が有る。
「ドガーン！」
「パリン！パリパリパリパリ！」
ビャクのグリフォンの一踏みで魔法陣は一撃で壊れた。
レイが体育館、目掛けて飛び降りる。
「壁切り！」
「ズバーン！」
「ズズッズズッズズッ…ドドドド…」

体育館の壁が綺麗に片面切り崩れた。
外で待機していた暴力組織の長達が見たのは人質に取られた自分達の愛しい我が子が黒巫女、ダークエルフ、ジジに喰われる様だった。
「アア…オノレ…！人の娘、食い晒しやがって！」
暴力組織の部下達は一斉にダークエルフ、黒巫女、ジジに銃、自動小銃を発砲した。
「何じゃ！ウヌらは敵はあいつ等だろ！」
ジジが叫ぶが頭に血が登った暴力組織に声は届かない。
「うぐ…あ！」
「ギャ」
黒巫女達は逃げるがダークエルフ達は殆どが銃弾に倒れる。
「あが！」
後ろで暴力組織の黒服達が吹き飛ばされる。
銀次に化けたジンバ達が学園に着いた。
「バリバリバリ…」
雷を操る男ライジが男達を感電させながら歩いて来る。
「ビカ！ドドドーン」
天空より落雷がライジに落ちライジに直撃した。
ライジは黒い炭になり崩れ落ちた。
「そのような電撃で死ぬとは雷使いをなのるな！」
空に真っ黒な女性の頭の異形の馬に乗った勇者ガルムが雷鳴を響かせながら地上に舞い降りた。
「もう、投降したらどうだジンバよ！」
巨大な身体を乗せてもビクともしない異界の馬は黒巫女達を畏怖させた。
フワリと黒巫女サラが異界文字の書かれた紙を黒巫女達に見せ大声で叫んだ。
「暗黒神神殿庁よりの勅命である。元黒巫女ジジは暗黒神より破門となった身！ジジに加担する者は暗黒神神殿庁に弓を引く者とし、この場で破門とする！」

元黒巫女のジジの復権を信じていた黒巫女達も神殿庁には逆らえない。
暗黒神の加護が無ければタダのダークエルフ、エルフ、マビトになる。
「敵意無き者はこの場より去れ！残る者は破門としこの場で抹殺する！」
戦っていた黒巫女、少女を喰らっていた黒巫女達が一斉にコウモリに変化して夕暮れの空に飛び出し群れを成して天空に消えた。
後に残るのは勇者ジンバ、ダークエルフの女王から産まれたリー、ジジから産まれた道満のみになった。
道満が黒巫女サラに襲いかかる。
「ウリャ！」
「バリバリバリバリバリ！」
ガルムが電撃を放つが全て道満の身体をすり抜ける。
「瞬氷！」
襲いかかる寸前にレイが道満を凍らせた。
「何なの！」
サラがピンヒールのような靴で蹴ると凍らせた道満は粉々に散った。
「危ない！」
「ガギン！」
一人の女子学生が日本刀でレイに、切りつけた。
セーラー服に血が付いた日本刀。
髪は紅く変色している。
ジジによって魔女に変えられたヤスエが立っている。
「この子、希少種から子宮玉を抜かれて魔女になったわね…」
処女の希少種。
その魔女と成れば力はSクラス巫女と同じ。
体育館から同じ制服の少女達が数人出て来た。
薙刀、日本刀…
「ジジのヤツ何人、作ったんだよ…」

尋常では無い殺気が辺りに立ち込めた。

新章１４食　リーの最後と最終決戦

新章１４食
「ガギン！」
「キン！」
「何よ！この子達！ラクナの剣士より強いんじゃない！」
「防戦だけではやられるよ！」
「ガチャン！ガチャン！」
「黒巫女達よ、無闇に殺生するなよ！まだ、ヒトに戻る方法はある！」
「どうするですか？女王ガズさま！」
「娘達の腹に収まる子宮玉を抜き、ダークエルフの子宮玉を入れろ！後は私の力で戻す！」
「バム！そこらにいるダークエルフから子宮玉を抜いて！」
「わかった！」
「エルム！アタシ達の術で娘達をとめるから魔鉱石を抜いてアナタが子宮玉を入れて！」
「分かったわ！」
「ガシャン！ガシャン！」
「久しいな！女！また、俺がぶっ刺してやるよ！」
リーがガズの前に立ち裸になる。
スキンヘッドに筋骨隆々な黒い肌。
股間には丸太のようなペニスがダラリと垂れ下がっている。
「レイ！俺たちも加勢せねば！」
「儂を無視をするな！」
レイ、ビャクの前に銀次の姿から元に戻ったジンバが立ち塞がる。
「オイ！雷鳴のガルム！奴に落雷を落としてくれ！」
「レイ！奴は焼いても元に戻るぞ！」

「ビャク、焼いた奴を俺は凍らせ粉々にする。それをビャクの水流術で異界と異界の狭間に流してくれ！異界で粉々になった身体は霧散する。それしか方法は無い」
「何をゴチャゴチャと！」
大きな腹を揺らしながらビャク達にジンバは襲いかかる。
「ガルム！」
「オー！」
「ビカ！ドドドーン！」
白い光の柱がジンバの身体を包む。
「儂に電撃は聞かぬは！」
「瞬凍！」
「パキン！」
今度はジンバの身体は白く凍った！
「ガルム！そちの馬で踏み潰してくれ！」
「オオ！」
「踏み潰せ！」
「かしこまりました！」
人頭の馬が巨体を生かし大きな両脚で踏み付ける。
粉々には成らぬが小さな石位の大きさになった。
「時空斬！」
レイが小石大になった地面を斬ると真っ黒な漆黒の空間が現れた。
「ビャク！頼む！」
「水流派！」
どこからともなく水が現れ潰れたジンバの周辺を全て時空の裂け目に流した。
…こ…こいつら…儂は絶対にラクナに戻り、復讐をするぞ…
綺麗に崩れたジンバを時空の裂け目に流した。
「オノレ！」
叫びに空気が揺れ、窓ガラスがガタガタと鳴る。
「緊縛術！」

黒巫女達が少女達を術で拘束した！
「レイナ！早く！」
「縛！」
「アウ！」
ダークエルフを動けなくし、裸の股に手を無理やり肘まで入れて子宮を掴み引摺りだす。
「ア！」
子宮を抜かれるエルフ達は声も出せずにズルズルと自分の体内から抜かれる子宮を見ている。
その子宮を持ち少女の一人に駆け寄ると、直に少女の狭い割れ目に腕を押し込み魔鉱石を探す。
少女達は魔女に変化しているので身体を止める事は出来ないが縛っている縄には術はかけれる。
「ギチ…ギチギチギチ…」
「ぐうー！」
「レイナ！早く入れ替えて！この子、力で縄を千切るつもりよ！」
セーラー服に麻縄が食い込み暴れるので服が擦れ破れて肌や乳房が見える。
「ズボッ！」
「抜けた！」
急いでダークエルフの子宮玉を股間に押し付け亀裂だけの割れ目にポッカリと開いた肉の穴に押し込んだ。
レイナの腕の肘まで膣に入り子宮の位置で子宮玉を置く。
「あ…あが…あが…あが…」
倒れてのたうち回る少女を放ったらかし、次の少女のスカートに手を入れて狭い膣に腕を突っ込み腹をかき回す。
「アタシもするわ」
黒巫女サラも少女のスカートに手を入れて狭い膣に腕を突っ込む。
少女５人の魔鉱石を抜きダークエルフの子宮玉を入れられた少女達は激痛でのたうち回っている。

「どうするのこの子達！」
「女王ガズに任すしかないでしょ！」
ガズの前にはリーが立ち塞がっている。
「また！お前のアソコに俺のビッグコックを突き刺してやるよ」
ガズはスタスタと歩いてリーに近付き、丸太のようなペニスを自ら口に頬張った。
「オゥ！スケベ女！俺のペニスが忘れられんか？」
舌がヒルのように絡み、ビクビクと蠢く。
「あーイキタイ…」
ガズの頭を持ち喉奥に突っ込む。
「オゥ！ハァ～」
「ハゥ！」
ガズの舌先が糸のようになりリーの尿道口に潜り込む。
「オオオ…ォゥ…」
ガズの舌先がリーの尿道の奥深く、前立腺にまで届く。
舌先が前立腺を刺激する。
「ノゥ！」
ガズは笑いながらリーの丸太のペニスを頬張る。
「ハゥ！」
何回めかに…
…コレでは精気が全部、吸われる…
「ノゥ！ハナレロ！」
笑いながらまだ咥えて離れない。
リーは全身の黒い身体をもっと漆黒にして霧になって逃げようとした。
「フ～！ズズッズズッズズッ！」
霧になった所をガズは全て吸い込んだ。
…クソ女！身体の中で実体化してやる…
「？」
霧になったリーの身体はガズの内臓の細胞内に全て吸収されだした。

…あ…あ、あ、あ、消える…き、え…
リーはガズに吸収された。
「女王ガズ！少女達に全てエルフの子宮玉を入れた！」
「フ～！ズズッズズッズズッ！」
少女達の股からは黒い煙が吹き出し全てガズが吸い切った。
「もう良いぞ！」
「サリ！少女達を離れた場所に置くわ！手伝って！」
サリの黒い巫女服の袖が少女3人の身体を巻き取るとサリは体育館から離れた学園寮の入口に置き去り、体育館に戻った。
「ガキン！キン！」
…え？もう抵抗する敵はいないでしょ？…
「え！何なのコレは！」
サリの前には巨大化した女性器と無数の食手を出す膣。
鋼鉄のような硬さで勇者達の剣を受ける肉ビラが変形した盾。
クリトリスの辺りにジジの顔が浮かび上がる。

最終章　ジジの最後

最終章
「ガギン！」
「カカン！」
S級の巫女、勇者達が防戦一方になっている。
「雷撃！」
「バリバリバリバリバリバリ！」
「ブシュ～」
表面が焦げただけで、
スグに再生する。
「絶対凍結！」
「ガキン！」
「ジュ～シュシュシュシュ…」
凍結もしない。
「コチラからののののはんげききき…」
巨大化した膣から出た食手が少女やダークエルフの亡き骸の股間に伸びて、ペニスの形になり幼い割れ目に潜り込む。
食手は膣から脊椎、脳へと移り亡き骸が動き出してくる。
落ちている剣を拾いバム達に、襲いかかる。
「コレじゃきりがないわ！」
電撃で焼いても首を落としても亡き骸は無限に有る。
「ババババ…」
「防御壁！」
食手は銃器を持った暴力組織の部下達の尻から入り脳を乗っ取り身体を動かす。
「ウンギョウ！」
レイナの暗黒龍が巨大な肉のヒダに噛み付くが歯が立たない。

「妾に任せよ！レイナ、任せていた短刀を…」
ダークエルフの女王ガズにダークエルフの短刀を渡す。
ゆっくりと歩いてジジの巨大化した性器に近付く。
食手がガズの身体に巻き付きガズの小麦色の肌の股間、鎧の隙間から食手が滑り込み、ガズの性器に入ろうと蠢く。
血のような真っ赤な膣口をウネウネと入りだす…
「ガブッ」
「ガッガッガブッ！」
「ギェー！」
巨大化した性器のクリトリスの位置に有るジジの顔が苦痛に歪む。
ガズを巻いていた食手はズルズルと拘束を解き膣内に引っ込んでゆく。
巨大な肉のヒダが左右からビッチリと締り褐色から漆黒に変色していく。
「お前の力でも開ける事は無理であろう…」
体育館の天井付近に有る性器の上方からジジの声が聞こえる。
ガズがレイナに渡していた短刀を引き抜き、漆黒の肉ビラの隙間に刺すとズブリと刺さった。
「ギャー！」
ジジの絶叫が聞こえる。
ザクザクとガズは肉ビラを切り裂いて左右に拡げていく。
洞窟のような膣口が見えて来た。
「ザクッ！ザクッ！」
膣壁に銀の義手を刺し切り裂きながら中に進む。
数メートル進むと真っ赤な肉の壁が行く手を阻む。
壁には横に割れ目が走っている。
「ブズッ！」
「アガー！」
ジジの絶叫が体育館の窓ガラスを振動させる。
ガズは縦に隙間が出来た子宮口に両手と片脚をかけて縦に押し開き

子宮内に入った。
子宮内部には無数の突起状の玉が出来ている。
「ズバッ！ズバッ！」
壁一面の玉を切り取ってゆく。
全ての玉は少女達から抜いた子宮玉である。
切り取った子宮玉はスグに消えてゆく。
最後に真っ黒な子宮玉が残っている。
ガズは切り取り、口に頬張りはじめた。
「アギャー！喰うなー！
妾を喰うな！」
「クチャクチャクチャクチャ…」
ガズは全て食べ終えた。
「アガー！」
巨大な性器が小さくなって行く。
ガズは外には出ずにいる。
段々とジジは小さくなる。
ガズはまだ出ないでいる。
「アガー！子宮が破れる！ガガガー！」
破裂する程の下腹部のジジが床に横たわっている。
「バリバリバリ…」
「アギャー」
腹を裂いてガズがジジの下腹部に立っている。
腹は破れ、ガズの足元には真っ赤な血溜まりと瀕死のジジが
横たわっている。
義手、義足だったガズのうでは元に戻り、腕も元に戻っている。
「南の王！ビャクよ！このモノはどうする？ソナタ達で処分するか？曲がりなりにも我がダークエルフの眷属。妾が処分しても良いが？」
「ダークエルフの女王よ！ラクナに連れ戻しても、まだジジの配下の黒巫女は潜れています。出来れば女王に処分をお願いしたいので

すが…」
「分かった」
そう言いうと黒髪をショートボブにした壁画のクレオパトラに似た女王ガズはジジの口に唇を合わせた。
「シュ～シュ～ズズッズズッズズッ」
ジジの身体が萎み
最後に全てガズに飲み込まれた。
呆気なくジジは消え去った。
「後はソチたちに任せてもよいか？」
「分かりました。女王！」
「黒巫女、白巫女の回復術で黒いオーラ以外の娘達は助けてくれ！」

「父親達の亡き骸は時空の暗黒神の供物とする。」
エルム達、黒巫女とレレイ、セン達白巫女が天空に各々の武器を天空に突き上げ、「ヒール！」
５本の剣、鎌、槍の重なった場所が光り、光が学園全てを照らした。
「次は暗黒神さまね！
我が主…暗黒神さま…この骸を御供え致します。」
レイナ、エルム、サラが空を切り裂くと空間が割れて裂け目から無数の腕が伸びて暴力組織の組員らを掴み割れ目に引き摺り込んでいった。
…ラクナ半年後…
「く…苦しいよ…助けてよ…」
幼い顔にツインテールをした少女の胸だけがボーリングの玉のようにパンパンにはち切れんばかりに巨大化している。
「ああ…助けてよ…レイナさん…」
アイドルのようなフリフリの衣装から巨大な乳房がブリンと出ている。
巨大な乳房とアバラの境目にレイナは短刀を差し込みスパッと切り取り木の桶に入れた。

「アナタの姉も乳房を食料にしていたのよ！無痛刃で切ってあげているんだから…ゴチャゴチャと言うと片方の乳房は激痛刃で切り取りるよ！」

乳房をツンと突くと

「ウギャ！」

声をあげて泣き叫ぶ。バムが小屋に入ってくる。

「お前ってムカつくとメンバーを階段から突き落とすの？」

「普通にアイドルとやらをしていたらラクナに連れ去る事はないのに…。お前達、姉妹は似ているな？

まあ…一年、俺たちの戦闘食になってくれたら、地球に返してやるよアヤ！」

顔をクシャクシャにして泣くアヤを見ながら切り取った乳房をペチペチと叩きながらバムは笑っている。

…ここはラクナ…罪人しか彷徨い込まない場所…

完

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n4896gt/

レーション（戦場食）　　～巨乳アイドルが異世界に連れ去られ、強化食として扱われましたが回復術で何度も再生します～

2025年2月4日22時03分発行